

# 豊浦町 高岡 1 遺跡

－北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成 5 年 度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター







包含層出土の土器（縄文時代早期・条痕文土器）



包含層出土の土器（縄文時代早期・コッタロ式土器・中茶路式土器）







包含層出土の土器（縄文時代中期の土器）



包含層出土の土製品・石製品





カラー図版 3



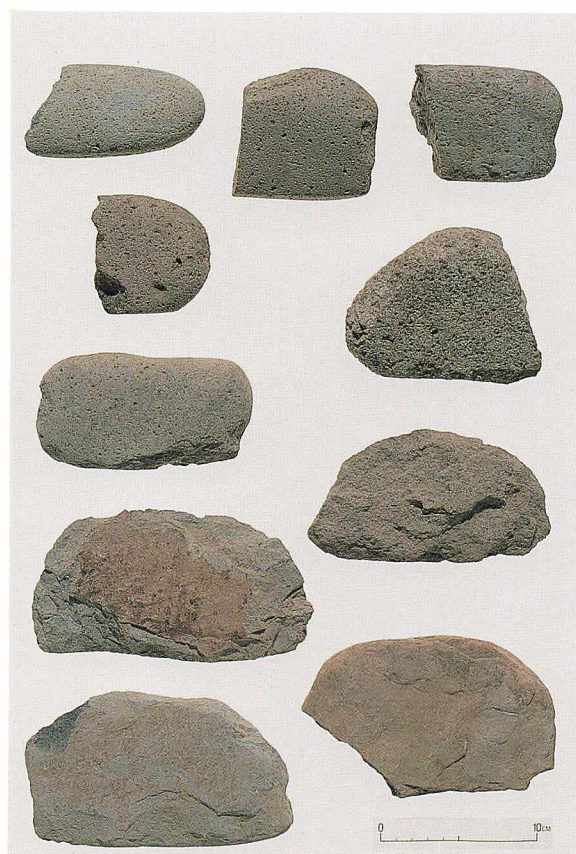
包含層出土の石器（石槍・ナイフ）



包含層出土の石器（つまみ付きナイフ）



包含層出土の石器（石斧）



包含層出土の石器（すり石）







高岡 I 遺跡 周辺の空中写真（1976年10月28日撮影）  
（これは国土地理院発行の10,000分の1を複製したものである）







# 豊浦町 高岡 1 遺跡

－北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成 5 年 度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



## 例 言

1. 本書は、北海道縦貫自動車道建設工事にともない、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成5年度に実施した豊浦町高岡1遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 平成5年度の調査は、調査部調査第2課が担当した。
3. 本書の作成は、西田茂、立川トマス、藤原秀樹が担当し、執筆者については、文頭か文末に記した。編集は西田茂があたった。
4. 黒曜石の原産地推定は、京都大学原子炉実験所藁科哲男氏に依頼した。
5. 石器等の石材鑑定は、調査第4課花岡正光がおこなった。
6. 出土資料は、豊浦町教育委員会で保管する。
7. 調査にあたっては、下記の機関および人々のご協力、ご助言をいただいた。

豊浦町教育委員会、虻田町教育委員会 土肥研晶、伊達市教育委員会 竹田輝雄・福田茂夫、室蘭市民俗資料館 久末進一、釧路市埋蔵文化財センター 石川 朗、名寄市教育委員会 氏江敏文・鈴木邦輝、枝幸町教育委員会 佐藤隆広、紋別市立郷土博物館 佐藤和利、常呂町教育委員会 武田 修、網走市立郷土博物館 和田英昭・米村 衛、北海道立北方民族博物館 青柳文吉、池田町教育委員会 横山英介、札幌市埋蔵文化財センター 加藤邦雄・上野秀一・羽賀憲二・仙庭伸久、恵庭市郷土資料館 上屋真一・松谷純一・佐藤幾子、千歳市教育委員会 田村俊之・高橋 理・豊田宏良・松田淳子、苫小牧市埋蔵文化財センター 佐藤一夫・工藤 肇・宮夫靖夫・渡辺俊一・二階堂啓也・赤石慎三・兵藤千秋、平取町教育委員会 森岡健治、今金町教育委員会 寺崎康史・能條歩、八雲町教育委員会 三浦孝一・柴田信一、森町教育委員会 藤田 登、南茅部町教育委員会 阿部千春・福田裕二・山口 敦・小林 貢、七飯町教育委員会 石本省三、函館市教育委員会 中村公宣・佐藤智雄、市立函館博物館 田原良信、函館市北方民族資料館 長谷部一弘、上ノ国町教育委員会 佐藤一志、北海道開拓記念館 平川善祥・右代啓視、北海道大学 林謙作、札幌医科大学 大島直行、札幌大学 木村英明・高宮広土、札幌学院大学 鶴丸俊明、鹿児島大学 上村俊雄、東京大学 宇田川洋・大貫静夫、東京大学大学院 鶴沢和宏、筑波大学大学院 石井 淳、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 工藤利幸、岩手県滝沢村教育委員会 桐生正一・井上雅孝、秋田県埋蔵文化財センター 高橋 学・利部修、秋田市教育委員会 西谷 隆・日野 久、新潟県埋蔵文化財事業団 藤巻正信、新潟県巻町教育委員会 前山精明、新潟県和島村教育委員会 田中 靖、長野県埋蔵文化財センター 川崎 保。

## 凡 例

1. 本文および図表中では、つぎの略号を使用した。

H：住居跡 P：土壇 F：焼土

2. 実測図の縮尺は、原則として次のとおりである。適宜変更したものもある。

遺構 1：40 土器 1：3 土器拓本 1：2 剥片石器 1：2 礫石器 1：3

3. 遺構の規模については、次の要領で示した。なお、一部破壊されているものは、現存長を（ ）で示した。

\* 確認面での長径×短径／底面での長径×短径／最大深さ（単位m）

4. 土層の表記は、基本土層についてはローマ数字で、住居跡、土壇、沢跡等部分的な層位については、アラビア数字で示した。

# 目 次

例 言

凡 例

I 調査の概要	1
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査にいたる経緯	1
4 調査の概要	1
II 遺跡の位置と環境、周辺の遺跡	4
1 位置と環境	4
2 周辺の遺跡	8
III 調査の方法、遺物の分類	11
1 調査の方法	11
2 土層の区分	13
3 土器の分類	16
4 石器等の分類	18
IV 遺構とその遺物	21
1 概要	21
2 住居跡	23
(1) H-1	23
(2) H-2	31
(3) H-3	32
(4) H-4	43
(5) H-5	50
3 土壇	56
(1) P-1	56
(2) P-2	57
(3) P-3	59
(4) P-4	62
(5) P-5	63
4 焼土 (F-1、F-2、F-7)	67
説明表	71
V 包含層の土器	75
1 縄文時代早期 条痕文平底土器	75
2 縄文時代早期 縄文、撚糸文等の土器	83
3 縄文時代前期、中期、後期の土器	102
4 続縄文時代の土器	130

VI 包含層の石器等 .....	132
図版 .....	153
VII 自然科学的手法による分析結果 .....	217
1 豊浦町高岡1遺跡出土の黒曜石製遺物の原産地分析 .....	217
2 高岡1遺跡の火山灰について .....	226
VIII 成果と問題点 .....	230
1 黒曜石の原産地推定について .....	230

## I. 調査の概要

### 1. 調査要項

事業名：北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査

事業委託者：日本道路公団札幌建設局

事業受託者：財団法人北海道埋蔵文化財センター

遺跡名：高岡1遺跡（北海道教育委員会登録番号：J-05-17）

所在地：虻田郡豊浦町字高岡63-1ほか

調査面積：4,090㎡

調査期間：平成5年4月1日～平成6年3月31日（発掘期間：5月6日～10月29日）

### 2. 調査体制

理事長 寺山敏保（～8月10日） 阿部 茂（8月11日～）

専務理事 永田春男 常務理事 中村福彦

業務部長 中野眞吾 調査部長 森田知忠

調査第2課長 越田賢一郎

主 任 西田 茂（発掘担当者） 立川トマス（発掘担当者）

嘱 託 藤原秀樹

### 3. 調査にいたる経緯

日本道路公団が建設を進めている北海道縦貫自動車道（函館～稚内、643km）のうち、現在供用がなされているのは道央部の伊達インターチェンジ～旭川鷹栖インターチェンジ間258、9kmである。これより南については、整備計画（1978年11月、1986年1月）施行命令（1978年11月、1988年11月）のもと順次建設工事が行われている。

これらの道路建設工事に先立つ埋蔵文化財の調査は、遺跡所在確認調査、遺跡範囲確認調査が北海道教育委員会によって行われている。豊浦町内の遺跡については1991年（平成3年）9月から遺跡範囲確認調査が始められ、この結果にもとづいて発掘調査が必要な範囲が決定されている。

高岡1遺跡は、1991年（平成3年）9月、1992年（平成4年）10月の範囲確認調査により発掘が必要と判断され、1993年（平成5年）5月から財団法人北海道埋蔵文化財センターが調査を行うこととなった。

### 4. 調査の概要

**位置と立地** 高岡1遺跡は豊浦町市街地の西1.5kmにある。内浦湾（噴火湾）に向かって落ちこむ崖錐堆積物斜面のうちで比較的ゆるやかなところに立地している。道路用地になる前は、おもに畑地として利用されていた。

**地区の名称** 調査区域のなかに古別川と呼ばれる小川が北から南へ急流となってかけ下っており、川の東側（左岸）を川東地区、西側（右岸）を川西地区と呼んでいる。今年度は、川東地区2545㎡、川西地区1545㎡を調査したが、ここに報告するのは川東地区である。

**川東地区** 調査予定範囲には、その東辺に町道が幅15～20mで南北に走り、北辺には私



図 I-1 高岡 1 遺跡の位置 (この図は、国土地理院発行の 5 万分の 1 地形図「豊浦」の一部を複製したものである。)



道が東西に延びている。調査はこれらの道路部分を残すかたちで行った。地形の大略は、北に高く南に低い。西側には古別川の下刻作用による急傾斜が認められる。標高は約25～34 m。

調査区のほぼ全域に、耕作による地表部分の土層攪乱が見られた。調査区のほぼ中央には、東西に延びる豊浦町上水道管埋設にともなう幅80cm、深さ1 mに及ぶ土層攪乱があり、南辺部分は30年ほど前に操業していたという碎石工場の造成時の削平を受けていた。

土層の区分は以下に行った。I層：耕作表土、盛り土。II層：黒色腐植土。III層：褐色土。IV層：灰褐色粘質土。V層：黄褐色火山灰（幌別火山灰）。VI層：黒色～黒褐色土。VII層：暗褐色土。VIII層：褐色土（岩礫混じり）。遺物の本来的な包含層は、III層・IV層（続縄文時代～縄文時代早期）、VI層・VII層（縄文時代早期）である。

**遺構と遺物** 遺構は竪穴住居跡5、土壇5、焼土3である。石組み炉が検出された竪穴住居跡（H-2、H-5）は縄文時代中期のものである。竪穴住居跡（H-1、H-3、H-4）、土壇（P-4、P-5）は、V層の黄褐色火山灰（幌別火山灰）よりも下位に検出されており、縄文時代早期のものである。P-3は黄褐色火山灰（幌別火山灰）との関係は明瞭でないが、覆土の2層上面に中茶路式土器が小片になりながらもまとまりを保って検出されていることから、縄文時代早期の遺構である。

土器、石器等の出土遺物は65,900点である。土器は縄文時代早期のアトリ式（条痕文平底土器）、東釧路Ⅱ式、東釧路Ⅲ式、コッタロ式、中茶路式、東釧路Ⅳ式、縄文時代中期のサイベ沢Ⅶ式、見晴町式、天神山式、大安在B式、煉瓦台式などが多く出土している。このほかに少量ではあるが縄文時代前期の円筒下層式、縄文時代後期の手稻式、続縄文時代の後北C1式なども検出されている。縄文時代中期中葉のものかとみなされる魚骨回転文の平底土器もある。中茶路式土器の破片のひとつに、種子圧痕（ササ？長さ6.2mm）が認められる。

石器は石鏃、石槍、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石斧、たたき石、台石、すり石、石皿、石鋸、砥石、石錘などがある。これらの定形的な石器はそれぞれに形態的な特色があって、土器との対応関係が明瞭に推定されるものがある。

土製品としては中茶路式土器の土製円盤、石製品としては縄文時代中期の石棒、垂飾などがある。

黒曜石の礫、残核、剥片・碎片などが多く出土している。これらの大多数は、近年明らかにされつつある原産地豊泉群（豊浦町）に含まれるものである。現在、豊泉群の黒曜石が容易に採集できるのは、遺跡の西北方3 kmほどの豊泉川の川原である。

**川西地区** 調査予定範囲の南辺に沿う幅15～20 mを調査した。東西に細長い調査区のために地形図では明瞭でないが、地形の大略は南に傾斜している。東側には南に開く沢地形が認められる。標高は約25～37 m。

調査区のほぼ全域に、耕作による地表部分の土層攪乱が見られた。調査区の南辺部分は、豊浦町上水道管埋設、国道37号建設に伴う私道造成などによる土層攪乱、削平を受けていた。このために本来的な遺物包含層を確定するにはいたっていない。

土器、石器等の出土遺物は約30,000点である。土器の大多数は耕作等によって表面摩耗しているが、比較的特徴の明らかなものは縄文時代中期後半の時期である。（西田 茂）

## II. 遺跡の位置と環境、周辺の遺跡

### 1. 位置と環境 (巻頭写真 4、図 I-1、図 II-1・2)

#### (1)位置 (巻頭写真 4、図 I-1)

北海道の南西部、太平洋側に内浦湾（噴火湾）があり、この内浦湾の北岸に豊浦町がある。豊浦町の沿海部は、河川の流入するごく一部の地域を除き、急激な斜面となって海に落ちこむ地形である。高岡 1 遺跡は、豊浦町市街地の西 1.5km、海岸線から 500m ほどのところにある。

高岡 1 遺跡は、内浦湾に向かって落ちこむ崖列が窪地状になったところの崖錐堆積物斜面上に立地している。標高 100m 付近で断崖となって北から南に落ちる傾斜地のなかで、比較的ゆるやかなところである。遺跡からは、西、北、東三方の視界はさえぎられているが、唯一開けた南には噴火湾をへだてて渡島駒ヶ岳が望まれる。標高は 26～50m である。

#### (2)地形 (図 II-1・2)

図 II-1 は道路工事予定図をもとにした地形図である。遺跡の調査予定範囲は白抜きの部分で示したが、これは当初計画のものである。1993年、遺跡の周囲にパーキングエリア設置の工事計画変更がなされ、これに伴って調査予定範囲が、標高の高い方に拡大している。

調査予定範囲は東側と西側の 2 か所に分かれている。東側の予定範囲の西に接して古別川と呼ばれる小川が流れている。この古別川を境にして、東側を川東地区、西側を川西地区と呼んでいる。今回報告するのは川東地区である。

川東地区の東辺には町道（以前の国道 37 号）の盛り土が幅 15～20m で南北に走り、北辺には私道の盛り土が東西に延びている。微地形は、扇状地をおもわせるように北から南に傾斜しているが、西辺は古別川の侵食によって急崖をなしているところもある。標高は 25～34m である。

道路用地になる前は、おもに畑地として利用されていたところである。発掘調査時にアスパラガス、ジャガイモ、長芋などの残存がみられた。一部に荒地をあらわすヨモギ、クマイササ、イタドリ、ヤナギなどの侵入している様子は、数年間の放置を思わせるものであった。調査区の南辺部分は 30 年ほど前に操業していたという碎石工場の造成時の削平を受けていた。

図 II-2 の柱状図は、道路建設にさいしてのボーリングの成果をもとにして作成したものである。B (STA394+00BC) の地点は今回調査の J-72-b 区であり、A (STA390+20 BL-7) の地点は川東地区 (B の地点) から西方約 400m のところである。A、B ともに礫混じりの層がみられ、崖錐堆積物であることを示している。B 地点では 10m の深さまで礫層の繰り返しとなっている。それよりも下部は凝灰岩の基底層である。

#### (3)周辺の環境 (巻頭写真 4、図 I-1、図 II-1)

遺跡の周辺を、海側からみていくとつぎのようになっている。

海岸は、直線的な砂浜の汀線である。この砂浜は、貫気別（ヌッキベツ）川が運んだ土砂の供給によって形成されたものと考えられる。砂浜の防潮堤で囲まれた内側には、東西にはしる舗装道路に沿って浜高岡の集落がある。

集落よりも一段高いところに、鉄道線路がはしっている。空中写真をみると、以前の鉄道線路は、今よりも強い曲率であったことが読み取れる。集落と鉄道線路との間には、耕作地の区画がある。

鉄道よりもさらに高いところに国道37号がはしっている。国道の沿線の比較的平坦なところは民家、耕作地になっている。耕作地ではイチゴ、キク、ダリアなどの園芸作物が多く作られている。国道37号が現在のように幅広く直線的になったのは、1965年のことである。それ以前の旧国道は遺跡の東側を南北にはしり（現在の舗装町道）、北側を東西にぬける（現在の山林町道）ものであった。

ちなみに、旧国道は1890年（明治23年）から車馬がすれ違える幅で建設が始められ、改良を重ねられても小型自動車が辛うじてすれ違える程度のものであった。当然、切り盛りを少なくするために斜面の腹部を通るもので、屈曲が多かった。遺跡の東側を海岸近くまで下って、鉄道よりも海側で貫気別川を渡り、豊浦の市街地に延びるものである。

旧国道と現国道とが交差する西北部に水準点（23.6m）がある。

高岡1遺跡よりも高い場所では、比較的平坦なところは畑地、牧草地として利用され、傾斜のきついところは山林である。植林のマツも一部にみられるが、大部分は自然林の落葉広葉樹である。調査区の近辺にはオニグルミ、クリ、ヤマクワ、タラノキ、ヤマブドウ、コクワ、ホオノキなどがみられた。植栽樹として目立つのは、鉄道と国道に挟まれた位置にあるスギ林、国道に沿う街路樹の桜列である。鉄道線路の脇にはドクダミの群落が点在しており、初夏には白色の島となって浮き上がる。

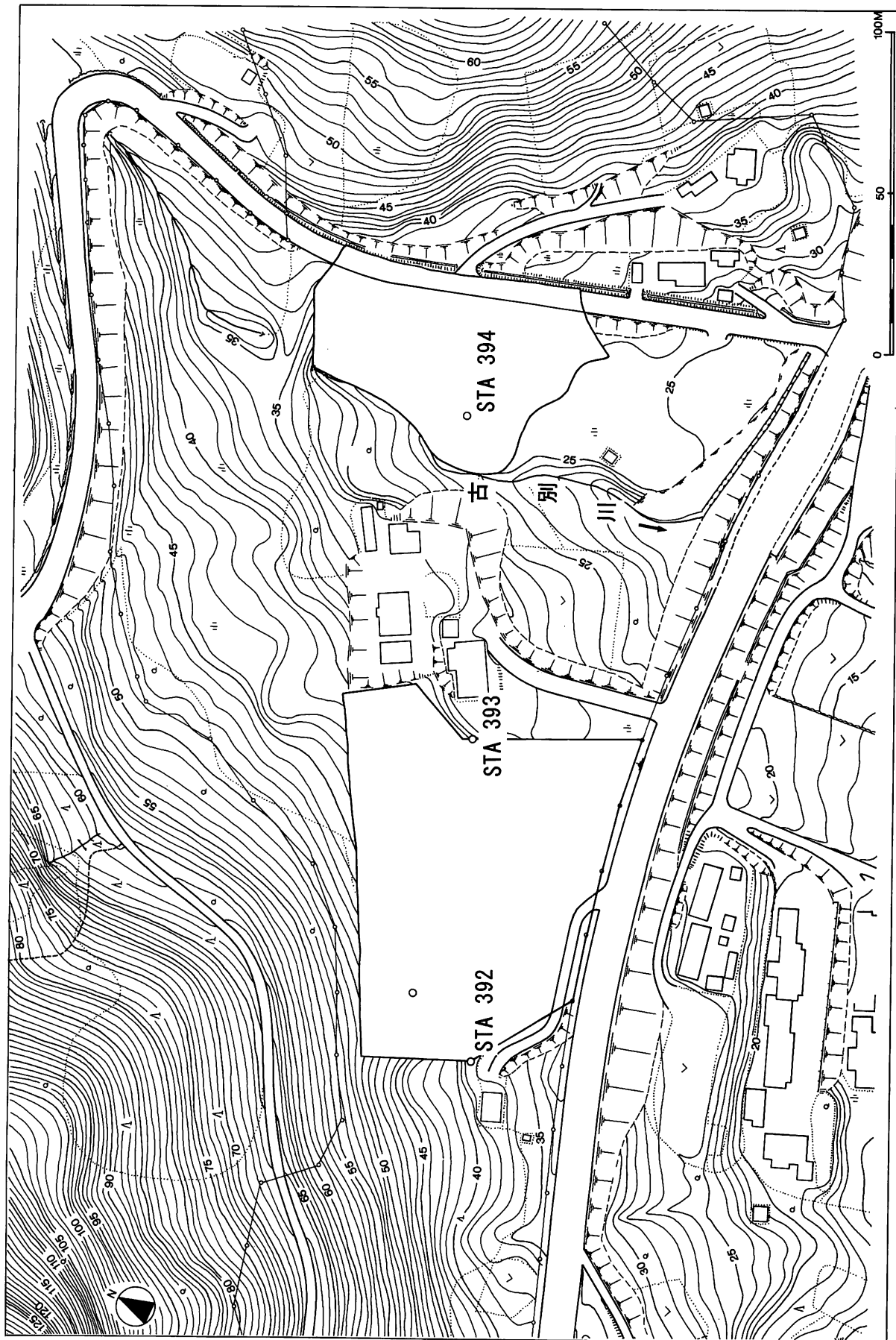
斜面のいたるところに湧き水がみられる。周辺の民家ではこの冬も涸れることのない清冽な湧き水を、町営の上水道が配備される1969年まで、飲料水としていたという。

高岡1遺跡から東側に一山越えると、貫気別川である。貫気別川は標高200mほどの台地を強く刻み込んで北から南に流れている。貫気別川の東方の傾斜地、海岸沿いに豊浦の市街地がある。国道を西側に4km行くと豊泉である。豊泉には黒曜石が礫となって産出するところがあり、豊泉川の川床では、現在でも拳大の礫を拾うことが出来る。

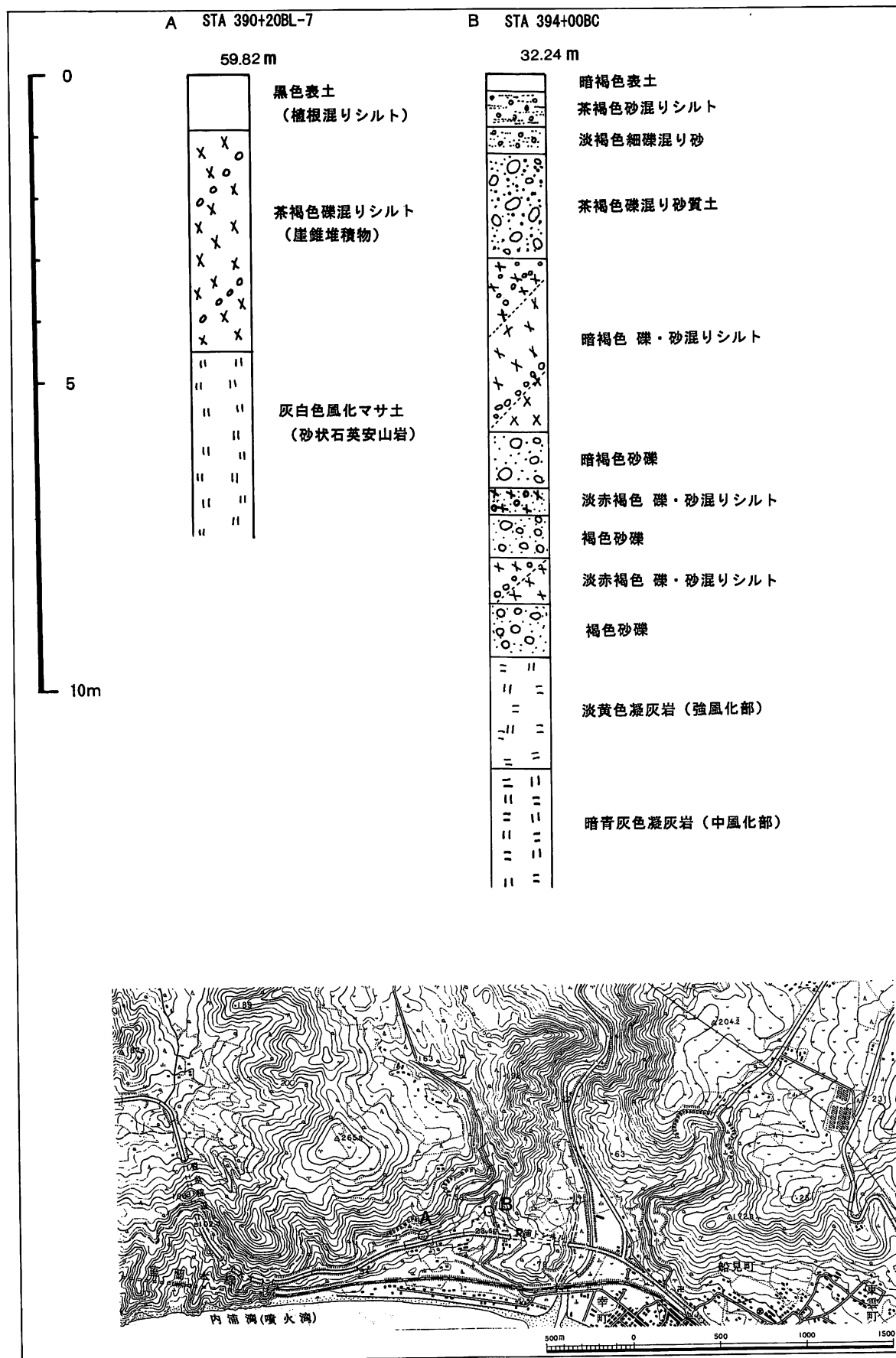
遺跡の北側に町道の急斜面を登りつめると、標高150mほどのなだらかな地形になる。この台地状平坦面は、大区画の農地となっており畑地、採草地、放牧地として利用されている。遺跡の北側、西側の断崖の一部は崩壊地である。崩壊地はかつて採石場であったという。

豊浦町の気象概況は、室蘭地方気象台大岸観測所の資料で知ることが出来る。月別平均気温は高いのが7月8月の20℃前後、低いのが2月の-5℃前後であり、内浦湾に面していることもあって年間の寒暖差は少ない。年間降水量は、年較差が大きく1000~2000mmで変動している。7月~10月には、100mmを越すときが多い。降雪は10月下旬から4月下旬まで、月に100mmを越すことは少ない。夏季の海霧は少ない。高岡1遺跡は西、北、東の三方を塞がれた地形なので、年間を通して南方から吹き上げる風が卓越する。

1993年7月12日22時過ぎに発生した「北海道南西沖地震」は、震源域から140kmほどの距離なので「震度4」程度の揺れであった。調査区内に特別の変化はみられず、調査事務所の棚に置いてあった物品、書籍のいくつかが転倒していただけであった。（西田 茂）



図Ⅱ-1 遺跡周辺の地形



図Ⅱ-2 機械ボーリングによる土層柱状図

## 2. 周辺の遺跡

図II-3は、北海道教育委員会作成の埋蔵文化財包蔵地カードと『豊浦町史』（1972年、豊浦町）などをもとにして作った豊浦町内の遺跡分布図である。これによると、丘陵斜面と海岸付近に遺跡がみつまっている。

これらの遺跡の時代・時期・立地の特色は、発掘調査等によりその内容が比較的明らかなものをもとに推定すると、次のようになる。

縄文時代早期の遺跡にはアルトリ遺跡、勝木遺跡、大和遺跡、高岡1遺跡などがある。アルトリ遺跡では、1955年（昭和30年）からの調査によって貝殻条痕文土器が検出されている。ここの器形を知りうる良好な資料をもとに「アルトリ式土器」が、設定されている（図II-4）。高岡1遺跡では条痕文平底土器、撚糸文平底土器が出土している（本書）。

縄文時代前期になると、噴火湾沿岸には貝塚の形成をみるが、豊浦町内では貝塚は未確認である。縄文時代中期の遺跡には、アルトリ遺跡、勝木遺跡、アクンナイ遺跡、青山遺跡、礼文華2遺跡、高岡1遺跡などがある。丘陵斜面に立地する遺跡が多い。

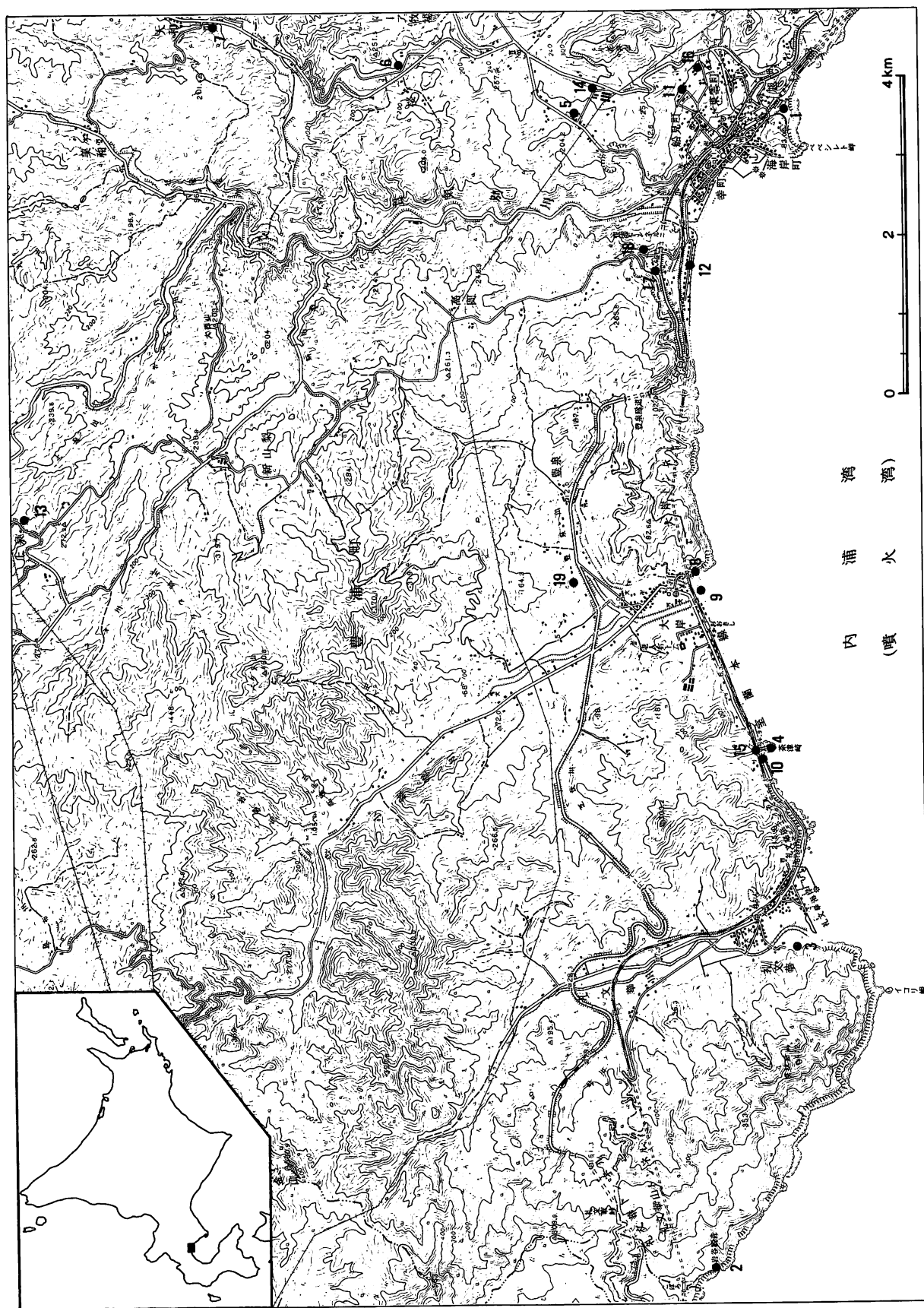
縄文時代後期の遺跡には、勝木遺跡、西川遺跡、チャシナイ遺跡、アクンナイ遺跡、アカ川遺跡、桜遺跡、礼文華2遺跡、高岡1遺跡、高岡2遺跡などがある。縄文時代晩期の遺跡には、勝木遺跡がある。

続縄文時代の遺跡には、小幌洞窟遺跡、礼文華遺跡、大岸川口左岸遺跡、大岸川口右岸遺跡、高岡1遺跡などがある。礼文華遺跡は恵山式土器を含む貝塚があり、人骨のみならず、鹿、鯨、イルカの積み石塚が見つまっている。さらに1991年の発掘では、紡錘車が検出されている。

擦文時代の遺跡は小幌洞窟遺跡、チャシの時代の遺跡はカムイチャシ跡がある。（西田 茂）

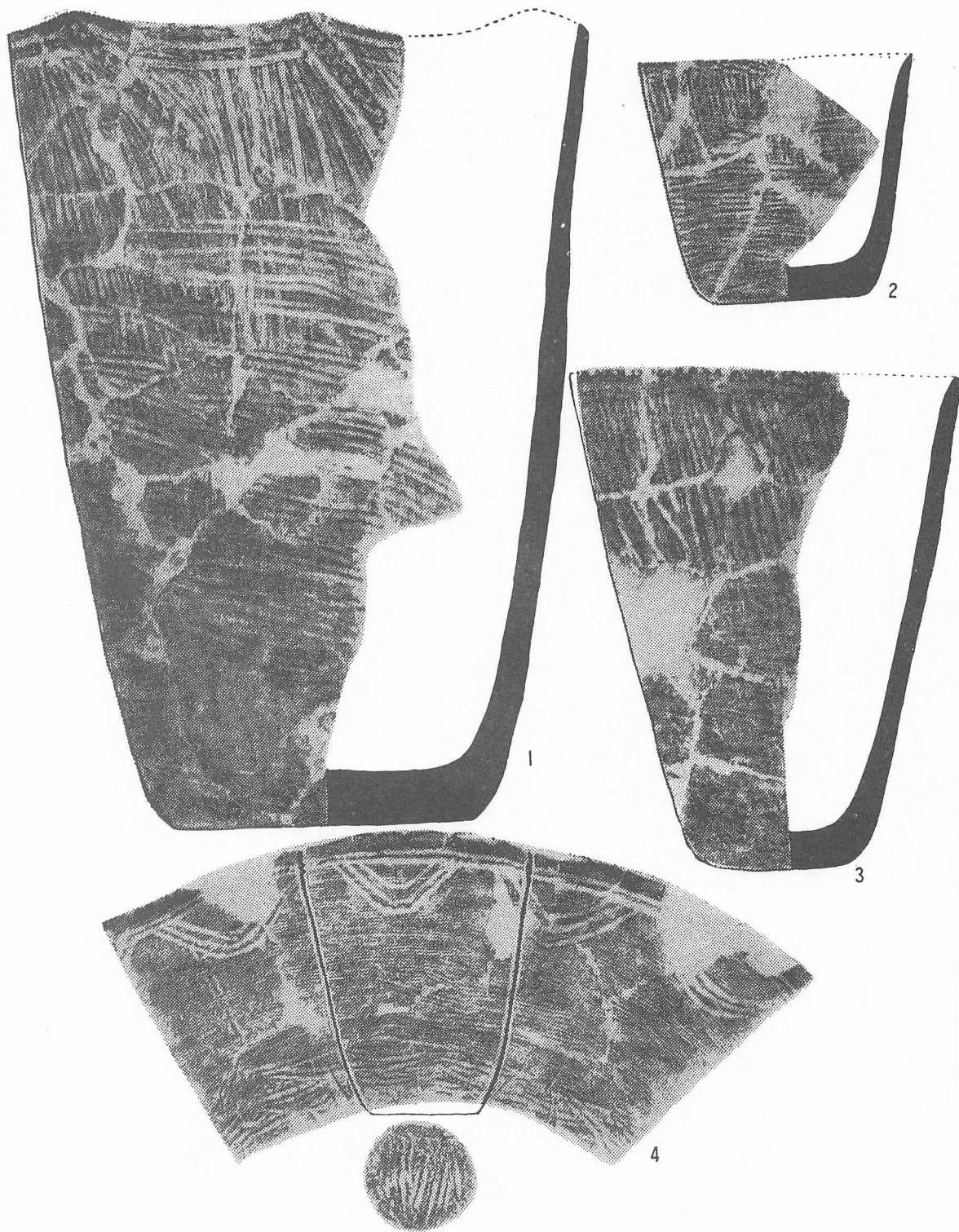
表II-1 豊浦町の遺跡

番号	遺 跡 名	所 在 地	概 要
1	アルトリ	旭町	縄文時代早期、中期。条痕文土器、撚糸文土器。アルトリ式土器の標識遺跡。
2	小幌洞窟	礼文華小幌	続縄文時代。擦文土器。土器、石器、骨角器、人骨が出土。
3	礼文華	礼文華149-8ほか	続縄文時。土器、石器、骨角器、人骨が出土。礼文華貝塚とも言う。
4	カムイチャシ	礼文華茶津岬	内浦湾に突きでた岬に一条の濠がある。史跡公園として整備されている。
5	勝木	桜138-2ほか	縄文時代早期、中期、後期、晩期。包含層は広い範囲である。
6	西川	桜303	縄文時代後期。
7	大和	大和127-1	縄文時代早期。条痕文土器出土の記録がある。
8	大岸川口左岸	大岸13-1	続縄文時代。川と海に接した崖の下に貝塚を含む遺物包含層がある。
9	大岸川口右岸	大岸	続縄文時代。擦文時代。砂丘からの遺物出土記録がある。
10	チャシナイ	礼文華3ほか	縄文時代後期。
11	アクンナイ	舟見町131-1ほか	縄文時代中期、後期。石斧、石槍などが出土している。
12	アカ川	浜高岡	縄文時代後期。海岸線に沿って細長い範囲である。
13	青山	上泉238ほか	縄文時代中期。元上泉小学校の南側から遺物出土の記録あり。
14	桜	桜138-5	縄文時代後期。
15	礼文華2	礼文華2地先	茶津岬の濠の外側から縄文時代中期、後期の遺物が検出された。
16	東雲	東雲町83ほか	縄文時代。時期不詳。石斧が出土している。
17	高岡1	高岡57ほか	縄文時代早期～続縄文時代。古別川の両岸。1993年発掘調査。本書。
18	高岡2	高岡74-2ほか	縄文時代後期。土器、石器が出土している。
19	豊泉	大岸512-2	縄文時代。つまみ付きナイフ、黒曜石剥片が出土している。



図Ⅱ—3 豊浦町の遺跡





図Ⅱ-4 豊浦町アルトリ遺跡の土器



### Ⅲ. 調査の方法、遺物の分類

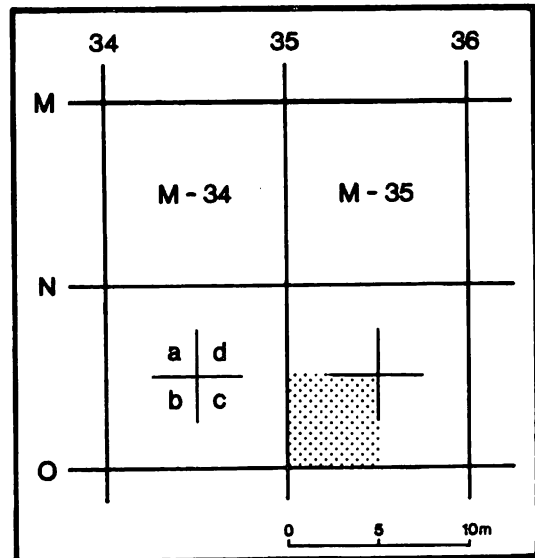
#### 1 調査の方法 (図Ⅲ-1・2)

**発掘区の設定** 現地調査の基本図は、北海道縦貫自動車道工事予定図1,000分の1を使用した。発掘区の設定は、以下のようにおこなった。まず、工事予定(下り車線)中央線のSTA392、STA393をそれぞれM-50、M-60とする。これを基軸線として10mの方眼を設定する。この10mの方眼は、北西端の交点のアルファベットと数字の組み合わせで呼称される(例：N-35)。さらにこの10mの方眼は5m四方に分割されて小発掘区となり、反時計まわりに、北西端からa、b、c、dと呼ぶ(例：N-35-b)。

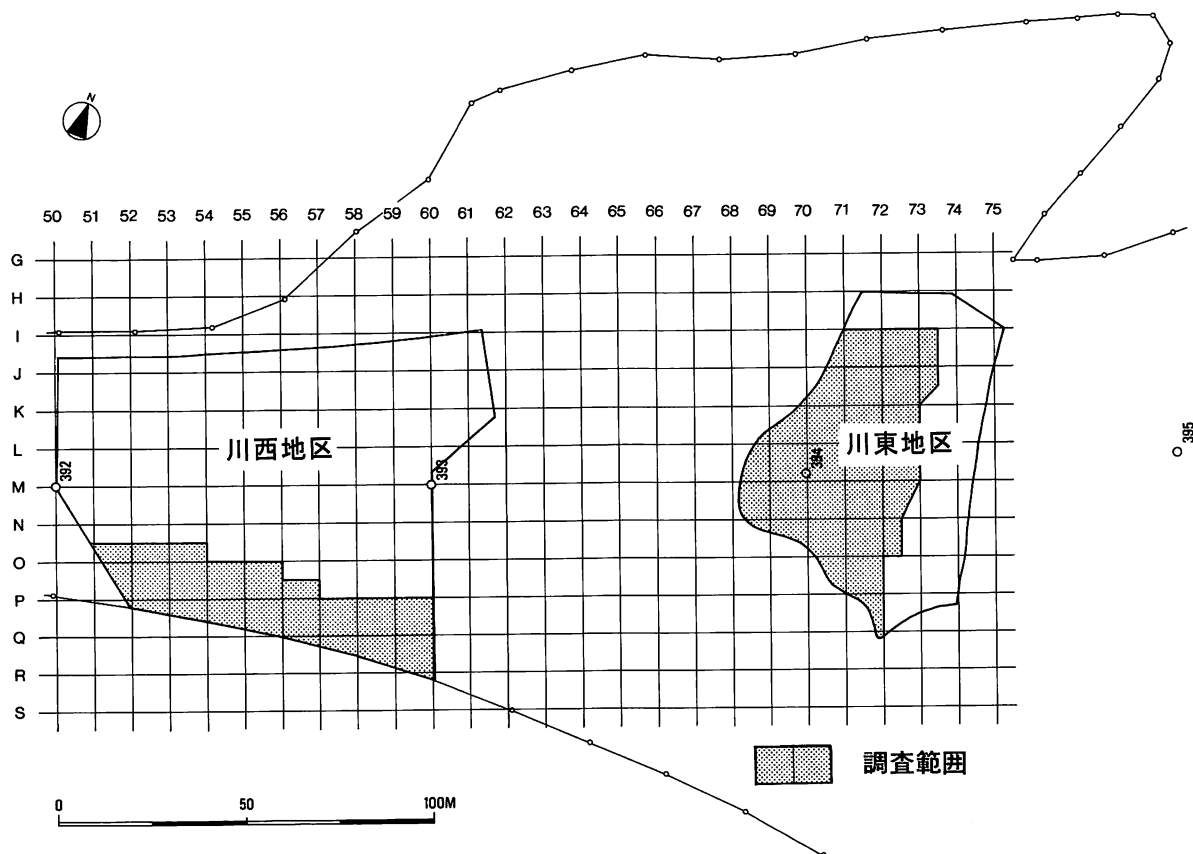
なお、基軸線に用いた点の平面直角座標は、第XI系で  
STA392：X=-156,673.2798、Y=36,660.3172  
STA393：X=-156,640.4408、Y=36,754.7687  
である。

**調査予定地の遺跡内容の推定** 北海道教育委員会によって1992年におこなわれた範囲確認調査の結果から、以下のように推定された。

川東地区：出土遺物は縄文時代早期の土器、縄文時代中期の土器、石鏃、スクレイパー、扁平半月形石器(すり石)、土製円盤、黒曜石の剥片などである。縄文時代中期の土器はまとめて出土しており、住居跡な



図Ⅲ-1 発掘区の呼称



図Ⅲ-2 地区の呼称、グリッドの設定、調査範囲

どの遺構が検出される可能性がある。縄文時代早期の土器は、小破片である。調査予定地は、畑として耕作されており、良好な遺物包含層の残存はごく部分的であろう。

川西地区：出土遺物は縄文時代中期の土器、石斧、すり石、ナイフ、スクレイパー、黒曜石の剥片、メノウの剥片などである。土器の出土状態、土層の堆積状況から判断して住居跡などの遺構の検出が予想される。調査予定地は、畑として耕作されており、良好な遺物包含層の残存はすくないであろう。

**発掘の手順と遺物の取り上げ** はじめ5 m四方の小発掘区を飛び飛びに全体の4分の1を発掘した(25%調査)。これをもとに遺構・遺物の分布状況を推定し全体の調査に取りかかった。あきらかな盛り土は建設用重機を使って搬出した。そのほかはすべて人力による手掘り作業で、小発掘区ごとにスコップ、ツルハシ、移植ゴテ、竹ヘラなどを用いて遺物の多寡、土層の変化をみきわめながらおこなった(包含層調査)。

遺物は出土の状況に応じて、位置や土層を記録してから発掘区ごとに取り上げた。とりわけ本来的な遺物包含層と考えられるⅢ層・Ⅳ層、Ⅵ層・Ⅶ層から検出される遺物については、出土状態の詳細な記録化をおこなった。微細遺物の密集部分では、水洗いによって取り上げたところもある。

25%調査時に、Ⅷ層も手堀作業でいくつか試掘溝を掘ったが、この土層からは遺物が検出されなかった。

**遺構の調査** 25%調査、包含層調査時に住居跡、土壌などを推定できたときは、その平面形の長軸と短軸方向に土層観察用の土手を残して掘り下げた。想定される床面の検出は、土層観察用の土手に接して小さな先行溝を掘るなどして、慎重に行った。遺物は、出土の状況を詳細に記録化してから取り上げた。

**遺物整理の方法** 出土した遺物は、野外作業と並行して現地で水洗・注記作業をおこなった。小片あるいは微細なものを除いて、大多数の遺物には発掘区と出土層、および取上げ番号を注記した。現地では遺物収集帳点検・補正(遺物台帳作成)、大まかな遺物の分類までおこなった。冬期の室内整理作業で、土器の接合・復元作業、石器や黒曜石剥片類の接合、土器・石器の実測・製図、集計およびそのほかの記録類の整理をおこなった。

土器の接合・復元作業においては、土器の破片個々の出土位置を明記することによって、土器の破損状況を明らかにすることにつとめた。しかし、縄文時代においても繰り返し人が住む場所であったことも禍して遺構・遺物の残存状態が不良のために、土器破損の様子を十分に把握することは出来なかった。したがって、縄文時代早期の住居跡と多量の土器とが、いかように関係しているのかは、明確な結論を得たものは少ない。

黒曜石の石器・石核・剥片には原産地「豊泉群」と推定されるものが多くあった。これらの接合をおこなうとともに、肉眼観察による特色の理解につとめた。さらに原産地推定に供しうる理化学的な資料の蓄積のために、発掘調査に並行して近辺野外での資料採取もおこなった。

## 2．土層の区分（図Ⅲ－3・4・5）

25％調査を終えた段階で、土層の区分は以下のように行った。これは深堀部分も含めて調査予定地の全体を見渡し、区分したものである。しかしながら、調査区の全域に自然流失や耕耘のための削平・攪乱が生じており、これらの土層区分が整然と残っているところは少ない。

遺物の取上げは、この土層区分をもとに行ったが、流失・削平、攪乱の判然としないところでは、区分に一部混乱が生じたものもある。

I層：耕作表土、盛り土。

II層：黒色腐植土。この中に灰白色火山灰がある。

III層：褐色土。粒子は細かい。

IV層：灰褐色粘質土。乾燥するとクラックが生じる。擬似グライ層。

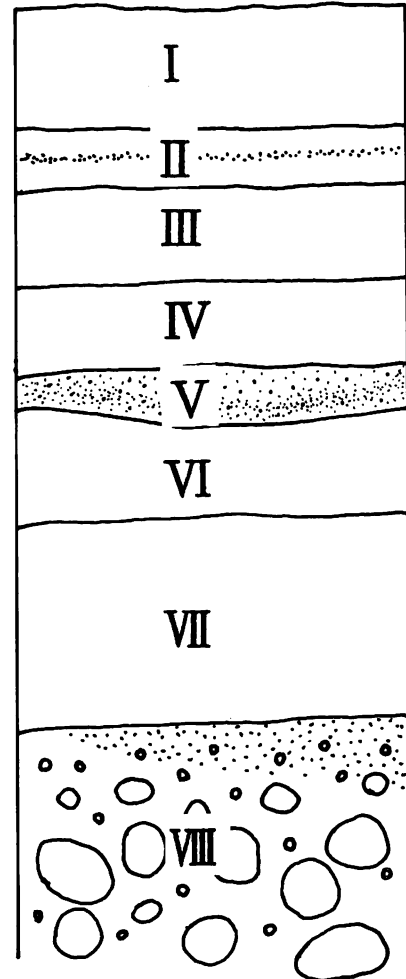
V層：黄褐色火山灰（幌別火山灰）。

VI層：黒色～黒褐色土。粗粒子で、粘性少なし。

VII層：褐色～暗褐色土。細粒子で、弱い粘性あり。

VIII層：黄褐色～褐色土（岩礫混じり）。上部は砂質。

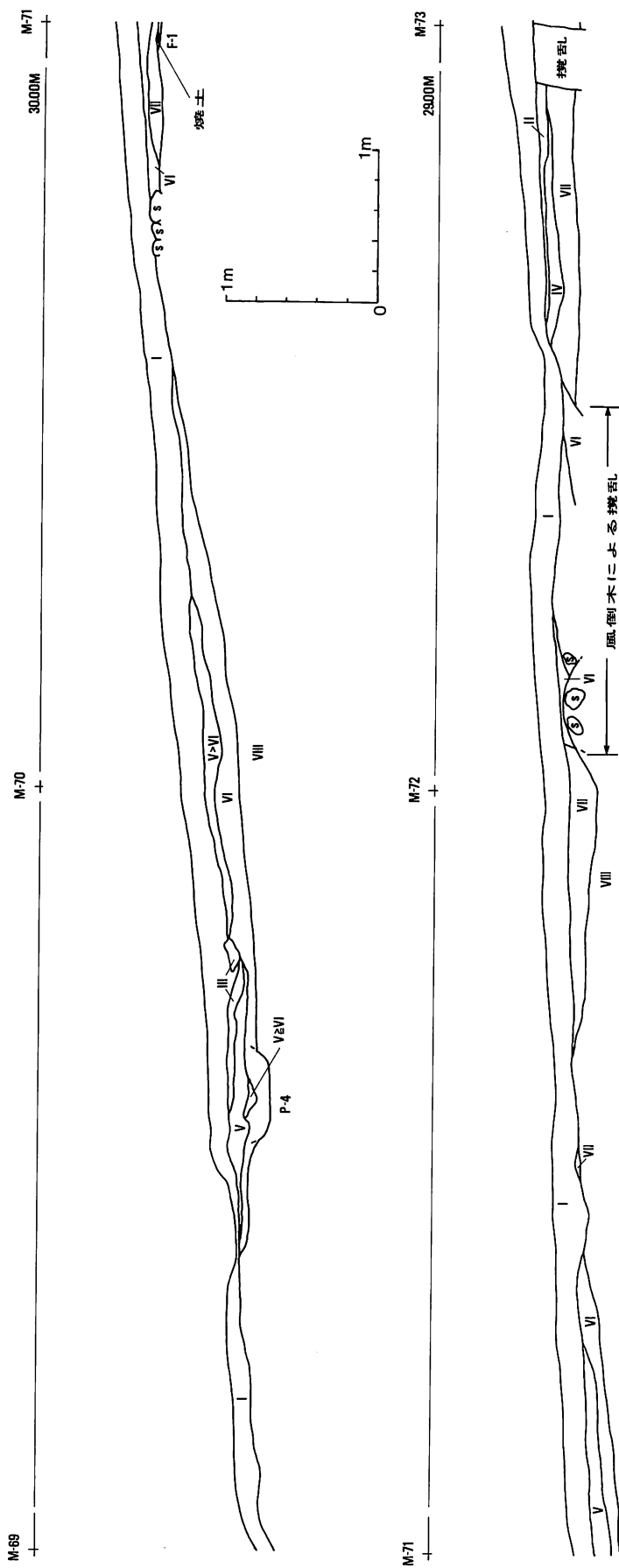
遺物の本来的な包含層はIII層・IV層（続縄文時代～縄文時代早期）、VI層・VII層（縄文時代早期）である。現地で認められる火山灰は、上位から灰白色（呼称不明）、黄褐色（苫小牧火山灰、窪地に点在）、黄褐色（幌別火山灰）がある。



図Ⅲ－3 土層柱状図

土層断面は図Ⅲ－4・5である。図示した大半の部分が耕作による削平、攪乱を受けており、II層、III層、IV層の残存はごくわずかである。東西方向ではM-69、70区にIII層、V層、VI層の整序層が認められる。南北方向ではJ・K-72区とM-72区にV層、VI層の整序層が認められる。

（西田 茂）



- I 層：耕作表土、盛り土。  
 II 層：黒色腐植土。この中に灰白色火山灰がある。  
 III 層：褐色土。粒子は細かい。  
 IV 層：灰褐色粘質土。乾燥するとクラックが生じる。擬似グライ層。  
 V 層：黄褐色火山灰（嵯峨火山灰）。  
 VI 層：黒色～黒褐色土。細粒子で、粘性なし。  
 VII 層：褐色～暗褐色土。細粒子で、弱い粘性あり。  
 VIII 層：黄褐色～褐色土（岩礫混じり）。上部は砂質。  
 V>VI：暗黄褐色土。V 層と IV 層の混じり。粗粒子で、粘性なし。  
 V<VI：暗黄褐色土。V 層と VI 層とほぼ同質であるが、V 層が多くて細粒子である。

図 Ⅲ—4 土層断面（東西方向、M69—M73）

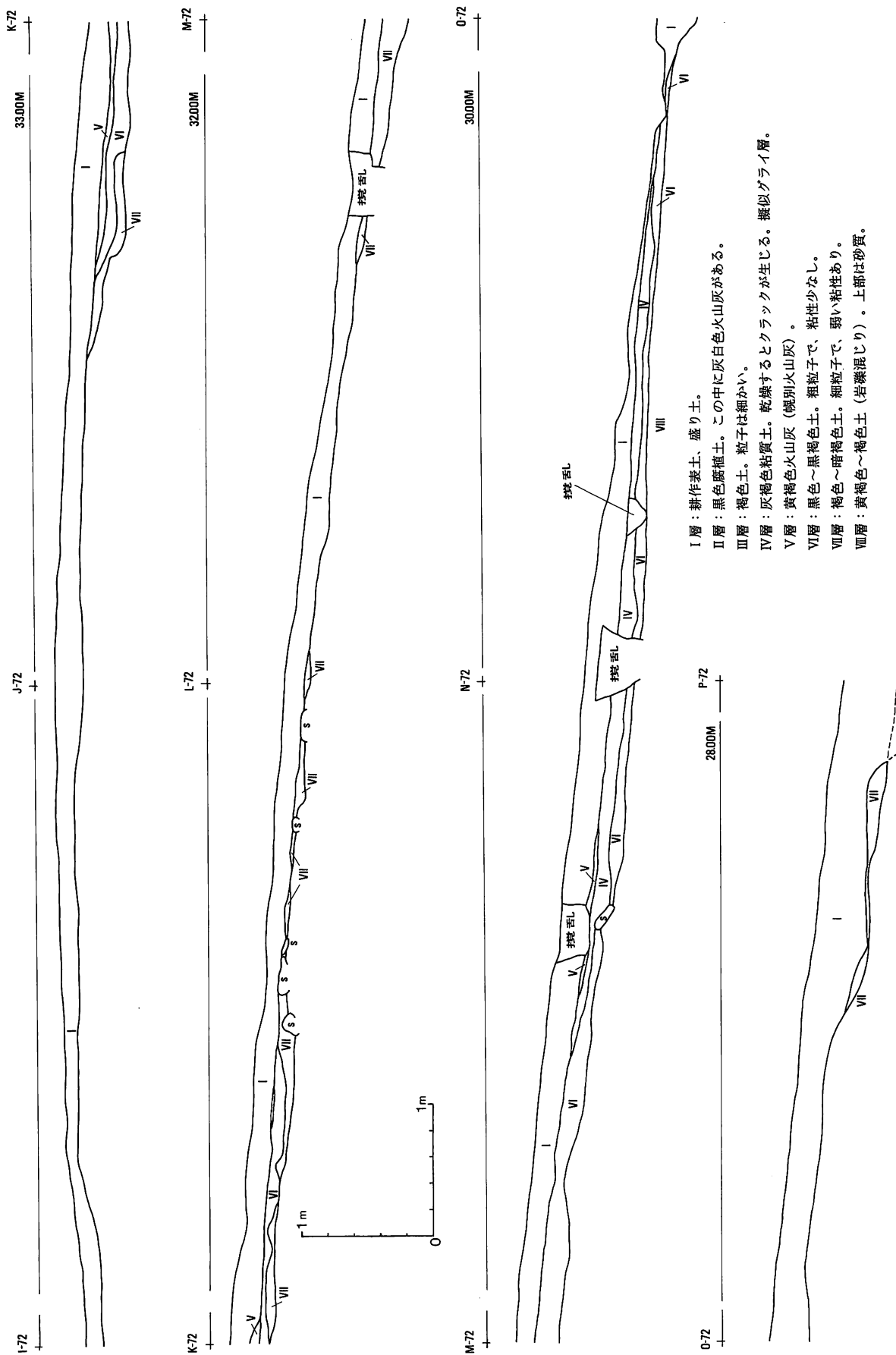


図 11-5 土層断面（南北方向、I 72—P 72）

### 3. 土器の分類

土器は縄文時代早期に属する資料をⅠ群とし、以下順次前期、中期、後期、晩期をⅡ群、Ⅲ群、Ⅳ群、Ⅴ群とした。続縄文時代のものはⅥ群、擦文時代のものはⅦ群である。

#### 《Ⅰ群》縄文時代早期に属する土器群

本群はa、bの2類に分類され、さらに細分される。

a類：貝殻文、条痕文のある土器群

a-1類 貝殻文尖底土器

a-2類 条痕文平底土器。アルトリ式に相当するもの

b類：縄文、撚糸文、組紐圧痕文、貼付文等のある土器群

b-1類 東釧路Ⅱ式に相当するもの、表館Ⅵ群に相当するものも含む

b-2類 東釧路Ⅲ式に相当するもの

b-3類 コッタロ式に相当するもの

b-4類 中茶路式に相当するもの

b-5類 東釧路Ⅳ式に相当するもの

#### 《Ⅱ群》縄文時代前期に属する土器群

本群はa、bの2類に分類され、さらに細分される。

a類：縄文尖底土器群

a-1類 網文土器とそれに伴う斜行縄文、組紐回転文等の施された土器群

a-2類 春日町式、中野式に相当するもの

b類：円筒下層式に相当するもの

#### 《Ⅲ群》縄文時代中期に属する土器群

本群はa、bの2類に分類され、さらに細分される。

a類：円筒上層式に相当する土器群

a-1類 円筒上層a式、円筒上層b式に相当するもの

a-2類 サイベ沢Ⅶ式に相当するもの

b類：中期後半の土器群

b-1類 天神山式、見晴町式、大木8b式に相当するもの

b-2類 柏木川式、大安在B式、大木9式に相当するもの

b-3類 北筒式、ノグップⅡ式、静狩式、煉瓦台式、大木10式に相当するもの

#### 《Ⅳ群》縄文時代後期に属する土器群

本群はa、b、cの3類に分類される。

a類：余市式、手稲砂山式、入江式、トリサキ式、大津式、白坂3式に相当するもの

b類：ウサクマイC式、船泊上層式、手稲式、ホッケマ式に相当するもの

c類：堂林式、三ツ谷式、湯の里3式に相当するもの

#### 《Ⅴ群》縄文時代晩期に属する土器群

本群はa、b、cの3類に分類される。

a類：大洞B式、大洞BC式に相当するもの

b類：大洞C1式、大洞C2式に相当するもの

c類：大洞A式に相当するもの

《Ⅵ群》続縄文時代に属する土器群

本群はa、b、cの3類に分類される。

a類：恵山式以前とみなされるもの

b類：恵山式に相当するもの

c類：後北式に相当するもの

《Ⅶ群》擦文時代に属する土器群

(西田 茂)

参考文献

- 『吉井の沢の遺跡』 1982 北海道埋蔵文化財センター  
『美沢川流域の遺跡群Ⅶ』 1984 北海道埋蔵文化財センター  
『美沢川流域の遺跡群Ⅷ』 1985 北海道埋蔵文化財センター  
『登別市川上B遺跡C地区』 1986 北海道埋蔵文化財センター  
『木古内町建川2・新道4遺跡』 1987 北海道埋蔵文化財センター  
『木古内町新道4遺跡』 1988 北海道埋蔵文化財センター  
『深川市納内6丁目付近遺跡Ⅱ』 1990 北海道埋蔵文化財センター  
『伊達市牛舎川右岸遺跡、稀府川遺跡』 1990 北海道埋蔵文化財センター  
『中野A遺跡』 1992 北海道埋蔵文化財センター  
『表館(1)遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 1989 青森県教育委員会  
『御幸町』 1985 北海道森町教育委員会  
『入江遺跡発掘調査報告』 1991 北海道虻田町教育委員会  
『コタン温泉遺跡』 1992 北海道八雲町教育委員会  
『静狩遺跡』 1955 大場利夫、田川賢蔵  
『サイベ沢遺跡』 1958 市立函館博物館  
『サイベ沢B遺跡調査報告』 1967 亀田町教育委員会、市立函館博物館  
『西股』 1974 北海道第四紀研究会  
『知内川中流域の縄文時代遺跡』 1979 知内町教育委員会  
『札内台地の縄文時代集落址』 1982 登別市教育委員会  
『萩ヶ岡遺跡』 1982 江別市教育委員会  
『南稀府5遺跡』 1983 北海道文化財保護協会  
「陸奥国榎林遺跡の研究」 1941 角田文衛『考古学論叢』第十輯  
「入江貝塚」 1958 名取武光、峰山巖『北方文化研究報告』第十三輯  
「函館郊外煉瓦台遺跡」 1965 大場利夫、蛸子千代志『北方文化研究報告』第二十輯  
「函館市見晴町遺跡の資料」 1966 高橋正勝『北海道青年人類科学研究会会誌』8  
「札幌市平岸天神山出土の土器について」 1967 菊池俊彦『北海道考古学』第3輯  
『円筒土器文化』 1974 村越潔  
「石狩海岸砂丘地帯の遺跡群について」 1978 上野秀一『北海道考古学』第14輯  
「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」  
1981 大沼忠春『考古学雑誌』第66巻第4号  
「北海道南部の土器」 1981 高橋正勝『縄文文化の研究』4 縄文文化Ⅱ  
「北筒式土器様式」 1989 大沼忠春『縄文土器大観』第1巻

#### 4. 石器等の分類

石器等の分類については、定形的な石器をI～IX群に分け、石核・剥片類をXI群とし、定形的な石器と認定しがたい加工痕や使用痕のある剥片・礫をX群として、記号を用いて分類をした。分類記号を用いなかったものには、礫や土製品、石製品がある。

なお、IXA 1, IXA 2の本文中や一覧表での名称には、R・フレイク、U・フレイクの略称を用いている。

##### ＜I 群＞ 石鏃・石槍類

##### A 類 石鏃

- 1：石刃鏃
- 2：長身のもの
- 3：薄身のもの
  - a：柳葉形のもの
  - b：五角形になるもの
- 4：三角形のもの
  - a：凹基のもの
  - b：平基のもの
- 5：木の葉のもの
- 6：菱形のもの
- 7：有茎のもの
- 8：破片(細分の困難な破片)・未製品など

##### B 類 石槍またはナイフ

- 1：茎をもつもの
- 2：茎が明瞭にみられないもの  
(木の葉形・菱形のものを含む)
- 8：破片(細分の困難な破片)・未製品など

##### ＜II 群＞ 石錐

##### A 類 石錐

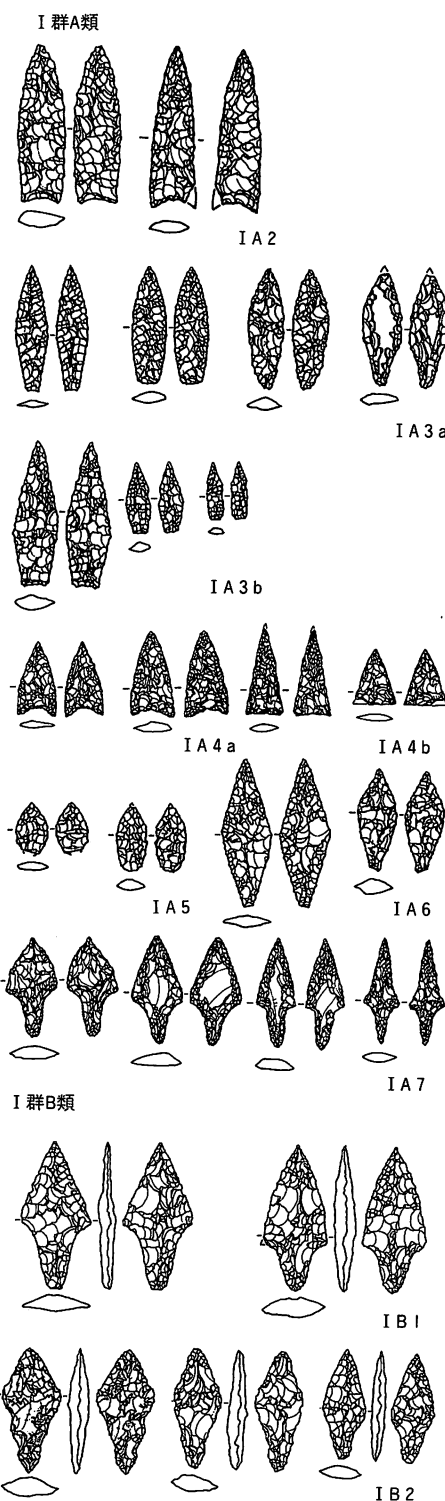
- 1：刺突部を作り出したもの
- 2：棒状のものにつまみ部が作り出されたもの
- 3：棒状のもの
- 8：破片(細分の困難な破片)・未製品など

##### ＜III 群＞ つまみ付きナイフ・スクレイパー

##### A 類 つまみ付きナイフ

- 1：片面全面加工のもの  
(裏面の一侧縁に刃部をもつもの)
- 2：片面全面加工のもの
- 3：片面周縁加工のもの
- 4：両面加工のもの
- 8：破片(細分の困難な破片)・未製品など

##### B 類 スクレイパー



石器分類模式図(その1)



- 1：石べらと称されるもの
- 2：円形のもの
- 3：主に縦長で下端部に刃部が設けられるもの
- 4：素材の縁辺にえぐりを入れ、それを刃部としているもの
- 5：縦長で、側縁に刃部が設けられているもの
- 6：素材の形状を大きく変えていないもの
- 8：破片(細分の困難な破片)・未製品など

〈IV 群〉 石斧類

A 類 石斧

- 1：擦り切り手法によって製作されたもの
- 2：部分的に磨かれているもの
- 3：全面磨整のもの
- 8：破片(細分の困難な破片)・未製品など

B 類 石のみ

〈V 群〉 たたき石

A 類 たたき石

- 1：棒状礫を素材としたもの
- 2：扁平礫を素材としたもの
- 3：円礫を素材としたもの
- 4：くぼみ石と称されるもの
- 8：破片(細分の困難な破片)・未製品など

〈VI 群〉 すり石

A 類 すり石

- 1：断面が三角形の礫の稜をすったもの
- 2：扁平礫を素材としたもの
- 3：扁平礫を半円状に打ち欠き弦をすったもの
- 4：円礫を素材としたもの
- 5：北海道式石冠と称されるもの
- 8：破片(細分の困難な破片)・未製品など

〈VII 群〉 台石もしくは石皿

A 類 台石・石皿

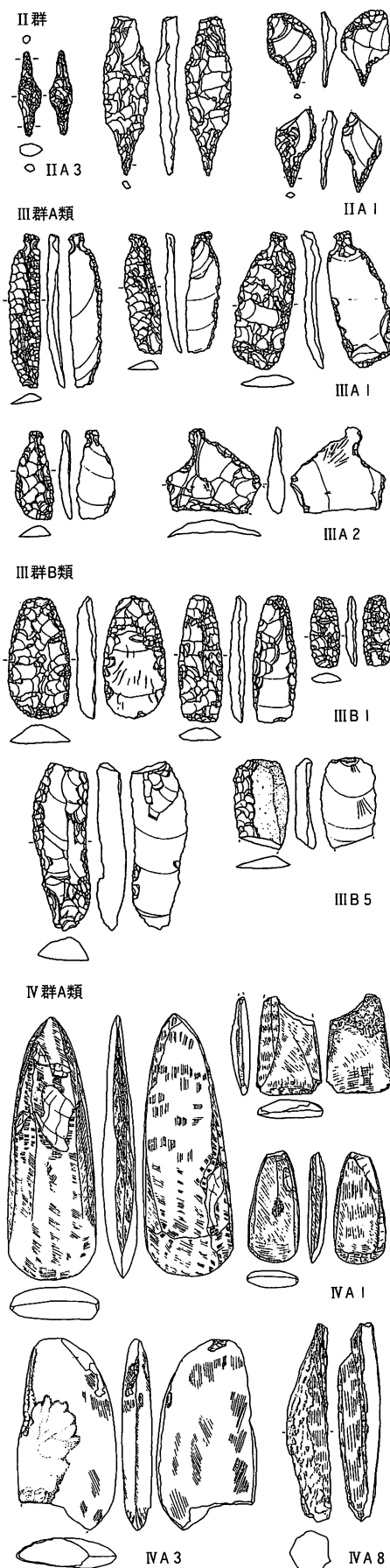
〈VIII 群〉 石鋸、砥石類

A 類 石鋸

- 1：石鋸
- 8：破片(細分の困難な破片)・未製品など

B 類 砥石

- 1：研磨面に溝があるもの
- 2：板状のもの
- 3：角柱状のもの



石器分類模式図 (その2)

8：破片(細分の困難な破片)・未製品など

〈IX 群〉 石錘

A 類 石錘

- 1：4ヵ所の打ち欠きをもつもの
- 2：長軸の両端に打ち欠きをもつもの
- 3：短軸の両端に打ち欠きをもつもの
- 8：破片(細分の困難な破片)・未製品など

〈X 群〉 加工痕、使用痕のみられる剥片や礫など

A 類 加工痕、使用痕のみられる剥片

- 1：剥片に加工痕のみられるもの(R・フレイク)
  - a：ピエス・エスキーユと称されるもの
  - b：加工痕から器種を特定できないもの。
- 2：剥片に使用痕のみられるもの(U・フレイク)

B 類 加工痕のみられる礫

- 1：擦り切り痕のある礫および礫片
- 2：意図の不明瞭な加工痕のあるもの

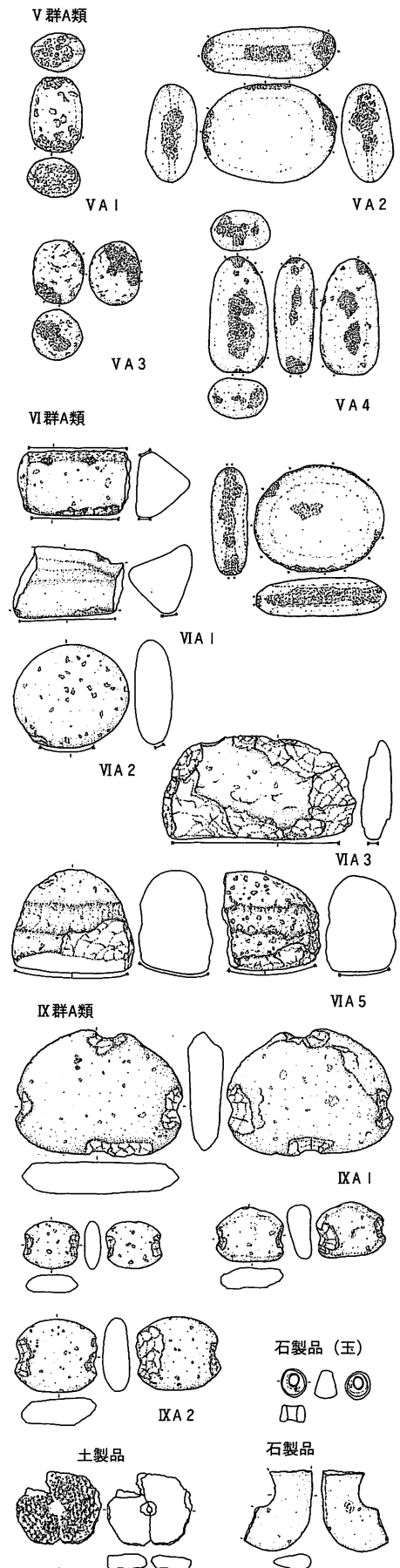
〈XI 群〉 石核・剥片類

A 類 石核・原石

- 1：石核
- 2：石器原石と考えられるもの

B 類 破片・碎片

(立川トマス)



石器分類模式図 (その3)

## IV 遺構とその遺物

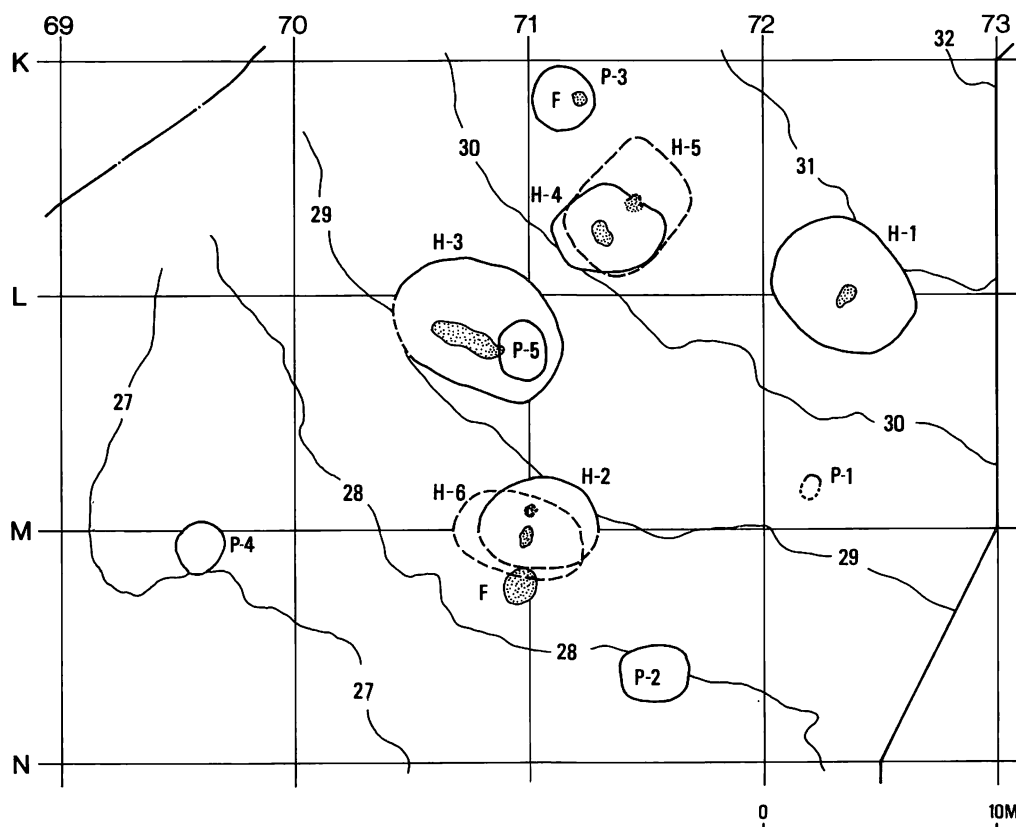
### 1. 概要

今回の調査で検出された遺構は住居跡5軒、土壇5基、焼土3か所である。

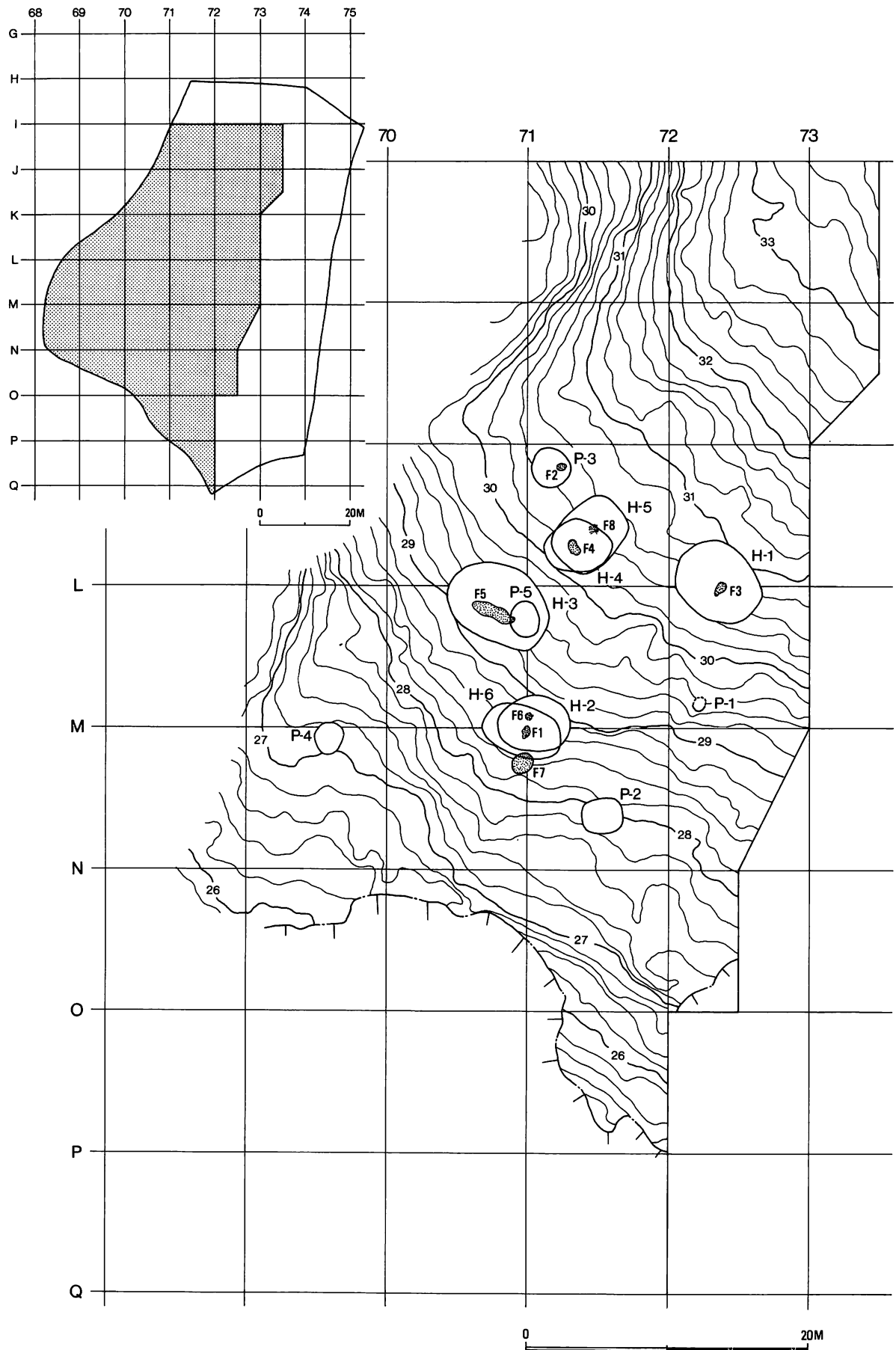
住居跡は調査区のほぼ中央部にまとまっていた。そのうちH-4と5は重複していた。H-1・3・4の三軒は覆土に幌別火山灰が存在した。出土遺物から判断するとH-1は縄文時代早期後葉、H-3は早期後半、H-4は早期末葉に属すると思われる。H-2・5の二軒は石組炉を有している。H-2は床面出土の土器から中期末葉、H-5は判然とはしないが中期中葉のものと思われる。住居跡は耕作による削平の他に、特に傾斜方向の崩落が激しく壁が明瞭に検出されたところはわずかであった。H-2、H-4は床面にまとまった土器が検出された。特にH-4は検出された土器の破片数が多かった。

土壇は住居跡よりは散在している。これらのうちP-4は住居跡と同じく幌別火山灰を覆土としており、さらに出土遺物から早期後葉であることがわかる。残りの三基は掘り込み面のほか、出土遺物から判断すると、P-2は同じく早期後葉、P-1・3は早期末葉であると思われる。とくに、P-3は中茶路式土器など数多くの遺物がレンズ状に堆積していた。また、P-5はH-3と重複しており、P-5の方がH-3よりも古いことがわかる。焼土は3か所検出された。F-1はH-2と重複し、H-2よりレベルが低いので、より古いことがわかる。周辺の遺物から考えると早期末葉に該当しようか。F-2はP-3の覆土中に存在するので、より新しく、或いは中期中葉かと考えられる。F-7は検出面から早期と考えられる。

以上、検出された遺構は調査区のほぼ中央部にまとまっていた。その他にも、遺物の平面



図IV-1 遺構の位置



表Ⅳ—2 川東地区の地形と遺構の位置



分布を見ると今回の調査区の北側にも中期を中心として分布の濃い場所が存在する。

幌別火山灰についてはⅦ-2で論点が整理されている。ここでは遺構との関連で簡単に触れてみたい。幌別火山灰を覆土に含むものはH-1、H-3、H-4、P-4である。それぞれの遺構の時期は、H-1が東釧路Ⅲ式、H-3は東釧路Ⅲ式あるいは中茶路式、H-4は中茶路式、P-4は東釧路Ⅲ式に相当する。そして、東釧路Ⅲ式土器、中茶路式土器が火山灰の下から出土した。このように遺構の覆土に幌別火山灰が見える例として登別市の川上B遺跡D地区が挙げられる（北埋調報13『川上B遺跡』）。住居跡ではDH-1～9、土壇ではDP-6にレンズ状若しくは一部分のみの幌別火山灰の堆積が見られた。それぞれの遺構の時期は東釧路Ⅲ式から中茶路式に相当すると考えられている。今回の調査結果とこの川上B遺跡の事例は類似している。（藤原秀樹）

## 2 住居跡

(1) H-1 [図Ⅳ-3～6 表Ⅳ-2～4 図版-3、10、18]

位置 K-72-b・c, L-72-a・d

規模  $6.32 \times 5.76 (5.06) / 5.48 \times 4.08 (3.90) / 0.42$

平面形 楕円形

**確認調査** 耕作土を掘り下げた段階では平面形は確認できなかった。南半分を掘り下げるとⅦ層の上面に焼土のような赤みを帯びた部分が見られたが、炭化物が肉眼では検出されず、その色調もやや黒みが強かったため、この遺跡でよく存在する酸化による変色と考えた。又、南半分では、傾斜の関係で壁がほとんど存在せず、遺物も散漫にしか出土しなかった。念のために、土層観察用のベルトを設定し、72ラインに沿った土層断面用ベルトの裏側を掘り下げているときに壁の立ち上りらしきものを確認したために、住居址と認定することになった。しかしながら、立地の関係から傾斜方向の崩壊が激しく、壁の立ち上がりはその方向にまのびした形でしか確認できなかった。幸いに、壁柱穴を発見できたので、その配置から楕円形を呈することを想定した。

**覆土** 幌別火山灰が堆積していたが、二次堆積と考えられる。その他はⅦ層が流れ込んだもので、一部には酸化によると思われる変色も認められた。

**壁・床** 壁の立ち上がりは北西から南東にかけての約2分の1弱しか検出できなかった。更に、そのうち傾斜方向の主軸に当たる北東側は崩壊が激しく、実際には全体の四分の一程度しか明瞭に検出出来なかった。その高さは20cm～40cmぐらいであり、斜めに立ち上がっていた。床面も、明瞭に平らには確認出来ず、傾斜方向に比例する形でなだらかに傾いていた。また、遺物の分布がとぎれる南部分の一部は耕作により削平されたものと考えられる。

**炉** 地床炉である。焼土面もまた平らにはならず、北側が高くなっている。

**柱穴** 主柱穴と考えられるものは、7本である。この内3本は近接してもう一つ柱穴が存在する。3本のみ新たに交換したのか、住居自体が立て替えられ3本以外が元の柱穴を利用したのかは不明である。これら3本と対になる主柱穴がもう1本考えられるが検出出来なかった。次に、壁柱穴と考えられるものは17本であり、楕円形に回っていた。南部分の壁柱穴が欠けているのは耕作による削平と考えられる。

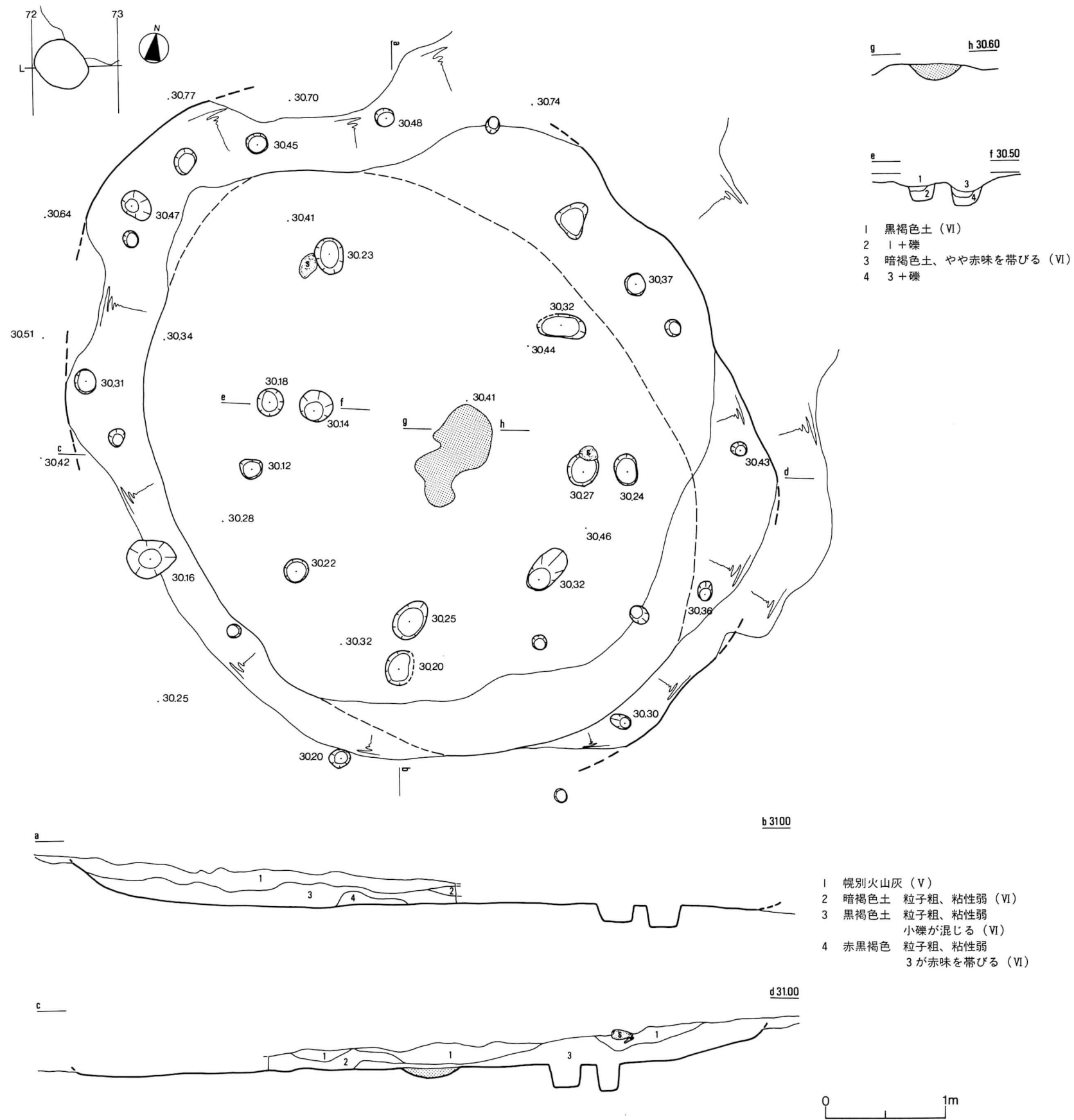
**遺物** 床面と覆土から遺物を検出した。[図Ⅳ-5～6]

土器：器形を復元出来た土器は一つである。1は口縁及び底部共に欠いているが、直立

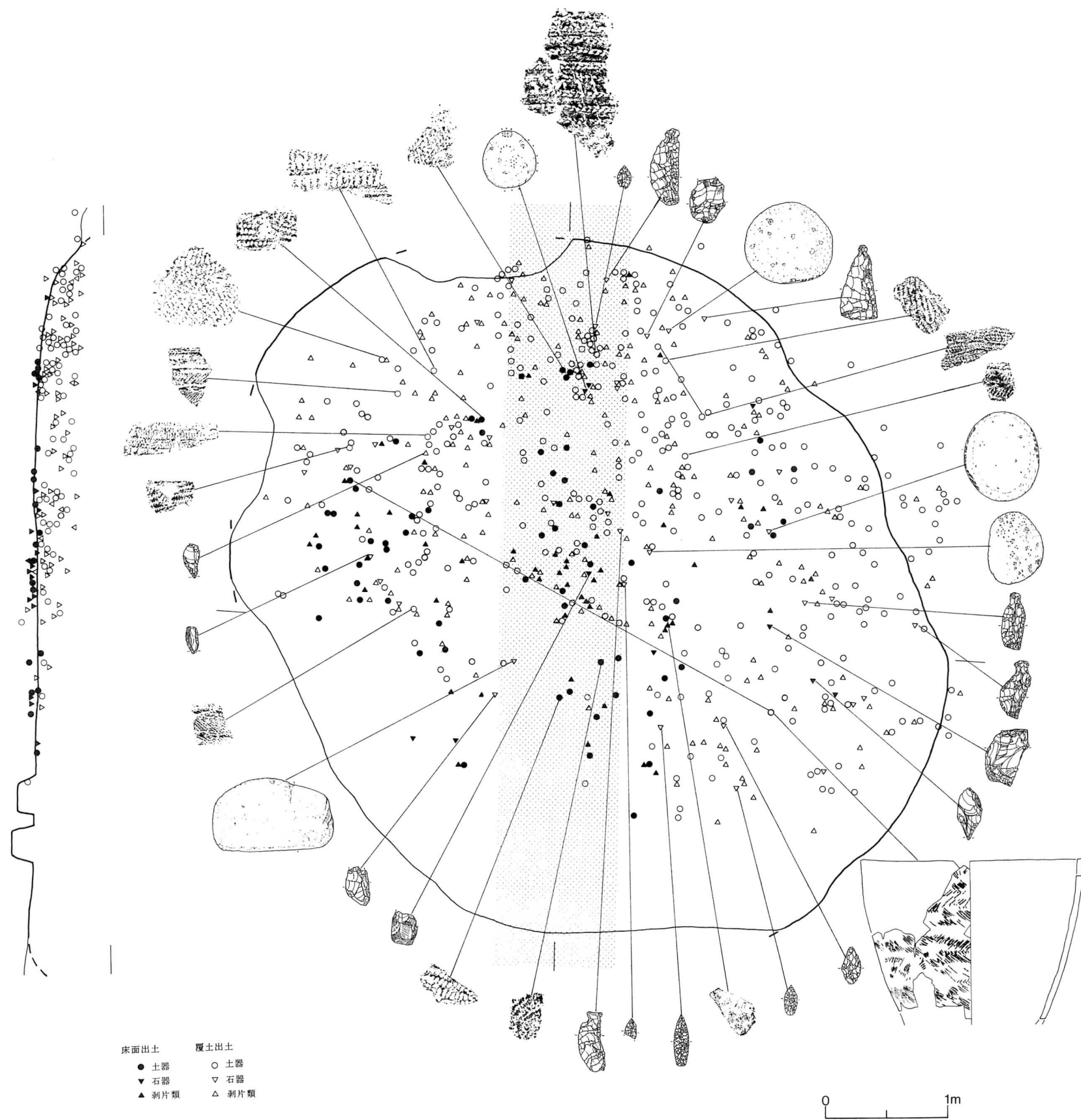
気味の口縁部からややくびれながら下りていることがわかる。文様は結束第1種の羽状縄文が施文されており、焼成もしっかりしている。また、部分的に擦り消しが行われている。コッタロ式と考えられる。住居周辺の土器と接合する事から流れ込みであろう。2～8までは床面出土の土器でいずれも東釧路Ⅲ式である。胎土には砂が含まれている。2は口唇直下に短縄文が押捺され縄文は横走気味である。3は隆起帯が口縁部に設けられ、その上下に短縄文が見られる。また角ばった口唇上にも同じ原体を用いた縄文が施されている。さらに下方には組紐文が横走している。4は縄文が斜行及び横走しており内面に横方向の筥調整による条痕が見られる。5～7は斜行縄文が見られるものである。6には縄端の押捺も見える。4及び6・7は内面に指頭調整様の凹凸がある。9は底部で、中茶路式かと考えられる。10～17は覆土出土の土器である。10・11は東釧路Ⅲ式である。10はやや横走気味に縄文が走っている。口唇直下には筥状工具で横方向に調整した跡があり、その後に施文していることがわかる。口唇には同じ原体を用いた縄の圧痕が見える。11はやや外反気味の口縁で口唇直下と胴部の横走する組紐文の間に縄端が押捺されている。口唇にも同じ原体を用いた縄が深く押してある。12～16は中茶路式である。12は縦方向の微隆起線が貼り付けられている。微隆起線間の短縄文は、器面を筥状工具で調整した後に施文されている。13から15は斜行縄文が見える。13・15は微隆起線がより太くはっきりしている。粘土紐を貼り付けた後にその下端を筥状工具でなで付けた跡がある。14は微隆起線が細く、器面調整をした後に粘土紐を貼り付け、それから施文している。16は波状口縁を呈している。微隆起線も波状になっており、短縄文が見られる。

石器：1～4は無茎鏃である。いずれも、薄身で柳葉形のもの(I A3a)である。2は先頭部を、3・4は基部を欠損する。4は裏面に一次剝離面がみられる。石質は、1が頁岩、2～4が黒曜石である。5・6は石槍またはナイフに分類されるもので、茎が明瞭にみられないもの(I B2)である。いずれも、礫表皮面を残し、素材は黒曜石の角礫が用いられている。6は先頭部が欠損している。7～9は、石錐である。いずれも、棒状のものにつまみ部が作り出されたもの(II A2)である。8・9は、刃部に回転によると思われるつぶれがみられる。石質は、いずれも頁岩である。10～14は、つまみ付きナイフである。いずれも片面全面加工で、裏面の一侧縁に刃部を持つもの(III A1)である。14は下端部を欠損する。石質は、いずれも頁岩である。15はスクレイパーで、素材の形状を大きく変えていないもの(III B6)である。石質は、黒曜石である。16は、全面磨製の石斧(IV A3)の破片である。胴部から基部を欠損する。石質は、蛇紋岩である。17・18は、たたき石である。17は、円礫を素材としたもの(V A3)で、礫全面に小さなたたき痕がみられる。18は、くぼみ石と称されるもの(V A4)である。腹・背面の中央部に位置するたたき痕が主な使用痕と思われるが、礫の両端部にも小さなたたき痕がみられる。石質は、いずれも安山岩である。19～22は、すり石である。19は断面が三角形の礫の稜をすったもの(VI A1)、20・21は扁平礫を素材としたもの(VI A2)である。19は腹・背面が、20は腹面がすり面として使用されている。21は、すり面の中央部にたたき痕がみられる。石質は、いずれも安山岩である。22は、黒曜石製の石核(XI)である。

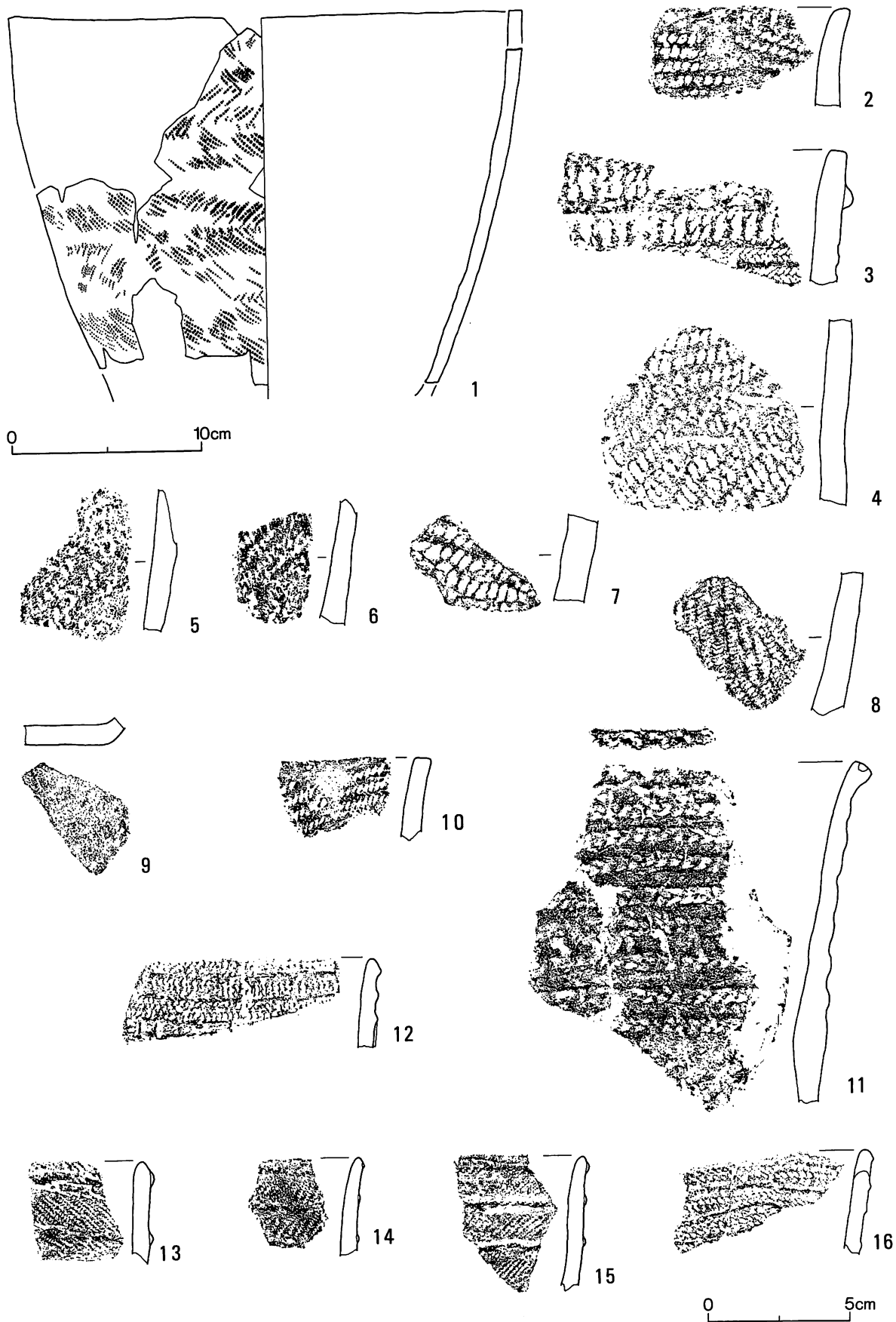
時期 2～8の床面出土の土器はI群b-2類であることから早期後葉の遺構と考えられる。  
(藤原秀樹・立川トマス)



図Ⅳ-3 H-1

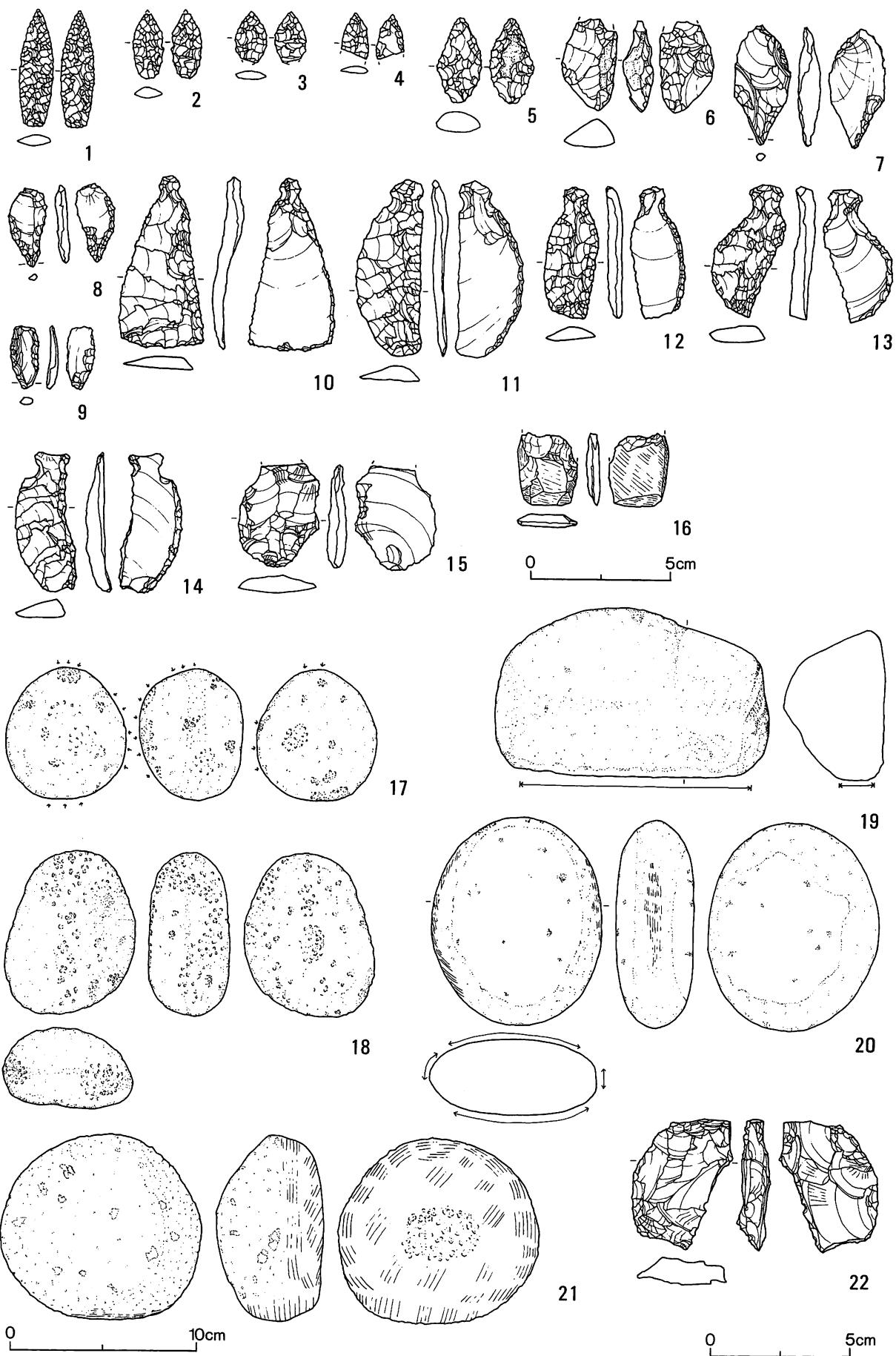


図Ⅳ-4 H-1の遺物分析



図Ⅳ—5 H-1出土の土器





図Ⅳ-6 H-1出土の石器

(2) H-2 [図IV-7~9 表IV-5~7 図版-4、11、19]

位置 L-70-c, L-71-b (M-70-d, M-71-a)

規模  $5.88 \times (3.06) / 5.20 \times (2.14) / 0.62$

平面形 卵形? 楕円形?

**確認調査** Mラインに沿った土層断面用のベルトを残して周囲をⅧ層まで掘り下げている時には、すぐ近くに水道管が走っており掘り上げ土や礫があったこと等により石組炉が出現するまで住居址であることに気がつかなかった。石組炉自体も耕作土ぎりぎりの直下で発見された。したがって遺構の南半分は傾斜の関係で削平され消失していた。

**壁・床** 壁の立ち上がりがはっきりと確認されたところはなかった。北西から東方向にかけてなだらかに上っている程度である。また、H-1と同様に傾斜方向の標高の高い側である北東の壁は他の壁よりもよりなだかになっており、崩壊が著しかったことが窺われる。床面はほぼ平らである。なお、南半分における床面の拡がりを想定するために床面レベルから5cmまで低い遺物の分布を現わして見た。南西側にはそれでも遺物がなく、耕作により削平されていたことがはっきりとわかる。南東側は確認された床面を超えて1.70m付近まで遺物の拡がり確認出来た。

**炉** 礫を7個用いた石組炉である。その内の一つは図IV-9-4の安山岩製のすり石である。すり面が上に向いて検出された。その他の礫は遺跡周辺でよく見られるものである。多くは扁平なものをを用いている。平面形は六角形である。炉の中、及び周辺部には炭化物が存在した。礫の埋め方はほぼ垂直に近いが、一つだけ斜め約30°と鋭角に差し込まれていた。この状態が構築時からのものであることは、半截した際の土層断面に示された焼土のあり方から想定出来る。

**柱 穴** 主柱穴、壁柱穴共に確認できなかった。

**遺 物** 床面及び覆土から遺物が検出された。[図IV-9]

**土器**：1は炉の近くで床面から口縁部がやや浮いた形で検出された。耕作時の削平により4分の1程度しか残されていなかった。器形は頸部にくびれがなく直線的に底部に下りている。口径は17.8cmで底部は欠けているが、底径は8.7cmよりもやや小さい程度であると思われる。文様は口唇直下に半截竹管状工具を用いた押引文が巡っている。胴部には隆起帯を設けてその隆起帯上に同じく押引文があるが、下方では一部二段になっている。隆起帯はなだらかな山形の断面で不整形であり、また傾いて巡っている。胎土には小石が混じっている。煉瓦台式であろう。2~6は覆土から出土したものである。2は東釧路Ⅲ式である。組紐が数条巡り、その端に縄が押捺されている。3は中茶路式で隆起線が細くなっており、内面には横方向に調整の条痕が見える。4~6は大木Ⅹ式に相当するものだろうか。口縁部が磨かれて無文となっており、頸部がくびれ胴が張り出している。7は床面出土で厚さや焼成等は1に似ているが縄文はよりしっかりと施されている。煉瓦台式であろうか。

**石器**：1は、無茎鏃で長身のもの(ⅠA2)である。石質は、頁岩である。2は、石槍またはナイフで、茎が明瞭にみられないもの(ⅠB2)である。尖頭部の両側縁につぶれがみられる。石質は、頁岩である。3は、一般にくぼみ石と称されるもの(ⅤA4)である。棒状の礫を素材としている。表・裏両面にくぼみがみられるが、表面の方が深く頻繁に使用されたと思われる。石質は、安山岩である。4は、すり石で、扁平礫を半円状に打ち欠き弦をす

ったもの(VI A3)である。石質は、安山岩である。5は、石核(XI A1)である。石質は黒曜石で、礫表皮面を残す。礫表皮面からみて、角礫が使用されている。

**時期** 平面形、および1の床面出土のⅢ群b-3類の土器から中期末葉の遺構であると推定される。  
(藤原秀樹・立川トマス)

(3) H-3 [図Ⅳ-10~13 表Ⅳ-8~9 図版-5、11、20]

**位置** K-70-b・c, K-71-b, L-70-a・d, L-71-a

**規模** 7.36×5.54/6.66×4.52/0.59

**平面形** 楕円形

**確認調査** 耕作土を取った段階でL-70-dにかなり大規模な幌別火山灰の堆積を確認した。その幌別火山灰を掘り下げるとやや小礫の混じった面に焼土を検出したので住居址と認定した。

**覆土** 幌別火山灰が厚く堆積していた。又、L-71杭の周辺に灰褐色土が存在し、それが固めであったため最初はこれを壁面と考えた。しかし、トレンチを見るとⅦ層を掘り込んでいることが確認できたので灰褐色土は三角堆積である、との結論に達した。

**壁・床** 壁が確認できたのは北から東にかけての約3分の2である。このうち、K-70b・c区に属する北側の壁は大人一人が持ち上げられない程の大きな礫が流れ込んでいるような状況で壁は判然とはしなかった。K-71杭周辺が最もよく残っており、その高さは55cm程である。残る東側はなだらかに上っている。床面はP-5が重複していたこともあり明瞭に検出できなかった。特に南側においてはなだらかに確認面まで上っており、さらに風刻木痕が絡んでいるので、壁・床共に明瞭にはならなかった。西側は傾斜の関係で削平されていた。

**炉** 地床炉が大きく広がっていた。しかも、中心より南西に寄っている。但し、半截した断面を見ると、焼土が厚い部分が中心であると考えられる。

**柱穴** 支柱穴・壁柱穴ともに検出することはできなかった。

**重複** P-5が床面より下に検出された。覆土の状況からH-3がより新しいと思われる。

**遺物** 床面及び覆土から遺物が検出された。[図Ⅳ-12~13]

土器：復元できた土器は無い。また、床面出土の土器も磨耗が激しかった。1は東釧路Ⅲ式で、組紐が縦横に走っており、内面には調整による条痕が横走している。2は中茶路式である。胎土には砂が含まれ、表面の磨耗が著しい。いずれも床面出土である。3は東釧路Ⅱ式と思われる。胎土に繊維様のものが含まれ、内面は凹凸が激しい。4~6は東釧路Ⅲ式かと思われる。4は補修孔が開けられ、内面には炭化物が付着しており補修孔面にも若干それが見られる。5は斜行縄文が施され、更に短縄文が見られる。6は器面に空間をあけて縄文を施文している。7~10はコッタロ式かと思われる。胎土は砂質で8~10は撚りの異なる原体を用いて羽状縄文としている。11~13は中茶路式である。11・12は縄文を施してから微隆起線の両端を篋状工具で調整している。また胴部はいずれも内面に炭化物が付着している。14は東釧路Ⅳ式で胎土には小石が含まれている。15は中茶路式の底部である。底から立ち上がってすぐのところに貼り付けたような小さな瘤状のものが見えるが、文様であるのかということは、これだけでは判断出来ない。また、底面も剝落である

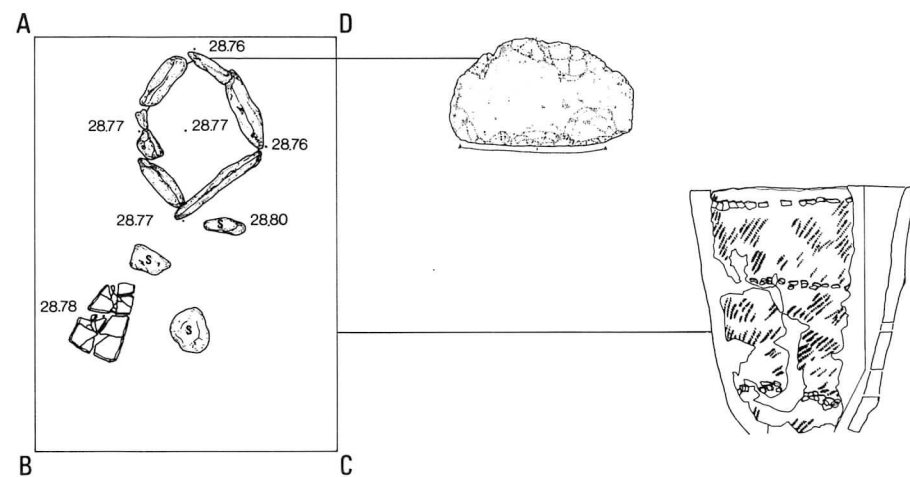
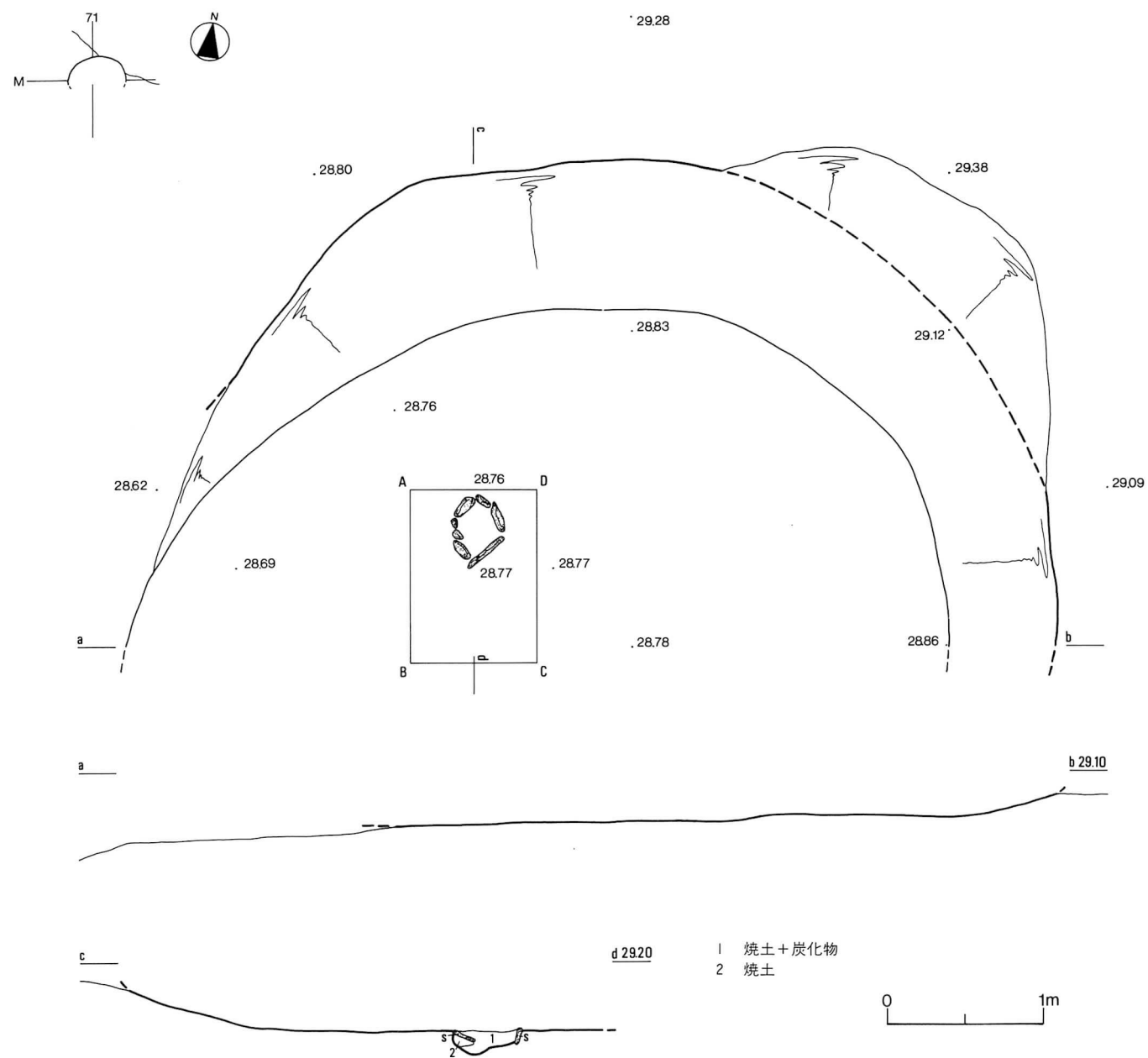
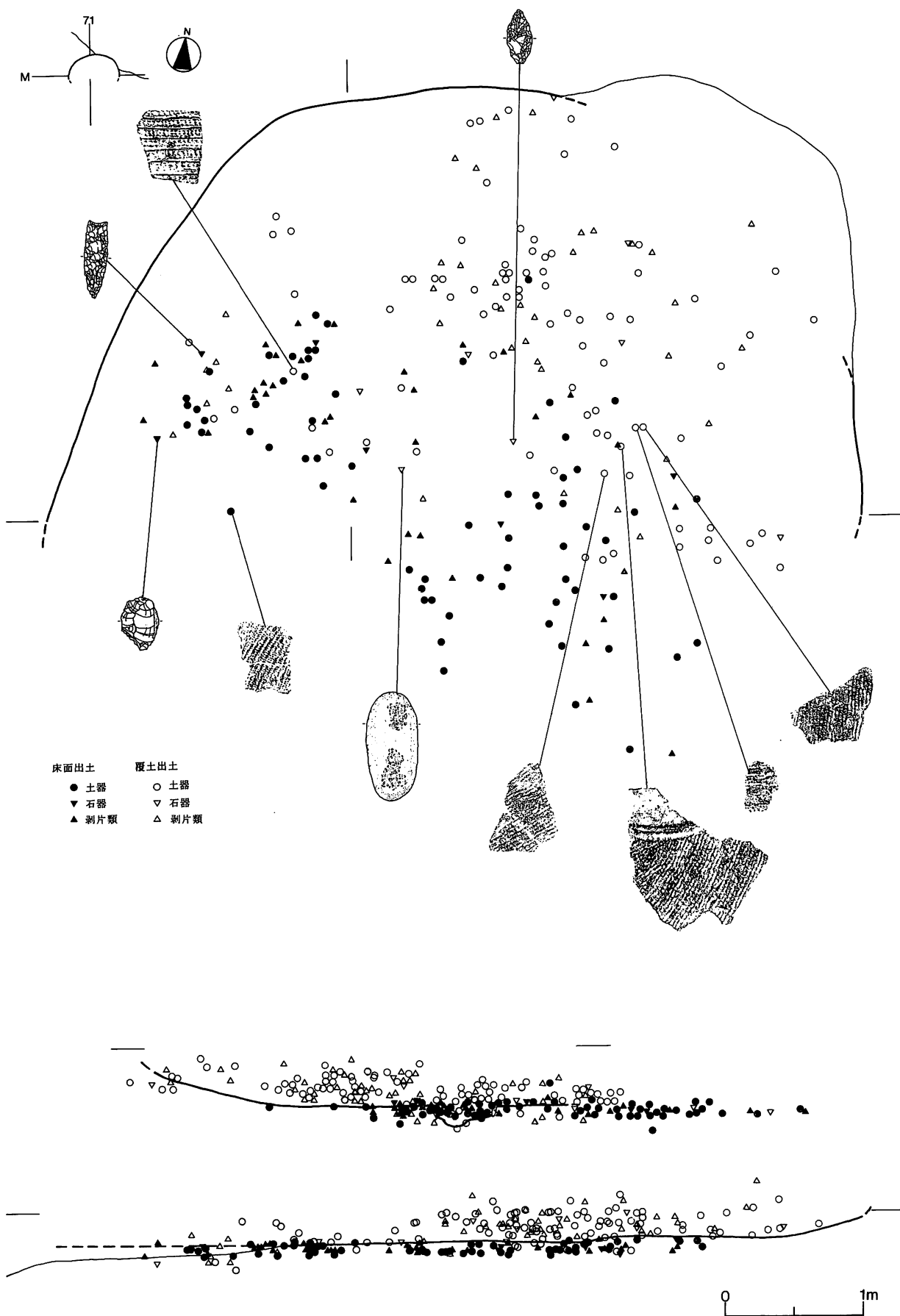
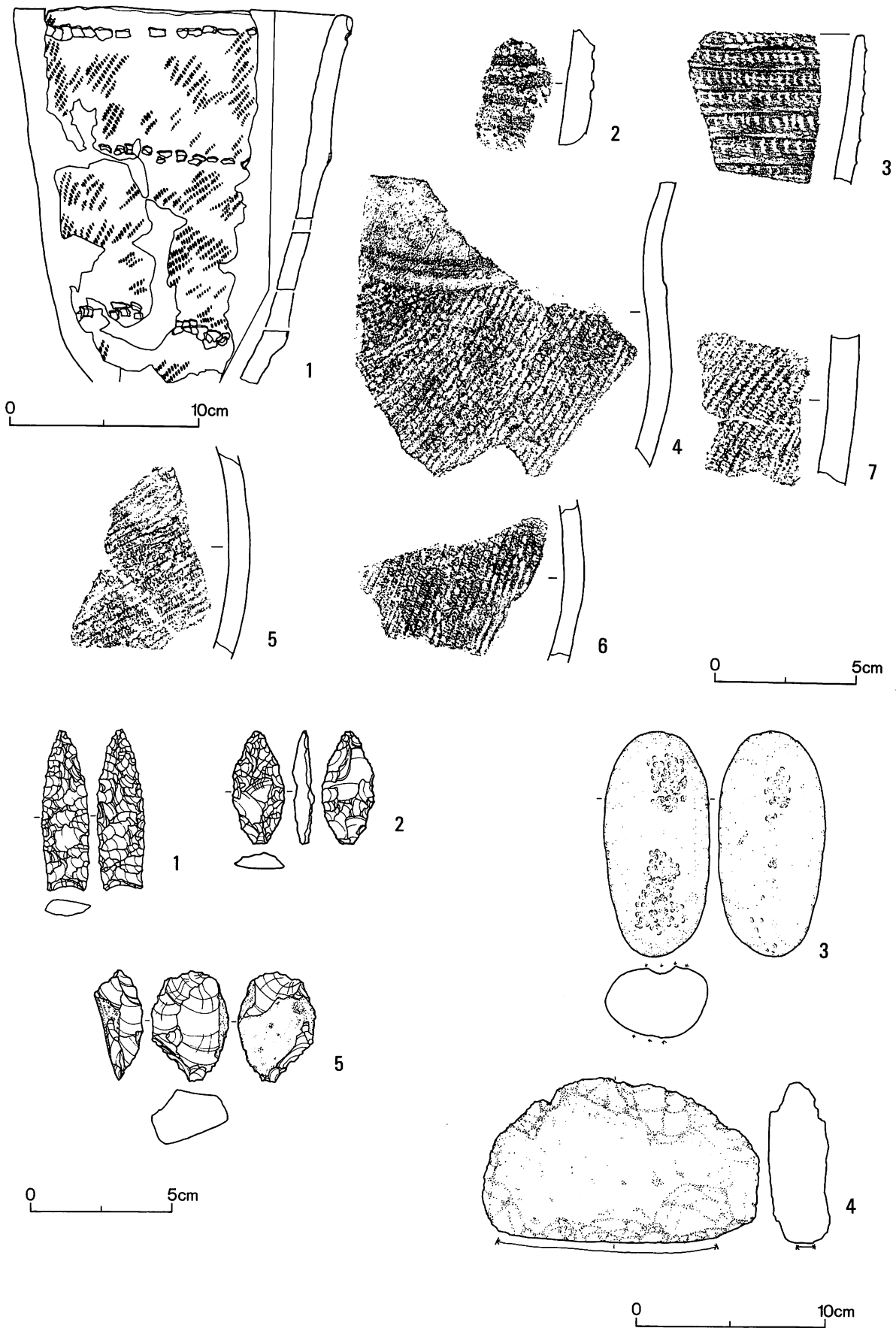


图 IV-7 H-2

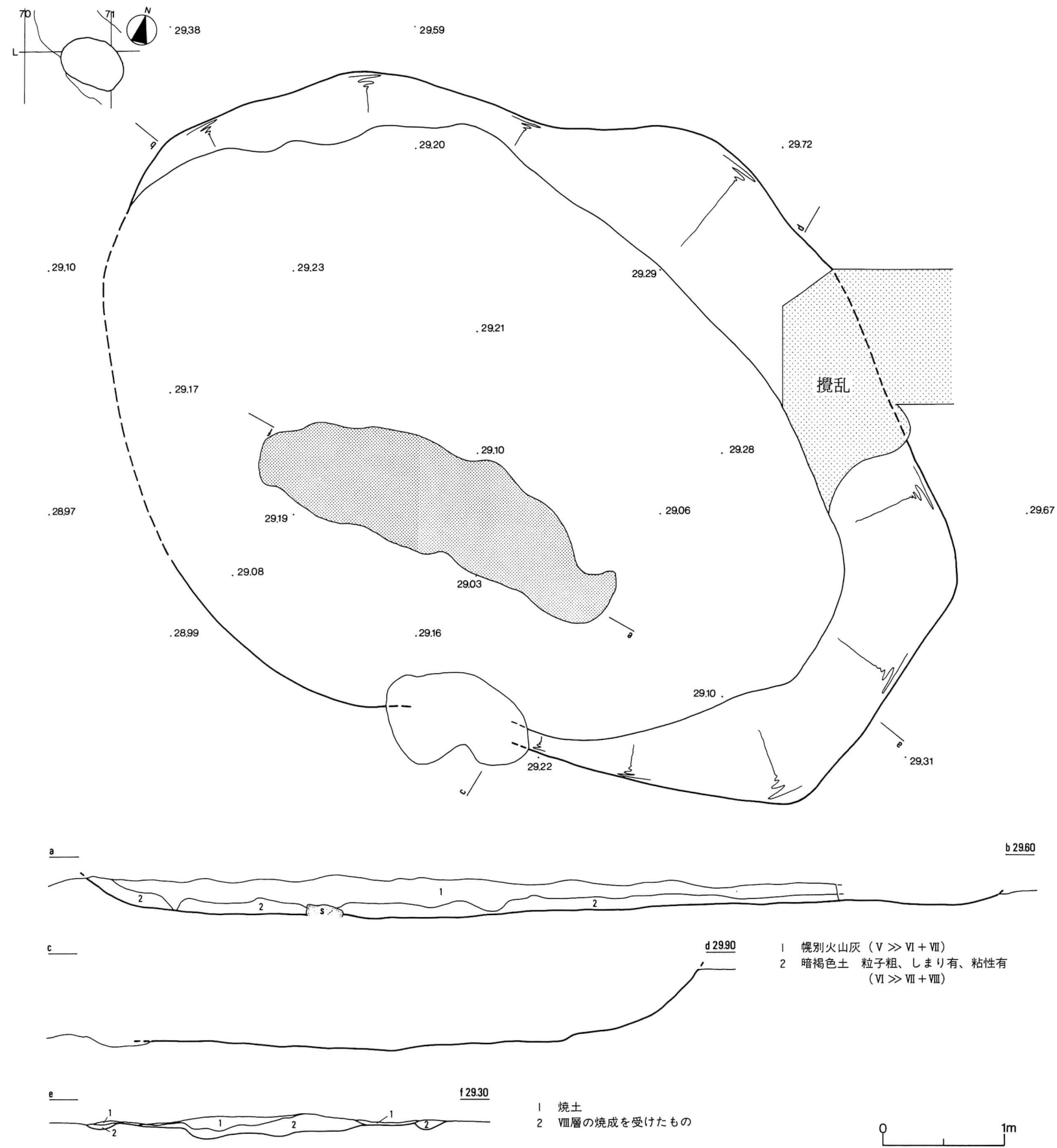


図Ⅳ-8 H-2の遺物分布

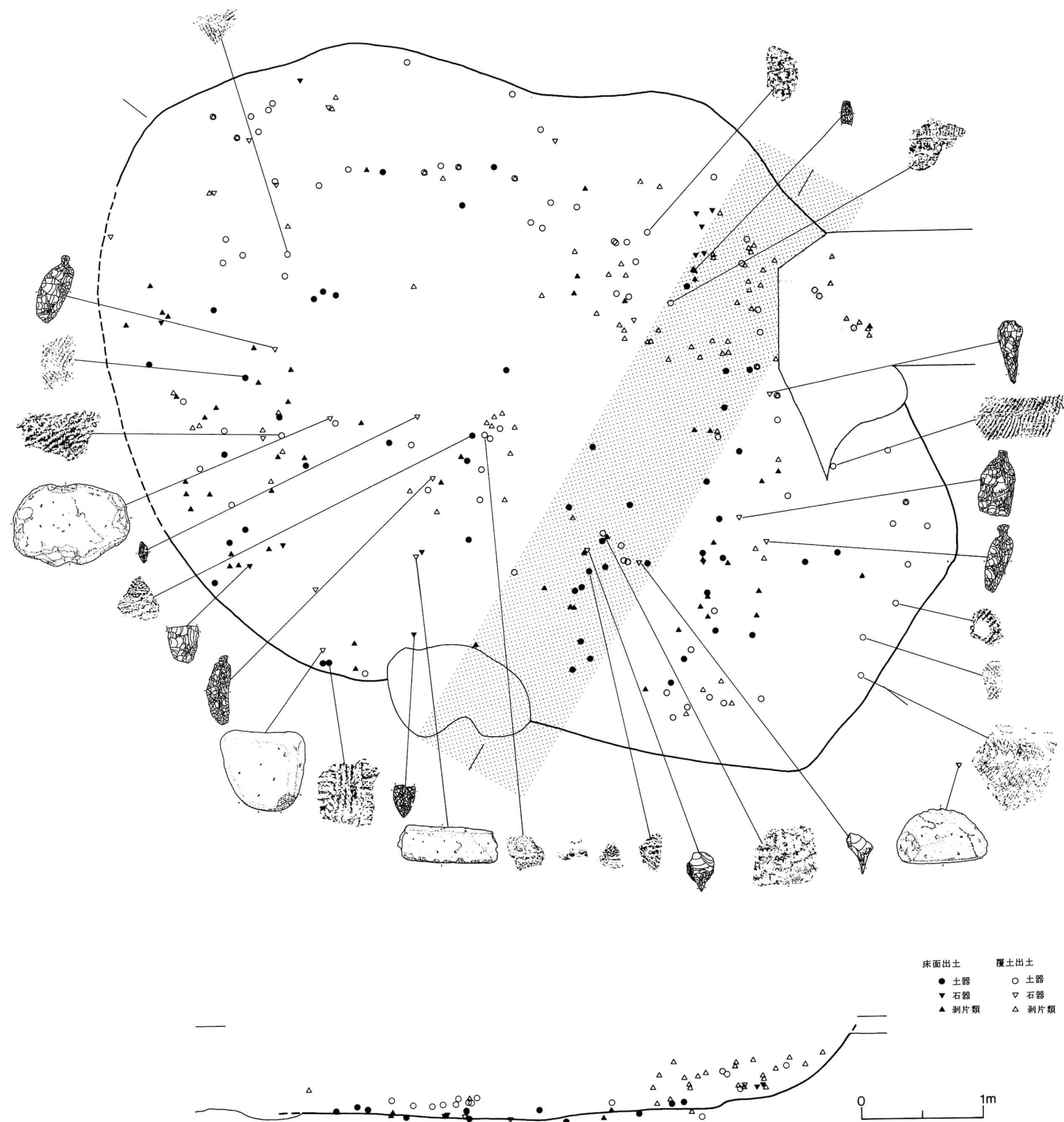




図Ⅳ-9 H-2出土の土器・石器



図Ⅳ—10 H—3

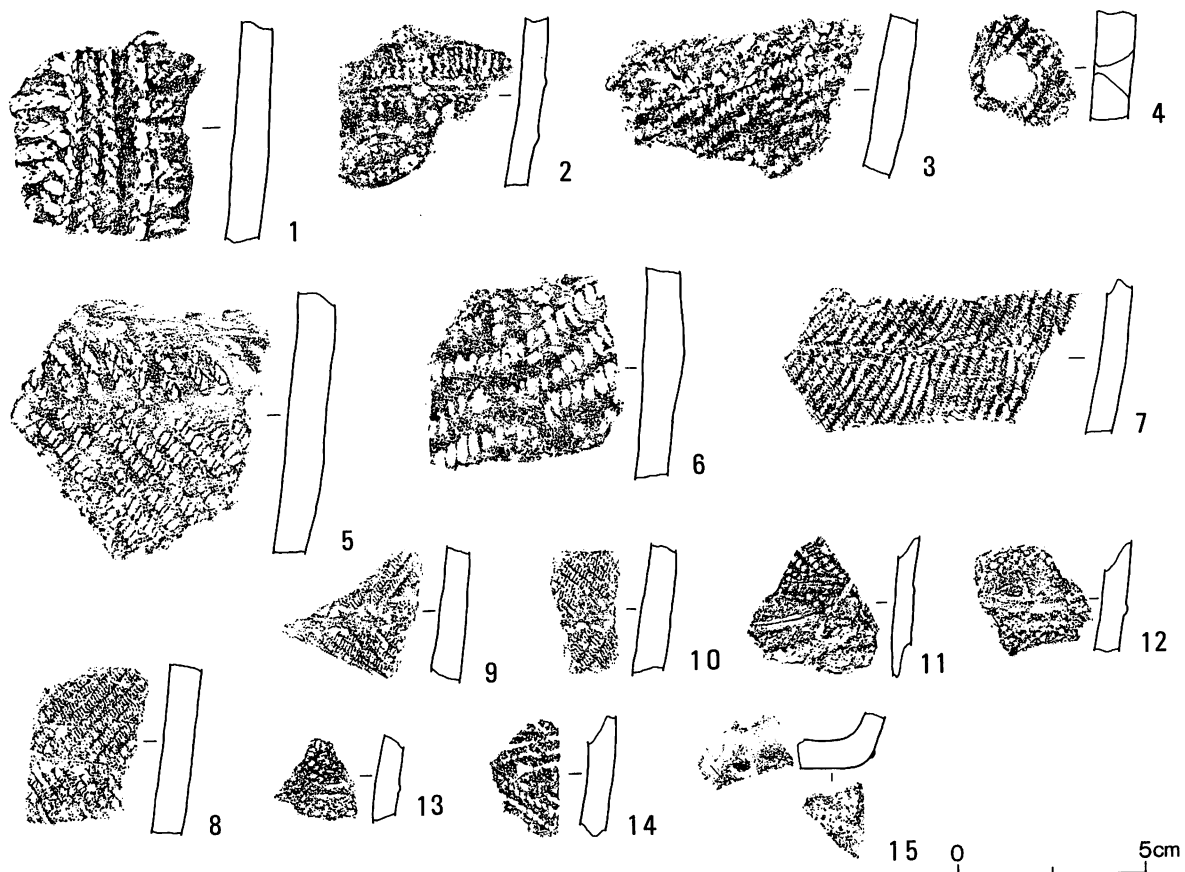


図Ⅳ-11 H-3の遺物分布

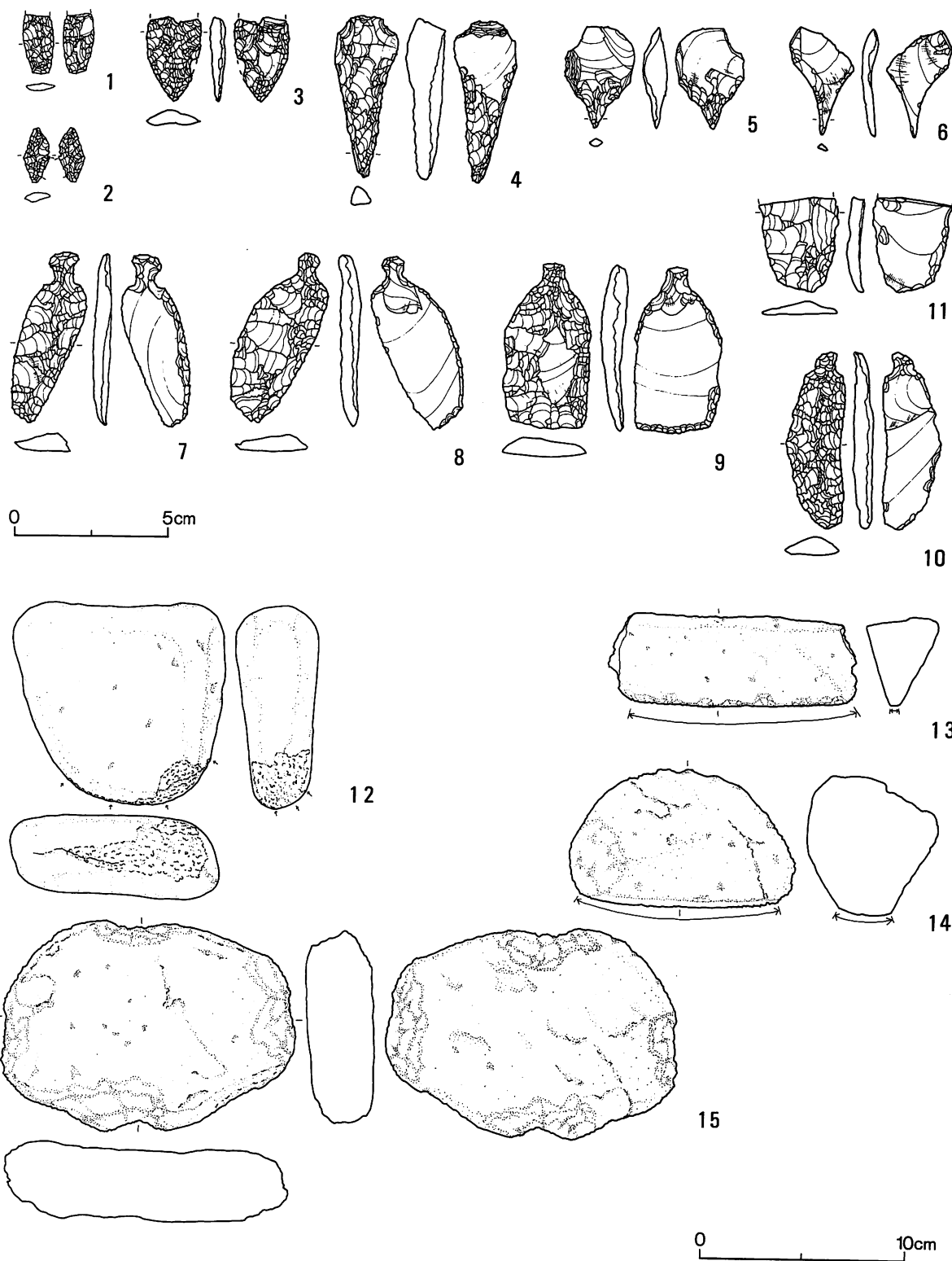
のか縄文であるのか判然としない。3～15の内7・10・13はレベル的に床面あるいはそれに近いと考えられる。

石器：1・2は無茎鏃である。1は、薄身に柳葉形のもの(I A 3a)である。尖頭部を欠損する。2は菱形を呈する石鏃(I A 6)の破片と考えられる。基部を欠損する石質は、いずれも黒曜石である。3は石槍またはナイフに分類されるもので、茎が明瞭にみられないもの(I B 2)の破片である。先頭部が欠損している。4～6は、石錐である。いずれも、棒状のものにつまみ部が作り出されたもの(II A 2)である。4は、刃部に回転によると思われるつぶれがみられる。6は焼成を受けている。石質は、4・5が頁岩、6が黒曜石である。7～11は、つまみ付きナイフである。いずれも片面全面加工で、裏面の一侧縁に刃部を持つもの(III A 1)である。11は、胴部からつまみ部にかけてを欠損する。石質は、7・9～11が頁岩、8がメノウ質頁岩である。12は、たたき石である。扁平礫を素材としたもの(V A 2)で、縁辺部にたたき痕がみられる。また、礫周縁に敲打による調整痕がみられる。石質は、安山岩である。13・14は、すり石である。いずれも断面が三角形の礫の稜をすったもの(VI A 1)である。14は、13に比べすり面の幅も広く、断面もきれいな三角形を呈しているがVI A 1に分類した。石質は、13が安山岩、14がデイサイト(石英質安山岩)である。15は、4か所に打ち欠きを持つ石錘(IX A 1)である。石質は、いずれも安山岩である。

時 期 床面及び覆土から出土しているI群b-2類あるいはb-4類の土器から判断して早期後半の遺構と考えられる。(藤原秀樹・立川トマス)



図IV-12 H-3出土の土器



図Ⅳ-13 H-3 出土の石器



(4) H-4 [図IV-14~19 表IV-10~12 図版-6、12~14、21]

位 置 K-71-b・c

規 模  $5.02 \times (3.80) / 4.68 \times (3.68) / 0.34$

平 面 形 五角形

確認調査 耕作土を掘り下げた段階でK-71-bに幌別火山灰の堆積が認められた。それを取り除くと焼土が検出され、北西方向に立ち上がりを確認したので住居址と認定した。

壁・床 一部に木根による攪乱があった他、北東にはH-5の石組炉の掘り込みがあり壁を明瞭には検出できなかった。また南方向も傾斜の関係で明確な壁を認めることはできなかった。しかし、これらを除くとⅧ層を掘り込んだ、明瞭な立ち上がりを確認することができた。床面は地形の傾斜方向に比例して南西側に若干下がり気味に検出された。

覆 土 幌別火山灰が堆積していたほか、H-5の床面が特に北東側に存在していた事が炭化物の広がりからわかる。南西側は傾斜の関係でH-5床面が削平されており幌別火山灰が耕作土の直下に露出していた。

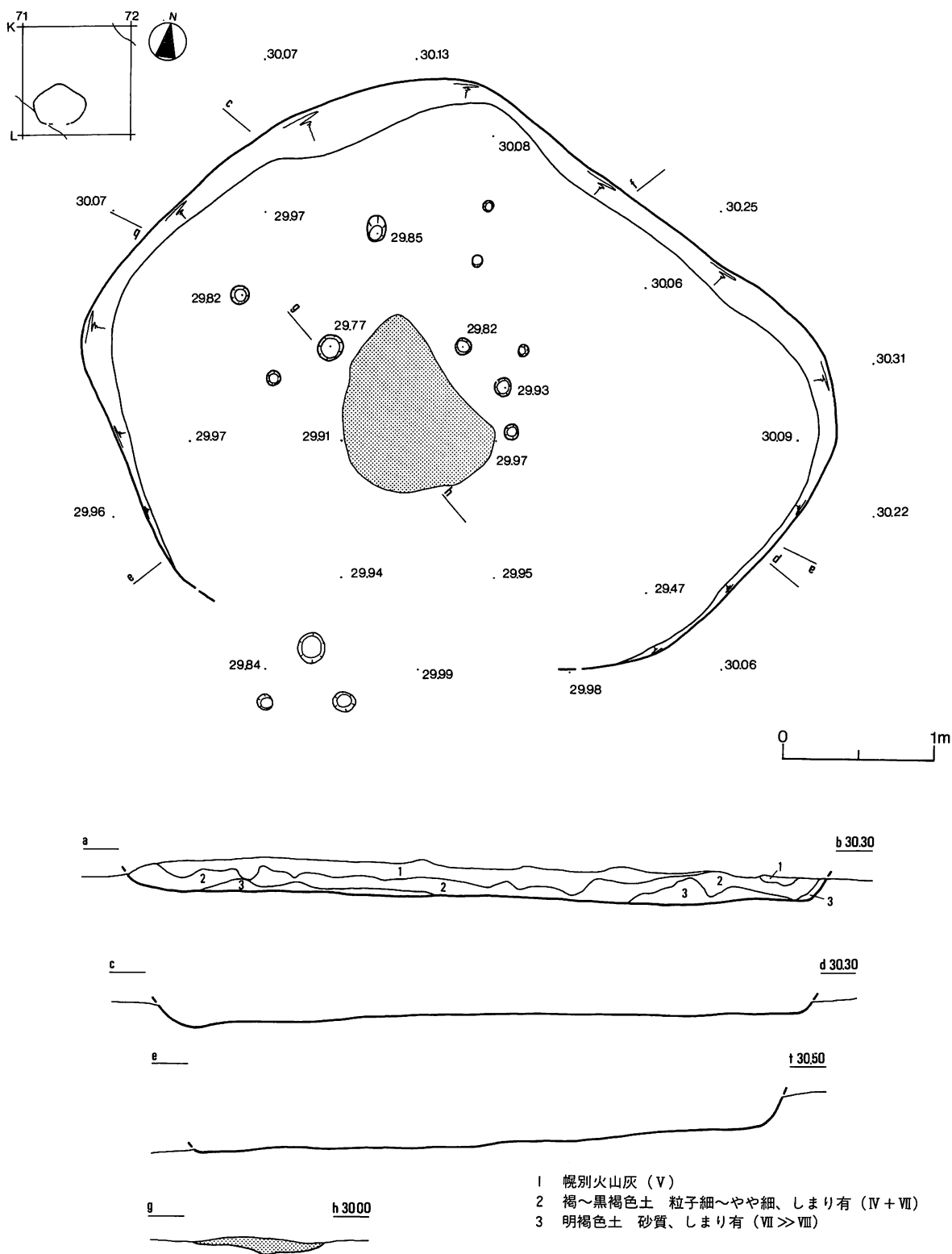
炉 地床炉が住居址のほぼ中央に位置している。

柱 穴 炉の北半に柱穴かと思われる穴がいくつか検出できたが、明確に柱穴と認定できるものはなかった。

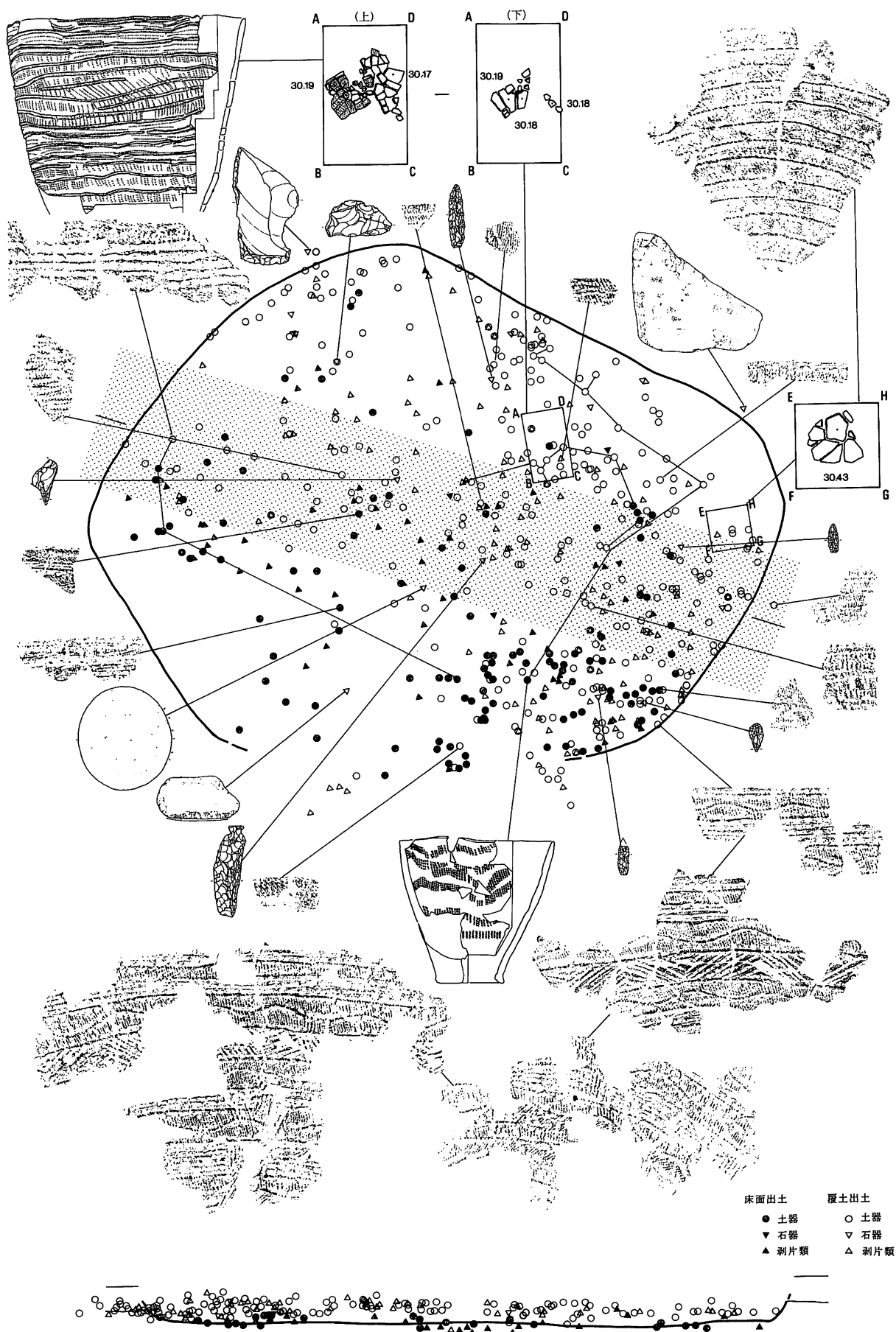
重 複 H-5の石組炉が壁の立ち上がり付近にあり、H-4の床面よりもレベルが高いため、H-5よりも古いことがわかる。出土遺物からも同じ事が言える。

遺 物 床面及び覆土から大量の遺物を検出した。[図IV-16~19]

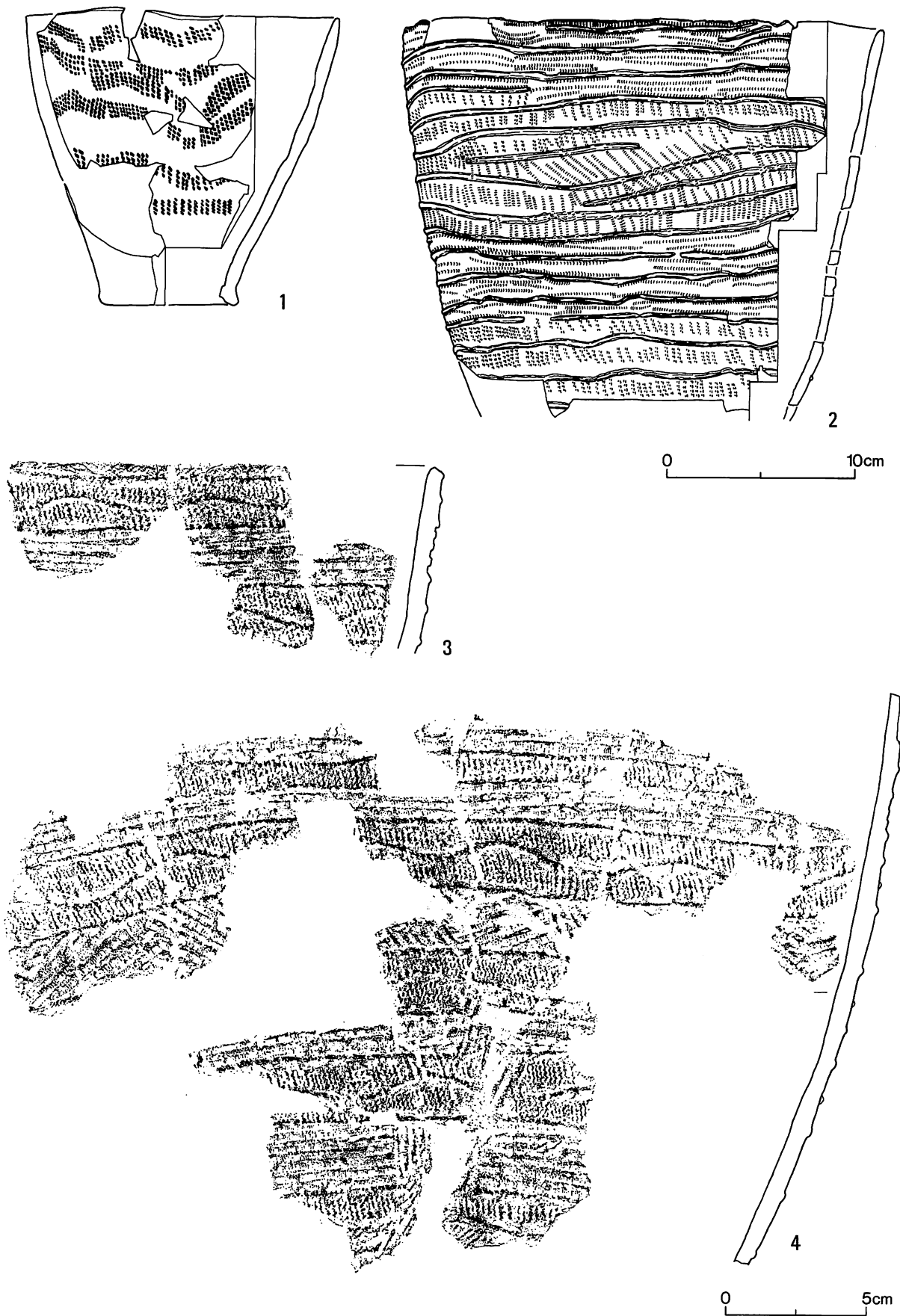
土器：器形を復元出来たものが床面及び覆土から出土している。1はコッタロ式かと思われる。器壁は厚めで器形は口縁部からすぼまっており、底部が張り出している。文様は短縄文が縦に7mm程施されたものが帯となって波状に横環している。それは、縦に走る短縄文三本程度を一単位としており、指くらいのものかそれより若干細めの太さのものに紐を三回巻き付けたものを反時計周りに施文している。口縁から胴部迄残っているところでは六段の帯が認められる。底部付近には同じ原体を用いた斜行縄文が見られる部分もある。床面として取り上げた破片は口縁の一部であり、胴部及び底部は覆土からの出土である。2は中茶路式で1よりも器壁が薄めである。出土状況図からもわかるようにつぶれた形で覆土から出土したが底部は検出できなかった。器形は口縁が若干傾きそのまま直線的に下りて、その下でくびれながら底部へ向かっている。文様は、微隆起線で区画された中に、まず角が取れた棒状のものに紐を巻付けた絡条体圧痕文が横方向に4.5~6cmを一単位として施文されている。次に撚紐を指程度かそれより小さめのものに巻き付け施文したと思われる短縄文が縦に並んだものが3段に見られる。その下には最初の文様を短く縦に施文したものが2段並ぶ。以下はもう一度、最初の横に走る絡条体圧痕文からの文様をひとまとまりとする繰り返しとなる。但し、これらの文様構成は器面の片側、約2分の1程度であって残り半分は微隆起線及び文様ともかなり崩れている。3~16も中茶路式である。3から6は同一個体である。3の文様は、最初に平行な微隆起線間に波状に巡る微隆起線があり、その間には短縄文が施文されている。次には丸みを帯びた軸に紐を巻き付けた絡条体圧痕文が横方向に五段押捺されている。その下には最初の文様が繰り返す。4は胴部から底部にかけての部分で、次第にすぼまる器形を示す。文様は、平行と波状が組み合わせられた微隆起線と短縄文の文様帯の間に鋸歯状に施された絡条体圧痕文、縦横に施された



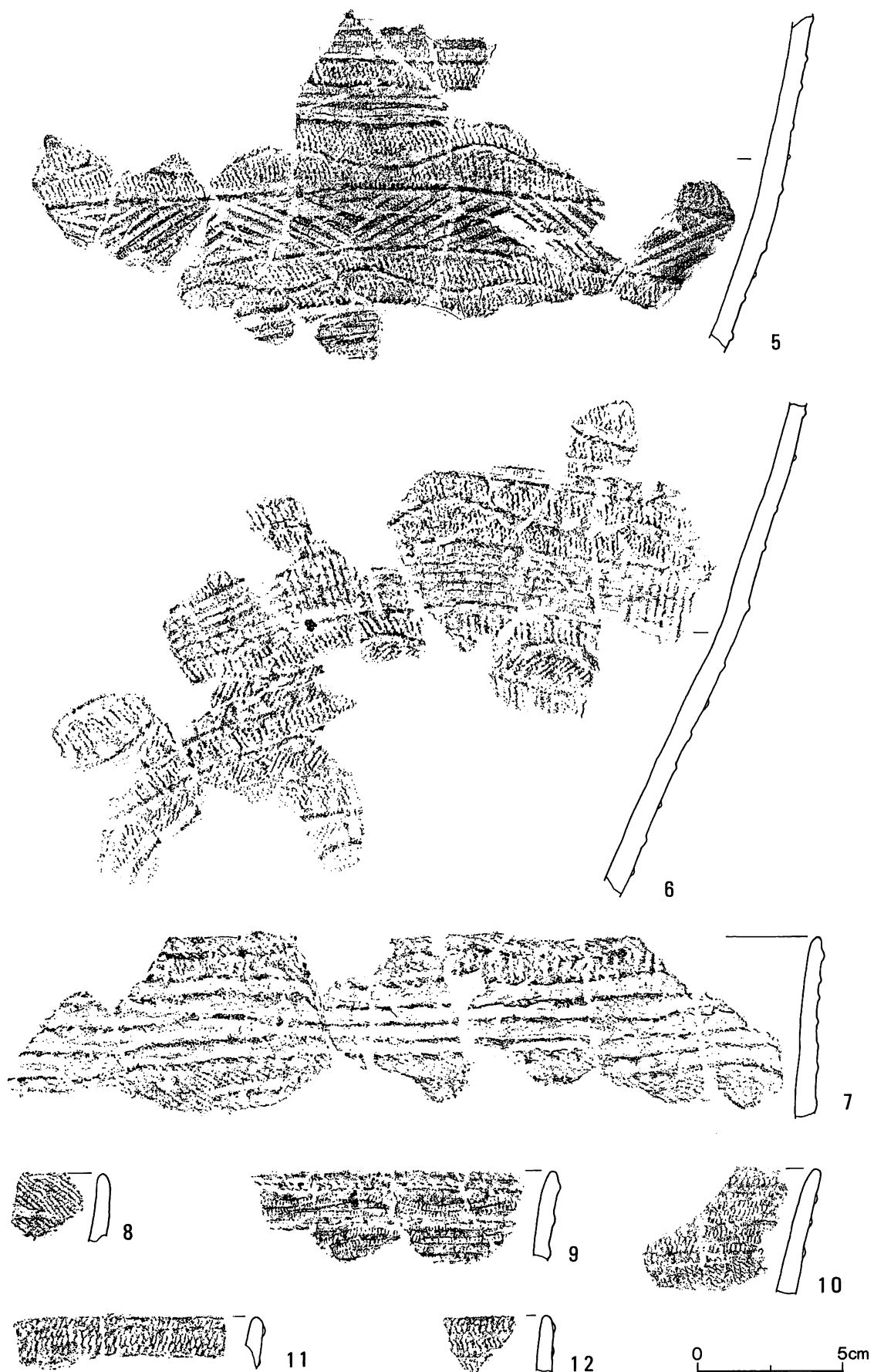
図Ⅳ-14 H-4



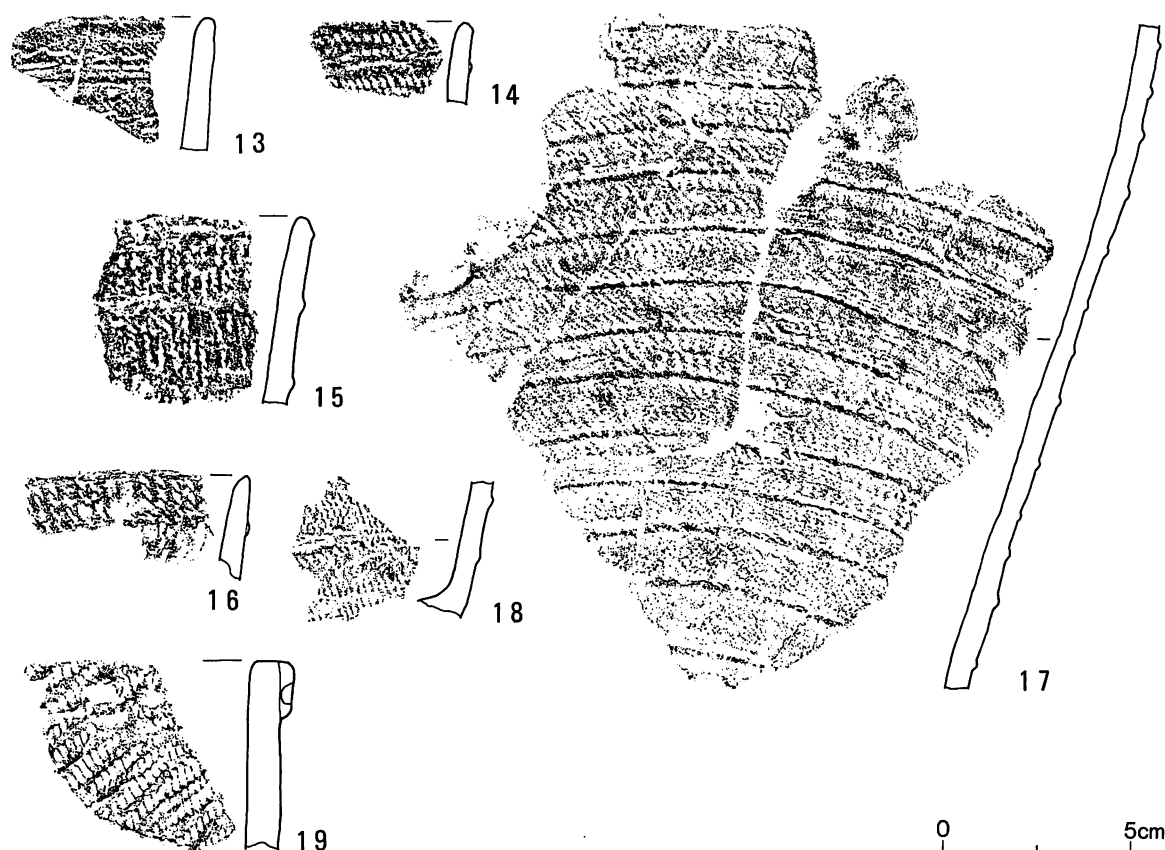
図Ⅳ-15 H-4の遺物分布



図Ⅳ—16 H—4 出土の土器(1)



図IV-17 H-4出土の土器(2)



図Ⅳ—18 H—4出土の土器(3)

絡条体圧痕文があり、上部には平行に走る微隆起線と短縄文・三段の横走る絡条体圧痕文も見られる。5は4の上部に相当する部分であろう。6はすぼまってゆく底部付近に相当する部分である。波状の微隆起線の上または下に斜行縄文も見える。いずれも焼成はよく、文様も乱れること無くしっかりと押捺されており完成度は高いと言える。更に、4・6にはベンガラが付着している。いずれも床面及び覆土からの出土である。7は微隆起線が間隔を狭くして走っており短縄文と斜行縄文が見える。但し、多くは篋状工具で微隆起線下を調整したのみで無文となっている。これも一部が床面出土である。8以下は覆土出土である。8は斜行縄文が施されている。9は微隆起線の上にやわらかい軸に巻き付けた絡条体圧痕文が2本一単位として波状に施文されている。10～12は短縄文が施されている。いずれも、微隆起線上にも施文されている。12は輪積み製法で作られていることが割れ口から見てとれる。13は微隆起線が篋状工具でわずかにあらわされているものの、隆起自体はかなり退化している。その微隆起線の間には綾絡文が見られる。14～16も短縄文が施文されている。17は出土状況図にあるように、この形のまま内側を外に向けて出土した。底部付近のくびれている部分である。微隆起線間に二本或いは三本一組の縄文を平行に並べて押捺した文様があり、底部付近には斜行縄文が見える。18は同じく中茶路式の底部である。微隆起線が斜めに下りている。19は断面が四角い隆起帯が貼付られており、口唇は篋状工具で調整されている。隆起帯上には地文と同じ原体で同じ方向に縄文が施文されているが、一緒に施文したものではない。また貼付帯上には縄を丸めての刺突がある。

19のような貼付帯上に縄を用いた刺突を持つ土器は美々3遺跡で報告されている(『美沢川





図Ⅳ-19 H-4 出土の石器

流域の遺跡群』XIV、図III-123-1。『美沢川流域の遺跡群』XV、図II-34)。これは貼付帯の断面は四角形ではなく、地文施文後に貼付帯を加え、その上と胴部で羽状縄文となっている。煉瓦台式と余市式の両方の要素を持っており、IV群に分類している。19は貼付帯の断面等が余市式に近いものがあるのでIV群に分類しておく。

石器：1～3は無茎鏃である。1は長身鏃(I A2)、2・3は薄身で柳葉形のもの(I A3a)である。2は、尖頭部に回転によると思われる刃部のつぶれがみられる。また、今調査で検出された石鏃のうち最も厚みがある。このことから、石鏃の機能を併せ持つ可能性がある。3は尖頭部を欠損する。石質は、1が頁岩、2・3が黒曜石である。4・5は石錐である。いずれも、棒状のものにつまみ部が作り出されたもの(II A2)である。4は焼成を受けている。5は刺突部先端を欠損する。石質は、いずれも黒曜石である。6は、つまみ付きナイフである。片面全面加工で、裏面の一侧縁に刃部を持つもの(III A1)である。石質は、頁岩である。7は、スクレイパーで素材の形状を大きく変えていないもの(III B6)である。石質は、頁岩である。8・9は、すり石である。いずれも扁平礫を素材としたもの(VI A2)である。8は背面がすり面として使用されている。周縁部に、たたき痕もみられる。9は側縁部にすり面を持つもので、打ち欠きにより裏面となる部分を調整している。石質は、いずれも安山岩である。10は台石(VII A)である。台石表面に、小さなたたき痕がみられる。石質は、安山岩である。11は、黒曜石製の石核(XI A1)である。

時 期 床面出土の2～7のI群b-4類の土器から判断して早期末葉の遺構と考えられる。  
(藤原秀樹・立川トマス)

(5) H-5 [図IV-20～22 表IV-13～14 図版-7、14、19]

位 置 K-71-a・b・c・d

規 模 ?×?/?×5.12/0.36

平 面 形 隅丸方形?

確認調査 耕作土を掘り下げた段階では確認できなかった。H-4の検出のため幌別火山灰を取り、壁面の立ち上がりを精査している時に炭化物が土層の間に挟んで検出され、その段階で炭化物が面的に広がっている事が想定された。これをその都度記録しながら、もう少し掘り進めると石組炉を検出したので、住居址と認定するに至った。既に周辺を掘り下げていたので壁は検出できず土質・土色の違いから床面相当部分を確認するに留まった。

壁・床 壁の立ち上がりは全く不明である。床面の確認も含めて、石組炉周辺の遺物の垂直分布を見てみた。特にH-4との重複部分は石組炉のレベルを参考に30.20mより高い遺物を取り上げて見た。南北方向ではKラインよりも南に5m離れたところから南にかけて30.30m付近の高さに安定的に遺物が存在している。東西方向では72ラインよりも西に4.50m付近から西にかけてやはり30.30m付近に遺物が集中している。30.21mで一線を引いて抽出したため30.20m付近はそれ以下のH-4覆土の遺物と混在しているものの、特に石組炉周辺では30.30mくらいを床面と想定して線が引けそうである。さらに、遺物の平面分布では、確認できた平面形を延長するところで遺物分布に偏りが見られる。これらのことから、石組炉の30.30mのレベルで、確認出来た平面形の延長部分にもH-5の床面が広がっていることが推定出来そうである。

炉 石組み炉である。炉石の1点は調査中に周辺の礫とともに掘り下げてしまった

が、残りの石の位置関係から考えると長方形であると推定できる。なお、石組み炉の掘り込みは石よりも若干大きい程度であることが認められた。

**柱 穴** 確認することはできなかった。

**重 複** H-4の上位に存在することから、H-4よりも新しいことがわかる。

**遺 物** 床面及び覆土から遺物が検出された。[図IV-22]

土器：1・2は中茶路式である。床面として取り上げた。1は微隆起線が縦横にあり、絡条体圧痕が横方向に施文されている。2は縄文が斜めに押捺されている。3～14は覆土出土である。3は中茶路式の口縁部であり、斜行縄文が見える。4は口唇部に篋状工具による刻みが施され、地文は斜行縄文である。内側は剥落している。Ⅲ群a-2類に入ろうか。5も微隆起線が縦横に走る中茶路式である。6～14はⅢ群に入るとされる土器である。6は条が太めの斜行縄文が施文され内面はきれいに磨かれている。7は一部沈線が見られ、胎土には砂が入っている。Ⅲ群a-2類に入ろうか。8～10は斜行縄文のみが見えるものである。8は内面が磨かれ炭化物が付着している。9・10とも厚みがあり胎土には砂、さらに小礫が入っている。焼などからⅢ群a-2類に含められるものであろう。11は底部に近い破片であり縄文がしっかりと施文されており、胎土には砂が含まれている。12は篋状工具で底部が調整されており垂直気味に底に下りている。また内面が磨かれており、Ⅲ群a-2類ではないかと思われる。13・14は同一個体である。器壁は厚く、底部はややすばまっている。底から数mm程度に指頭様のなでがみられる。Ⅲ群a-2類あるいはb-1類に該当しよう。15～19はH-4で取り上げたもののレベルから考えるとH-5の床面と考えられるものを抜き出したものである。15から18はⅢ群a-2類あるいはb-1類に入ろうか。15～17は同一個体である。条が太めの斜行縄文で器壁は厚く内面は磨かれている。16は輪積み製法による擬口縁が見られる。18もほぼ同じ特徴を有している。19は中茶路式の底部で胎土には砂が入っており脆い。

石器：20は無茎鏃で、薄身で柳葉状のもの(I A3a)である。基部を欠損する。石質は、黒曜石である。

**時 期** 15～18のⅢ群a-2類・Ⅲ群b-1類の土器、及びH-4との関係からの中期中葉の遺構であることが推定出来る。  
(藤原秀樹・立川トマス)

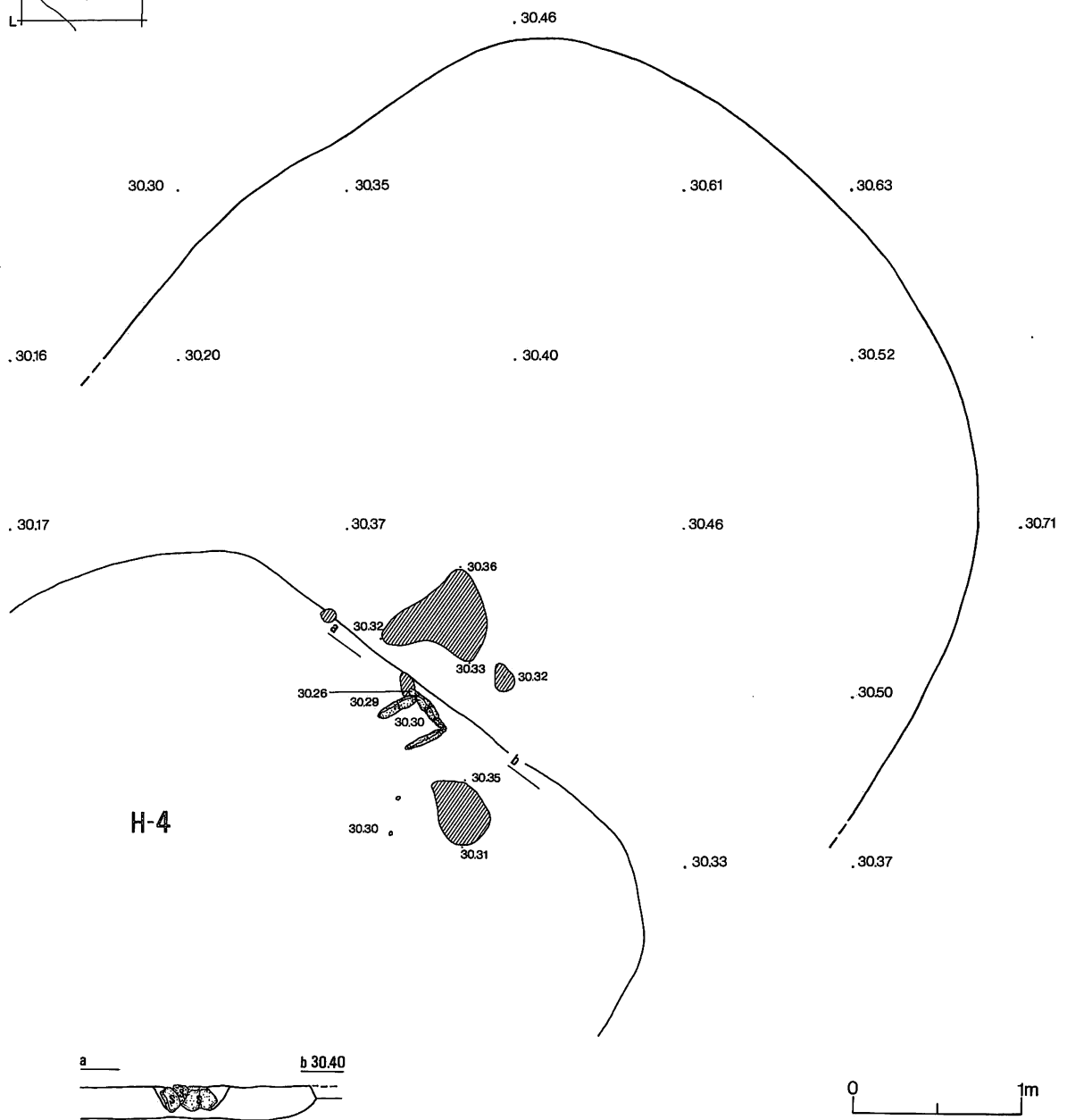
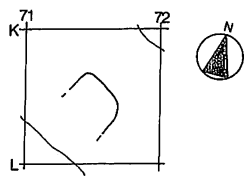
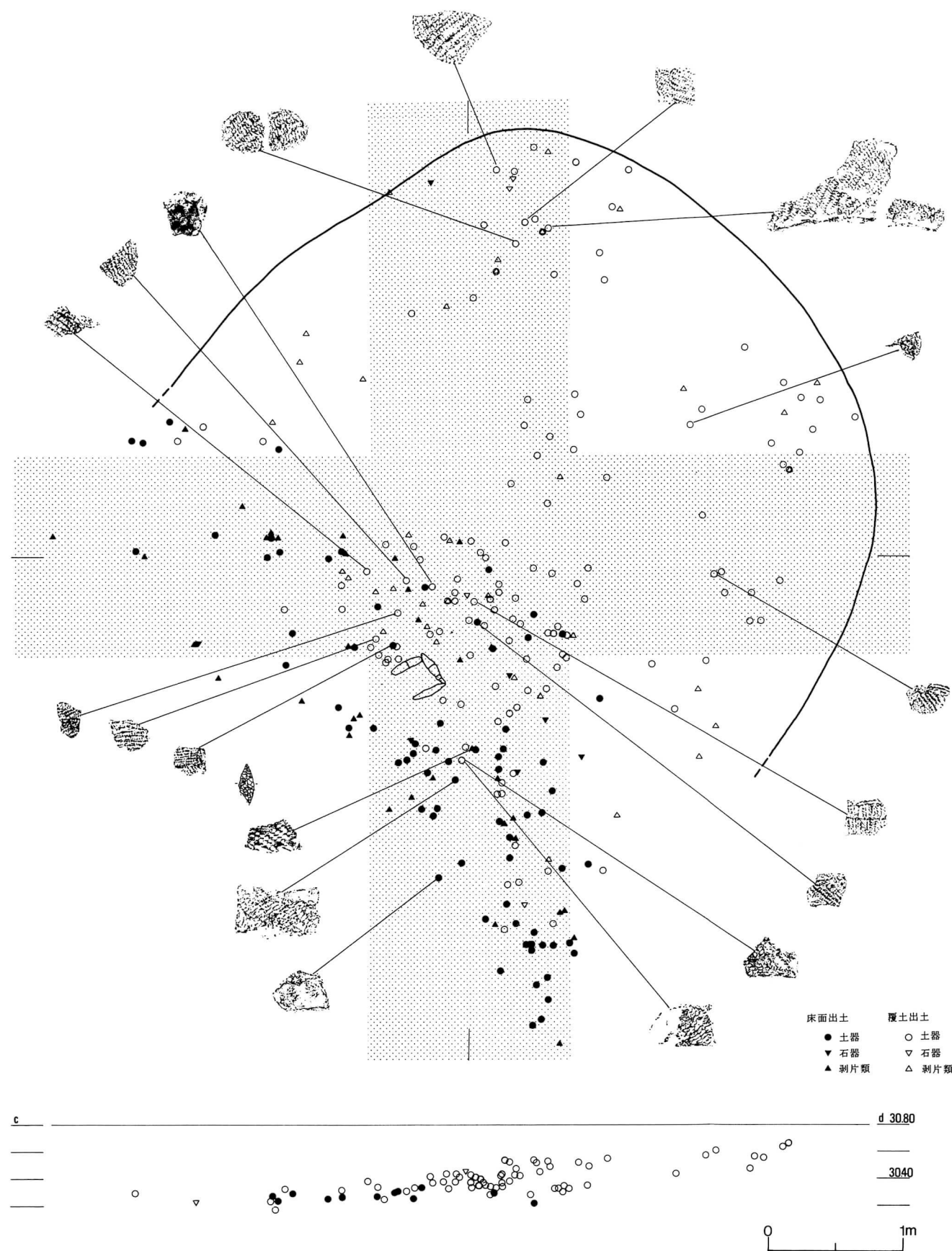
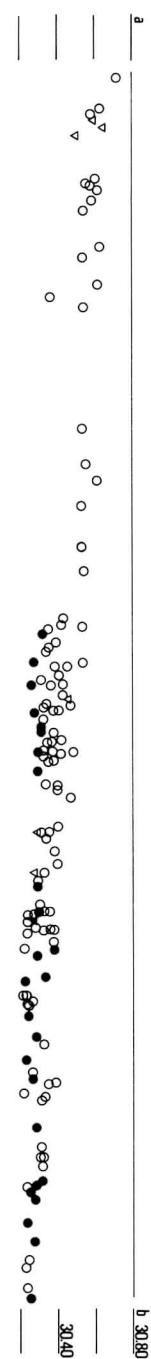
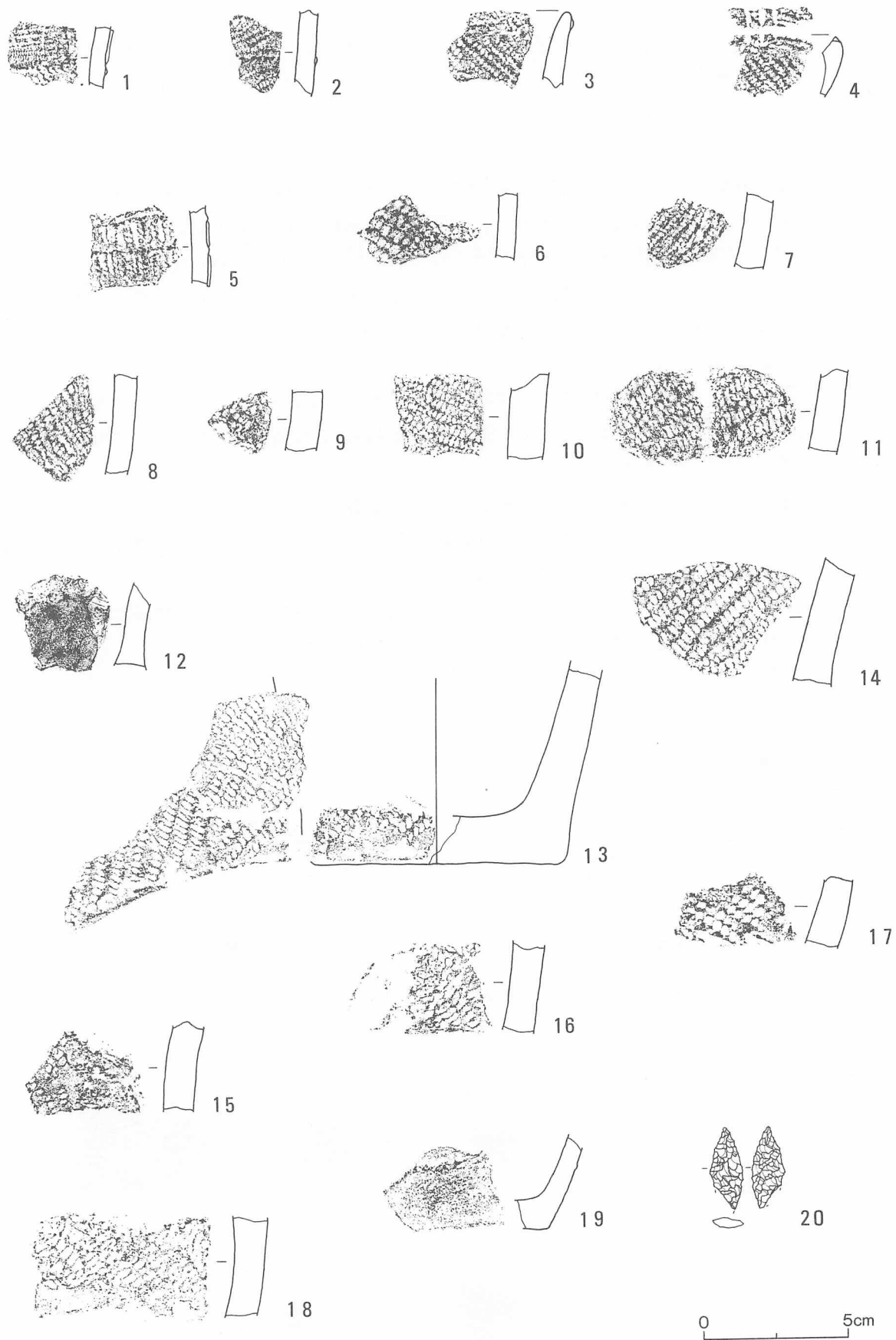


图 IV-20 H-5



図Ⅳ-21 H-5の遺物分布



図IV-22 H-5出土の土器・石器



## 3 土壌

(1) P-1 [図IV-23、IV-31-1 表IV-15、IV-21-1 図版-7、15、22]

位置 L-72-b

規模  $(0.90) \times 0.96 / 0.28$ 

平面形 楕円形

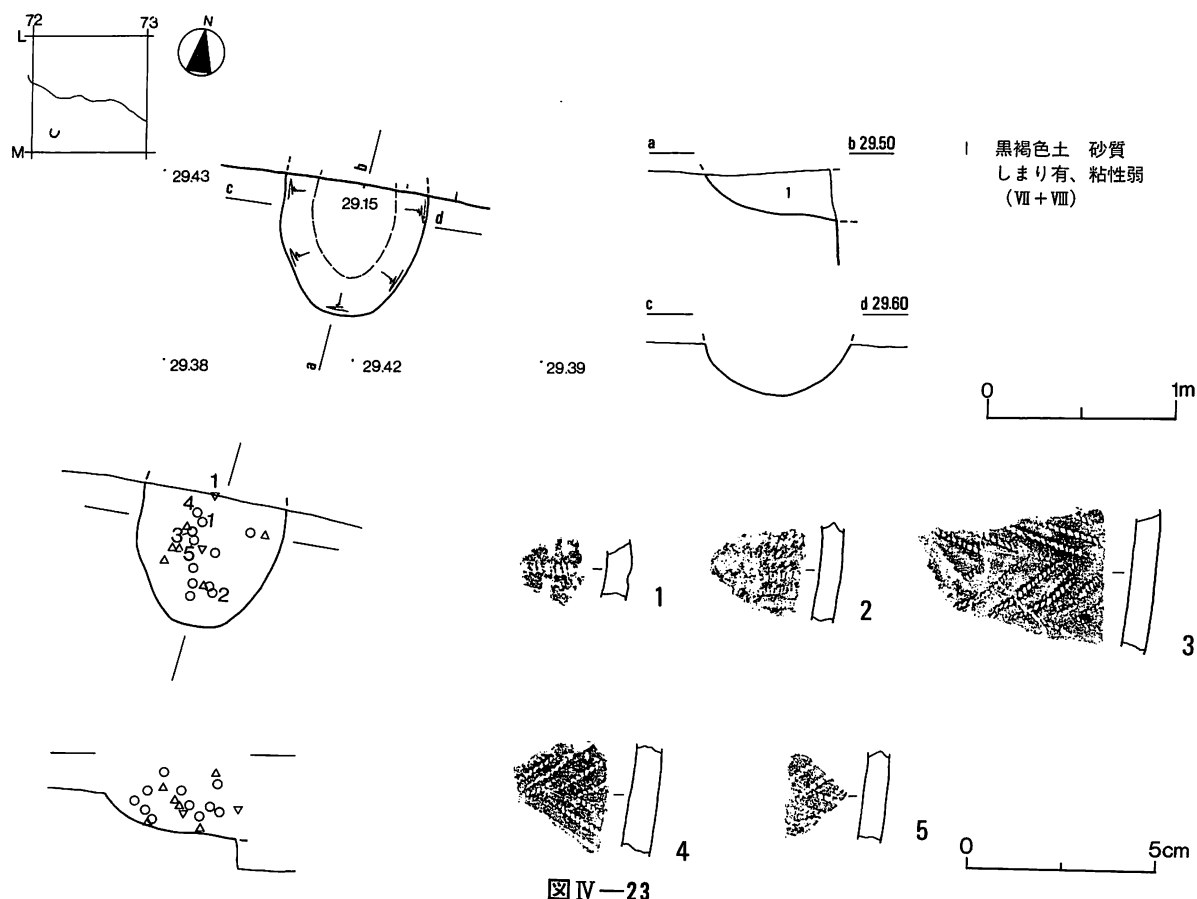
確認調査 耕作土を掘り下げた段階では確認できず、VII層の調査を終えVIII層まで掘り下げている時に土色の違いを見つけた。北側は水道管埋設のため削平されていた。平面形からすると円が閉じる状態で水道管に切られているため半分以上が残っていると考えられた。しかし、掘り込みから判断すると、攪乱部分に至るまで下がっているの、半分残っているとも言い難い。ここでは平面形から判断して約3分の2程度が残っていると考えたい。長軸方向はほぼ、傾斜の向きに沿っている。

覆土 VIII層土がややブロック状に混じった一枚の層からなっており、自然堆積の様相は呈していないと考えた。しかし遺物の出土状況から見ると人為的に埋められたものとは考えがたいと思われる。

遺物 遺物は覆土からのみ検出された。[図IV-23、IV-31-1]

土器：1・2は絡条体圧痕文が見えるI群b類の土器。3～5は東釧路IV式で同一個体と考えられる。又、2・4には内面に炭化物の付着が認められる。

石器：1は、つまみ付きナイフである。片面全面加工で、裏面の一侧縁に刃部をもつもの(ⅢA2)である。裏面の刃部の加工が顕著でないため、ⅢA2に分類した。石質は、頁岩である。



図IV-23

時 期 覆土の状況、及び出土土器がⅠ群b類であることからの早期後半の遺構であると推定される。  
(藤原秀樹・立川トマス)

(2) P-2 [図Ⅳ-24~25、Ⅳ-31-2 表Ⅳ-16、Ⅳ-21-2 図版-7、15、22]

位 置 M-71-b・c

規 模  $2.11 \times 2.07 / (2.37) \times (1.94) / 0.24$

平 面 形 円形

確認調査 包含層調査中に、Ⅶ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認された。当初、この土壌の東側で調査中の、72ラインに沿って南に傾斜する浅い沢状地形の一部と考えられていた。沢状地形の調査が進むにつれ、これとは別に狭い範囲ではあるが平坦面と壁らしき立上りが確認された。調査の結果、土壌の北側から西側にかけてほぼ垂直に立ち上がる壁と、平坦で固くしまった床面が検出された。南側から東側については、沢状地形と近接するため、明瞭な壁は確認されなかった。ボール状ローム面で確認された。覆土は、粗粒の砂質の黒褐色土で、Ⅵ層に類似している。粘性はない。覆土中から、わずかではあるが炭化物粒が検出された。

遺 物 床面と覆土から遺物が出土した。[図Ⅳ-25、Ⅳ-31-2]

土器：床面出土の土器は磨耗がいちじるしく、また小破片となっていたりしていたので掲載出来なかったが、胎土等から考えて以下に述べる覆土出土のものと同じである。1~15はいずれも東釧路Ⅲ式である。1~8は同一個体であり8が底部となる。組紐圧痕文が数条横走しその間に別原体の縄文が施文されている。底部付近には縄端の圧痕が並んでいる。胎土は砂を含み脆い。一部は内面に炭化物が付着している。9・10は縄文が横走して押捺され9には組紐圧痕も見られる。胎土・焼成ともに8までの土器に近い。11は縄が縦横に施文され内面には凹凸が見られる。12・13はこれまで述べたものより焼きがよく固いが磨耗も激しい。12は斜行縄文と縄端の圧痕がみられ、13は縄線が施され、それを境に羽状縄文を形成している。14・15はやや角張った幅の広い軸に巻き付けた絡条体圧痕文が見られる。15には絡条体圧痕文の押捺後に軸を外そうとして付いたと思われる棒で引っ搔いたような跡が見られる。以上のうちレベル的に床面若しくはそれに近いと考えられるものは13である。

石器：2は無茎鏃で、薄身で柳葉形を呈するもの(ⅠA3a)である。胴部から尖頭部を欠損する。石質は、黒曜石である。

時 期 出土した遺物から縄文時代早期、東釧路Ⅲ式の時期と思われる。

(立川トマス・藤原秀樹)

(3) P-3

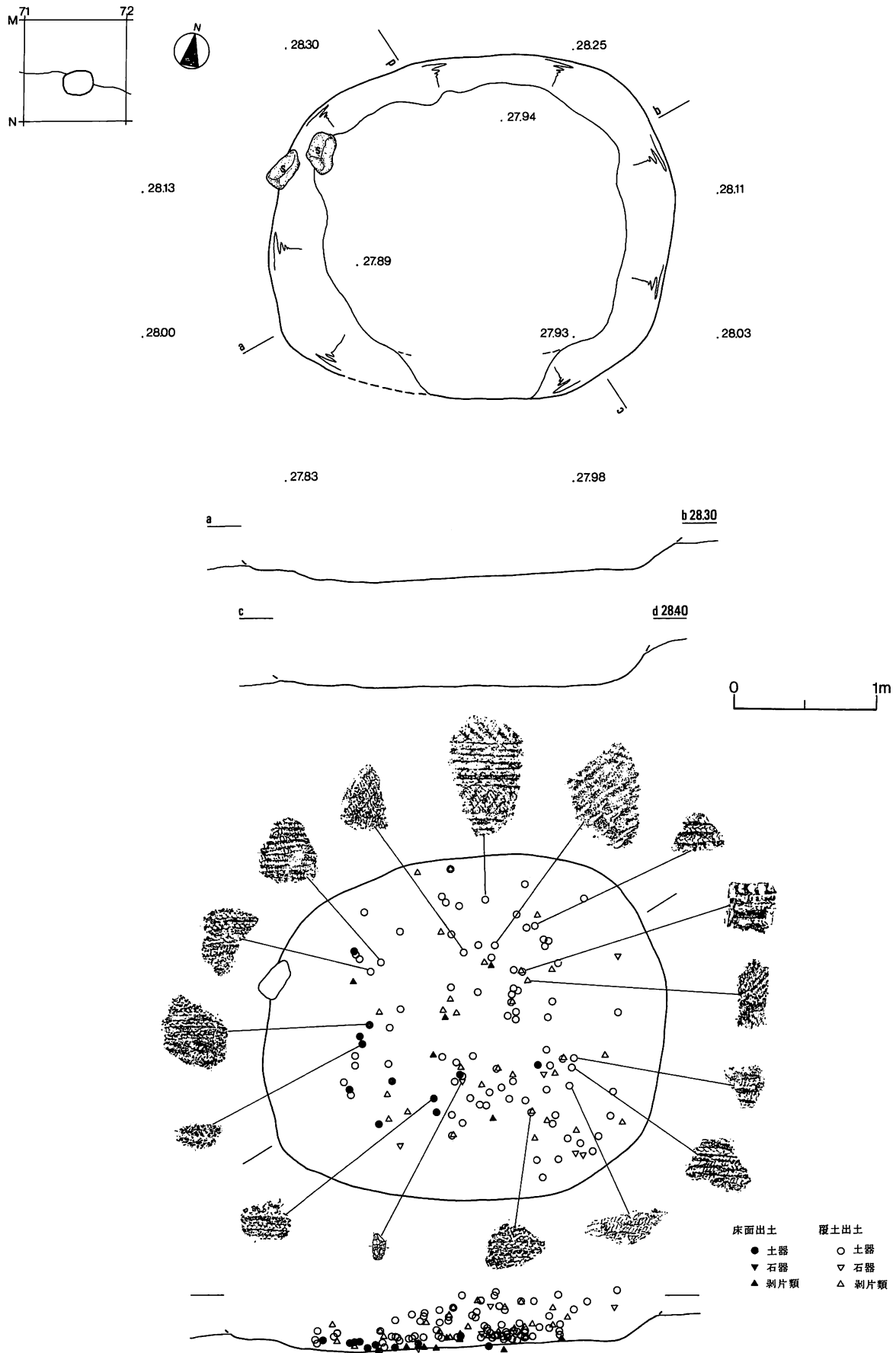
[図Ⅳ-26~28、Ⅳ-31-3~9 表Ⅳ-17~18、Ⅳ-21-3~9 図版7、16~17、22]

位 置 K-71-a

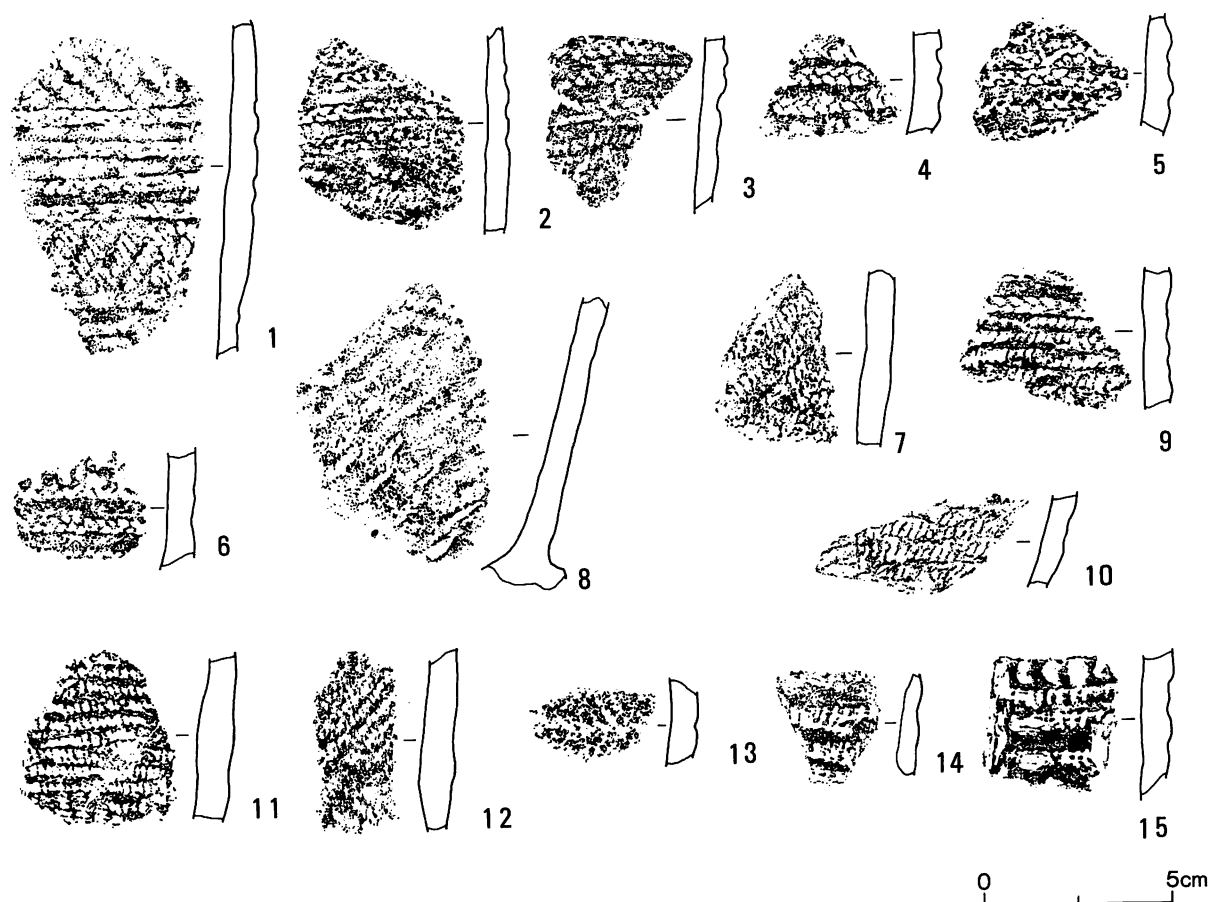
規 模  $2.64 \times 2.50 / 2.30 \times 2.06 / 0.40$

平 面 形 円形

確認調査 耕作土を掘り下げた段階では半円形を呈した土色の違いを確認したため当初は風剥木痕と考えていたが念のため土層観察用のベルトを残して掘り進めた。掘り下げにともなって土器・石器等を中心に皿状に遺物が堆積して多数出土し、壁の立ち上りが確認出



図Ⅳ—24 P—2とその遺物分布



図IV-25 P-2出土の土器

来たので遺構と認定した。

**覆土** 三層に分層出来た。自然堆積の様相を呈している。遺物は覆土2層の上面を中心として、1層との間に多く検出された。

**遺物** 床面と覆土から遺物が出土したが大部分は覆土からである。[図IV-27~28、IV-31-3~9]

**土器**：中茶路式土器の破片が多数出土した。横倒し状態でまとまりを持つものもあったが、器形を完全に復元することは出来なかった。1は中茶路式土器である。波状口縁を呈し、口縁は直立気味で胴部の上約3分の1くらいから急にすばまりだす。口径が27.7cm、底径が6.0cmとその差が大きく、器高も34.4cmあり不安定な感じである。平行な微隆起線三本と波状の微隆起線で文様が構成されており両者をつなぐ縦の微隆起線もある。微隆起線間の文様は短縄文と絡条体圧痕文からなる。波状の微隆起線の部分は短縄文が多用され、平行な部分では絡条体圧痕文が羽状に押捺される、という傾向がある。また、三段目では篋状工具で微隆起線をなで付けた跡が見られ、無文となっている。2~6は中茶路式である。2は横走る微隆起線があり、部分的にそれを縦につなぐものも見られ、短縄文が施されている。文様が無い部分では微隆起線を篋状工具で調整した跡が見られる。また、内面には調整による条痕が横に走っている。3・4は微隆起線間に縄文が斜めに施文されている。4は微隆起線上にもまたがって施文した後にその両脇を篋状工具でなでている。5・6は同一個体である。5は三本の平行な微隆起線と2本の波状を呈する微隆起線とが交互

にあらわれる。文様は一段目が縄文施文後にそれをなで消しており、2段目と4～7段目は短縄文、それ以外は斜行縄文が押捺されている。6は短縄文が2段目から見られ、施文後に微隆起線のなで付けをしている。特に1段目はそのことにより文様の殆どが消されている。7は東釧路Ⅳ式かと思われるものであるが磨滅が激しく、文様ははっきりとはしない。また、横方向の調整痕が表面に見られる。8はあるいは5の底部かと思われる。斜めに押捺された縄文が底部まで見える。9・10は中茶路式の底部と思われる。10は胴部が不明であるが、胎土に砂が含まれており、やや厚めである。11は薄手で、同一個体と思われる胴部を見てみても底部付近には文様が確認出来ない。I群b類に入ろうか。

石器：1・2は無茎鏃である。1は、薄手で柳葉形のもの(I A 3a)である。尖頭部を欠損する。2は菱形を呈する石鏃(I A 6)の破片と考えられる。基部を欠損する石質は、いずれも黒曜石である。3は石槍またはナイフに分類されるもので、茎が明瞭にみられないもの(I B 2)の破片である。先頭部が欠損している。4～6は、石錐である。いずれも、棒状のものにつまみ部が作り出されたもの(II A 2)である。4は、刃部に回転によると思われるつぶれがみられる。6は焼成を受けている。石質は、4・5が頁岩、6が黒曜石である。7～11は、つまみ付きナイフである。いずれも片面全面加工で、裏面の一侧縁に刃部を持つもの(III A 1)である。11は、胴部からつまみ部にかけてを欠損する。石質は、7・9～11が頁岩、8がメノウ質頁岩である。12は、たたき石である。扁平礫を素材としたもの(V A 2)で、縁辺部にたたき痕がみられる。また、礫周縁に敲打による調整痕がみられる。石質は、安山岩である。13・14は、すり石である。いずれも断面が三角形の礫の稜をすったもの(VIA 1)である。14は、13に比べすり面の幅も広く、断面もきれいな三角形を呈していないがVIA 1に分類した。石質は、13が安山岩、14がデイサイト(石英質安山岩)である。15は、4か所に打ち欠きを持つ石錘(IX A 1)である。石質は、いずれも安山岩である。

時 期 I群b-4類の土器が覆土に多く検出されたことから構築自体はI群b-4類の時期か、それよりも古いと言える。  
(藤原秀樹・立川トマス)

(4) P-4 [図Ⅳ-29、Ⅳ-31-10～14 表Ⅳ-19、Ⅳ-21-10～14 図版8、17、22]

位 置 L-69-c、M-69-a・d

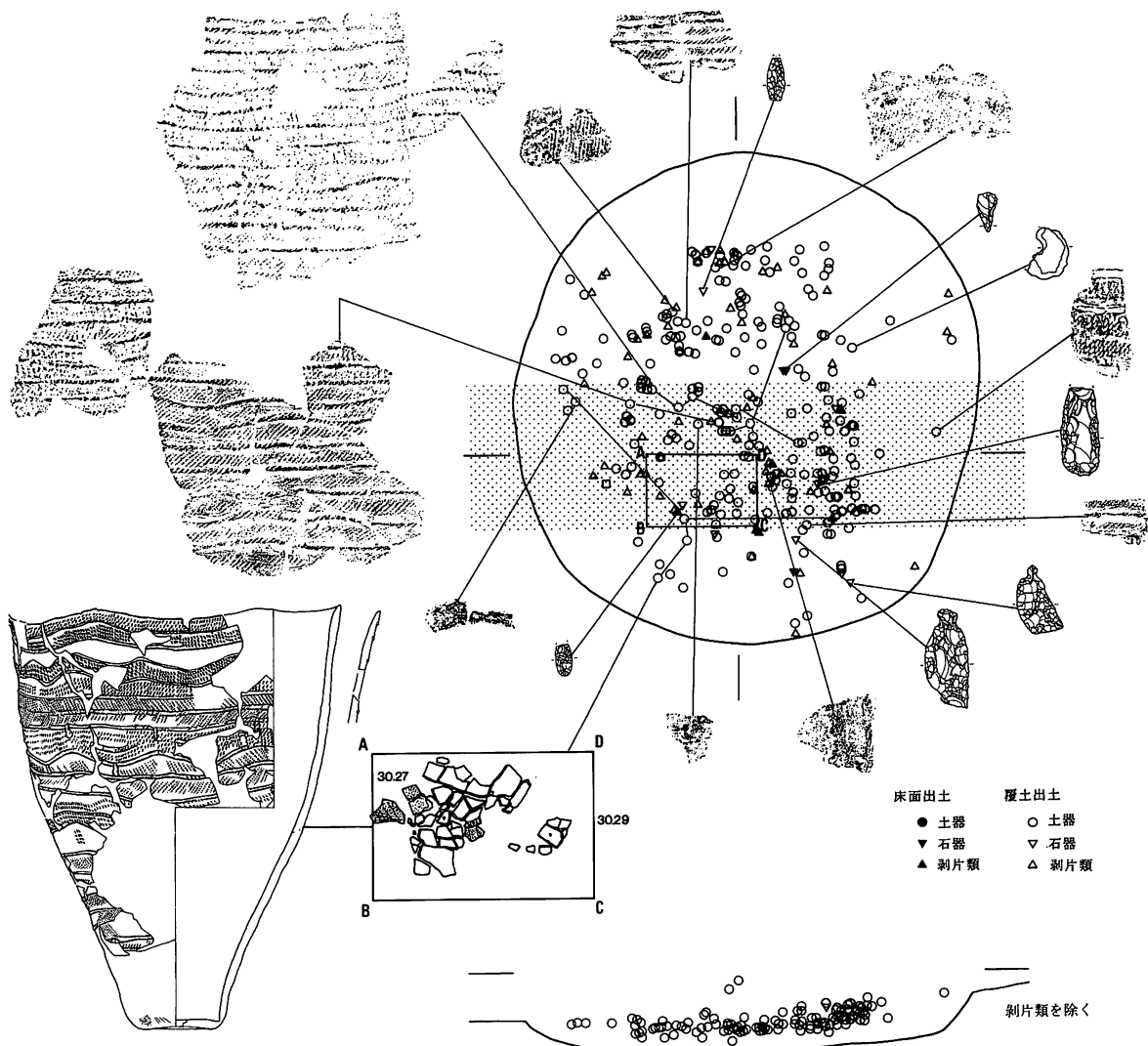
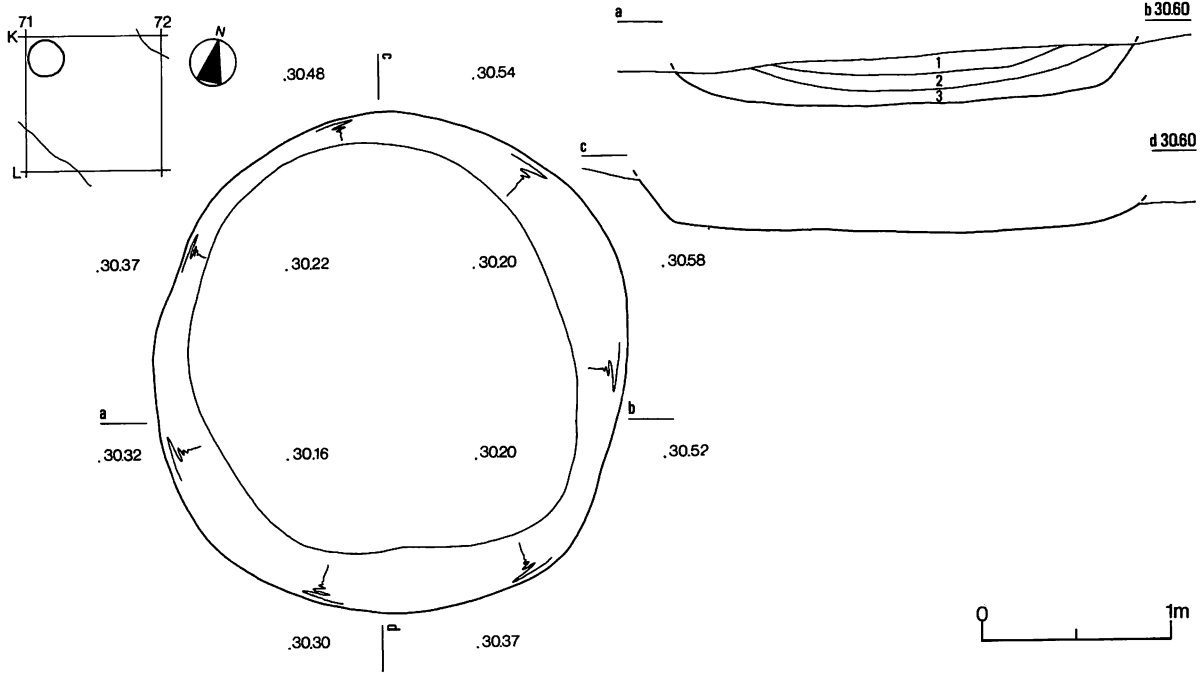
規 模  $2.11 \times 1.66 / 1.92 \times 1.69 / 0.24$

平 面 形 円形

確認調査 包含層調査中に、耕作表土下にV層(幌別火山灰)の暗黄褐色土の広がりが確認された。Mラインと69ラインに土層観察用の土手を設定し、この暗黄褐色土を掘り下げたところ、遺構確認面のⅧ層上面で黒褐色の落ち込みとして確認された。床面は、ほぼ平坦である。壁は、南から西側で緩やかに、北から東側でほぼ垂直に立ち上がる。覆土は、粗粒の砂質の黒褐色土で、Ⅵ層に類似している。覆土中から、わずかではあるが炭化物粒が検出された。

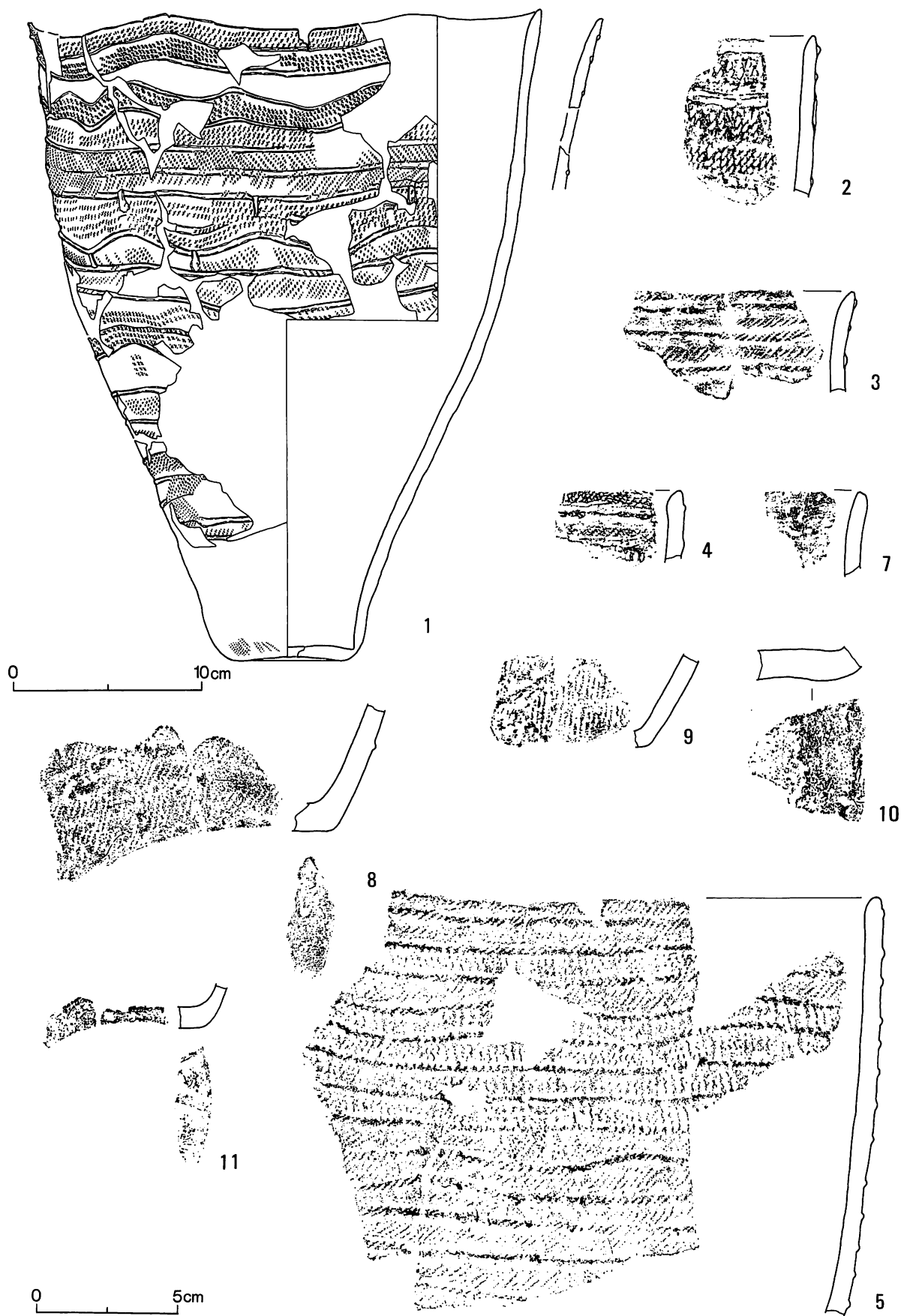
遺 物 床面と覆土から遺物が検出された。[図Ⅳ-29、Ⅳ-31-10～14]

土器：床面出土の土器は脆く、また磨滅が激しいので殆ど掲載出来なかった。しかしそれらは胎土や焼きなどから、以下で述べる最も多く出土した東釧路Ⅲ式と思われる。1は斜行縄文の上から縄線が横に三段押捺されている。また、口唇部および内面にも同じ原体を用いた縄線が施されている。図Ⅴ-2-2の6と接合する。I群b-1類である。2～7

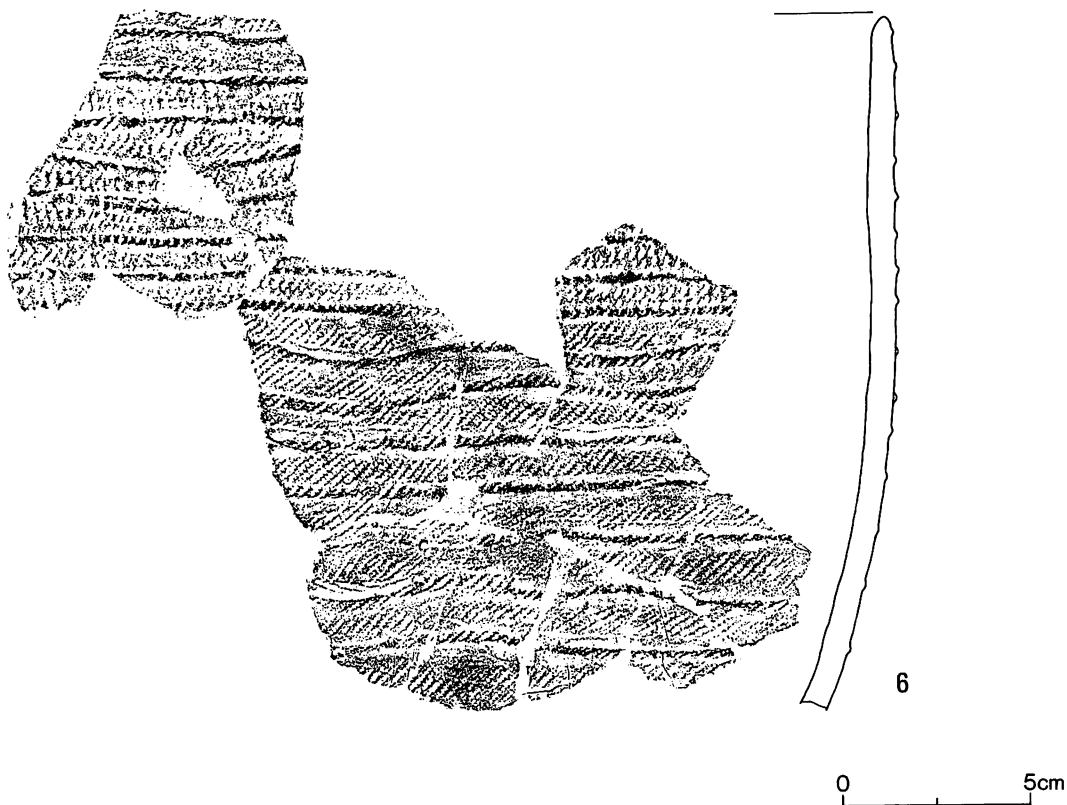


図IV-26 P-3とその遺物分布





図IV-27 P-3 出土の土器(1)



図Ⅳ-28 P-3 出土の土器(2)

はいずれも東釧路Ⅲ式と考えられる。2は条の太い縄文が施されている。胎土には小石も含み、内面は凸凹である。3も同じような原体を用いているが、やや色調が異なる。4は縄文が押捺され手いる。5・6は絡条体圧痕文が見られ胎土、焼き等が類似している。7はやや角張った軸に紐を巻き付け、軸跡が残らないような程度の力で押し付けている。これらのうち5が床面に近いレベルから検出された。

石器：10は、石槍またはナイフのうち、茎の明瞭にみられないもの(ⅠB2)である。尖頭部に回転によるつぶれが認められることから、石錐的な機能を併せもつ可能性がある。石質は、黒曜石である。11~13はつまみ付きナイフある。11・12は全面加工で裏面の一侧縁に刃部を持つもの(ⅢA1)、13は全面加工のもの(ⅢA2)である。石質は、いずれも頁岩である。14は、土製品の破片である。土器片を使用した有孔の円盤状を呈する。縄文時代早期の東釧路Ⅲ式土器の破片が使用されている。

時 期 出土した遺物から、縄文時代早期の東釧路Ⅲ式土器の時期と考えられる。

(立川トマス・藤原秀樹)

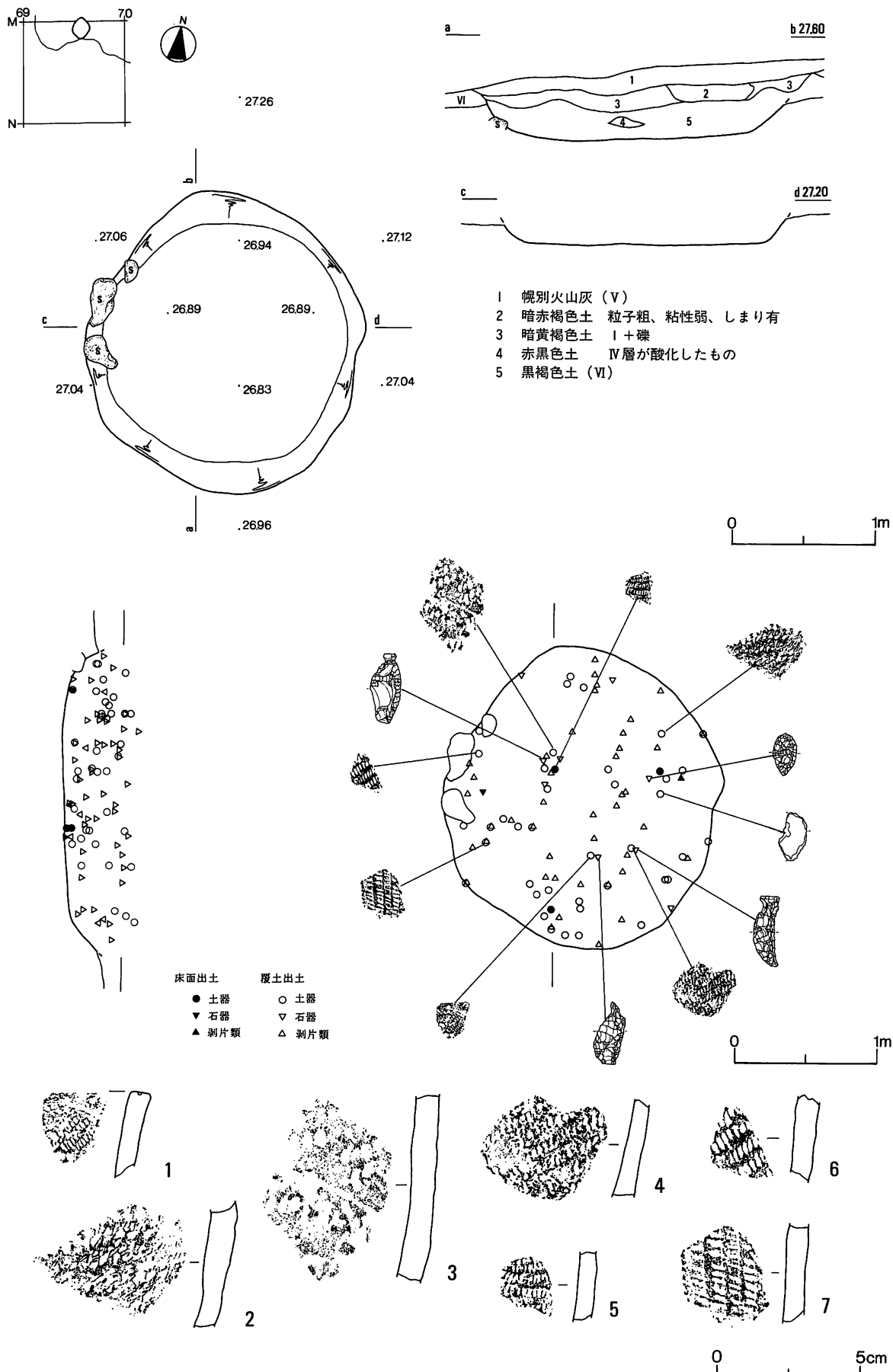
(5) P-5 [図Ⅳ-30、Ⅳ-31-15 表Ⅳ-20、Ⅳ-21-15 図版7、17、22]

位 置 M-70-d、M-71-a

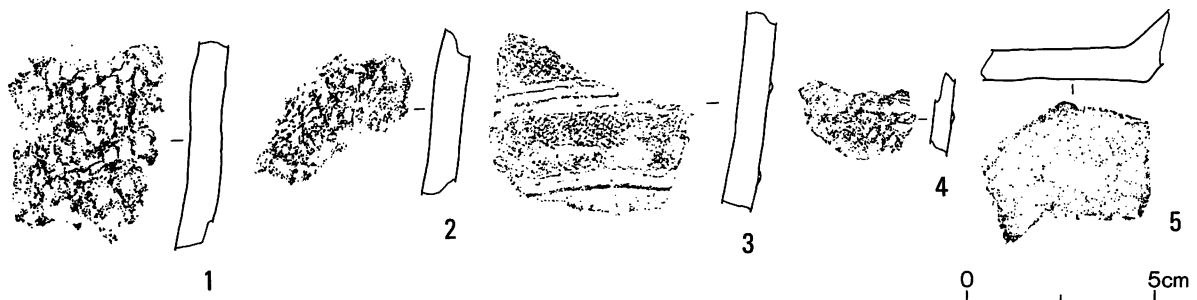
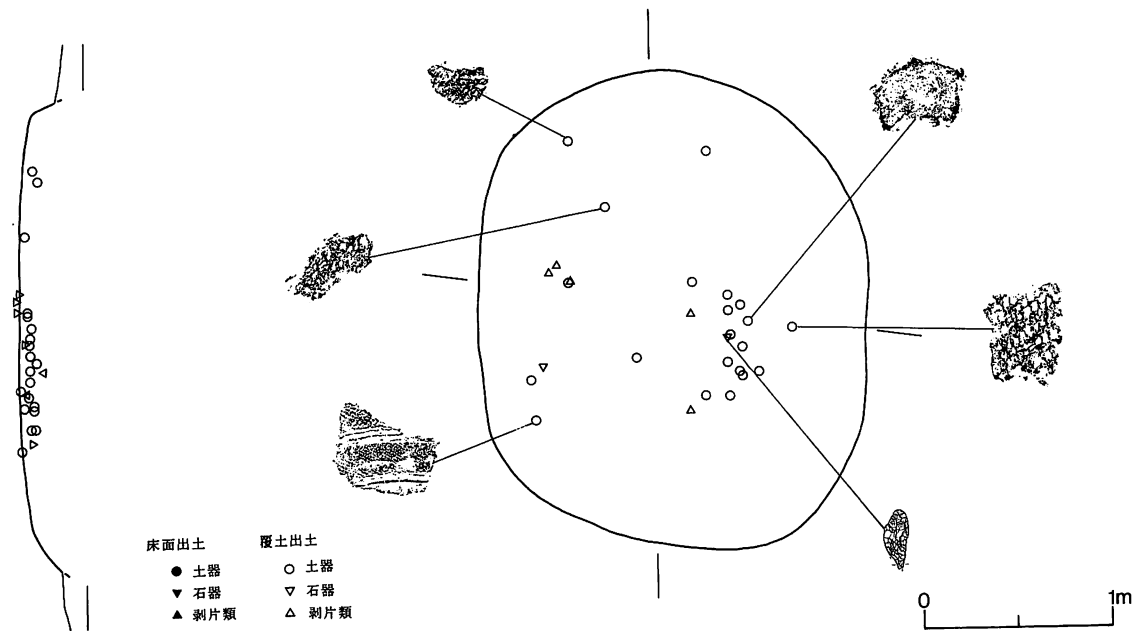
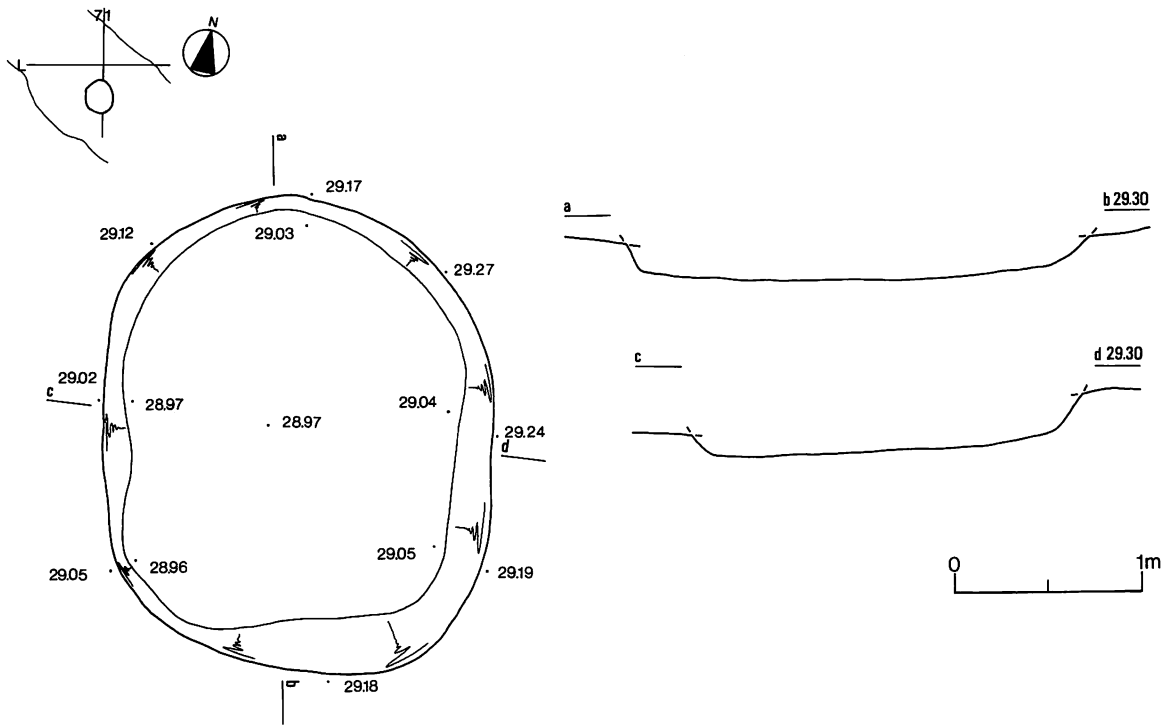
規 模  $2.49 \times 2.16 / 2.20 \times 1.78 / 0.33$

平 面 形 楕円形

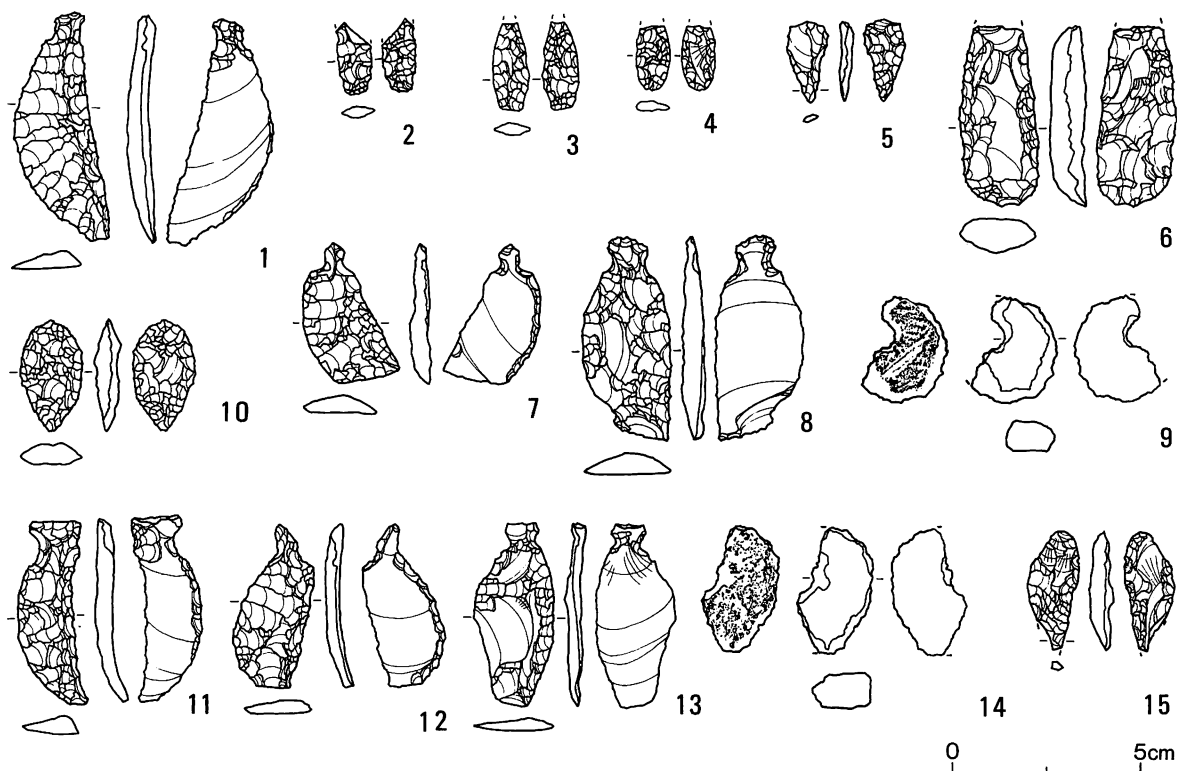
確認調査 H-3の床面精査中に、確認された。当初、H-3床面下の自然地形のくぼみと考えられたが、床面と思われる平坦面と壁らしき立上りが確認された。壁は、北から東



図Ⅳ-29 P-4とその遺物分布、出土土器



図IV-30 P-5とその遺物分布、出土土器



図Ⅳ-31 土壌出土の石器

側にかけてがほぼ垂直に、南から西側が緩やかに立ち上がる。床面は、平坦で固くしまっている。覆土は、上部が焼土粒と炭化物混じりの暗黄褐色を呈し、固くしまっている。下部は、細粒の砂質の黒褐色土で、VI層に類似しているが、強い粘性を持つ。覆土中から、わずかではあるが炭化物粒が検出された。

**遺 物** 覆土から遺物が検出された。[図Ⅳ-30、Ⅳ-31-15]

土器：1・2は東釧路Ⅲ式である。条の大きい斜行縄文が見られ、内面は凸凹がある。胎土には砂が含まれ脆い。表面がかなり磨滅している。3・4は中茶路式である。3は微隆起線を挟んで縄文が羽状に施文されている。微隆起線の両端は施文後になで付けられている。4は縄文が斜めに施されている。5は東釧路Ⅲ式の底部である。胎土、焼きなど1・2に近い。

石器：15は、石錐で、棒状のものにつまみ部が作り出されたもの(ⅡA2)である。刺突部が、欠失している。石質は、黒曜石である。

**時 期** 出土した遺物から、縄文時代早期の東釧路Ⅲ式土器の時期と考えられる。

(立川トマス・藤原秀樹)

#### 4. 焼土

今回の調査において、F-1～7の7か所の焼土が検出された。このうちF-3～6の4か所の焼土は住居に伴うものである。ここでは、住居に伴わないF-1、2、7の3か所について記述する。これら3か所の焼土は、いずれも堀込みを持たない地床炉である。

## (1) F-1 [図IV-32・33]

位 置 L-70-c、L-71-b、M-70-d、M-71-a

平 面 形 楕円形

規 模  $1.06 \times 0.78 \times 0.05$

**確認調査** 包含層調査中に、調査区のほぼ中央部M-71区のⅦ層下位より検出された。周辺を焼土上面レベルまで掘り下げたところ、焼土のほぼ4分の3が確認されたが、北端部が削平により破壊されていた。半さいして断面観察を行ったところ、掘り込みを持たない地床炉であることが判明した。焼土の上半部は全体的によく焼けた明るい赤橙色を呈するが、下半部は酸化により黒赤色に変色している。

また、この焼土は南に向かって傾斜する緩斜面部上にわずかに開けた平坦部に位置している。この焼土を中心に、平坦部から多量の遺物が検出された。このことから、この焼土を中心とした遺物出土範囲は、住居の可能性が考えられる。

**遺 物** 焼土中から、わずかな炭化物粒が検出された。

**時 期** 焼土検出面のⅦ層が縄文早期の遺物出土面であることと、この焼土が位置する平坦部から縄文早期中茶路式の土器が検出されていることから、縄文時代早期と考えられる。  
(立川トマス)

## (2) F-2 [図IV-32]

位 置 K-71-a

規 模  $0.57 \times 0.51 \times 0.10$

**確認調査** 耕作土を掘り下げた時、橙褐色土のまとまりを検出した。位置的にはP-3の確認面で、その内側に存在する。

**遺 物** 土器、フレイクが焼土中より出土した。土器は中茶路式である。但し、焼土はP-3の覆土であり、P-3覆土出土の土器(図IV-27-5)と接合したものもある。よって、焼土に伴う遺物とは考えられない。

**時 期** P-3よりも新しいので、I群b-4類の時期以降である。隣のグリットのK-70-d区からⅢ群a-2類の接合・復元土器が出土していることを考えると或いはその時期とも推定出来る。  
(藤原秀樹)

## (3) F-7 [図IV-32]

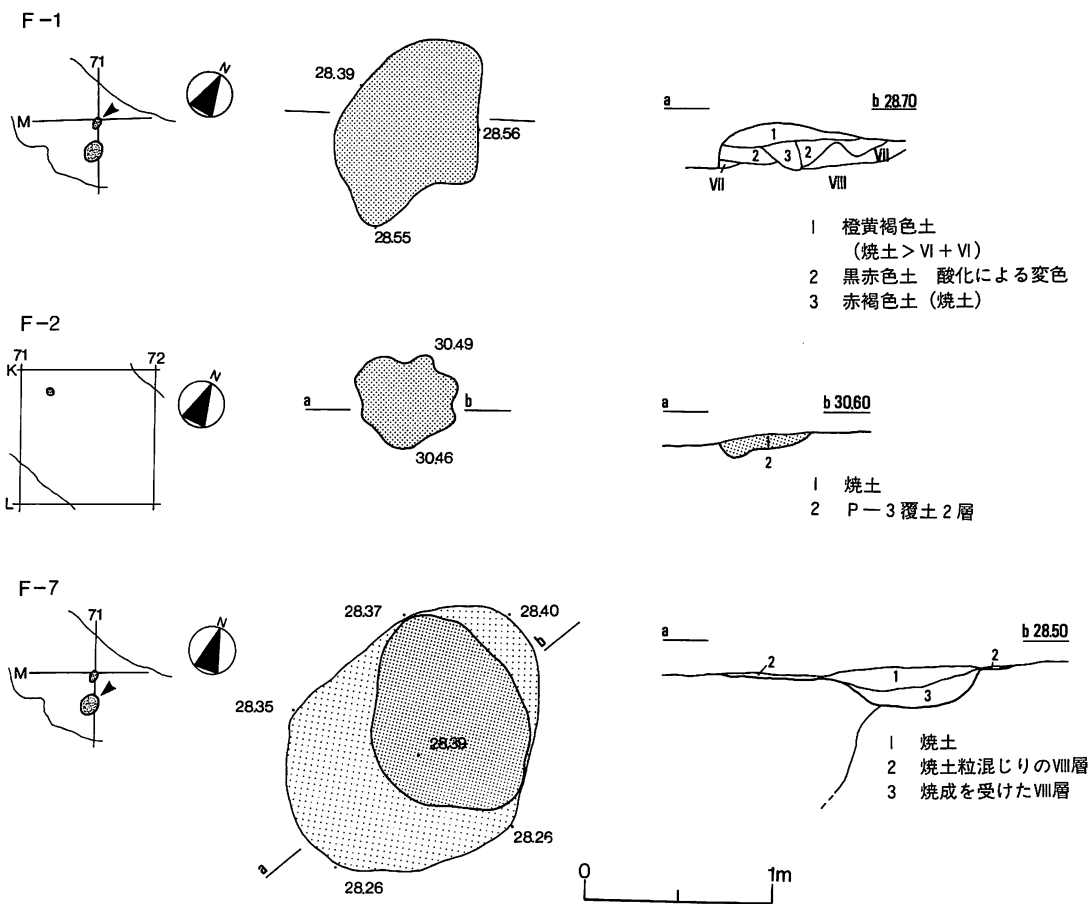
位 置 M-70-d、M-71-a

平 面 形 楕円形

規 模  $0.86 \times 0.81 \times 0.12$

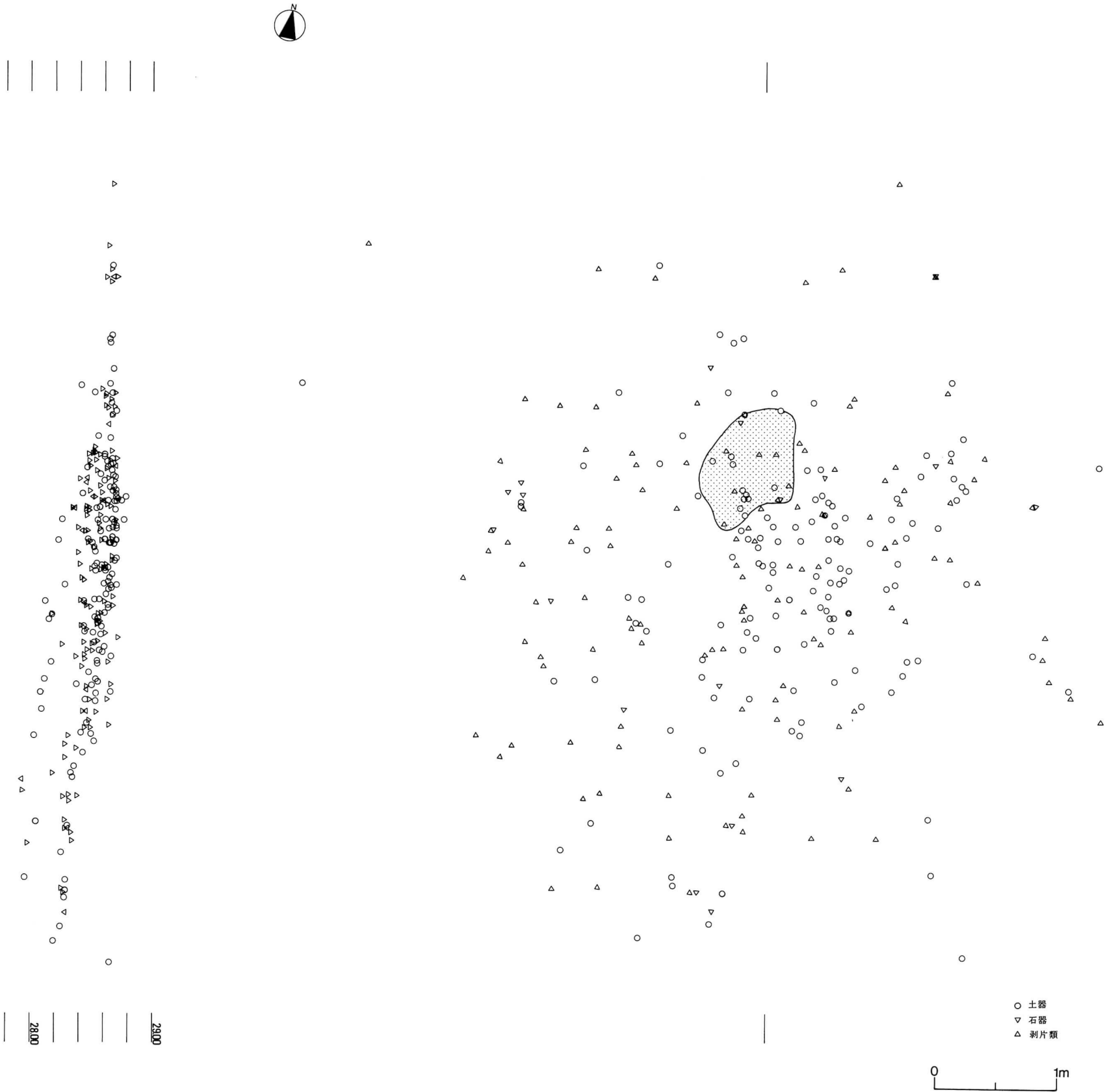
**確認調査** 包含層調査中に、F-1の南側のⅧ層上面で、焼土粒混じりの黄褐色土の広がりとして確認された。半さいして断面観察を行ったところ、この黄褐色土の広がり北東側に焼土本体が確認された。焼土は全体的によく焼けた赤橙色を呈する。この焼土は、断面観察から掘り込みを持たない地床炉である。

**時 期** 焼土検出面のⅧ層上面が縄文時代早期の遺物出土面であることから、縄文時代早期と考えられる。  
(立川トマス)



図IV-32 焼土 (F-1、F-2、F-7)





図IV—33 F—1 周辺の遺物分布

表IV-1 遺構一覧

遺構	図	発掘区	平面形	規模(確認面の長径×短径/底面の長径×短径/深さm)	遺物
H-1	IV-4	K-72-b・c, L-72-a・d	楕円形	6.32×5.76(5.06)/5.48×4.08(3.90)/0.42	土器:720 石鏃:11 石槍:2 石錐:3 つまみ付ナイフ:10 ナイフ:2 スクレイパー:4 石斧:1 たたき石:3 すり石:3 石核:5 剥片類:861 土製品:1
H-2	IV-7	L-70-c L-71-b (M-70-d, M-71-a)	卵形? 楕円形	5.88×(3.06)/5.20×(2.14)/0.62	土器:322 石鏃:2 スクレイパー:3 ナイフ:1 石斧:1 石核:6 原石:1 剥片類:126
H-3	IV-10	K-70-b・c K-71-b L-70-a・d L-71-a	不整楕円形	7.36×5.54/6.66×4.52/0.59	土器:238 石鏃:4 石錐:7 つまみ付ナイフ:8 スクレイパー:1 たたき石:3 すり石:4 石核:5 石槍:2 剥片類:236
H-4	IV-14	K-71-b・c	五角形	5.02×(3.80)/4.68×(3.68)/0.34	土器:1,963 スクレイパー:4 つまみ付ナイフ:3 ナイフ:1 石鏃:1 石核:2 砥石:4 台石:4 たたき石:1 石鏃:5 剥片類:908
H-5	IV-20	K-71-a・b・c・d	隅丸方形?	?×? / ?×5.12 / 0.36	土器:208 石槍:2 スクレイパー:1 台石:1 石核:2 石製品:1 石鏃:1 剥片類:81
P-1	IV-23	L-72-b	楕円形	(0.90)×0.96/ / 0.28	土器:16 台石:1 つまみ付ナイフ:1 剥片類:9
P-2	IV-24	M-71-b・c	円形	2.11×2.07/(2.37)×(1.94)/0.24	土器:149 つまみ付ナイフ:1 すり石:1 石核:1 石鏃:1 剥片類:85
P-3	IV-26	K-71-a	円形	2.64×2.50/2.30×2.06/0.40	土器:1,048 石鏃:3 石錐:1 石核:1 スクレイパー:1 ナイフ:1 つまみ付ナイフ:4 土製品:1 剥片類:244
P-4	IV-29	L-69-c, M-69-a・d	円形	2.11×1.66/1.92×1.69/0.24	土器:68 石鏃:4 石槍:1 つまみ付ナイフ:3 土製品:1 剥片類:59
P-5	IV-30	M-70-d, M-71-a	楕円形	2.49×2.16/2.20×1.78/0.33	土器:25 石槍:1 剥片類:7

表IV-2 H-1 復元土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	口 径	底 径	器 高	分類	接合・同一個体
IV-5	1	(H-1)L-72-a	73	覆土	(26.2)	(17.3)	(18.6)	Ib-3	K-72-b126, K-71-b25・42, K-71-c4, L-72-d68, L-69-a86 と接合, K-72-a73, K-72-b86・320・438・620 L-71-b25、L-71-c4 と同一個体

表IV-3 H-1 掲載土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体	図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
IV-5	2	H-1(K-72-b)	592	床面	Ib-2		IV-5	10	H-1(L-72-a)	109	覆土	Ib-2	
"	3	" (L-72-a)	114	"	"	K-72-b103 と接合	"	11	" (L-72-b)	442	"	"	
"	4	" (L-72-a)	115	"	"		"	12	" (K-72-b)	42	"	Ib-4	K-71-b42 と接合
"	5	" (K-72-b)	596	"	"		"	13	" (K-72-b)	66	"	"	
"	6	" (L-72-a)	129	"	"		"	14	" (K-72-b)	229	"	"	
"	7	" (L-72-a)	131	"	"		"	15	" (K-72-b)	36	"	"	
"	8	" (K-72-b)	564	焼土	"		"	16	" (K-72-b)	212	"	"	K-72-b318 と接合
"	9	" (K-72-b)	609	床面	Ib-4								

表IV-4 H-1 掲載石器属性一覧

番号	遺構番号	遺物番号	層位	名 称	分 類	大きさ(長さ×幅×厚さcm・重さg)	石 質	備 考
1	H-1	69	覆土	石 鏃	I a 3 a	4.2×1.2×0.4・1.8	頁 岩	
2	"	42	"	"	"	(2.3)×1.1×0.4・1.0	黒曜石	
3	"	329	"	"	"	(1.8)×1.1×0.3・0.4	"	
4	"	409	"	"	"	(1.6)×1.0×0.3・0.4	"	
5	"	38	"	石 槍・ナイフ	I B 2	3.0×1.6×0.7・2.8	"	
6	"	25	"	"	"	(3.3)×2.0×1.0・4.8	"	
7	"	20	"	石 錐	II A 2	4.2×2.0×0.3・5.0	頁 岩	
8	"	107	"	"	"	2.8×1.4×0.2・1.2	"	
9	"	77	"	"	"	2.2×1.0×0.3・0.8	"	
10	"	334	"	つまみ付きナイフ	III A 1	6.1×3.0×0.4・9.6	"	
11	"	330	"	"	"	6.3×2.4×0.6・7.8	"	
12	"	478	"	"	"	4.7×1.9×0.5・4.6	"	
13	"	112	"	"	"	(4.9)×2.2×0.6・6.2	"	
14	"	222	"	"	"	4.8×2.6×0.6・5.6	"	
15	"	202	"	スクレイパー	III B 1	(3.7)×2.9×0.6・6.4	黒曜石	
16	"	102	"	"	"	4.7×2.2×1.0・7.8	"	
17	"	296	床面	石 斧	IV A 3	(2.6)×2.1×0.5・4.0	蛇紋岩	
18	"	554	"	た た き 石	V A 3	7.0×6.4×5.5・324.0	安山岩	
19	"	183	覆土	"	V A 4	8.7×7.0×4.3・328.0	"	
20	"	27	"	す り 石	IV A 1	8.9×14.7×5.4・965.0	"	
21	"	236	"	"	IV A 2	11.0×9.1×4.0・605.0	"	
22	"	321	"	"	"	10.0×10.8×5.8・650.0	"	
23	"	475	床面	石 核	XI A 1	4.7×3.6×1.0・14.8	黒曜石	

表IV-5 H-2 復元土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位				分類	接合・同一個体
					口 径	底 径	器 高		
IV-9	1	H-2	55	床面	17.8	(8.7)	(19.6)	III b-3	H-2 60と接合

表IV-6 H-2 掲載土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体	図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
IV-9	2	H-2	49	覆土	Ib-2		IV-9	5	H-2	50	覆土	III b-3	
"	3	"	30	"	Ib-4		"	6	" (L-71-b)	41	"	"	
"	4	"	44	"	III b-3		"	7	H-2	59	床面	III b	

表IV-7 H-2 掲載石器属性一覧

番号	遺構番号	遺物番号	層位	名 称	分 類	大きさ(長さ×幅×厚さcm・重さg)	石 質	備 考
1	H-2	21	床面	石 鏃	I A 2	5.6 × 1.7×0.5・ 5.8	頁 岩	
2	"	37	覆土	石 槍・ナイフ	I B 2	3.9 × 1.8×0.6・ 4.2	"	
3	"	56	"	た た き 石	V A 4	11.8 × 5.6×3.6・342.0	安山岩	
4	"	82	床面	す り 石	VI A 3	8.6 × 14.7×3.2・451.0	"	
5	"	10	"	石 核	XI A 1	3.9 × 1.8×0.6・ 15.5	黒曜石	

表IV-8 H-3 掲載土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体	図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
IV-12	1	H-3	219	床面	Ib-2		IV-12	9	H-3	35	覆土	Ib-3	
"	2	"	203	"	Ib-4		"	10	"	239	(床面)	"	
"	3	"	157	覆土	Ib-1		"	11	"	33	覆土	Ib-4	
"	4	"	38	"	Ib-2		"	12	"	30	"	"	
"	5	"	240	"	"		"	13	"	32	(床面)	"	
"	6	"	52	"	"		"	14	"	11	覆土	Ib-5	
"	7	"	45	(床面)	Ib-3		"	15	"	32	"	Ib-4	
"	8	"	128	覆土	"								

表IV-9 H-3 掲載石器属性一覧

番号	遺構番号	遺物番号	層位	名 称	分 類	大きさ(長さ×幅×厚さcm・重さg)	石 質	備 考
1	H-3	193	覆土4	石 鏃	I A 3 a	(1.9) × 1.0×0.2・ 0.4	黒曜石	
2	"	119	覆土3	"	I A 6	(1.8) × (0.9) × 0.3・ 0.4	"	
3	"	221	床面	石 槍・ナイフ	I B 2	(2.3) × 1.8×0.2・ 2.2	"	
4	"	171	覆土4	石 錐	II A 2	5.3 × 2.0×1.2・ 10.2	頁 岩	
5	"	87	覆土3	"	"	3.3 × 2.2×0.7・ 5.0	"	
6	"	85	"	"	"	3.5 × 2.1×0.4・ 1.4	黒曜石	
7	"	113	"	つまみ付きナイフ	III A 1	5.6 × 2.3×0.5・ 6.0	頁 岩	
8	"	125	"	"	"	5.6 × 3.1×0.6・ 8.8	メノウ質岩	
9	"	81	"	"	"	5.4 × 2.8×0.8・ 11.2	安山岩	
10	"	153	焼土	"	"	(3.1) × (2.6) × 0.8・ 6.8	"	
11	"	216	床面	"	III A 2	5.7 × 1.9×0.6・ 4.8	"	
12	"	244	覆土4	た た き 石	V A 2	9.7 × 10.4×4.1・660.0	安山岩	
13	"	8	覆土2	す り 石	IV A 1	4.5 × 12.1×4.1・250.0	"	
14	"	166	"	"	"	6.7 × 11.1×6.1・499.0	テライト	
15	"	123	覆土3	石 錐	IX A 1	10.2 × 14.3×3.7・740.0	安山岩	

表IV-10 H-4 復元土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位				分類	接合・同一個体
					口 径	底 径	器 高		
IV-16	1	H-4	666	床	16.6	7.4	15.7	Ib-4	H-4 146、252、275、276、443 600、640、651、663、676、685と接合 H-4 173、340、640と同一個体
"	2	H-4	534	覆土	25.4	(16.4)	(20.9)	Ib-4	H-4 53、75、85、275、280、286、337 338、341、344、345、347、535、574、629 640、645、649、655、677と接合 H-4 73、205、206、265、276、286、296 344、345、448、524、534、574、655 680と同一個体

表IV-11 H-4 掲載土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体	図	番号	発掘区	物番号	層位	分類	接合・同一個体
IV-16	3	H-4	425	床面	Ib-4	H-4 465 と接合	IV-17	11	H-4 (K-71-b)	639	覆土	Ib-4	H-4 580 と接合
"	4	"	466	"	"	H-4 419, 422, 463, 464 465、630 と接合	"	12	"	82	"	"	
IV-17	5	"	424	"	"	H-4 423, 428 と接合	IV-18	13	"	357	"	"	
"	6	"	422	"	"	H-4 463, 464, 465 と接合	"	14	"	73	"	"	
"	7	H-4 (K-71-b)	60	覆土	"	H-4 550, 596, K71b65 と接合	"	15	"	266	"	"	
"	8	"	167	"	"		"	16	"	41	"	"	
"	9	"	112	"	"	H-4 372, 373 と接合	"	17	"	457	"	"	
"	10	"	455	"	"		"	18	"	464	"	"	
							"	19	"	116	"	VI a	

表IV-12 H-4 掲載石器属性一覧

番号	遺構番号	遺物番号	層位	名称	分類	大きさ(長さ×幅×厚さcm・重さg)	石質	備考
1	H-4	565	床面	石 鏃	I A 2	4.6 × 1.1 × 0.6・ 3.7	頁岩	
2	"	583	覆土	"	I A 3 a	2.1 × 0.7 × 0.2・ 0.3	黒曜石	
3	"	398	"	"	"	(2.1) × 0.8 × 0.2・ 0.4	"	
4	"	10	"	石 錐	II A 2	0.2 × 1.0 × 0.5・ 0.7	"	
5	"	108	"	"	"	(3.1) × (1.8) × 0.7・ 2.3	"	
6	"	63	"	つまみ付きナイフ	III A 1	6.6 × 2.3 × 0.5・ 8.1	頁岩	
7	"	307	"	スクレイパー	III B 6	8.6 × 4.7 × 1.3・ 40.7	"	
8	"	374	"	すり石	V A 2	11.2 × 10.0 × 5.0・ 850.0	安山岩	
9	"	213	"	"	"	9.5 × 17.7 × 4.2・ 1016.0	"	
10	"	458	"	台石・石皿	VII A	26.4 × 27.4 × 7.4・ 5880.0	"	
11	"	144	"	石 核	XI A 1	2.6 × 4.7 × 1.7・ 20.9	黒曜石	

表IV-13 H-5 掲載土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体	図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
IV-22	1	H-5	36	床面	Ib-4		IV-22	11	H-5 (K-71-d)	273	覆土	III a-2	K-71-d274 と接合
"	2	"	25	"	"		"	12	H-5	28	"	"	
"	3	"	32	覆土	"		"	13	" (K-71-d)	203	"	III a-2 III b-1	K-71-d21 と接合 13-14 同一個体
"	4	" (K-71-c)	161	"	III a-2		"	14	" (K-71-a)	63	"	"	
"	5	"	18	"	Ib-4		"	15	" (H-4)	278	註 (H-5 附)	"	15-17 同一個体
"	6	"	11	"	III a-2		"	16	" ( " )	278	" ( " )	"	
"	7	"	8	"	"		"	17	" ( " )	327	" ( " )	"	
"	8	" (K-71-b)	137	"	"		"	18	" ( " )	277	" ( " )	"	
"	9	" (K-71-d)	195	"	"		"	19	" ( " )	50	" ( " )	Ib-4	
"	10	" ( " )	277	"	"								

表IV-14 H-5 掲載石器属性一覧

番号	遺構番号	遺物番号	層位	名称	分類	大きさ(長さ×幅×厚さcm・重さg)	石質	備考
1	H-5	15	覆土	石 鏃	I A 3 a	(2.8) × 1.1 × 0.3・ 0.7	黒曜石	

表IV-15 P-1 掲載土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体	図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
IV-23	1	P-1	7	覆土	Ib		IV-23	4	P-1	9	覆土	Ib-5	
"	2	"	11	"	"		"	5	"	6	"	"	
"	3	"	8	"	Ib-5	3-5 同一個体							

表IV-16 P-2 掲載土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体	図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
IV-25	1	P-2	19	覆土	Ib-2	1-8 同一個体	IV-25	9	P-2	39	覆土	Ib-2	
"	2	"	5	"	"		"	10	"	40	"	"	
"	3	"	11	"	"		"	11	"	12	"	"	
"	4	"	21	"	"		"	12	"	27	"	"	
"	5	"	43	"	"		"	13	"	3	(床面)	"	
"	6	"	49	"	"		"	14	"	38	覆土	"	
"	7	"	59	"	"		"	15	"	25	"	"	
"	8	"	57	"	"								

表IV-17 P-3 復元土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	口 径 底 径 器 高			分類	接合・同一個体
IV-27	1	P-3	179	覆土	27.7	6.0	34.4	Ib-4	P-3 30、31、K-71-a10、22、34、46 と接合 P-3 12、44、50、174、K-71-a1、10、22 と同一個体

表IV-18 P-3 掲載土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体	図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	合・同一個体
IV-27	2	P-3	205	覆土	Ib-4		IV-28	6	P-3	44	覆土	Ib-4	P-3 56、57、130
"	3	"	75	"	"								132、152、154、164
"	4	"	188	"	"								175、177 と接合
"	5	"	49	"	"	P-3 51、148、155	IV-27	7	"	53	"	"	
						159、160、165	"	8	"	79	"	"	
						F-2 4、5、6	"	9	"	140	"	"	
						K-72-a22 と接合	"	10	"	227	"	"	
							"	11	"	36	"	Ib	P-3 181 と接合

表IV-19 P-4 掲載土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体	図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
IV-29	1	P-4	12	覆土	Ib-1		IV-29	5	P-4	34	(床面)	Ib-2	
"	2	"	31	"	Ib-2		"	6	"	37	覆土	"	
"	3	"	36	"	"		"	7	"	15	"	"	
"	4	"	7	"	"								

表IV-20 P-5 掲載土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体	図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
IV-30	1	P-5	18	覆土	Ib-2	1~2同一個体	IV-30	4	P-5	2	覆土	Ib-4	
"	2	"	3	"	"		"	5	"	16	"	Ib-2	
"	3	"	7	"	Ib-4								

表IV-21 土●掲載石器属性一覧

番号	遺構番号	遺物番号	層位	名 称	分 類	大きさ(長さ×幅×厚さcm・重さg)	石 質	備 考
1	P-1	10	覆土	つまみ付きナイフ	III A 1	6.0 × 2.6×0.4・ 6.3	頁 岩	
2	P-2	47	覆土	石 鏃	I A 3 a	(1.9)×(0.9)×0.2・ 0.4	黒曜石	
3	P-3	77	覆土	"	"	(2.3)× 1.0×0.2・ 0.6	"	
4	"	231	"	"	"	(1.7)× 0.9×0.2・ 0.3	"	
5	"	63	"	石 錐	II A 2	2.1 × 1.1×0.3・ 0.6	"	
6	"	209	"	つまみ付きナイフ	III A 1	3.7 × 2.6×0.4・ 2.6	頁 岩	
7	"	3	"	"	III A 2	5.4 × 2.3×0.5・ 6.8	"	
8	"	186	"	スクレイパー	III B 1	(4.8)× 2.1×0.9・ 12.2	"	
9	"	98	"	土 製 品		2.8 × (2.3)×0.8・ 3.8		
10	P-4	28	覆土	石 槍 ・ ナ イ フ	I B 2	3.0 × 1.6×0.6・ 2.8	黒曜石	
11	"	8	"	つまみ付きナイフ	III A 1	4.8 × 1.7×0.5・ 4.3	頁 岩	
12	"	11	"	"	"	4.3 × 2.1×0.4・ 3.8	"	
13	"	35	"	"	III A 2	4.8 × 2.1×0.4・ 3.5	"	
14	"	29	"	土 製 品		3.3 × (2.0)×0.9・ 4.4		
15	P-5	19	覆土	石 錐	II A 2	(3.1)× 1.3×0.4・ 1.5	黒曜石	

## V. 包含層の土器

本来的な包含層が耕作によって削平・攪乱を受けているために、土器の多くは小破片となっている。縄文時代早期、前期、中期、後期、続縄文時代のものがあり、合計23000点である。

縄文時代早期のアルトリ式、東釧路Ⅱ式、東釧路Ⅲ式、コッタロ式、中茶路式、東釧路Ⅳ式、縄文時代中期のサイベ沢Ⅶ式、見晴町式、天神山式、大安在B式、煉瓦台式などが多く出土している。このほかに少量ではあるが縄文時代前期の円筒下層式、縄文時代後期の手稲式、続縄文時代の後北C1式なども検出されている。縄文時代中期後半のものかともみなされる魚骨回転文の平底土器もある。中茶路式土器の破片のひとつに、種子圧痕(ササ? 長さ6.2mm)が認められる。

包含層から出土した土器を時期の区分をもとにした、次の4項に分けて説明する。1：縄文時代早期 条痕文平底土器、2：縄文時代早期 縄文、撚糸文等の土器、3：縄文時代前期、中期、後期の土器、4：続縄文時代の土器

### 1 縄文時代早期、条痕文平底土器 (図V-1-1~5) [図版23~27]

破片の大小をとわぬ調査区毎の出土点数は図V-1-1である。調査区域の南半により多く出土しているが、分布の濃淡は包含層の残存状況に影響を受けているものと考えられる。

1は口径21.5cmの水平口縁、底径10.5cm、高さ29.0cmである。断面を見ると、口縁から底部までゆるやかなふくらみを保ってすばまっている。口縁部はいくぶん外に開き気味で、口唇は丸みをもっている。口縁部には横にめぐる一条の肥厚帯がある。肥厚帯の上辺には肥厚帯形成時のへう調整痕が細い線として残っている。肥厚帯の下方5cmほどは縦方向の条痕であり、さらにその下方は横方向の条痕である。

1個体の4分の3ほどで接合・復元したものである。これらの破片は、縦に半割りした片方ほどがM-69-d区からまとまって、ほかは5mほどの範囲から検出された。層位は「V層」となっているが、この土器が出土した周辺は「幌別火山灰」の降下堆積後に土器を含む土層の人為的な再堆積がなされたところである。したがってこの土器と「幌別火山灰」の時間的な先後関係は確定的ではない。

2は口径14.8cmの水平口縁、底径7.8cm、高さ21.0cmである。断面を見ると、口縁から底部まで直線的にすばまっている。口縁部はいくぶん外に開き気味で、口唇は平坦である。指頭圧痕様のかすかな凹凸はあるが、全体的につややかで平滑な表面である。

1個体の3分の2ほどで接合・復元したものである。これらの破片の大部分は、M-72-a区の1mほどの範囲から検出された。出土層位は「Ⅳ層、Ⅴ層」となっているが、この土器と「幌別火山灰」の時間的な先後関係を明瞭に示す観察記録は得られなかった。

3は口径9.8cmの水平口縁、底径4.6cm、高さ13.5cmである。断面を見ると、口縁から底部まで直線的にすばまっている。口縁部は直立し、口唇は丸みをもっている。口縁部には縦方向の、それよりも下方は横方向の条痕がある。底部にも条痕がある。

1個体の3分の2ほどで接合・復元したものである。これらの破片の大部分は、M-71-c区の2mほどの範囲から検出された。出土層位は「Ⅳ層」となっているが、この土器

と「幌別火山灰」の時間的な先後関係を明瞭に示す観察記録は得られなかった。

4は現存の上端径18cmで、横方向に条痕がある。下端は底部に近い。多数の破片があるが接合したのは少ない。M-72-a区から「2」の土器とほぼ同じ範囲から出土した。

5と6は同一個体である。口縁部に凹線が2本めぐり、口縁部は縦方向の条痕、その下方は横方向の条痕がある。7は波状口縁である。口縁部に凹線が3本めぐり、8と9は同一個体で、波状口縁である。口縁部に凹線が3本めぐり、

10・11・12は同一個体で、波状口縁を示す波頂部がある。口縁部に凹線で区切ることによってできた凸線が1本めぐり、この凸線の上下両辺には、凸線形成時の貝殻腹縁による調整痕が上下を縁取るように残っている。凸線の下方には縦方向の条痕がある。

13・14・15・16は同一個体で、波状口縁である。口縁部には上下両辺を貝殻腹縁圧痕で縁取られた1本の凸線がある。口縁部と胴部とを画する位置に、上辺を貝殻腹縁圧痕で縁取られた1本の凸線がめぐり、この凸線の下に接して細沈線の数条を単位とする横走がある。口縁部付近は縦方向の条痕、それよりも下方は横方向の条痕である。

17は波状口縁で、2本の凹線がある。18と19は同一個体で、隆起線がめぐり、20は隆起線がめぐり、21は上下両辺を擦痕で縁取られた凸線がめぐり、22と23は同一個体で、波状口縁である。口縁部に両辺を貝殻腹縁圧痕で縁取られた2本の凸線がある。この凸線の上下には貝殻腹縁圧痕でできた線がめぐっている。口縁部の下方には横方向の条痕がある。

24は口縁部に2本の凹線がある。撚糸の圧痕もある。25と26は2本の凹線がある。27～33は凸線がある。28は凸線を縁取りする位置に貝殻腹縁圧痕様のものがある。30は条痕がある。

34と35は横方向の条痕がある。35の口唇には角棒状の物を押し付けた刻みがある。36は縦方向の条痕がある。37は口唇部、口縁部に縦方向に引いた凹線がある。38と39は横方向の条痕がある。40は細沈線が3本めぐり、その下方には縦方向の条痕がある。41は口縁部に横方向の条痕があり、口唇には撚糸の圧痕がある。42は縦方向の条痕がある。43は横方向の条痕がある。44は縦横の条痕がある。

45～48は縦方向の条痕がある。47と48は同一個体であろう。49は貝殻腹縁の圧痕がある。50は交差重複する条痕があるが、判然としない。51は横方向の条痕がある。52と53は波状口縁で、縦方向の条痕がある。54と55は横方向の条痕がある。55はへうで刻んだような細沈線が2本ある。

56は口径13cmの波状口縁である。口縁部には縦方向の細い条痕が、その下方には横方向の条痕がある。57は口径11cmの水平口縁で、縦方向の細い条痕がある。58は横方向の条痕がある。59と62は条痕は認められずつややかな表面である。60は口縁部には横方向の、その下方には縦方向の条痕がある。

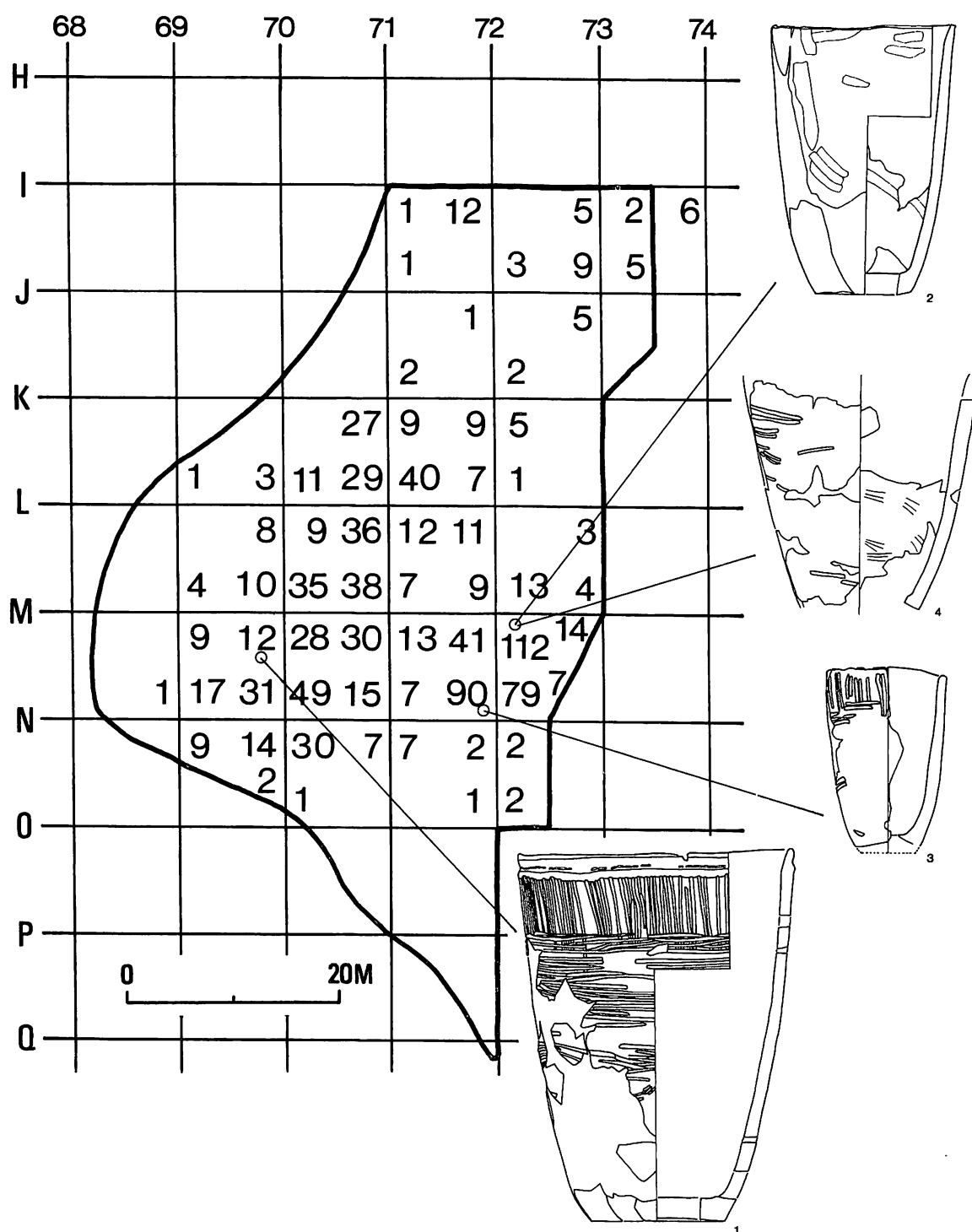
61は表面剥落が著しい。63は表面摩耗しているが、口縁部が薄くなっているのが認められる。64は表面摩耗しているが、横方向の条痕がある。65は図では明瞭でないが、口唇部に細い撚糸の圧痕様のものがある。

66と67は口唇近くに横方向の、その下方に縦方向の条痕がある。68は縦横の条痕が重複している。69は表面摩耗している。70と71は上半に縦方向、下半に横方向の条痕がある。72は縦横の条痕とともに、貝殻腹縁の圧痕がある。

73と74は横方向の条痕がある。75・76・77は平底で、横方向の条痕がある。78・80・82



は顕著な条痕が見られない底部である。79は径8.5cmの底部で、縦方向の条痕がある。81は横方向の条痕がある。  
(西田 茂)



図V-1-1 条痕文土器のグリッド毎出土点数

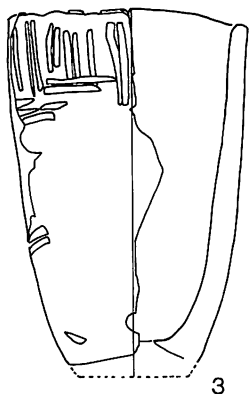
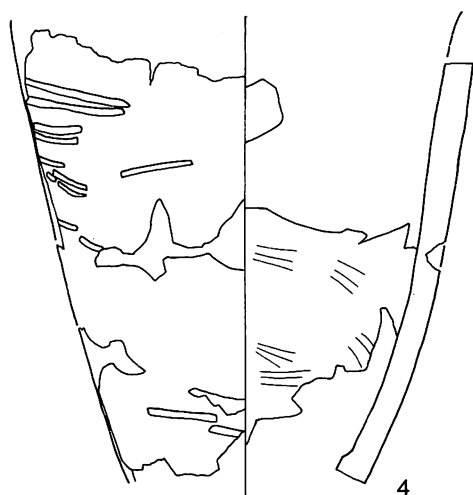
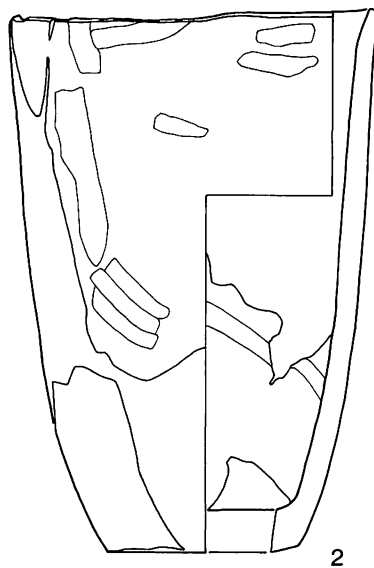
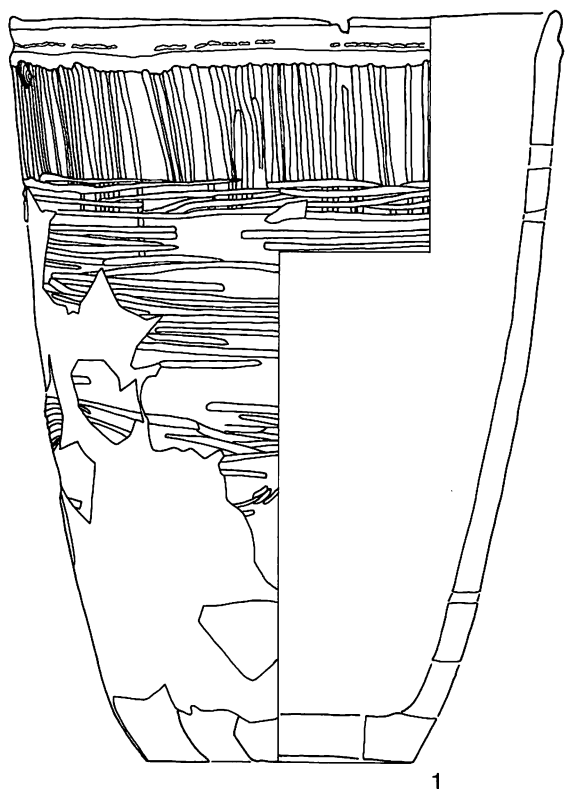
図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
V-1-2	1	M-69-d	179	V	I a-2	17、40、80、91、92、93、94
"	2	M-72-a	22	V	I a-2	13、139、241、M-72-c-159
"	3	M-71-c	118	IV	I a-2	124、156、334、365、416
"	4	M-72-a	27	V	I a-2	69、72、130
"	5	M-71-a	160	V	I a-2	
"	6	K-71-a	22	I	I a-2	K-71-a-1
"	7	K-70-c	72	V	I a-2	L-70-b-65
"	8	L-70-b	65	I	I a-2	M-70-b-1
"	9	H-3	41	フクド	I a-2	K-71-b-5
V-1-3	10	M-70-d	8	I	I a-2	N-70-d-21
"	11	M-70-b	6	I	I a-2	N-70-a-13
"	12	M-70-b	1	I	I a-2	
"	13	L-69-c	128	V上	I a-2	P-4-2-フクド
"	14	M-70-c	22	I	I a-2	
"	15	L-69-c	195	V上	I a-2	
"	16	L-69-c	33	V	I a-2	K-69-c-6
"	17	H-3	18	フクド	I a-2	
"	18	M-71-d	3	I	I a-2	
"	19	L-70-d	25	I	I a-2	
"	20	M-72-a	317	IV	I a-2	M-72-a-317
"	21	H-4	241	フクド	I a-2	
"	22	L-70-c	81	V上	I a-2	
"	23	L-71-b	38	V	I a-2	L-71-b-116、L-70-c-23 3点
"	24	I-71-d	1	I	I a-2	
"	25	K-70-d	16	I	I a-2	

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
V-1-3	26	N-69-a	26	I	I a-2	
"	27	M-72-a	22	I	I a-2	M-72-a-13
"	28	N-69-a	30	I	I a-2	
"	29	K-71-a	10	I	I a-2	
"	30	H-3	133	フクド	I a-2	
"	31	M-69-c	106	I	I a-2	
"	32	L-71-b	60	V	I a-2	
"	33	M-71-c	123	IV	I a-2	
"	34	M-70-d	86	V	I a-2	
"	35	M-71-c	381	IV	I a-2	
"	36	L-69-b	11	I	I a-2	
"	37	L-71-a	16	I	I a-2	
"	38	M-72-b	264	IV	I a-2	
"	39	L-71-b	52	V	I a-2	
"	40	M-71-d	31	I	I a-2	
"	41	M-69-d	17	I	I a-2	
"	42	L-70-b	73	V上	I a-2	
V-1-4	43	M-71-c	442	IV	I a-2	
"	44	M-70-b	242	V上	I a-2	
"	45	N-72-a	55	IV	I a-2	
"	46	M-71-c	29	V	I a-2	M-71-c-23/M-71-c-351
"	47	M-71-a	203	V	I a-2	
"	48	M-69-c	41	I	I a-2	
"	49	L-69-d	9	I	I a-2	
"	50	M-69-b	50	I	I a-2	

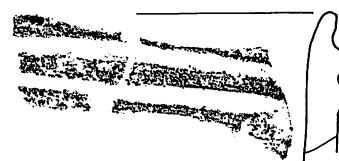
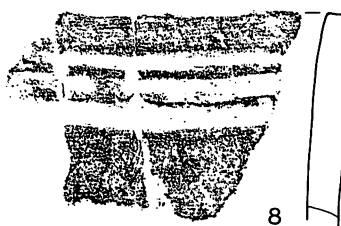
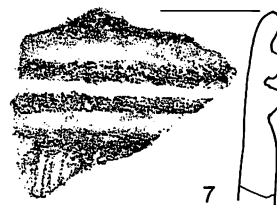
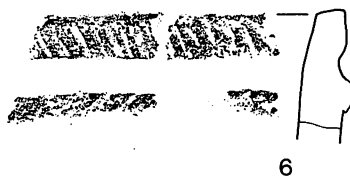
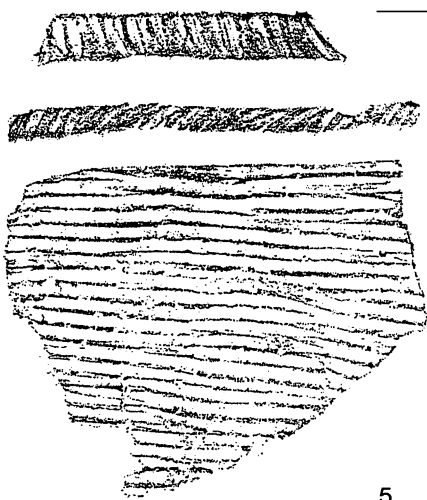
V-1-4	51	M-71-c	164	V	I a-2	
"	52	M-72-a	327	IV	I a-2	M-71-c-19
"	53	K-71-a	32	V	I a-2	M-71-a-32
"	54	M-72-a	22	I	I a-2	M-72-a-91
"	55	N-70-a	92	V上	I a-2	
"	56	M-71-c	380	IV	I a-2	M-71-c-71、380
"	57	M-71-a	15	I	I a-2	他2点
"	58	L-70-b	9	I	I a-2	
"	59	M-71-c	46	IV	I a-2	
"	60	M-72-a	279	V上	I a-2	
"	61	M-71-c	168	V	I a-2	M-71-c-168
"	62	M-71-c	353	IV	I a-2	
"	63	M-72-a	95	V	I a-2	
"	64	M-72-b	371	IV	I a-2	
"	65	I-71-d	3	I	I a-2	
"	66	M-71-d	113	V	I a-2	
"	67	P-2	8	フクド	I a-2	
"	68	M-71-c	92	V	I a-2	
"	69	N-71-d	62	V	I a-2	
"	70	H-4	691	フクド	I a-2	H-4-218-フクド2点
"	71	L-69-c	195	V上	I a-2	
"	72	M-72-a	250	V上	I a-2	
V-1-5	73	M-71-c	167	V	I a-2	M-72-a-22、M-71-c-112、169
"	74	M-71-c	99	IV	I a-2	M-71-c-116他2点
"	75	M-72-a	248	V上	I a-2	

V-1-5	76	N-70-a	13	I	I a-2	
"	77	K-71-c	152	V上	I a-2	
"	78	H-4	298	フクド	I a-2	H-4-656フクド、K-71-b-25
"	79	K-72-a	146	V上	I a-2	K-72-a-145
"	80	M-71-c	46	IV	I a-2	M-71-c-19
"	81	M-72-a	136	V	I a-2	M-72-a-136
"	82	L-72-c	365	V上	I a-2	他7点

表 V-1-1 条痕文土器

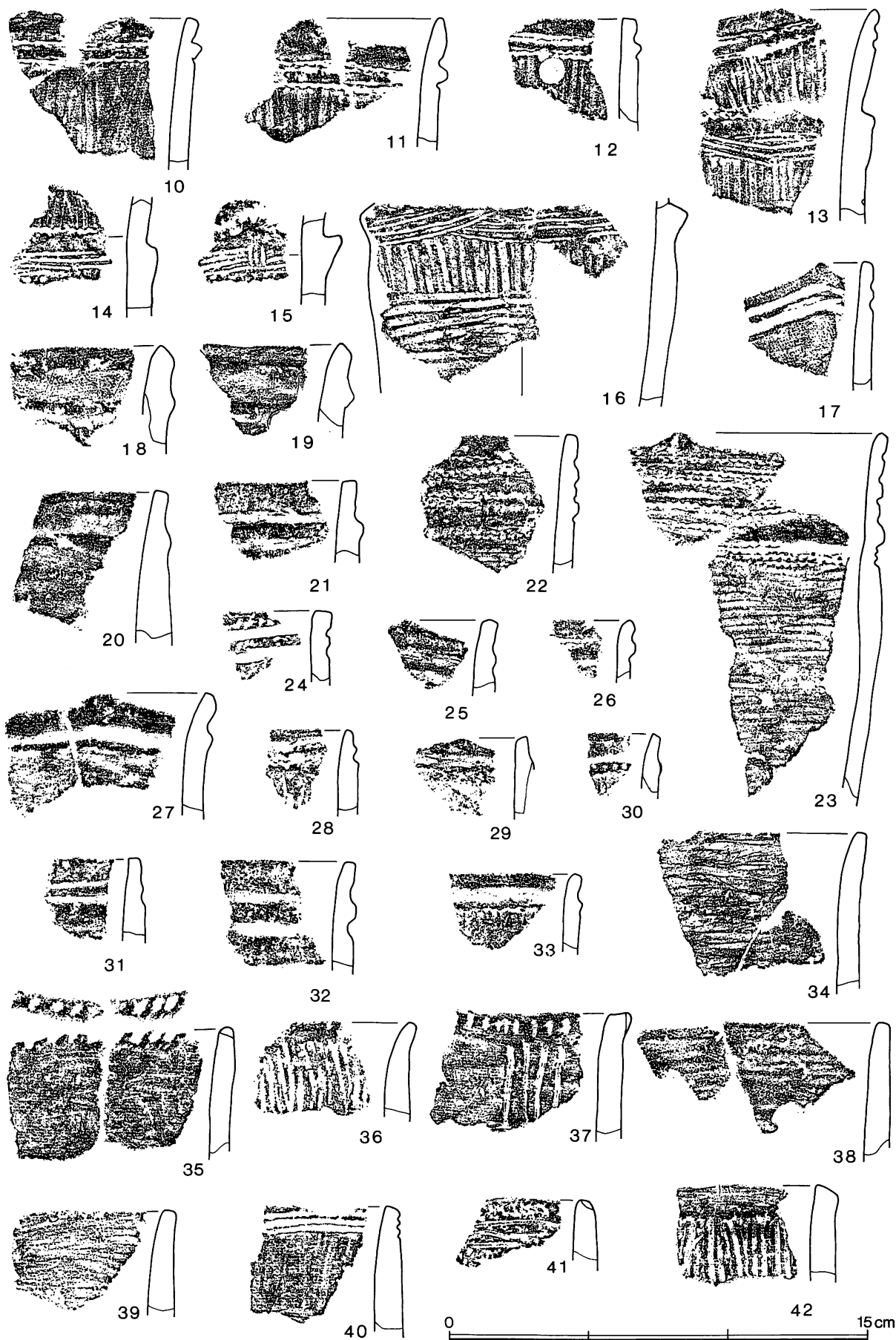


0 20cm

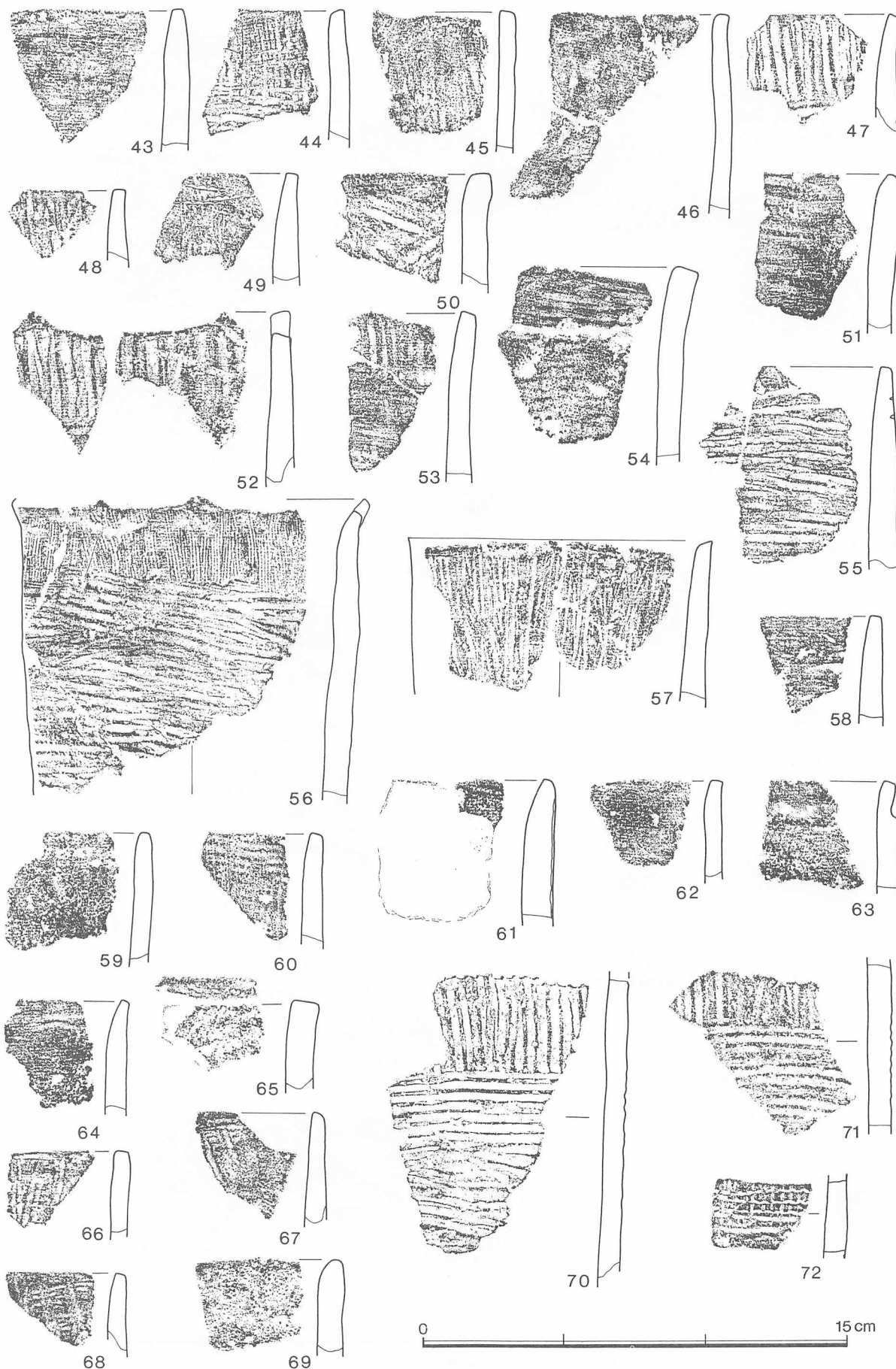


0 15cm 9

図V-1-2 条痕文土器 (その1)



図V-1-3 条痕文土器 (その2)



図V-1-4 条痕文土器 (その3)



図V-1-5 条痕文土器（その4）

## 2 縄文時代早期、縄文、撚糸文等の土器 (図V-2-1~10) [図版28~37]

縄文、撚糸文、組紐圧痕文、絡条体圧痕文などの土器は、器形・文様の特色から東釧路Ⅱ式、東釧路Ⅲ式、コッタロ式、中茶路式、東釧路Ⅳ式などに相当する5つに分ける。中茶路式が過半数を占める。表面摩耗、小破片のためにその型式的な特色をとらえがたいものも多い。縄文時代早期の遺構が検出された調査区域の南半により多く出土しているが、分布の濃淡は包含層の残存状況に影響を受けているものと考えられる。縄文等の施文原体が微細なために、その実際を拓影図でも充分に表現できないものがあることをはじめにお断りしておく。

1は口径20.0cmの水平口縁、底径8.5cm、高さは20.0cmである。断面を見ると、口縁から底部には緩やかなふくらみを保ってすぼまっている。口縁部は幾分外に開き気味で、口唇部断面は鋭く尖るように表現されているが、口唇は丸みをおびたところが多い。底部は外側に張り出すことのない平底である。

器面全体は横にめぐる13本の微隆起線で区画されている。この微隆起線で区画された上半部8段の内側は、縦にはしる長さ1cmほどの短縄文で埋められている。微隆起線で区画された下半部5段のなかには撚糸文の施されたものが部分的に認められる。短縄文と撚糸文とは同一の施文原体とみなされる。

短縄文で埋め尽くされた上半部には、横にめぐる微隆起線をつなぐ形の縦方向の短い微隆起線が、傾斜をもって施されている。この傾斜のある微隆起は、全体としてVの字様な配列の繰り返しとなっている。さらにVの字様な配列とはべつの短い微隆起線が、最上段にだけ見られる。横にめぐる微隆起線は断面図に表現できないほどの隆起であるが、縦方向の微隆起は貼付したものであり明瞭な高まりとして観察できる。中茶路式土器である。

1個体の縦に半割りした片方ほどで接合・復元したものである。これらの破片は、M-69-c区の2m弱の範囲から数片に分かれて検出された。層位は「V層上」となっているが、この土器が出土した周辺は「幌別火山灰」の降下堆積後に、土器を含む土層の人為的な再堆積がなされたところである。したがってこの土器と「幌別火山灰」の時間的な先後関係は確定的ではない。

2は口径25.0cmの水平口縁である。断面を見ると口縁部は幾分外に開き気味である。全体が、横にめぐる微隆起線で区画されている。上から2番目と3番目との微隆起線の間はさらに縦方向の微隆起線で長方形に区画されている。この長方形の中は、角棒状の原体による絡条体圧痕文で埋められている。斜め方向に施された絡条体圧痕文で埋められた区画もある。3番目と4番目との微隆起線の間にも、斜め方向に施された絡条体圧痕文がある。

絡条体圧痕文が施された以外のところには、短縄文がある。上から5番目の微隆起線は波形であり、短縄文が乗り越える形で施されている。中茶路式土器である。

N-71-a区の杭近くの径3mほどの窪地から多数の小破片となって検出された。1mほどの範囲に散っていた。層位は「V層上」となっているが、この土器が出土した窪地は「幌別火山灰」の降下堆積後に、土器を含む土層の人為的な再堆積がなされたと考えられる。したがってこの土器と「幌別火山灰」の時間的な先後関係は確定的ではない。

3は口唇部近くを欠くが、口径26.0cm、底径9.0cm、高さは35cm強である。断面を見ると、口縁から胴部なかほどまではほぼ同じ大きさであり、胴部下半は底部まで直線的にすぼま



っている。底部は幾分上げ底風であるが、外側に張り出すことのない平底である。

全体は横にめぐる微隆起線で区画されている。微隆起線に接する上下には微隆起線形成時のヘラ押し痕が残っているところもある。この微隆起線で区画された空間と微隆起線上には、斜行縄文がみられる。縄文は微隆起線をのり越えて施されていることになる。中茶路式土器である。

1 個体の4分の3ほどで接合・復元したものである。これらの破片は、M-69-b 区の1 m 弱の範囲から多数の破片となって検出された。層位は「Ⅲ層、Ⅴ層」となっているが、この土器が出土した周辺は「幌別火山灰」の降下堆積後に、土器を含む土層の人為的な再堆積がなされたところである。したがってこの土器と「幌別火山灰」の時間的な先後関係は確定的ではない。

4 は口径23.0cmの略水平口縁である。かすかに波状をなし、口唇部の高低差が認められる。断面を見ると口唇部は幾分外に開き気味で尖っている。全体が横にめぐる微隆起線で区画されている。この横方向に区画されたなかには、それぞれの段毎に右撚り、左撚りの縄文が施されている。この2種の斜行縄文は、ともに微隆起線を乗り越える部分が認められる。中茶路式土器である。

J-72-b 区の径0.5mほどから多数の小破片となって検出された。層位は「Ⅴ層」となっているが、この土器と「幌別火山灰」の時間的な先後関係を確定的にする観察記録は得られなかった。

5 は口径27.0cmの波状口縁である。全体的には水平口縁に近いが、2か所のかすかな波頂部があり、口唇部の高低差が認められる。断面を見ると口唇部は幾分外に開き気味で尖っている。口縁部には縄端圧痕文がめぐり、その下は羽状の撚糸文である。撚糸文の施文原体は、右撚りと左撚りとが交互に用いられている。東釧路Ⅳ式土器である。

N-71-a 区の杭近くの窪地のなか1 mほどの範囲から、多数の小破片となって検出された。層位は「Ⅴ層上」となっているが、この土器が出土した窪地は「幌別火山灰」の降下堆積後に、土器を含む土層の人為的な再堆積がなされたと考えられる。したがってこの土器と「幌別火山灰」の時間的な先後関係は確定的ではない。

6 は斜行縄文のうえに縄線が3本施されている。縄線は口唇部と内側にも見られる。施文原体は、縄文、縄線ともにL Rの同一物とみなされる。表館Ⅵ群に相当するものである。

7～43は東釧路Ⅱ式に相当するものである。

7・8は同一個体である。外面にはL Rの斜行縄文がはしる。縄目の列の間隔が開いていることから判断すると、原体は自縄自巻と考えられる。口唇部には、ヘラで切り裂いたような鋭く深い刻みがある。

9は斜行縄文がある。10は撚りの異なる原体による縄文がある。11・18は同一個体で、重複する斜行縄文のなかに縄線文が見られる。12～16は同一個体で、撚りの異なる原体による縄文がある。口唇部には、ヘラで切り裂いたような鋭く深い刻みがある。

17・19～22は斜行縄文の重複が見られる。23は縄文と縄線文の重複がある。24・26は斜行縄文がある。25は撚りの異なる原体による縄文がある。27は縄文と縄線文の重複がある。28は縄文がある。29は斜行縄文の重複と縄文とがある。30・31は縄文と縄線文の重複がある。32は縄文の重複がある。33は縄文がある。34は重複する縄文と絡条体圧痕文がある。

35～37は組紐圧痕文がある。38は撚糸圧痕文の重複と細い棒に細い糸を巻いた原体による絡条体圧痕文がある。39は組紐圧痕文の重複がある。40は縄文と組紐圧痕文との重複がある。

41は、底部まで斜行縄文が見られる、張り出しの少ない平底である。42は張り出しの顕著な平底である。43は底部まで撚糸文が見られる、幾分張り出しのある平底である。

44～59は東釧路Ⅲ式土器に相当するもの。

44は横方向の縄線と縦方向の短縄線とが見られる。横方向の縄線よりも下方には斜行縄文がある。45は表面が風化摩耗しているために鮮明ではないが、横にめぐる短縄文列がある。口唇部にも撚糸の圧痕がある。46は表面が摩耗しているために鮮明ではないが、組紐圧痕文と刺突文がある。口唇部には撚糸の圧痕がある。47は横にめぐる短縄文列と組紐圧痕文がある。口唇部には撚糸の圧痕がある。

48は47と同一個体の可能性がある。類似の横にめぐる短縄文列と組紐圧痕文があるが、口唇部の撚糸圧痕が少し異なる。49は組紐圧痕文と縄線文がある。口唇部には撚糸の圧痕がある。50は口縁部に横にはしる隆起線文があり、これの上下には短縄文列がある。その下方には組紐圧痕文がある。口唇部には撚糸の圧痕がある。

51は組紐圧痕文が間隔をおいて施されている。52は口縁部に縦方向にはしる縄線文が横に列をなしている。その下方には角棒状のものに巻いた絡条体圧痕文が横にはしっている。口唇部にはほぼ同じ原体による絡条体圧痕文がある。53は縦方向と横方向の縄線文がある。口唇部には撚糸の圧痕がある。54は縦方向の縄線文と斜めの組紐圧痕文がある。口唇部には撚糸の圧痕がある。55は縦方向の縄線文がある。口唇部には撚糸の圧痕がある。

56は横や斜めにはしる組紐圧痕文と刺突列とがある。この刺突は撚糸の一部を細い棒状のもので押し込んだ様にも見えるが判然としない。口唇部には撚糸の圧痕がある。57は56と類似の施文であり、同一個体の可能性がある。横や斜めにはしる組紐圧痕文と刺突列とがある。この刺突は撚糸の一部を細い棒状のもので押し込んだものである。口唇部には撚糸の圧痕がある。

58・59は同一個体である。口縁部に縄端圧痕文が横に列をなし、その下には2本の縄線文が横にはしる。縄線文の下にも縄端圧痕文が横に列をなしている。口唇部には縄端の圧痕がある。

60は表面が粘土付着のために判然としないが、組紐圧痕文様のものが重複して見られる。61は短縄文がある。口唇部には、ヘラで切り裂いたような鋭い刻みがある。60と61は東釧路Ⅱ式に含まれるのかもしれない。

62は縄線文がある。肥厚した口唇部には縄端圧痕文がある。63は口縁部に横にめぐる隆起線がある。隆起線には撚糸を押しつけた刻みがあり、これよりも下方には縄線文がある。62と63はコッタロ式に含まれるものであろう。

64は斜行縄文の重複がある。図の右上には横にはしる組紐圧痕様の細い施文があるが判然としない。東釧路Ⅱ式に含まれるのかもしれない。

65は横にはしる隆起線が口唇部を含めて4本あり、その隆起線を乗り越えるかたちで縄文がある。縄文は自縄自巻の原体を推定させるものであるが判然としない。66は口縁部に横にはしる隆起線があり、この隆起線には撚糸による刻みがある。破片のために図では途

切れているが、縄文は結束のある羽状縄文である。口唇部には撚糸の一部を細棒で押し込んだ様な刺突がある。67は口縁部に縦方向の細い縄線文の列が横にめぐり、その下方には縄線文と同一原体によるとみなされる斜行縄文がある。65～67はコッタロ式に含まれるものである。

68は組紐圧痕文のみで縦横の文様構成がなされている。東釧路Ⅲ式に含まれるものであろうか。69は結束のある羽状縄文がある。70は細目の斜行縄文である。縄文は結束のある羽状縄文である。図の上端には縦方向の縄線文がある。69と70はコッタロ式に含まれるものであろう。71は組紐圧痕文のみで縦横の文様構成がなされている。東釧路Ⅲ式に含まれるものであろうか。72は細目の斜行縄文がある。コッタロ式に含まれるものであろう。

73～120は絡条体圧痕文を特徴とするもの。

73は幅広い角棒状の原体による絡条体圧痕文が、波状曲線的に施されている。いくぶん肥厚している口唇部には撚糸の圧痕がある。74は口縁部に短縄文列が横にめぐり、その下には角棒状の原体による絡条体圧痕文がある。口唇部には撚糸の圧痕がある。75は縦にはしる縄線文と横方向の絡条体圧痕文がある。図には示していないが口唇部にも浅い絡条体圧痕文が認められる。絡条体圧痕文の原体はともに角棒状である。

76は角棒状の原体による絡条体圧痕文がある。口唇部にも絡条体圧痕文がある。77は斜めにはしる縄線文がある。口縁部に絡条体圧痕文様のものが横にめぐっているが、明瞭でない。口唇部には細い撚糸の圧痕がある。78は口縁部に縄端圧痕文がめぐり、その下に絡条体圧痕文がある。口唇部には撚糸圧痕がある。79と80は口縁部に縄端圧痕文がめぐり、その下方に絡条体圧痕文がある。

81は絡条体圧痕文の重複がある。82は縄線文と角棒状の原体による絡条体圧痕文がある。83は表面摩耗のために判然としないが、絡条体圧痕文が認められる。

73～83はコッタロ式に含まれるものであろう。

84は口縁部の微隆起線のあいだを短縄文で埋めてある。その下には幅広い角棒状のものに、細い糸を巻いた原体による絡条体圧痕文がある。図では判然としないが、右下半には細い2本の絡条体圧痕がある。この2本は細い丸棒状のもの（撚糸）に糸を巻き、折り曲げたものの圧痕である。85は丸棒状の細い原体による絡条体圧痕文がある。この深く押された絡条体圧痕文は、口縁部では2列が並行に、その下は鋸歯文風に施されている。86は微隆起線文のあいだに絡条体圧痕文がある。その原体は細い角棒状のものである。

87は微隆起線のあいだが、角棒状の原体による絡条体圧痕文で埋められている。88は角棒状の原体による絡条体圧痕文で埋められている。口唇部には撚糸の圧痕がある。89と92は同一個体である。縦横にはしる貼付隆起線で区画されたなかを、短縄文と角棒状の原体による絡条体圧痕文で埋めている。短縄文、絡条体圧痕文ともに隆起線の上にも見られる。90は口縁部の微隆起線のあいだを短縄文で埋めてある。短縄文は微隆起線をのり越えて施されている。その下には角棒状の原体による絡条体圧痕文がある。口唇部には撚糸の圧痕がある。84～90は中茶路式に含まれるものである。

91は角棒状の原体による絡条体圧痕文が縦横に施されている。口唇部にも絡条体圧痕文がある。93は口縁部の微隆起線のあいだを短縄文で埋めてある。その下には角棒状の原体による絡条体圧痕文がある。口唇部には縄文がある。94は波状口縁である。微隆起線のあ

いだに角棒状の細い原体による絡条体圧痕文がある。絡条体圧痕は上2段は横方向の波状、その下は縦方向の直線である。95は丸棒状の原体による絡条体圧痕文が縦横に施されている。

96は横にめぐる微隆起線のあいだに角棒状の細い原体による絡条体圧痕文がある。口唇部には撚糸文がある。97は口縁部の微隆起線のあいだを短縄文で埋めてある。その下方には角棒状の原体による絡条体圧痕文がある。98は横にめぐる微隆起線のあいだに角棒状の原体による絡条体圧痕文がある。口唇部には撚糸文がある。99は図では明瞭でないが、口縁部の微隆起線のあいだを短縄文で埋めてある。その下には角棒状の原体による絡条体圧痕文が縦横に施されている。100は波状口縁である。図では明瞭でないが、縦にはしる微隆起線のあいだに刺突と絡条体圧痕文がある。横に延びる微隆起線のあいだにも絡条体圧痕文がある。101は口縁部の微隆起線のあいだを短縄文で埋めてある。その下には角棒状の原体による絡条体圧痕文がある。91～101は中茶路式に含まれる。

102・103・104は微隆起線のあいだを、角棒状の原体による絡条体圧痕文で埋めてある。105は縦にはしる微隆起線のあいだに刺突と絡条体圧痕文がある。100と同一個体の可能性がある。106は微隆起線のあいだを絡条体圧痕文で埋めてある。絡条体圧痕文の原体は、角棒状のものと同棒状の細いものとの2種がある。101と同一個体の可能性がある。102～106は中茶路式に含まれるものである。

107は横にめぐる微隆起線の上方は短縄文で埋められている。微隆起線の下方は、縦にはしる微隆起線のあいだに角棒状の原体による絡条体圧痕文がある。108と109は微隆起線のあいだに角棒状の細い原体による絡条体圧痕文がある。110は角棒状の原体による絡条体圧痕文がある。107～110は中茶路式に含まれるものである。

111と112は微隆起線のあいだに、それぞれ2種の角棒状原体による絡条体圧痕文がある。113と114は微隆起線のあいだに角棒状の細い原体による絡条体圧痕文がある。115と116は微隆起線のあいだに、短縄文と角棒状原体による絡条体圧痕文がある。111～116は中茶路式に含まれるものである。

117は角棒状のものに糸を交差させた原体による絡条体圧痕文が、縦横に重複している。施文の重複という特色から、東釧路Ⅱ式に含めておく。

118は角棒状のものに糸を交差させた原体による絡条体圧痕文がある。119と120は角棒状原体による絡条体圧痕文がある。119～120は中茶路式に含まれるものであろう。

121～187は横にめぐる微隆起線の特色をもって中茶路式に含められるもの。

121は口縁部に2列の短縄文がある。短縄文は微隆起線を乗り越えている。その下は縄文である。122は微隆起線のあいだを短縄文で埋めてある。口唇部には撚糸の圧痕がある。123は貼付の隆起線である。隆起線を乗り越える短縄文がある。口唇部にも撚糸の圧痕がある。124と125は微隆起線を乗り越えるかたちの短縄文がある。124の下半には縄文がある。

126は口縁部に微隆起線を乗り越える短縄文がある。口唇部には縄文がある。下半には角棒状の原体による絡条体圧痕文がある。127は微隆起線を乗り越える短縄文がある。下半には縄文がある。127は124と同一個体の可能性がある。128は微隆起線を乗り越える短縄文がある。下半には縄文がある。129は微隆起線を乗り越える短縄文がある。口唇部には撚糸の圧痕がある。130は口縁部に微隆起線を乗り越える短縄文がある。口唇部には縄文がある。

下半には角棒状の原体による絡条体圧痕文がある。さらにその下方には短縄文がある。130は126と同一個体の可能性がある。

131と133は微隆起線を乗り越えるかたちの短縄文がある。132は微隆起線のあいだを埋める短縄文がある。134は口縁部に斜行縄文があり、微隆起線を乗り越える短縄文がある。135は微隆起線形成時のヘラ圧痕・指頭圧痕がある。微隆起線を乗り越える斜行縄文がある。縄文は微隆起線のあいだ毎に回転方向を交互に変えることによって、羽状縄文風の効果を表している。

136は微隆起線のあいだに斜行縄文がある。137は微隆起線を乗り越える短縄文がある。138は口縁部に短縄文、その下方には斜行縄文がある。短縄文、斜行縄文ともに微隆起線を乗り越えている。139は口唇部にも斜行縄文がある。140は口縁部に短縄文、その下方には斜行縄文がある。

141は微隆起線形成時のヘラ調整痕がある。口唇部にも斜行縄文がある。142と143は同一個体であろう。微隆起線のあいだに短縄文がある。144は波状口縁である。微隆起線は貼付のところもある。表面摩耗のために明瞭ではないが、微隆起線のあいだに短縄文と絡条体圧痕文がある。145と146は同一個体で、波状口縁である。微隆起線のあいだは短縄文と角棒状の原体による絡条体圧痕文とが交互に施されている。

147は波状口縁である。口縁部には縄文が、その下方には短縄文がある。縄文、短縄文ともに微隆起線を乗り越えている。148は短縄文がある。149は斜行縄文がある。150は図では明瞭でないが、短縄文がある。

151は縦横にはしる微隆起線のあいだに、短縄文がある。152と153は同一個体であろう。横にめぐる微隆起線のせまいあいだに短縄文がある。154は微隆起線のあいだを右撚りと左撚りの原体をそれぞれに使った斜行縄文である。縄文は微隆起線を乗り越えて施されている。155は微隆起線を乗り越えて無節の斜行縄文が施されている。口唇部には撚糸の圧痕がある。

156は微隆起線を乗り越えて短縄文がある。その上方、下方には斜行縄文がある。157は微隆起線を乗り越えて無節の斜行縄文が施されている。158・159・160は微隆起線を乗り越えて短縄文がある。

161は微隆起線で縦横に区画されたなかに、角棒状の幅広い原体による絡条体圧痕文がある。162は波状口縁である。微隆起線のあいだに短縄文がある。163は微隆起線を乗り越えて斜行縄文がある。164は微隆起線のあいだに短縄文がある。165は微隆起線のあいだに縄線文と縄文がある。

166は口縁部に撚糸の一部を細い棒で押したような刺突列がある。その下方には丸棒状の原体による絡条体圧痕文がある。167は微隆起線のあいだを短縄文と絡条体圧痕文とが交互に埋めている。168は微隆起線で縦横に区切られたなかに短縄文がある。169は微隆起線を乗り越える短縄文がある。170は無節の斜行縄文がある。

171は貼付の微隆起線のあいだに斜行縄文がある。172は微隆起線のあいだに短縄文がある。173は微隆起線を乗り越えて短縄文がある。174は微隆起線のあいだに無節の縄文がある。175は152・153と同一個体であろう。微隆起線のせまいあいだに短縄文がある。

176は口唇部に縄文がある。177は微隆起線を乗り越える無節の斜行縄文がある。178は貼付の微隆起線にヘラで押したような刻みがある。179は右撚りと左撚りの原体をそれぞれに

使った斜行縄文がある。縄文は微隆起線を乗り越えている。180は短縄文がある。

181は微隆起線を乗り越えて短縄文がある。182は微隆起線で縦横に区切られたなかに短縄文、角棒状の原体による絡条体圧痕文がある。短縄文、絡条体圧痕文ともに微隆起線を乗り越えている。183は微隆起線を乗り越える短縄文がある。184は短縄文と斜行縄文がある。短縄文は微隆起線を乗り越えている。185は無節の縄文と単節の縄文とがある。

186は微隆起線で区切られたなかに、絡条体圧痕文が縦横にはしっている。微隆起線には縄文と絡条体圧痕文がある。187は微隆起線を乗り越える斜行縄文がある。

188～190は同一個体である。口縁部近くには縄線文がめぐり、胴部には縄文もある。縄線文と縄文の施文の様子から判断すると、東釧路Ⅲ式に含まれるものであろう。

191～202は底部である。

191は縄文と短縄文がある。192は微隆起線を乗り越える斜行縄文がある。中茶路式である。193は外側に張り出している。縄文と縄端圧痕文がある。191と193は東釧路Ⅲ式に相当する。

194と195は短縄文がある。195には斜行縄文もある。196は図では明瞭でないが、縄文がある。197は短縄文がある。198は微隆起線を乗り越える斜行縄文がある。199は微隆起線のあいだに短縄文がある。200は微隆起線のあいだに斜行縄文がある。201は図では明瞭でないが、微隆起線のあいだに縦方向の絡条体圧痕文が認められる。202は丸底で、微隆起線のあいだに斜行縄文がある。194～202は中茶路式である。

203～216は東釧路Ⅳ式に相当するものである。

203・204・205・206は結束の羽状縄文がある。204・205・206には短縄文もある。207・208・210・211・212・215は羽状の撚糸文がある。209は縄文と短縄文がある。213と214は綾絡文と短縄文がある。216は微隆起線と撚糸文がある。

217は口径16.5cmの水平口縁である。結束の羽状縄文がある。東釧路Ⅳ式に相当するものであろうか。N-69-d 区の1 mほどの範囲から検出された。「V層上」から出土したが「幌別火山灰」との時間的な先後関係を明らかにする観察記録はえられなかった。

224は胎土のなかにササの実かと推定される種子圧痕がある。圧痕の長さ6.2mm。表面が剥落しているために文様の特色はとらえられない。この土器の周辺から検出された胎土と厚さ、破損・剥落の状態などが類似のものは218～226である。いずれも微隆起線と短縄文、縄文があり、中茶路式とみなされるものである。226は底部の内側にも短縄文が施されている。

(西田 茂)

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
V-2-1	1	M-69-c	367, 228	V上	I b-4	461, 227, 363, 283ほか
"	2	N-71-a	301, 354	V上	I b-4	347, 395, 346ほか
"	3	M-69-b	200, 201	V	I b-4	197, 204, 125, 213ほか
"	4	J-72-b	60	V	I b-4	58, 59
V-2-2	5	N-71-a	197	V上	I b-5	375, 338, 195, 369ほか
"	6	M-69-d	465	V上	I b-1	
"	7	M-71-d	92	V	I b-1	8と同一個体
"	8	J-73-b	3	I	I b-1	7と同一個体
"	9	J-73-a	646	V上	I b-1	
"	10	M-70-b	6	I	I b-1	
"	11	L-69-c	70	V	I b-1	18と同一個体
"	12	N-69-a	186	V	I b-1	12, 13, 14, 15, 16は同一個体
"	13	N-69-a	186	V	I b-1	
V-2-2	14	L-71-c	1	I	I b-1	M-69-d-424
"	15	N-69-a	186	V	I b-1	
"	16	N-69-a	9	I	I b-1	
"	17	L-70-b	64	V	I b-1	L-69-d-136・135, L-70-c-23, M-70-b-55
"	18	K-70-b	96	V	I b-1	11と同一個体
"	19	L-72-d	6	I	I b-1	
"	20	I-73-a	590	V上	I b-1	
"	21	L-69-c	217	V上	I b-1	
"	22	I-73-a	602	V上	I b-1	
"	23	J-70-c	15	V	I b-1	
"	24	K-70-c	78	V	I b-1	
"	25	M-71-c	76	V	I b-1	
"	26	K-70-c	68	V上	I b-1	

表 V-2-1 縄文、撚糸文等の土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
V-2-2	27	I-73-a	558	V上	I b-1	
"	28	K-70-c	56	V	I b-1	
V-2-3	29	K-70-b	18	I	I b-1	
"	30	K-70-b	48	V	I b-1	
"	31	K-70-d	16	I	I b-1	
"	32	I-73-b	302	V	I b-1	
"	33	M-69-b	72	III	I b-1	
"	34	K-71-b	107	V上	I b-1	
"	35	M-69-c	5	I	I b-1	
"	36	M-69-b	20	I	I b-1	
"	37	N-69-b	20	I	I b-1	
"	38	N-70-a	40	IV	I b-1	
"	39	M-69-	143	III	I b-1	
"	40	M-71-c	78	V	I b-1	
"	41	K-69-c	6	I	I b-1	
"	42	M-71-c	158	V	I b-1	
"	43	K-71-b	5	I	I b-1	
"	44	M-70-b	311	V上 (風雨木)	I b-2	
"	45	L-69-c	4	I	I b-2	
"	46	L-72-a	29	V	I b-2	
"	47	L-70-c	1	I	I b-2	
"	48	L-70-c	36	V	I b-2	L-70-c-10
"	49	M-69-a	1	I	I b-2	
"	50	L-72-a	151	V	I b-2	
"	51	M-70-c	52	V上	I b-2	

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
V-2-3	52	M-69-a	38	III	I b-2	
"	53	M-71-c	219	V	I b-2	
"	54	M-69-d	105	V	I b-2	
"	55	K-72-b	493	V上	I b-2	
"	56	L-72-d	66	V	I b-2	
"	57	L-72-c	199	IV	I b-2	
"	58	M-69-c	148	V	I b-2	
"	59	L-71-b	148	V上	I b-2	
V-2-4	60	M-69-b	329	V上	I b-1	
"	61	K-72-b	298	V上	I b-1	
"	62	K-70-b	75	V	I b-3	
"	63	K-71-b	42	I	I b-3	
"	64	L-70-b	56	V	I b-1	
"	65	K-71-a	22	I	I b-3	
"	66	L-69-d	117	V	I b-3	
"	67	M-71-c	267	V	I b-3	
"	68	M-71-c	429	V	I b-2	M-71-c433・218、N-71-a86
"	69	M-69-b	106	III	I b-3	
"	70	L-71-d	126	V	I b-3	L-71-d122・255
"	71	M-69-b	20	I	I b-2	
"	72	K-71-c	105	V上	I b-3	K-71-c104
"	73	L-71-d	8	I	I b-3	
"	74	M-71-b	14	I	I b-3	
"	75	M-70-b	50	III	I b-3	
"	76	M-69-a	26	I	I b-3	

V-2-4	77	M-69-a	1	I	I b-3	
"	78	L-72-a	112	I	I b-3	
"	79	L-71-c	15	I	I b-3	
"	80	K-72-b	298	V上	I b-3	
"	81	L-72-a	10	I	I b-3	
"	82	M-69-a	1	I	I b-3	
"	83	L-69-d	17	I	I b-3	
"	84	M-69-c	368	I	I b-4	
"	85	M-69-c	177	V上	I b-4	
"	86	L-72-b	98	V	I b-4	
"	87	M-70-b	239	V上	I b-4	
"	88	K-72-b	275	V上	I b-4	
V-2-5	89	N-70-d	153	V上	I b-4	
"	90	L-71-b	138	V上	I b-4	
"	91	P-3	245	覆土	I b-4	K-71-a22
"	92	M-70-c	77	V上	I b-4	
"	93	H-4	271	覆土	I b-4	
"	94	L-72-b	112	IV	I b-4	
"	95	M-70-b	126	V	I b-4	M-70-b280・275
"	96	M-71-c	251	V	I b-4	
"	97	M-69-b	163	III	I b-4	
"	98	H-4	113	覆土 (火)	I b-4	
"	99	M-71-b	236	V上	I b-4	
"	100	N-71-a	388	V上	I b-4	
"	101	L-69-c	166	V上	I b-4	

V-2-5	102	M-69-d	467	V上	I b-4	
"	103	K-71-b	25	I	I b-4	
"	104	L-71-d	74	V	I b-4	
"	105	N-71-a	14	I	I b-4	
"	106	L-69-c	165	V上	I b-4	
"	107	H-4	369	覆土	I b-4	
"	108	K-71-b	155	V上	I b-4	K-71-b123
"	109	H-4	356	覆土	I b-4	
"	110	L-71-a	16	I	I b-4	K-71-b25
"	111	L-71-b	119	V上	I b-4	L-71-b73
"	112	H-4	61	覆土 (火)	I b-4	
"	113	K-71-a	22	I	I b-4	
"	114	H-4	370	覆土	I b-4	
"	115	H-4	464	覆土	I b-4	
"	116	M-71-a	100	V	I b-4	
"	117	M-70-c	122	V上	I b-1	
"	118	K-70-d	16	I	I b-4	
"	119	K-71-c	4	I	I b-4	
"	120	L-69-c	142	V上	I b-4	
V-2-6	121	L-71-d	253	V	I b-4	L-71-d133
"	122	M-69-d	38	V上	I b-4	不明7
"	123	K-70-a	130	V上	I b-4	不明3
"	124	K-72-a	146	V上	I b-4	K-72-a96
"	125	K-72-a	186	I	I b-4	K-72-a70・184、K-71-d79
"	126	H-4	465	覆土	I b-4	

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
V-2-6	127	J-72-b	43	V	I b-4	
"	128	L-72-c	345	I	I b-4	
"	129	L-69-d	175	V	I b-4	
"	130	H-4	423	床	I b-4	
"	131	K-71-b	5	I	I b-4	K-71-b25
"	132	K-71-d	不明	I	I b-4	
"	133	K-71-d	21	I	I b-4	
"	134	M-70-d	58	V	I b-4	
"	135	K-71-a	119	V	I b-4	K-71-a77
"	136	M-69-b	20	I	I b-4	M-69-b50、M-69-c3、M-68-c
"	137	K-71-d	21	I	I b-4	
V-2-7	138	K-72-a	156	V上	I b-4	K-71-d5
"	139	K-72-a	150	V上	I b-4	K-72-a152
"	140	M-72-a	229	IV	I b-4	
"	141	M-69-d	435	V	I b-4	
"	142	J-71-c	31	V	I b-4	J-71-c66
"	143	K-69-c	39	V	I b-4	K-69-c38
"	144	N-71-a	335	V上	I b-4	不明1
"	145	K-71-c	117	V上	I b-4	不明5
"	146	L-71-a	1	I	I b-4	不明1
"	147	K-72-a	14	I	I b-4	
"	148	M-67-d	218	V上	I b-4	
"	149	M-70-b	305	V上	I b-4	
"	150	M-69-c	177	V上	I b-4	
"	151	N-69-d	56	V	I b-4	

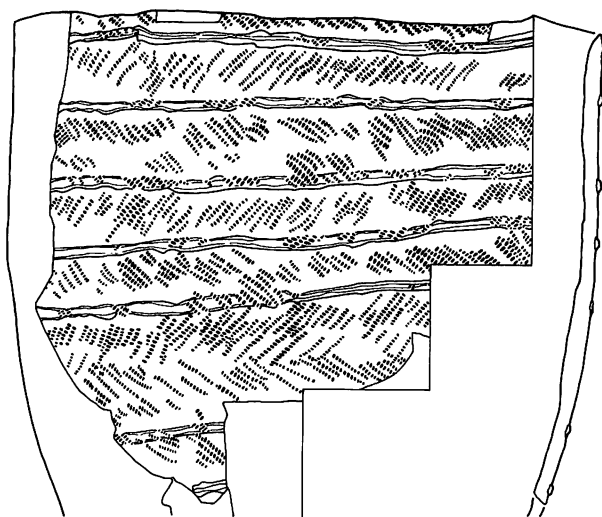
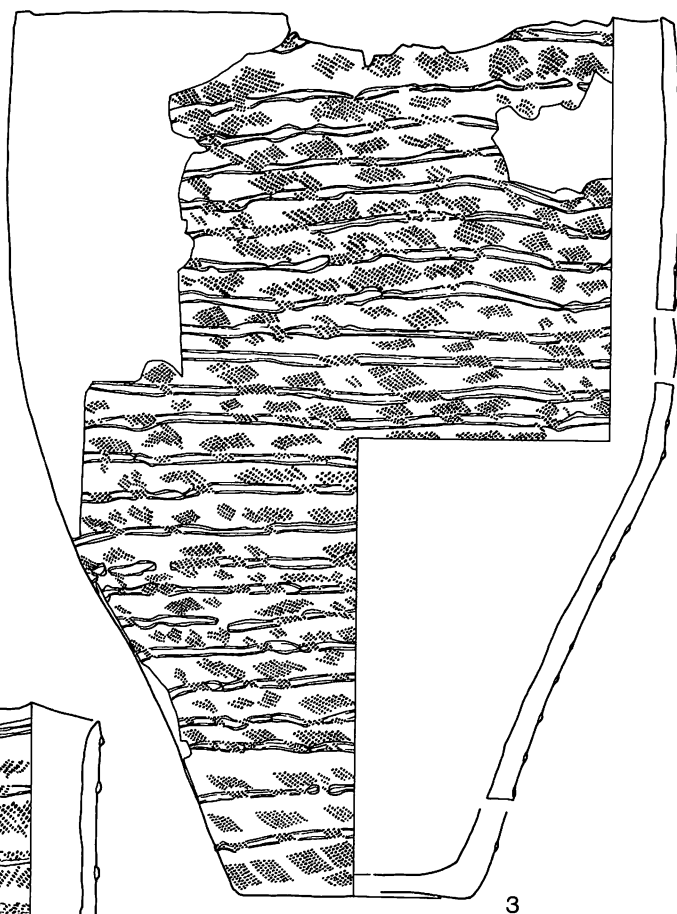
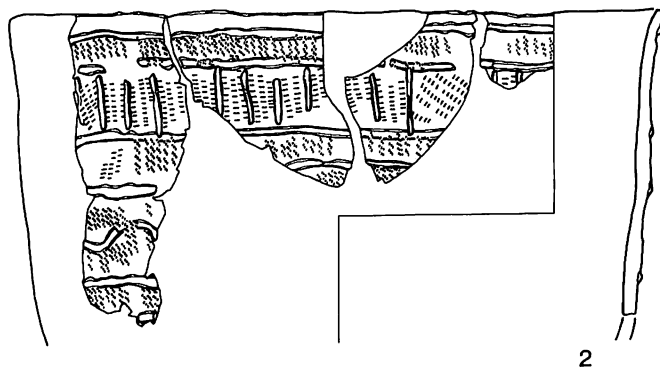
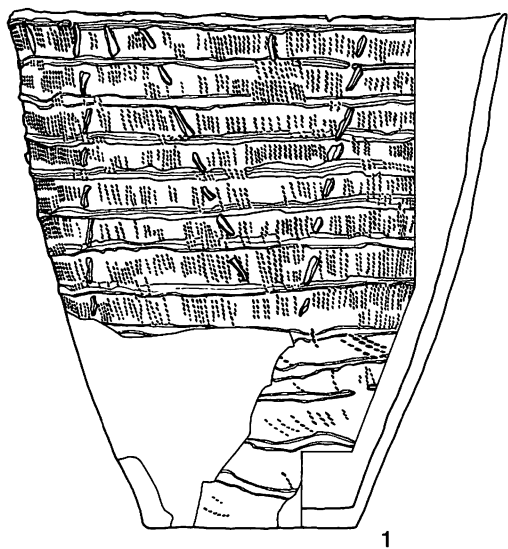
図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
V-2-7	152	M-69-d	342	V上	I b-4	
"	153	M-69-d	209	V上	I b-4	
"	154	M-70-b	318	V上	I b-4	M-70-b380
"	155	K-71-d	21	I	I b-4	
"	156	N-69-a	81	V	I b-4	
"	157	M-71-a	7	I	I b-4	
"	158	K-72-c	7	I	I b-4	
"	159	K-71-d	67	III	I b-4	
"	160	J-72-b	121	V上	I b-4	
"	161	M-71-b	236	V上	I b-4	M-71-b162 不明1
V-2-8	162	K-71-b	25	I	I b-4	
"	163	K-72-a	14	I	I b-4	
"	164	L-69-d	50	V	I b-4	
"	165	M-72-a	10	V上	I b-4	
"	166	J-72-b	128	V上	I b-4	
"	167	K-71-c	118	I	I b-4	不明2
"	168	K-71-c	65	V	I b-4	
"	169	J-72-b	124	V上	I b-4	
"	170	K-71-a	10	I	I b-4	
"	171	J-72-b	142	V上	I b-4	
"	172	K-71-d	278	V上	I b-4	
"	173	L-72-c	92	IV	I b-4	
"	174	M-69-d	349	V上	I b-4	
"	175	M-69-d	102	V	I b-4	
"	176	M-71-b	14	I	I b-4	

V-2-8	177	K-71-d	218	V上	I b-4	K-71-d-219
"	178	K-71-a	94	V	I b-4	
"	179	K-71-d	21	I	I b-4	
"	180	K-71-c	47	V	I b-4	K-71-c-100
"	181	J-72-b	132	V上	I b-4	J-72-b-141
"	182	H-4	271	覆土	I b-4	
"	183	H-4	152	覆土 (大)	I b-4	
"	184	K-71-d	80	III	I b-4	
"	185	H-4	187	覆土	I b-4	
"	186	J-72-b	58	V	I b-4	
"	187	K-71-d	50	III	I b-4	
"	188	K-70-a	96	III (本根)	I b-2	J-70-c-8 同一個体
"	189	K-70-a	9	V	I b-2	
"	190	J-70-c	18	V	I b-2	
"	191	L-71-d	131	V	I b-2	
"	192	J-72-b	121	V上	I b-4	
"	193	M-69-c	364	V上	I b-2	
"	194	L-71-a	8	I	I b-4	
"	195	K-71-d	21	I	I b-4	
V-2-9	196	M-71-b	24	V	I b-4	
"	197	L-71-c	63	V	I b-4	L-71-c-62・43
"	198	L-71-d	70	V	I b-4	
"	199	H-2	7	覆土	I b-4	L-71-b-86・67・118、 M-72-a-199・213 不明1
"	200	M-71-c	251	V	I b-4	
"	201	M-69-c	403	V上	I b-4	

V-2-9	202	M-69-d	165	V	I b-4	
"	203	N-71-a	378	V上	I b-5	
"	204	L-70-a	21	I	I b-5	
"	205	L-70-d	51	V上	I b-5	
"	206	K-70-b	1	I	I b-5	
"	207	N-71-a	189	V上	I b-5	
"	208	K-71-d	75	III	I b-5	
"	209	K-71-d	21	I	I b-5	
"	210	K-71-b	5	I	I b-5	
"	211	L-72-c	302	IV	I b-5	
"	212	L-72-c	17	I	I b-5	
"	213	L-72-d	1	I	I b-5	
"	214	L-72-c	7	I	I b-5	
"	215	M-72-a	140	V	I b-5	
"	216	K-71-a	10	I	I b-5	
V-2-10	217	N-69-d	69	V上	I b-5	66、70、71、72、73、76、116
"	218	M-69-b	50	I	I b-4	
"	219	M-69-b	20	I	I b-4	
"	220	M-67-b	1	I	I b-4	
"	221	M-69-b	41	I	I b-4	
"	222	M-69-b	50	I	I b-4	
"	223	M-69-b	20	I	I b-4	
"	224	M-69-b	20	I	I b-4	
"	225	M-69-b	20	I	I b-4	
"	226	M-68-c	10	I	I b-4	

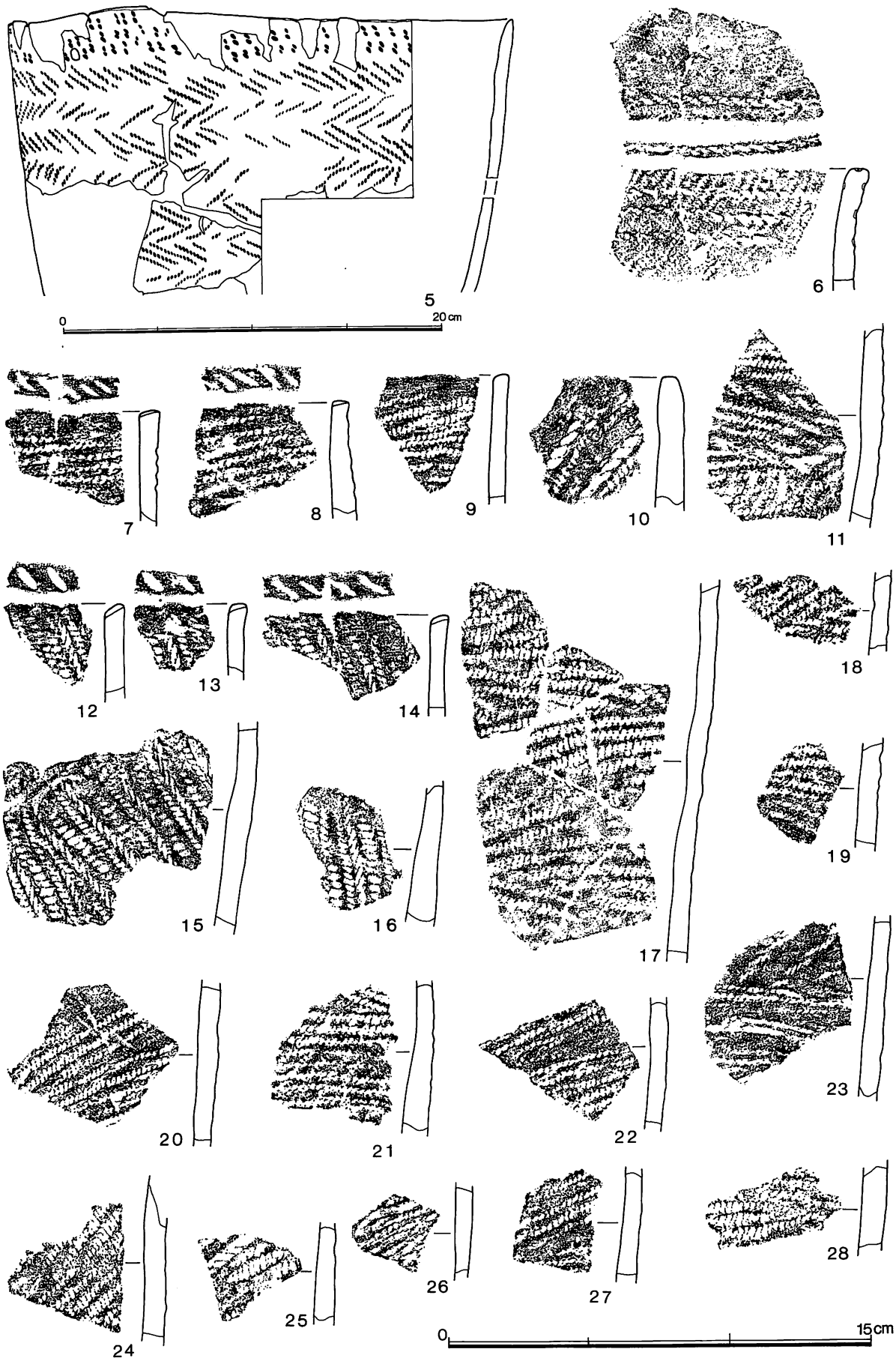
表V-2-1 縄文、燃糸文等の土器



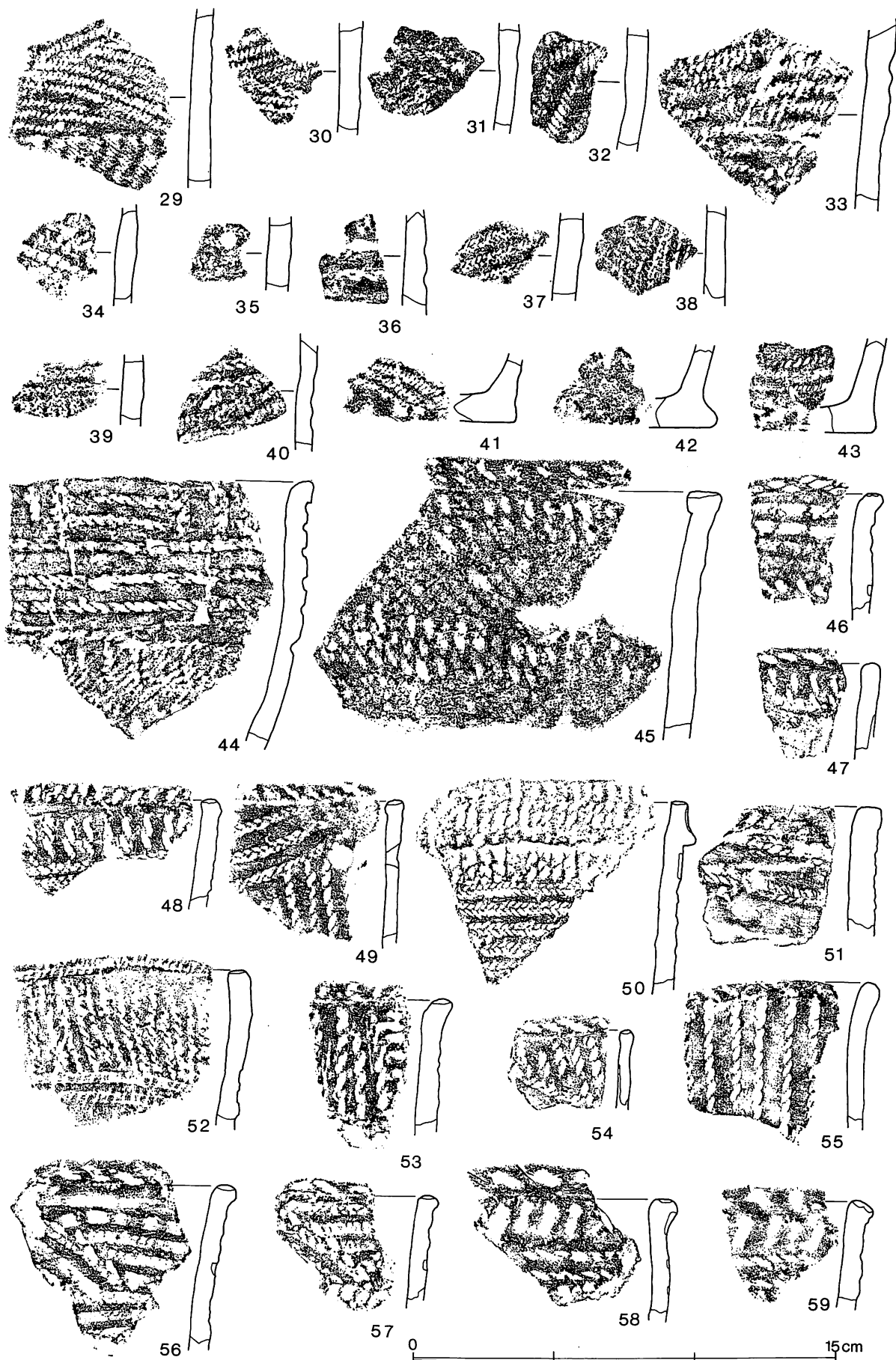


0 20 cm

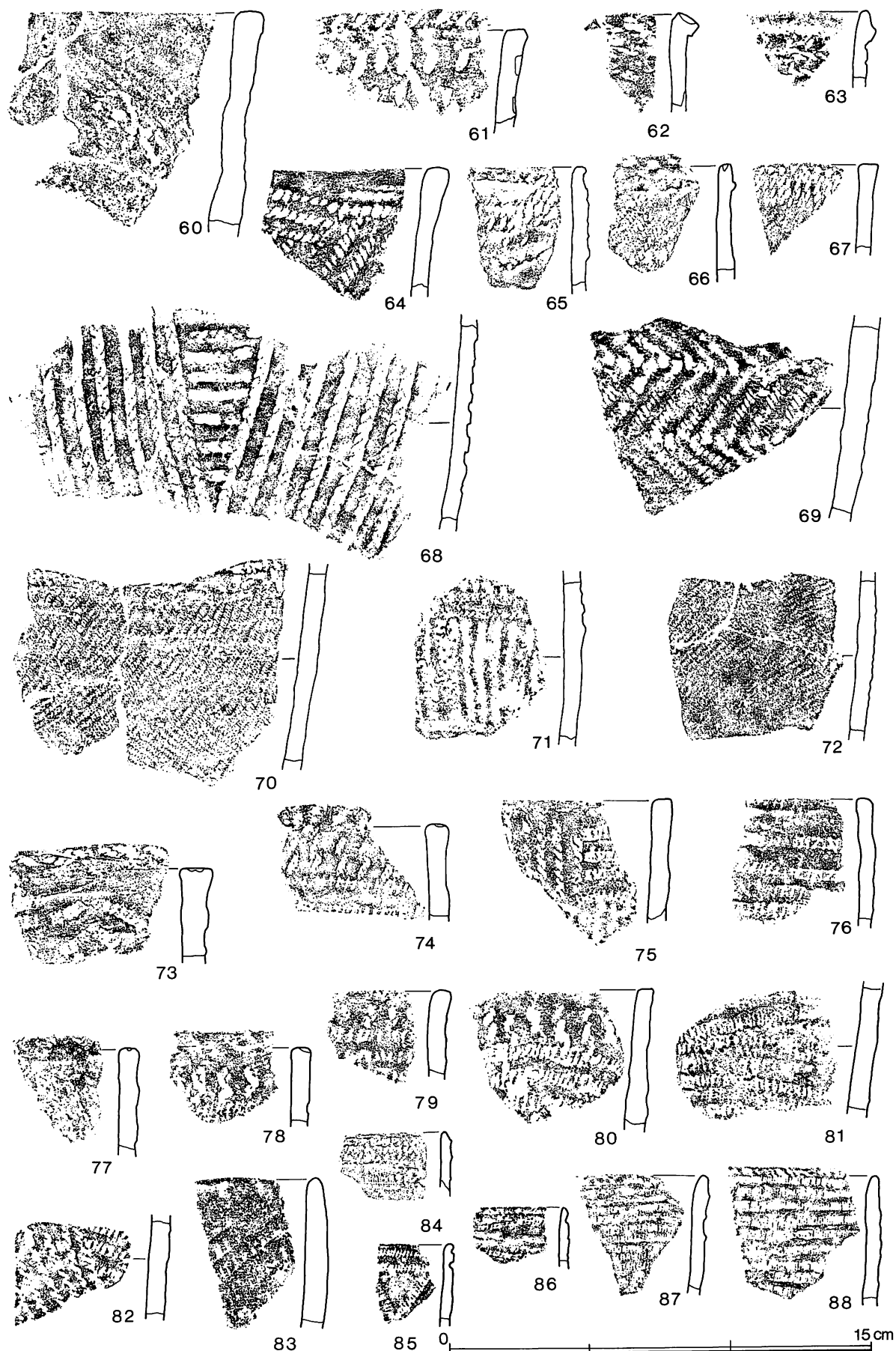
図V-2-1 縄文、撚糸文等の土器 (その1)



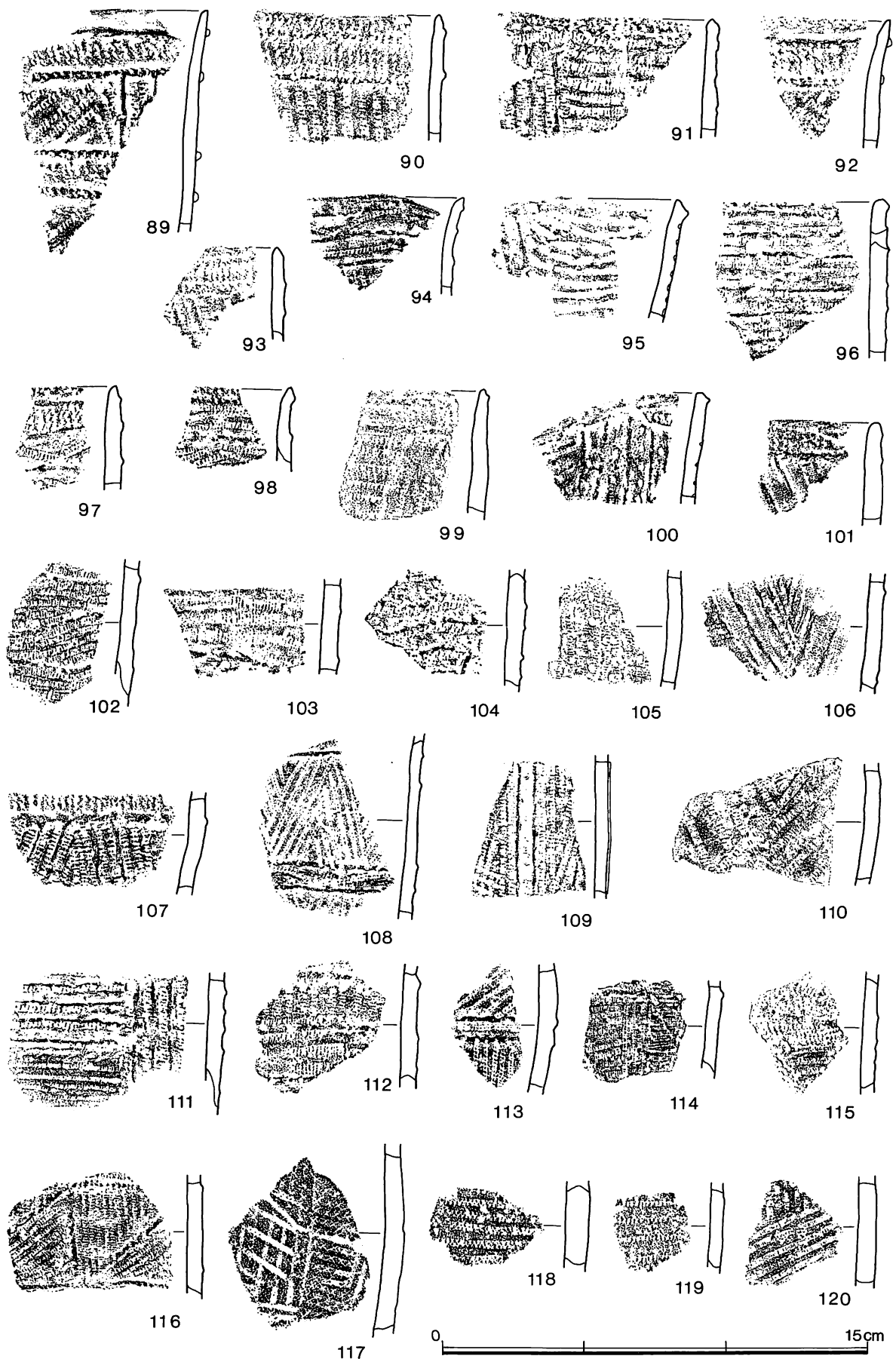
図V-2-2 縄文、燃米文等の土器（その2）



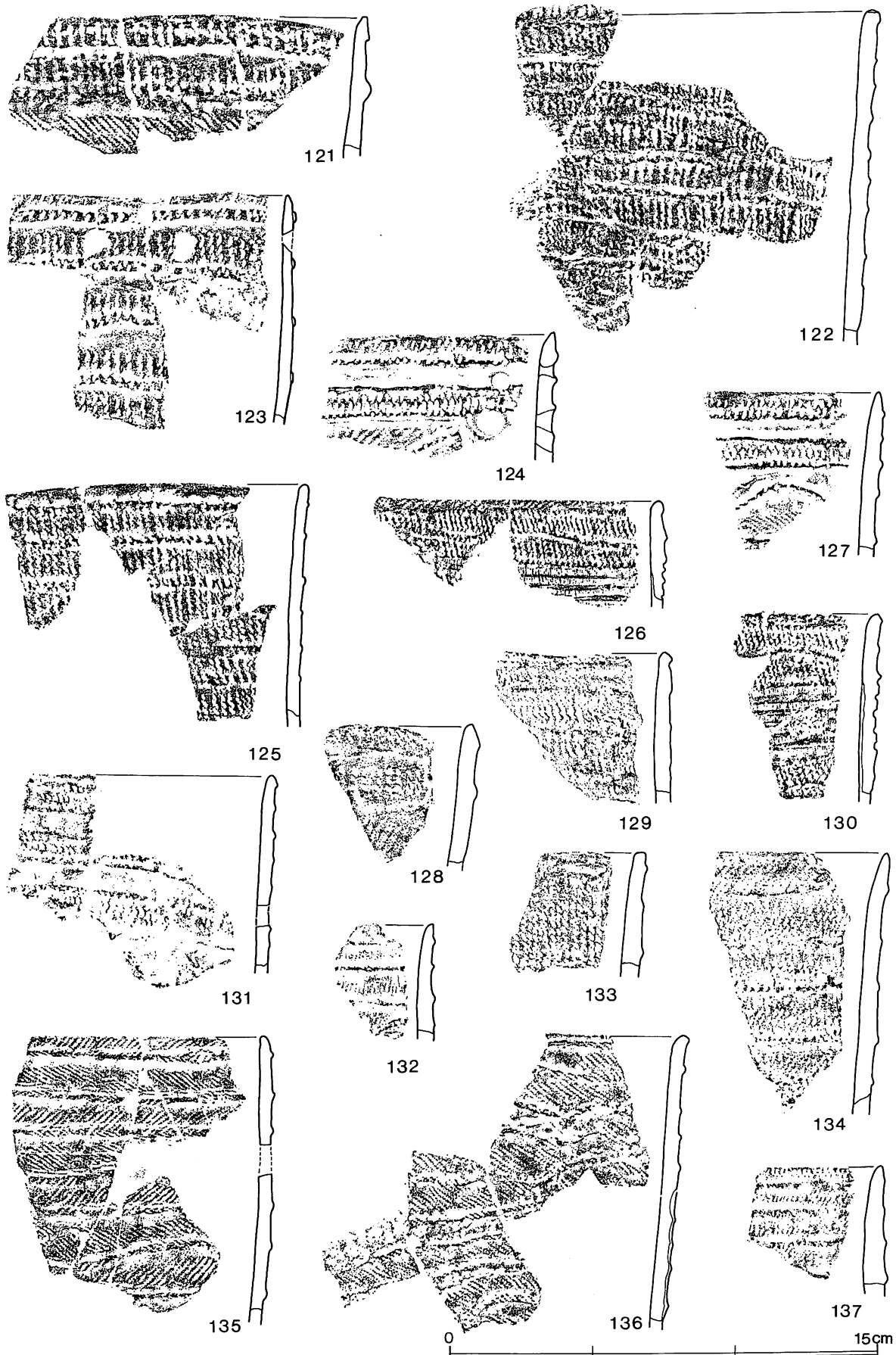
図V-2-3 縄文、燃糸文等の土器（その3）



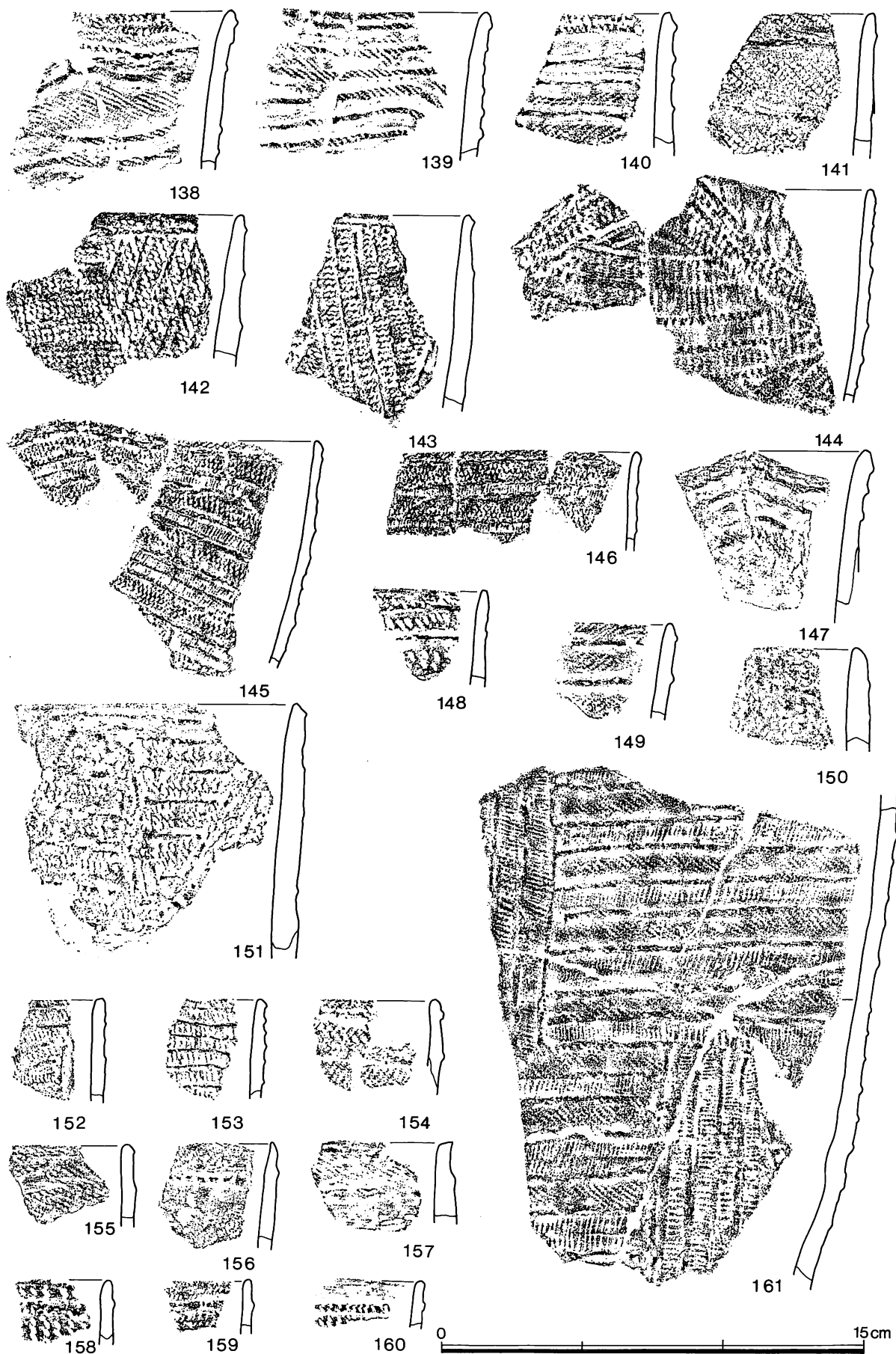
図V-2-4 縄文、撚糸文等の土器（その4）



図V-2-5 縄文、燃糸文等の土器（その5）

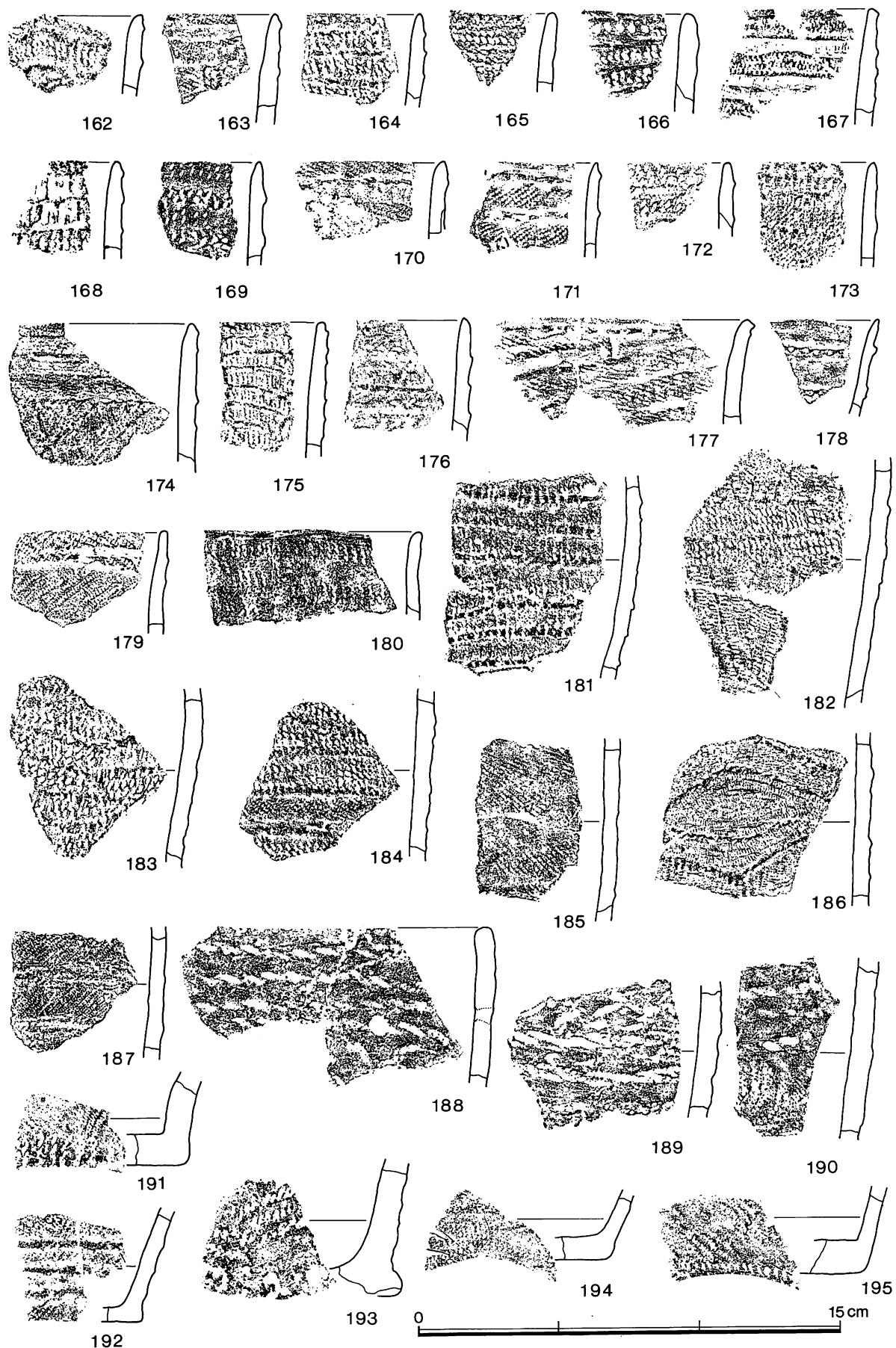


図V—2—6 縄文、燃米文等の土器（その6）



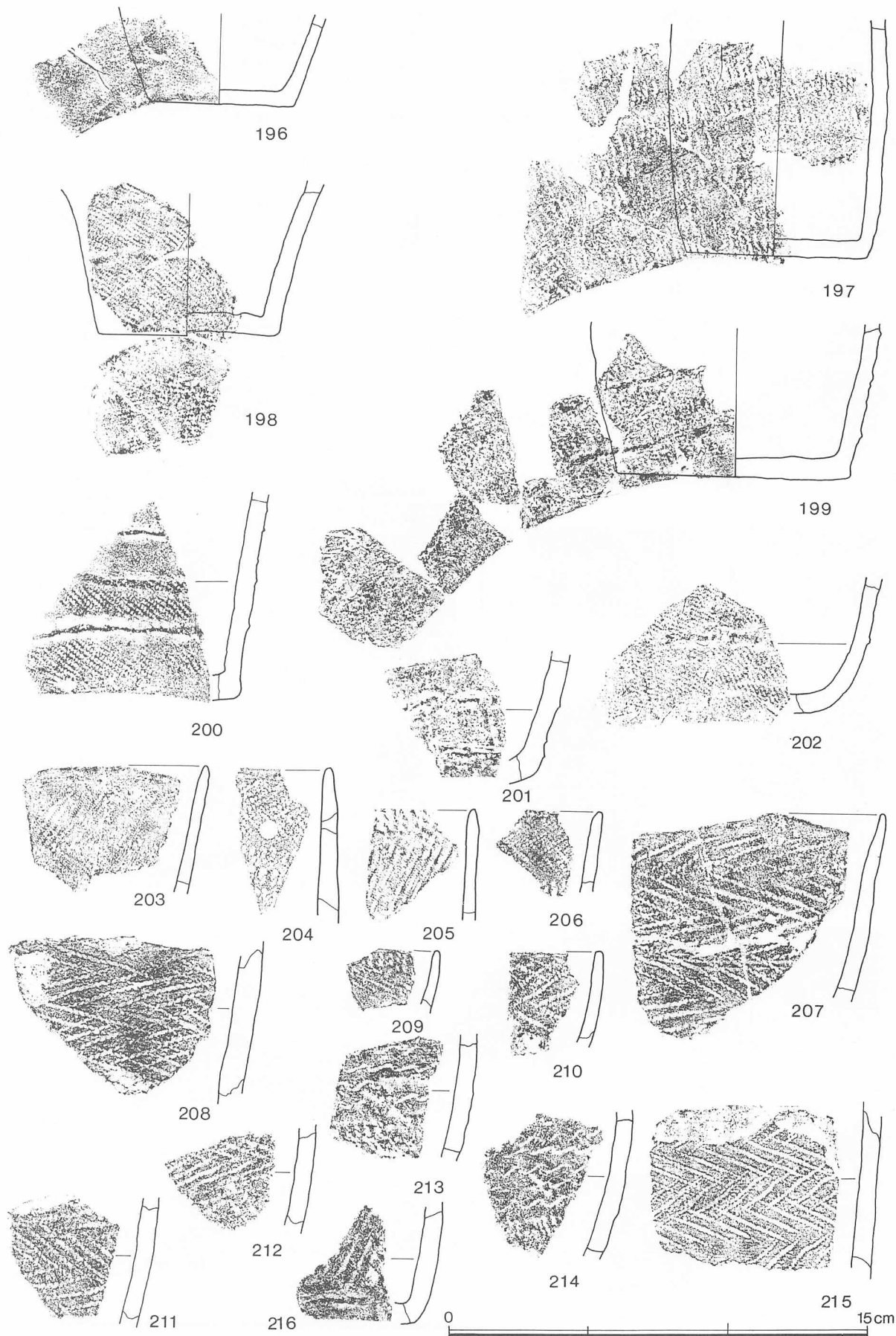
図V-2-7 縄文、撚糸文等の土器（その1）



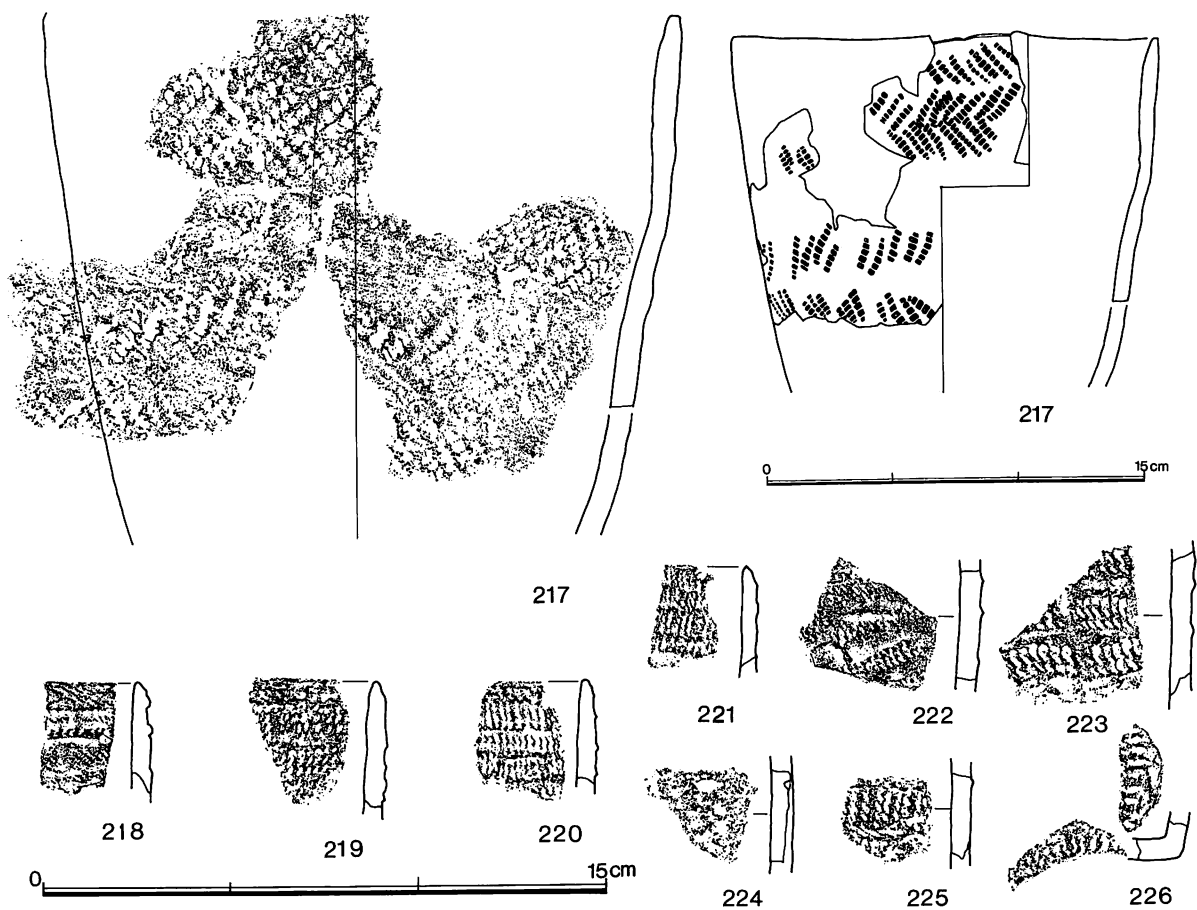


図V-2-8 縄文、燃米文等の土器（その8）





図V-2-9 縄文、撚糸文等の土器（その9）



図V-2-10 縄文、撚糸文等の土器（その10）

### 3 縄文時代前期・中期・後期の土器

#### Ⅱ群 b 類土器 (図 V-3-3-8~10 表 V-3-1 図版40)

8~10は円筒土器下層式 d 式に相当する。8は、口縁がやや外反し、口唇は尖り気味である。残っている口縁部分から判断すると波状口縁であろう。胴部には縦方向の、口縁部にはやや傾いた横方向の撚糸文が施されている。口縁部文様帯は1.5cm程と狭い。9・10は同一個体の胴部と考えられる。これらの土器の胎土にはいずれも少量の繊維を含んでいる。円筒土器下層式 d 式に相当する破片は全部で6点で、いずれも I-72-c 区から出土した。

Ⅲ群 a-2 類土器・Ⅲ群 b-1 類土器 (図 V-3-1・3~2-4・6、V-3-3-11~7-109 表 V-3-1 図版38~39、40~44)

サイベ沢Ⅶ式あるいは見晴町式に相当するもの。突起部とその欠けた直下の胴部とわかるもの、それ以外の口縁、とがある。尚、天神山式と考えられるものもここに含めた。

#### [1] 突起部 (図 V-3-3-11~6-53 図版40~42)

突起部分は、a 類：貼付で文様が構成されるもの、b 類：沈線で文様が構成されるもの、c 類：粘土塊の貼付で文様が構成されるもの、d 類：縄文で文様が構成されるもの、e 類：無文部分があるもの、f 類：山形突起、に分けた。

a 類 貼付で文様が構成されるもの。貼付と他の文様との組合せから以下の4つに分けた。

##### a 類-1 (11~16) 貼付で文様が構成されるもの。

11は縄文施文後に粘土紐を器面に2条、上端部に1条、貼付ている。器面側の粘土紐の上側は先が尖り気味の篋状工具で左から右方向へなでつけられている。上端部の粘土紐は、内面側の端が丸棒状工具でなでつけられている。粘土紐上には地文と同じLRの原体による縄文が施されている(原体は、節の観察が困難であったので、最終段の撚りの区別に留まり、LR・RLと表記した)。12は縄文施文後に3条の粘土紐が貼付られている。貼付後のなでつけは見られない。粘土紐上には地文と同じLRの原体の縄が押捺されている。13は貼付後のなで付けがしっかりされているために突起部では地文の有無も判然とはしないが、一番下の口縁部では貼付をなで付けた後に施文していることがわかる。また、横方向の貼付に加えそこから垂下する貼付もあり、両者には地文のLRとは異なるRLの縄の押捺ある。14にも縦横の貼付が見られるが、縦の貼付は磨滅が激しい。貼付の両端は篋で深く刻まれている。15は「X」字状の貼付があり、地は無文である。貼付上にはLRの縄の押捺がある。16は縦方向に3本の貼付が見られる。断面は半円形で貼付上には、それと直行する横方向にLRの縄が押されている。右側面にも同じ原体を用いた押捺が見られる。

##### a 類-2 (17~20) 貼付と沈線で文様が構成されるもの。

17は篋状工具による器面調整後に粘土紐を横に4段貼付ている。その下には、沈線が弧状に引かれている。18は弧状に5段の貼付があり、縦の貼付が、突起部には1条、その下には2条見える。貼付は突起部、胴部とも地文の施文後になされている。弧状の貼付上には細い2本の紐を並べた押捺が見られ、胴部の縦方向の貼付には篋状工具による押引きがある。19・20は三角形の突起である。19は縦長の長円に巡る貼付がある。さらにその長円の中に刻むような沈線が走っている。また、貼付から三角形の二端の角に向かって沈線が引かれ、突起下にも垂下する沈線が見える。20は三角の突起部の底辺にまず粘土紐が貼付られ、続いてそれと直角に交わる粘土紐が、それから突起の両端に沿って2本の粘土紐が貼付られている。沈線は垂下するもの3本、横走するもの2本が施されている。また口唇

にはRLの縄の押捺が見られる。

**a類—3 (21~22) 貼付と刺突文で文様が構成されるもの。**

21はやや反った突起をつなぐ貼付が見られる。粘土紐上には刻みがある。そして貼付の間に半截竹管による刺突が施されている。22は突起部よりも一回り小さい貼付が取れた跡がある。その貼付を囲むような形で円形刺突文が巡っており、更に側面にも同じ円形刺突文が見える。胎土には少量の繊維が入っている。

**a類—4 (23~27) 貼付の見られる突起部の直下の破片、把手。**

23~26は貼付と沈線が見えるものである。23は孔がある部分かと思われ、同心円状に粘土紐が貼付られている。その下方には沈線が下向きの弧状に引かれている。24は口唇部直下にそれに沿って沈線様の深い刻みが見え、貼付がそれと対称的に左下へ向かって下りている。口唇部は尖り気味で、その上にはRLの縄の圧痕が見える。また内面には凹凸がある。25は突起下の貼付上に沈線が見える。さらに、垂下する貼付もその痕跡が認められる。地文は無節で、口唇部は一旦肥厚してから尖り気味となっており、篋状工具による刻みが見える。26も孔の部分かと思われる。沈線は粘土紐状の隆起帯を作り出すかのように引かれている。27は把手であろう。割れ口からは下方が2つに分かれた三叉状のものである。粘土紐は平行に貼付られているが、下方の二俣に分かれる部分では分かれる角度に応じて傾いた貼付も見える。

**b類 沈線で文様が構成されるもの。**

**b類—1 (28~38) 突起部分。**

28~30は横方向の沈線がある。28は幅広の浅い沈線である。29は丸棒状工具を用いて左から右方向に沈線が引かれている。30は先の尖った工具で深く刻むような沈線が引かれている。左側面には同じ工具と思われる先端が尖った棒状工具による刺突が見える。31~33は孔があるものである。31は段の付いている突起で孔の上は横方向の、孔の部分は斜め方向の沈線がある。32は逆「Z」字状の沈線が見え、側面にも同じ工具によると思われる刻みがある。また、突起の先端部には指頭様のへこみがある。33は突起の側縁に沿って、孔との間にやや傾いた沈線が見られる。また左側面及び右側面の先端部には縄の圧痕がある。34・35は凹みが見えるものである。34は横方向に3本の沈線が見え、その下に先端の尖った棒状工具で掻きだしたような凹みが見える。35は円形の凹みを中心として上部分が斜めの、下部分は2本1組となった縦横方向とその間の斜めの沈線が見える。上部分では左側の斜めの沈線が最初に引かれ、次にその上を横切って右側の斜めの沈線が引かれている。下部分では縦に垂下する沈線、横方向の沈線、斜めの沈線の順に施文されている。36・37は縦方向の沈線のみが見られる。36は浅い1本の、37は深く刻む様な沈線がある。38は中心部分をつまみ出し盛り上げるように左右3本ずつの沈線が見える。

**b類—2 (39~40) 突起部直下の破片。**

39は横方向の沈線が上端に見える。地文は無節で口唇上にも同じ原体を用いたと思われる縄の圧痕が見られる。40は口唇直下が肥厚し切り出しナイフに似た断面となっている。口唇には地文施文後に、同じRLの原体を用いた縄の圧痕が押されている。突起下と思われる部分に弧状と垂下する深い沈線が見られる。また、斜めに下りる口縁に沿ってと、下方の折れた部分に横走する、浅い沈線がある。

**c類 (41~42) 粘土塊の貼付で文様が構成されるもの。**

41は0段多条の地文施文後に、縦1.5cm横0.7cm程の楕円形で断面はつぶれて平らに近くなっている粘土塊の貼付が見られる。横の両端には、なで付けた跡が見られる。器面には凹凸が見られ、突起の先端部はやや肥厚している。42は縦2.1cm横1.1cm程の楕円形で、断面が山形の粘土塊の貼付が見られる。

**d類** 縄文で文様が構成されるもの。

**d類—1** (43~47) 突起部分。

43~45は斜行縄文が見られるもの、47は綾絡文が見られるものである。43は突起付近では縄文が横走気味となっている。口唇にはやや間隔を開けた刻みが見える。44は斜行縄文が見られる。45は結束第1種の羽状縄文が見える。44・45はいずれも口唇部に細かい刻みがある。46は突起が反っている。47は突起部分がふくらみながら円柱状になり、先端部には指頭様の凹みが見える。また、器面には炭化物が多く付着している。

**d類—2** (48) 突起部直下の破片。

48は突起部直下の部分で綾絡文が見える。また内面は横方向に磨かれている。胎土には小石を含み、焼成は良い。

**e類** (49) 無文のもの。

49は右側面が欠けているものの、わずかにそこに上端や左側面と同じ縄の圧痕が見られたので突起部分と判断した。突起部分は無文で左端の下部に縄文が見える。

**f類** 山形突起。

**f類—1** (50) 沈線で文様が構成されるもの。

50は口唇直下が肥厚し、肥厚させている部分には山形突起の頂点から短い沈線が引かれている。その下には2本の逆「ノ」字状の沈線が見える。

**f類—2** (51~52) 縄文で文様が構成されるもの。

51は地文施文後に口唇の肥厚部分の下端をなで付けている。52は外傾する突起の内側に内面から直立する突起様のものが見られる。51・52共にの口唇部には地文と同じLRの縄の圧痕が見られる。

**f類—3** (53) 無文のもの。

53は切り出しナイフ様に口唇部が肥厚し、その下部分が無文となっている。口唇部分にはRLの縄の圧痕が見える。

**[2] 口縁部・復元土器** (図V-1-1・3、V-2-4、V-3-5-54~7-109 図版38~39、42~44)

**a類**：沈線で文様が構成されるもの、**b類**：縄線文で文様が構成されるもの、**c類**：縄文で文様が構成されるもの、**d類**：刺突文で文様が構成されるもの、に分けた。

**a群** 沈線で文様が構成されるもの。いずれも地文施文後に沈線が引かれている。

**a類—1** (2・58~62) 口唇部の断面が切り出しナイフ形若しくはそれに近いもの。口唇の形状から3種類に分けた。

2はI-73-b・c区の境界部分で出土した。b区の端で土器が出土し、c区へも切れ目なく土器が続いていたので、d区に接する部分を1m程拡張して接合したものである。口縁部に3本1組の沈線が2条横環し、それから、突起部から2本または3本の沈線が垂下している。口唇部には縄の圧痕が見られる。胎土には小石を含み、磨滅が激しいが、焼成はよく堅い。

58は口唇部にRLの縄の圧痕が見られる。また、内面は磨かれている。59は口唇部に篋状工具による刻みが見られる。60・61は同一個体かと思われる。口唇には篋状工具により「V」字状に刻みが入れている。また、地文はLRの複節の斜行縄文である。62は口唇部分も縄文を施文している。また、沈線は浅く磨耗が激しい。

**a類—2** (1・3～4・54～57・63～65) 口唇部の断面が角形若しくはそれに近いものの。

1はⅢ層中から、つぶれた状態で出土した。半分程度の口唇部と突起部を除いて器形を復元することが出来た。口縁部はほとんど外反せず、直立気味である。胴部にはくびれがなく、2分の1程度からすばまり始めている。底部は張り出しており、揚げ底である。底部付近には親指程度の幅で調整が行われている。文様は2本1組の沈線が縦に、次に横に引かれている。また、口唇部近くでは鋸歯状になり、突起部直下では弧状を呈している。突起は口縁の上り具合からすると山形突起と推測される。口唇部には縄文が施文されているが、磨耗が激しいため原体の特定は出来ない。また、内面には凹凸が見られる。

3はⅢ層中に土器が立ったまま上半がずり落ちて、底部の外側に胴部があるという2重になった状態で出土した。ただし、人為的に埋められたものではなく、風倒木痕にちょうどまぐり込んだと思われる。突起部分以外のほとんどの破片があり、接合・復元することが出来た。口縁部がやや外反し、胴部から徐々にすばまっている。底部は張出し、地文施文後に底部から3cm付近までの部分が篋状工具ですり消されている。底部から口縁部まで無節の斜行縄文が施文されており、口唇部には同じ原体を用いたと思われる縄の圧痕が見られる。突起部には2本1組の沈線が上向きの弧状に引かれている。その上には突起により異なり、2本もしくは1本の横方向の沈線があり、その上には下向きの弧状の沈線があると推測出来る。内面は下方部分が磨かれている。

4はK-70-d区の南西隅1m×2mの範囲の風倒木痕と耕作土中から出土したものが接合した。胴部で一旦直立気味になるが、口縁部からほぼ直線的にすばまっている。底部は若干張出し、底部から2cm付近までは磨かれている。また、口縁部は波状を呈すると推測される。口縁部から胴部には無節の斜行縄文が施文されており、口唇部には同じ原体を用いたと思われる縄の圧痕が見られる。一部には綾絡文風の波打つ縄文が確認される。

54～57は同一個体と思われる。口縁部がやや外反し、胴が若干膨らむ器形をしている。口唇部には地文と同じ縄文が施文されている。沈線は3本1組で横環するものと、弧状のものとがある。底部は底面に垂直気味に下りており、調整は見られない。63・64は共に2本の横環する沈線の下に弧状の沈線が見える。口唇部には地文と同じLRの縄文が施文されている。65は地文施文後にその上をなでた形跡が見られる。口唇部は別に施文したのではなく、地文施文時に一緒に施文されたと思われる縄文がある。

**a類—3** (66～68) 口唇部の断面が丸形若しくはそれに近いものの。

66・67は口唇部にRLの縄の圧痕がある。68は口唇部分が若干肥厚している。また、右側が縦に鋸歯状の、左側は「8」字状かと思える曲線の沈線が見える。

**b類** (69～70) 縄線文で文様が構成されるものの。

69・70は同一個体である。推定口径は19.5cmである。突起は同じ形状のもの2個が1組となっている。突起部も含めた口唇上には縄の圧痕が見られる。地文と同じRLの縄線は突起下にあり、69では1条、70では2条となっている。胴部には綾絡文が見られる。

c類 縄文で文様が構成されるもの。口唇部の形状から4種類に分けた。

c類-1 (71~81) 口唇の断面が切り出しナイフ形若しくはそれに近いもの。

71~74は口唇部近くに無文部分が存在する。71・72は口唇部にそれぞれLR、RLの地文と同じ原体の縄の圧痕がある。73は縄を丸めたものを口唇部に刺突している。内面は磨かれ、調整による条痕が横走している。74は表面が磨耗していて判然としないが綾絡文が見える。その他は無文のようである。また、口唇上に縄の圧痕がある。75~81は縄文のみのものである。75~77は口唇部に縄の圧痕が見えるもの、78~81は口唇上に縄文が施文されているものである。75が地文とは異なるLRの縄の圧痕が口唇部にある他は、地文と同じ原体を用いている。77は口唇部が平らに調整され、口縁部の縄文施文部と綺麗に区別されている。口唇上の縄の圧痕は深く整然と押されている。78は器面、内面とも凹凸が見られる。80は内面が磨かれている。81は78と同一個体かとも思われる。いずれも無節の縄文が施文されている。

c類-2 (82~93) 口唇部の断面が丸形若しくはそれに近いもの。

82・83は口唇上に地文と同じ縄文が施文されている。82は胎土に砂が含まれている。83はLRの複節の斜行縄文が見え、内面は口縁の傾きに沿って磨かれている。84は口唇部が無文で磨かれている。85は口唇部に篋状工具による刻みが見られる。胎土には砂が含まれている。86~89は口唇部に地文と同じ原体を用いた縄の圧痕が見られるものである。86・87はRL、88・89はLRである。86は胎土には砂が含まれており、堅い。87は無文部分が存在し、胎土には小石が含まれており脆い。88は口唇部に縄を押捺したために、口縁部の地文上に折り返しが見られる。90・91は綾絡文が見える。91は内面が磨かれており、口唇部には篋状工具による刻みが見える。91は口唇部にLRの縄の圧痕が見える。92・93は口唇部が無文である。92は縄文が横走気味である。焼成などが若干異なるため、或いはⅢ群b-2類に入るものかもしれない。

c類-3 (94~100) 口唇部の断面が角形若しくはそれに近いもの。

94は縄文が横走気味である。浅く明瞭ではないが無節の縄文と思われる。口唇部には縄の圧痕が見える。95は地文と同じLRの原体の縄文が口唇部に施文されている。96は口唇部が無文である。97~99は口唇部に地文と同じ原体を用いた縄の圧痕があり、97は浅く間隔をおいてRLが、98は細かくLRが、99は深くRLが押捺されている。98は綾絡文が2段見える。100は口唇部に刻みがある。斜めに刻まれており、途中から角度が変わっている。また、口縁部の一部は調整により磨り消されている。

c類-4 (101~107) 口唇部の断面が尖り気味のもの。

101は口唇部が磨かれ無文となっている。102は口縁部が反っている。縄文は粗く方向が一定していない。103~105は口唇部に地文と同じ原体を用いた縄の圧痕がある。103は胎土に海綿骨針が見える。104は内面に凹凸が見られる。105は器面に炭化物が付着している。106は篋状工具で口唇部を調整したために断面が尖っている。107は頸部がくびれ、胴部が張り出している。波状口縁を呈しており、口唇部は内面と同様、磨かれている。縄文は条の太い斜行縄文である。

d類 (108~109) 刺突文で文様が構成されるもの。

108・109とも半截竹管状工具による刺突文が見られる。胎土、焼成などが74に近いのでここに分類した。108は口唇部・内面に刺突文があり、器面は無文であるが一部、沈線様の

ものが見える。109は口唇部には指頭様の圧痕がある。半截された施文具は節の多いものである。

**〔3〕天神山式に相当するもの** (図V-3-2-6 図版38)。

6はI-73-a区のほぼ中央部、0.6m×0.3m程の範囲でまとまって検出された。但し接合・復元出来たのは縦に割った約2分の1である。口縁部は肥厚し、頸部はややくびれ胴部が膨らむ器形である。口唇部には半截竹管状工具による押引文が右方向からなされており、突起間の中央部では同じ半截竹管を用いた刺突文が見られる。口縁部にも同じ押引文が2段見られ、いずれも右方向からなされている。押引文は、上段は2条が、口縁部に沿って波状になっており、下段は3条が横環している。棒状突起の下には卵形の粘土塊が貼付られている。器面には斜行縄文が施文されている。内面には凹凸があり、横方向に調整による条痕が見られる。

**Ⅲ群b-2類土器** (図V-3-8-110~9-142 図版45~46)

大安在B式あるいは柏木川式に相当するもの。文様構成から、a類：貼付のあるもの、b類：沈線文のあるもの、c類：刺突文のあるもの、d類：隆起帯のあるもの、e類：縄線文のあるもの、f類：縄文のあるもの、g類：撚糸文のあるもの、h類：押引文のあるもの、i類：無文部分があるもの、に分けた。

**a類 (110~112) 貼付で文様が構成されるもの。**

110・111は同一個体である。110は綾絡文が見られ、右端には粘土紐が貼付られている。粘土紐上には地文と同じLRの縄の圧痕が粘土紐に平行して押捺されている。口唇部は折り返されておりその後に地文が施文されている。口唇部にはそこを跨っての貼付が2個所あり、口唇上には先端の尖った棒状工具による刺突が見られる。111は縦1.3cm横1.6cm程の粘土塊の貼付があり、110で見られたのと同じ粘土紐が弧状に貼付られている。112は波状口縁の頂点から垂下する粘土紐の貼付があり、その上には篋状工具による刻みが見える。

**b類 (113) 沈線で文様が構成されるもの。**

113は長さ1.5cm程の棒状工具による沈線が引かれている。なお、横方向の沈線が終わる所から縦に浅い沈線が見える。いずれも、地文施文後に引かれている。また、口唇部は無文で、調整された跡がある。

**c類 (114~118) 刺突文で文様が構成されるもの。**

114~116はいずれも半截竹管による刺突文が114は2段、115は1段見える。116は器面に2段の他、口唇部にも浅く見える。115は破片部分の下に綾絡文がある。116は波状口縁と思われ、内面に横方向の調整による条痕が見える。117~118は刺突文と沈線の見られるものである。117は口縁部が肥厚し、そこに2列に並んで円形で中空の棒状工具による刺突が見える。口縁部には2本の沈線が引かれている。118は口唇部と口縁部の角に刺突文があり、更に口縁部の2本1組の沈線の間にも刺突文が見られる。いずれも刺突は右方向から突かれている。刺突文・沈線とも地文施文後に施されている。また、口唇は磨かれており、器面には炭化物が付着している。

**d類 隆起帯の見られるもの。隆起帯上の文様から2つに分けた。**

**d類-1 (119~126) 隆起帯上に刺突があるもの。**

119~122は同一個体である。波状口縁で、器形は口縁部が外反し、胴部が張っている。



突起部分には折り返しが見られる。隆起帯は肩部に貼付られている。隆起帯上には半截竹管状工具による刺突があり、右方向から突かれている。地文は結束第1種の羽状縄文で、一部に篋状工具による調整が施文後に行われている。口唇部にはRLの縄文が施文されている。また、内面は磨かれている。123は2列の隆起帯が器面調整後に貼付られ、その両端がなでつけられている。隆起帯上には篋状工具による刺突があり、右方向から突かれ器面に垂直気味になるように若干起してから引き抜いている。口唇部は篋状工具で平らに調整されている。124は口唇部の断面が三角形になるように隆起帯が貼付られている。口唇部近くと隆起帯上に2段に半截竹管状工具で刺突されている。上部では右方向から、下部では器面に垂直気味でやや下方向から突かれている。125は口唇部が突き出すように断面が半円形となる隆起帯が貼付られている。そこに、半截竹管状工具による刺突がある。126は隆起帯上に刺突があり、さらに沈線の見られるものである。口縁部は外反している。隆起帯上および胴部の2本1組の沈線の間には棒状工具による刺突文がある。上部の2段は右方向から、下部の2段は左方向からの刺突である。刺突・沈線とも地文施文後に施されている。口唇部には地文と同じLRの縄文が施文されている。また、内面には凹凸があり、磨かれている。

**d 類一 2 (127) 隆起帯上に縄線の見られるもの。**

127は隆起帯が貼付られ、両端をなでつけた後に縄文を施文している。隆起帯上には地文と同じLRの縄線が見られる。口唇部および内面は磨かれている。

**e 類 (128~136) 縄線文で文様が構成されるもの。**

128は口縁がやや外反し頸部がくびれ、胴部が張り出している。口縁部には小突起がある。撚りの異なる原体を用いた縄線が2条押捺されている。縄線は6cm程の長さを一単位としている。口唇部には半截竹管状工具を用いた刺突があり、右から突かれている。胎土には砂が含まれている。129~131は同一個体である。なだらかな波状口縁を呈しており、口縁部は外反している。また、縄線が129は1条、130・131は2条巡っている。口唇部には半截竹管状工具による刺突が見られる。縄文は横走気味であり、胎土には小石が入っている。132は口唇部がなでであり無文である。133は口縁部が外反している。縄線は2段見られ、その他は磨耗が激しく判然とはしないが無文であると思われる。134は胎土に小石を含むなど129~131に近いが斜行縄文が見られる点で異なっている。縄線は1条であるが、地文の斜行縄文の端部分が強く押捺されており、それがつながっているように見え縄線のような効果をもたらしている。また、口唇部には、判然とはしないものの縄の圧痕様のものが見える。135は条の大きい縄線が1条見える。口唇部は無文で胎土には小石が入っている。136は縄線文と刺突文の見られるものである。口縁部は外反し、そこに2条の縄線が見える。口縁部は磨耗が激しく判然とはしないものの縄文が施文されているようである。その下は割れ口でやや膨らんでいるので、肩部に隆起帯があるようにも思われる。その上端には右方向からの半截竹管状工具による刺突文が見える。129~136の縄線はいずれも地文と同じLRである。

**f 類 (137~139) 縄文で文様が構成されるもの。**

137は口縁部の一部に無文部分が存在する。口唇部には丸棒状工具による右からの刺突が加えられ、そのため、口縁部がやや肥厚している。138・139は口唇部に半截竹管状工具による刺突がある。138は左から、139は右から突かれている。また、139は内面が磨かれてい

る。

g 類 (140) 撚糸文で文様が構成されるもの。

140は縦方向の撚糸文が見える。口唇部は内面と共に磨かれており、断面が丸くなっている。

h 類 (141) 押引文で文様が構成されるもの。

141は横及び縦方向に半截竹管状工具による押引文が見られる。さらに口唇部にも同じ押引文が見られる。口縁部ではまず、横方向の押引がなされ、次に縦方向の押引が下方から順に施されている。口唇部では右方向から押引がなされている。また、内面には調整による縦方向の条痕が見られる。

i 類 (142) 無文部分のあるもの。

142は口縁部が肥厚し、無文となっている。口唇部には節の多い半截竹管状工具を用いた刺突がある。胎土には少量の繊維を含んでいる。

### III群 b—3 類土器 (図 V—3—9—143~10—152 表 V—3—1 図版46~47)

煉瓦台式に相当するもの。隆起帯の有無、刺突の有無から4つに分けた。

a 類 (143) 縄文のみのもの。

143は口唇部が指頭様のもので調整され無文となっている。地文は0段多条である。また、内面には横方向の調整による条痕があり、凹凸が見られる。胎土には砂を含んでいる。

b 類 (144) 刺突文で文様が構成されるもの。

144は口縁部に搔きだしたような刺突がみられ、また口唇部は篋状工具で調整されている。胎土には小石、砂を含んでおり、脆い。

c 類 (145~149) 隆起帯があり、隆起帯上と器面とが一緒に施文されているもの。

145は隆起帯を貼付た後に、その下端をなでつけるように縄文が施文されている。口唇部は調整のため凹んでいる。146は隆起帯の断面が丸味を帯びている。焼成はよく堅い。147は口唇部分と、器面に向いて斜めに傾いた部分が縄文施文後に、篋状工具により調整されている。そのため、隆起帯の断面は丸みを帯びている。148・149は撚りの異なる原体を用いた羽状縄文が隆起帯上に施文されている。地文はLRで、隆起帯の上半はRLである。148は口唇部が器面を向いた側も少し含めて指頭様のもので調整されている。また、隆起帯の断面は丸くなっている。149は頸部がほんの少しではあるがくびれ気味である。隆起帯の羽状縄文は下端が施文後になでつけられている。その下にも折り返しが見え、そこは以下の胴部と一緒に縄文が施文されている。下方には2条の隆起帯の貼付があり、その上は調整され無文となっている。内面は凹凸があり、縦方向の調整による条痕が見える。

d 類 隆起帯があり、地文と隆起帯上とが別に施文されているもの。いずれも隆起帯とその下で羽状縄文を形成している。地文はLRで、隆起帯上はLRを縦方向に施文している。刺突文の有無により、2つに分けた。いずれもIV群a類の可能性もあるが、隆起帯の断面からとりあえずIII群とした。

d—1 類 (150) 刺突文のあるもの。

150は口唇部が篋状工具で調整され、内面には若干の折り返しが見られる。隆起帯上の刺突は棒状工具により、右方向から突かれている。

d—2 類 (151~152) 刺突文のないもの。

151・152は胎土、焼成が類似している。ただし、隆起帯の下端が151はまっすぐはっきりとしているのに対し、152は下端が波打っている。いずれも口唇部は篋状工具による調整が見られる。隆起帯の断面は角がとれ、やや丸みを帯びている。

### Ⅲ群 b 類土器 (図 V-3-10-153~165 表 V-3-1 図版47)

大木8b式あるいは大木9式に相当すると思われるもの。口縁部の形態から3つに分けた。

**a 類 (153~159)** 口縁部が肥厚し、そこに沈線があるもの。

153・154は同一個体である。胴部には3本1組の横走る沈線が引かれている。155・156も同一個体である。口唇部は磨かれており、下方の肥厚していない部分は無文となっている。157は縄文の一部が施文後に篋で調整され消えている。158は胎土、焼成などが157までとは異なる。159は胎土に砂を含んでいる。

**b 類 (160~163)** 口縁部が肥厚し、そこが無文であるか磨かれているもの。

160~162は肥厚した部分に沈線が見え、163には沈線が見えない。160は口縁が直立気味である。161は口縁が外反しており、破片の下方には沈線が見える。162は胎土に小石を含み、焼成などは158に近い。163は口唇部が篋状工具で調整されている。縄文は磨耗していて判然としないが、口唇近くまで縄文がある部分と、よく見えない部分とがある。

**c 類 (164~165)** 口縁部が肥厚しないもの。

164は縄文が施文されている。165は地文施文後に沈線が引かれている。

### Ⅳ群 a 類土器 (図 V-3-2-7 表 V-3-1 図版39)

余市式に類似するものである。7はI-73-a区の南東隅0.3m×0.3mの範囲から検出された。接合・復元出来たのは縦に割った約2分の1程度である。口縁部は幅5.5cm程の肥厚した部分がある。器形は口縁部から直線的にすぼまる筒型と考えられる。口唇部は指頭によるものと思われる調整がなされており、一部には小さい折り返しが認められる。肥厚した口縁部は磨かれており、その両端には篋状工具による押引文が見られる。下部の押引文は肥厚した口縁部にさらに隆起帯を設けて、その上になされている。その隆起帯は地文施文後に貼付られている。内面には凹凸があり、横方向の調整による条痕が見られる。胎土には小石を含んでおり、脆い。

### Ⅳ群 b 類土器 (図 V-3-10-166~167 V-3-1 図版47)

手稲式に相当するもの。166・167は同一個体である。波状口縁を呈しており、沈線によって区画された部分に縄文が見られる。

### 胴部 (図 V-3-11-168~12-204 図版48~49)

Ⅲ群に分類される装飾文様のある胴部を掲載した。Ⅲ群 a-2 類・Ⅲ群 b-1 類、Ⅲ群 b-2 類、Ⅲ群 b-3 類と思われるものに分けた。

[1] Ⅲ群 a-2 類・Ⅲ群 b-1 類と思われるもの (図 V-3-11-168~182)。a 類：貼付のあるもの、b 類：沈線の見られるもの、c 類：貼瘤部分、に分けた。

**a 類 (168~172)** 貼付で文様が構成されるもの。

168~170は粘土塊の貼付が見られるものである。168は粘土塊から縦横に2本1組の粘土

紐が貼付られている。その上にはLRの縄の圧痕が見える。169は縦横の他に斜め方向にも粘土紐が貼付られている。粘土塊の周縁部および粘土紐上には地文のRLと異なるLRの原体を用いた縄の圧痕が見える。171は粘土塊の縦横に沈線が見えるものである。171は結束第1種の結束部分の下に粘土紐が貼付られ、粘土紐上に別な原体を用いた縄の圧痕が見える。172は縦に粘土紐があり、その上にそれに直行して地文と同じRLの原体を用いた縄の圧痕が見える。

**b類 (173~181)** 沈線で文様が構成されるもの。

173・174は広く浅い沈線が、176~181は深い沈線が見える。177はLRLの複節の縄文が施文されている。180・181は曲線を主体とした文様である。あるいは大木式とも考えられる。

**c類 (182)** 貼瘤部分。

186は貼瘤部分が剥離したものである。胎土には砂を含んでいる。

[2] III群b-2類と思われるもの(図V-3-11-183~192)。a類：縄線文で文様が構成されるもの、b類：押引文で文様が構成されるもの、c類：刺突文で文様が構成されるもの、d類：隆起帯上に刺突文の見られるもの、に分けた。

**a類 (183)** 縄線文で文様が構成されるもの。

183は地文の縄文と同じRLの2条の縄線が横走している。内面は凹凸が激しい。

**b類 (184)** 押引文で文様が構成されるもの。

184は半截竹管状工具による押引が2段見られる。少なくともこの上下にも同じ押引文が存在する。

**c類 (185~186)** 刺突文で文様が構成されるもの。

185は円形刺突文が2段見える。胎土には砂と小石が入っている。186は沈線の間に棒状工具による刺突が左方向から施されている。

**d類 (187~192)** 隆起帯上に刺突文のあるもの。

187はやや膨らんでいる程度の隆起帯に2段の棒状工具による右方向からの刺突が見える。地文は無節の斜行縄文である。188は地文施文後に隆起帯の端を調整している。刺突は節の多い半截竹管状工具によりなされている。胎土には小石を含み、堅い。内面には横方向に調整による条痕が見られる。189は山形の隆起帯上に棒状工具による刺突がある。また、内面は磨かれている。190は口縁部が外反し、肩部付近になだらかな隆起帯が存在し、そこに半截竹管状工具による刺突が右方向からなされている。191は縄文施文後に隆起帯が貼付られ、その上半截竹管状工具による刺突が浅く施されている。内面には横方向に調整による条痕が見られる。192は断面がやや角張った隆起帯上に節の多い棒状工具による右方向からの刺突がある。

[3] III群b-3類と思われるもの(図V-3-11-192~12-204)。a類：刺突文で文様が構成されるもの、b類：刺突文と貼付で文様が構成されるもの、c類：隆起帯上に刺突文のあるもの、d類：隆起帯のあるもの、に分けた。

**a類 (193~199)** 刺突文で文様が構成されるもの。

193・194は縦方向に刺突が並んでいる。196~199はやや張り出した部分に刺突が見られるものである。196は刺突の角度が異なっており、破片の中央部では器面に垂直に突いている。いずれの胎土も砂を含み、パサパサした感じで脆い。197は刺突文の上下で羽状縄文と

なっている。上部分はLRの縄文を縦方向に施文し、下部分は横方向に施文している。199はH-2で出土した復元土器と同一固体と思われる。I層出土であるから、耕作時に削られたものであろう。

**b類** (200~201) 刺突文と貼付で文様が構成されるもの。

200・201は同一固体である。200は刺突の間に幅1.2cm程の粘土紐を貼付けている。ただし、貼付部分は磨耗が激しい。いずれも、篋状工具で右方向から刺突されている。また、内面には縦方向の調整による条痕が見える。胎土には砂を含んでいるが、a類とは異なり、焼成がよく堅い。

**c類** (202) 隆起帯上に刺突文のあるもの。

202は隆起帯上と地文の縄文が別々に施文されている。刺突は右方向からなされ、搔きだすような感じである。内面には縦方向の調整による条痕が見え、胎土・焼成はb類に近い。

**d類** (203~204) 隆起帯のあるもの。

203はやや膨らんでいる隆起帯部分である。隆起帯上には無節の縄文が、地文とは別に施文されている。胎土には小石を含んでいる。204は下端が波打つ隆起帯で、その上には地文と別に縄文が施文されている。胎土には砂を含んでおり、焼成がよく堅い。

**底部** (図V-3-2-5、V-3-12-205~13-222 V-3-1 図版49~50)

III群に分類される底部である。底部付近が磨かれているもの、なで調整されているもの、縄文が見えるもの、に分けた。それぞれ、底部が張り出すもの、ほぼ垂直に底部に下りるもの、胴部からそのままの角度で底部へ下りるもの、がある。

**a類** (205~207) 底部付近が磨かれて光沢があるもの。

205は底部に粘土を貼付け、張出しが形成されている。206・207は底部から垂直気味に胴部へ立ち上がる。206は複節の縄文が施文された後に底部を指頭様のものでも磨いている。底面は若干揚底気味である。207は底部付近だけでなく、底面も磨かれている。まず、円盤状の底部を作り、そこに輪積みの粘土の跡が見える。

**b類** (208~216) 底部付近がなで調整されているもの。

208~212は底部が張り出すものである。208はニシンタイプの魚骨回転文が見える。209は篋状工具による調整があり、内面の底部分が磨かれている。210・211は粘土を貼付ることにより、底部を張り出させている。211は沈線様のものが見える。212は横方向に調整による条痕が見える。胎土には小石が含まれており、磨耗が激しい。213~215は垂直気味に底部から立ち上っているものである。215はかなりの急角度で底部から胴部へ上っている。表面は磨耗が激しく判然としないが、縄文施文後に底部付近をなで消していると思われる。216は横方向に調整による条痕が見える。また、胎土に小石、砂が含まれており、ザラついた感じである。

**c類** (5・217~222) 底部近くに縄文があるもの。

5はK-70-d区の北寄りの風倒木痕から多くの破片が出土した。接合した破片も同じグリットから出土している。底部は張り出す途中で折れているので、このまますばまるとは思われない。若干張り出すと推測出来る。縄文は底部付近では施文されなくなる傾向がある。内面には炭化物が付着している。

217~220は底部が張り出している。217は底部近くまで縄文が施文されているが、一部調

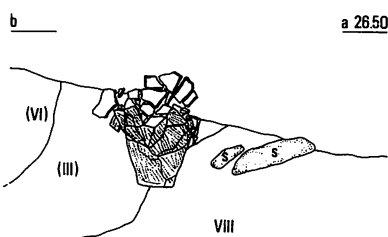
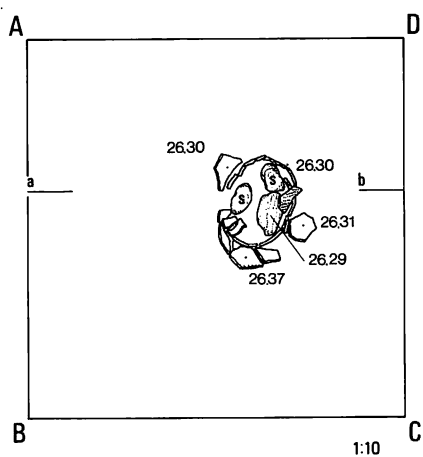
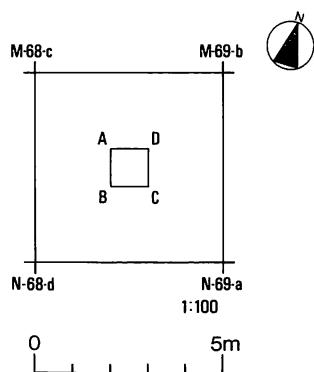
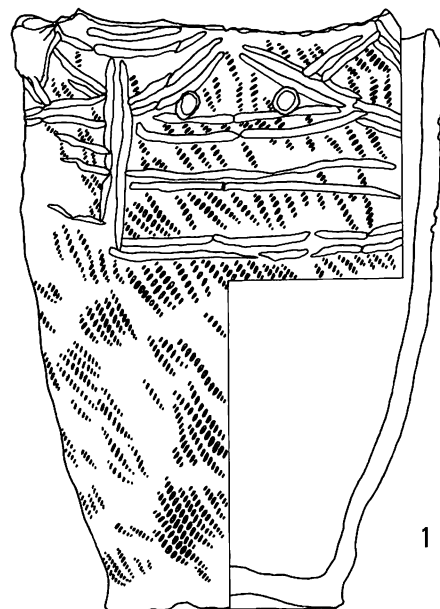
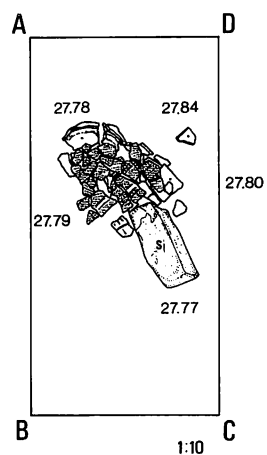
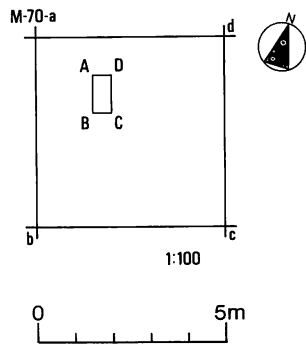
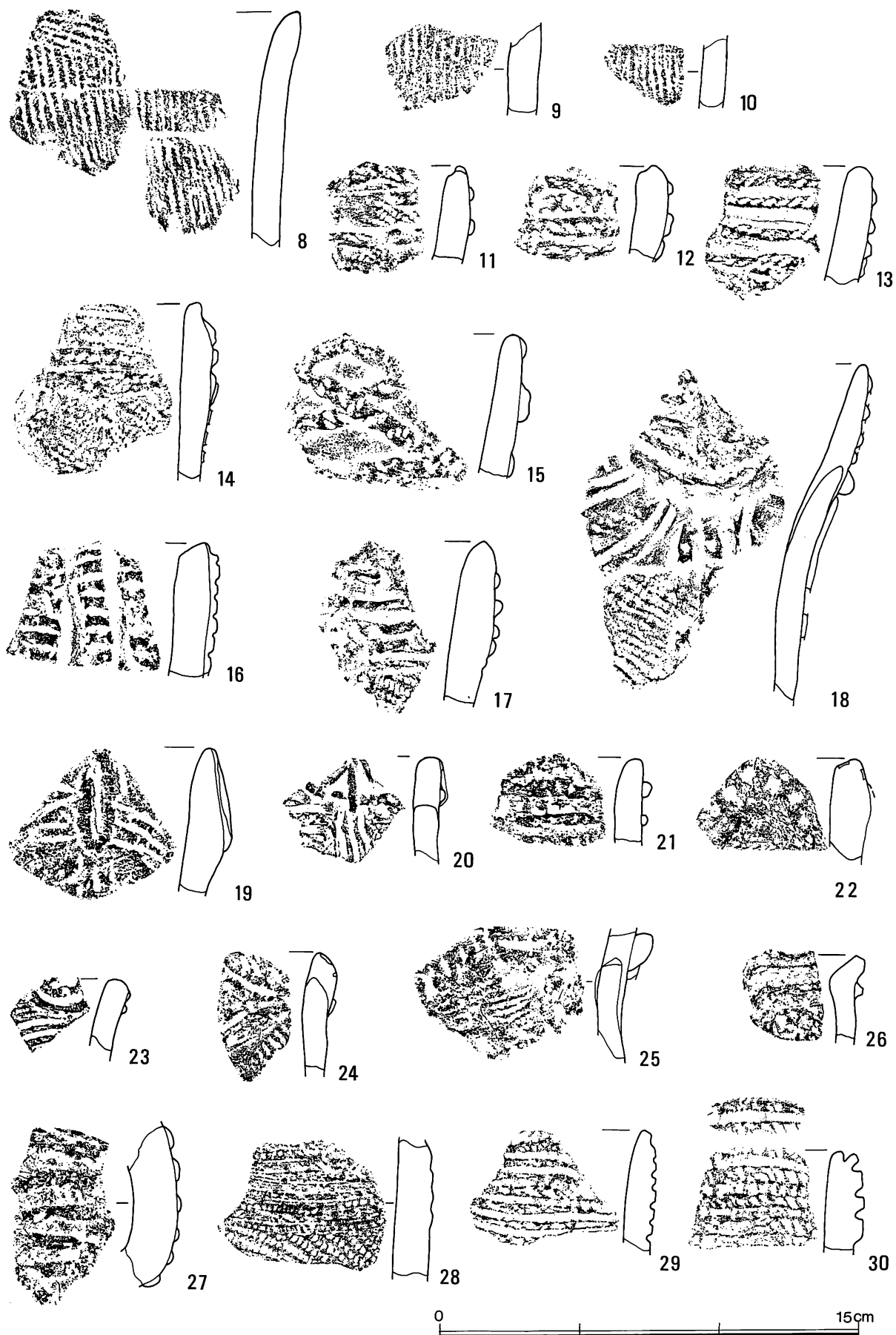


図 V-3-1 縄文時代前期・中期・後期の土器 (その1)

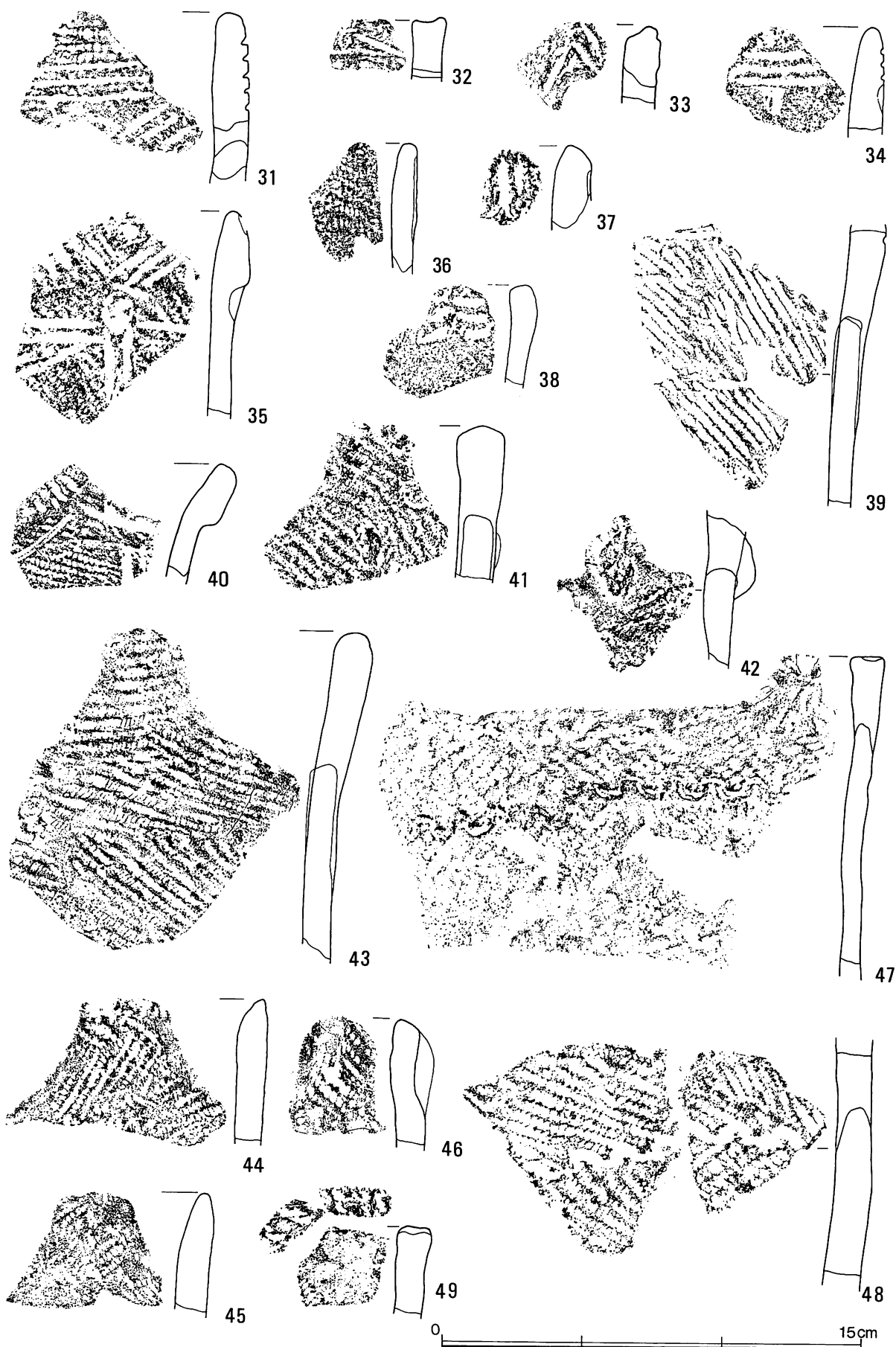


図V-3-2 縄文時代前期・中期・後期の土器（その2）



図V—3—3 縄文時代前期・中期・後期の土器（その3）





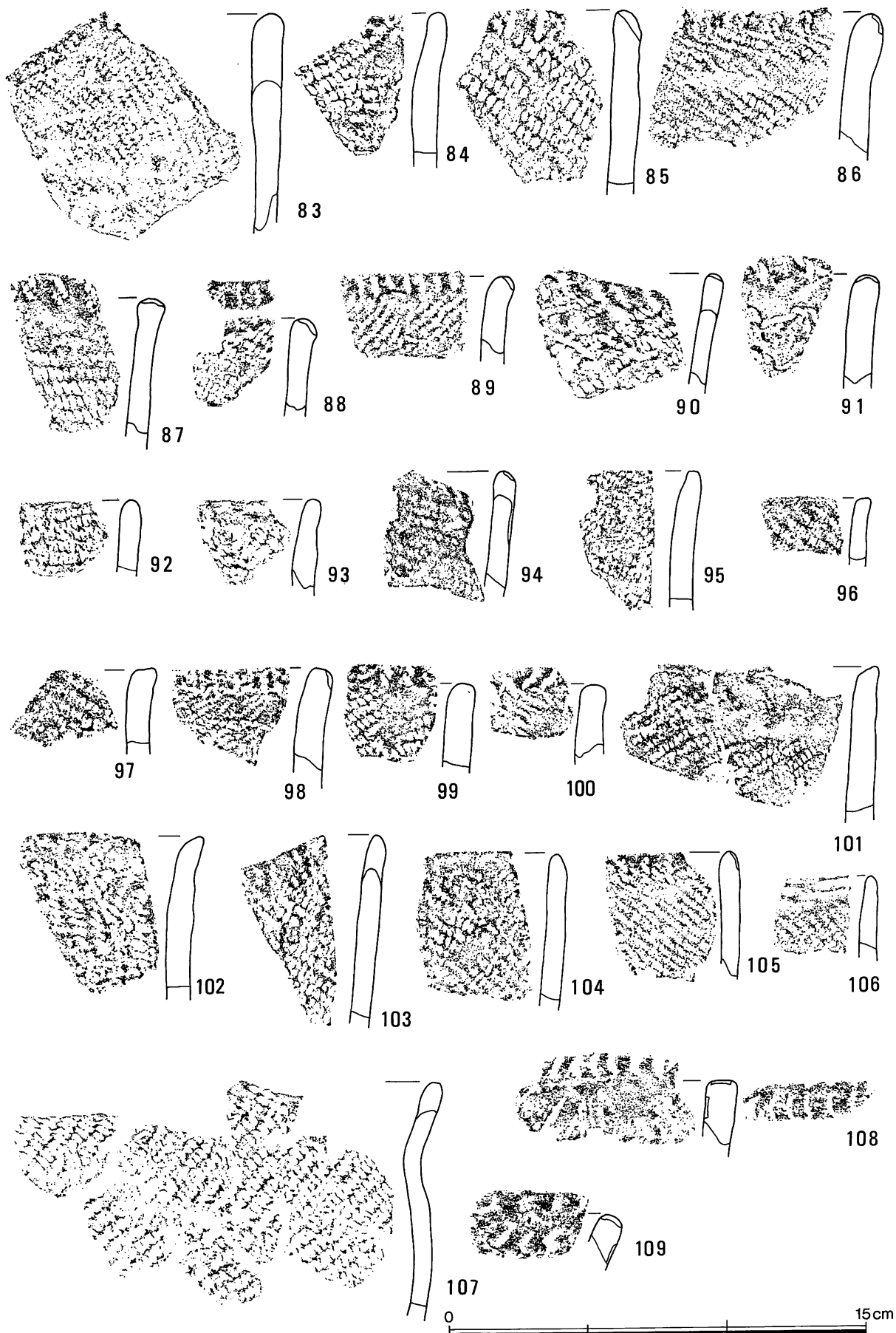
図V—3—4 縄文時代前期・中期・後期の土器（その4）



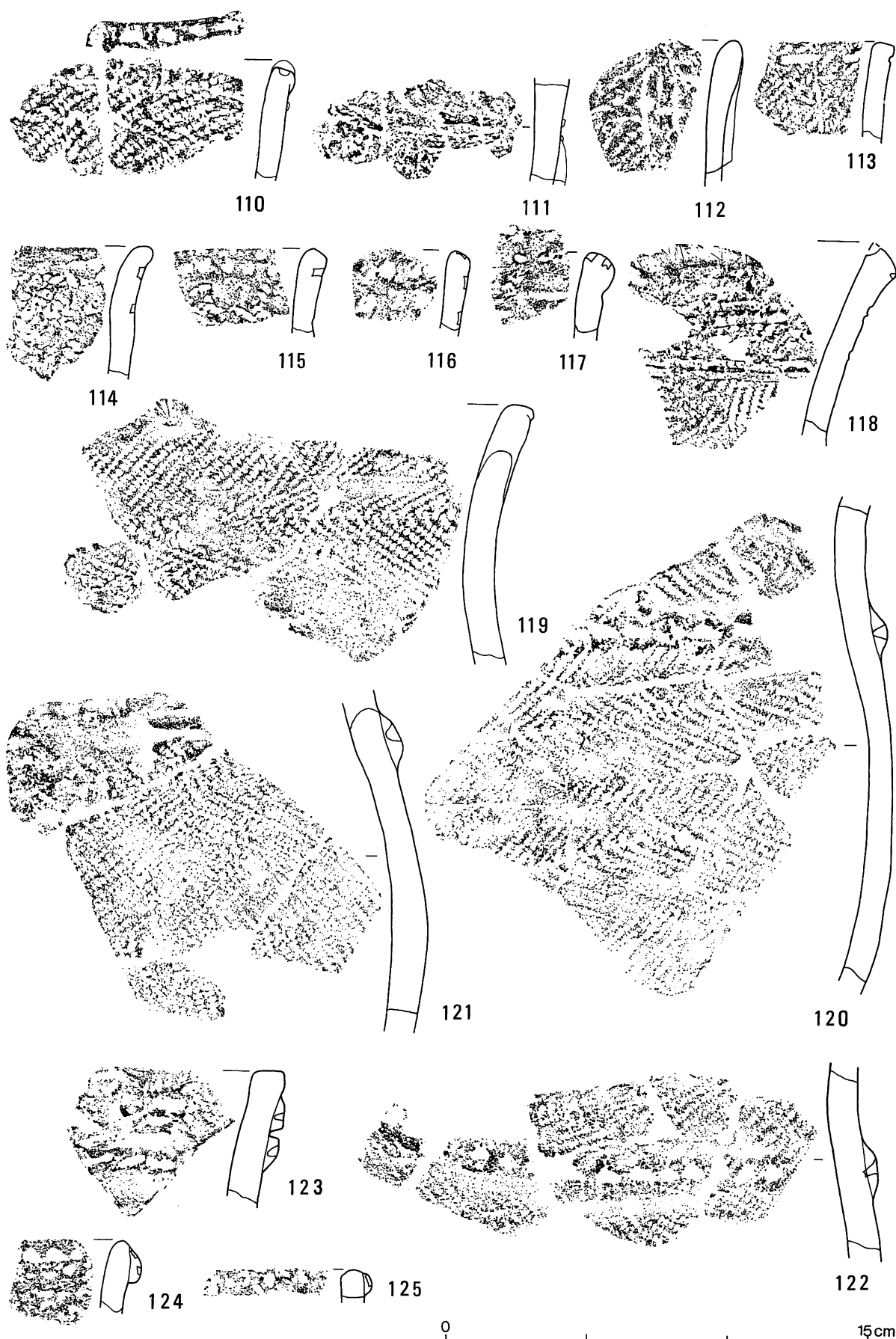
図V—3—5 縄文時代前期・中期・後期の土器（その5）



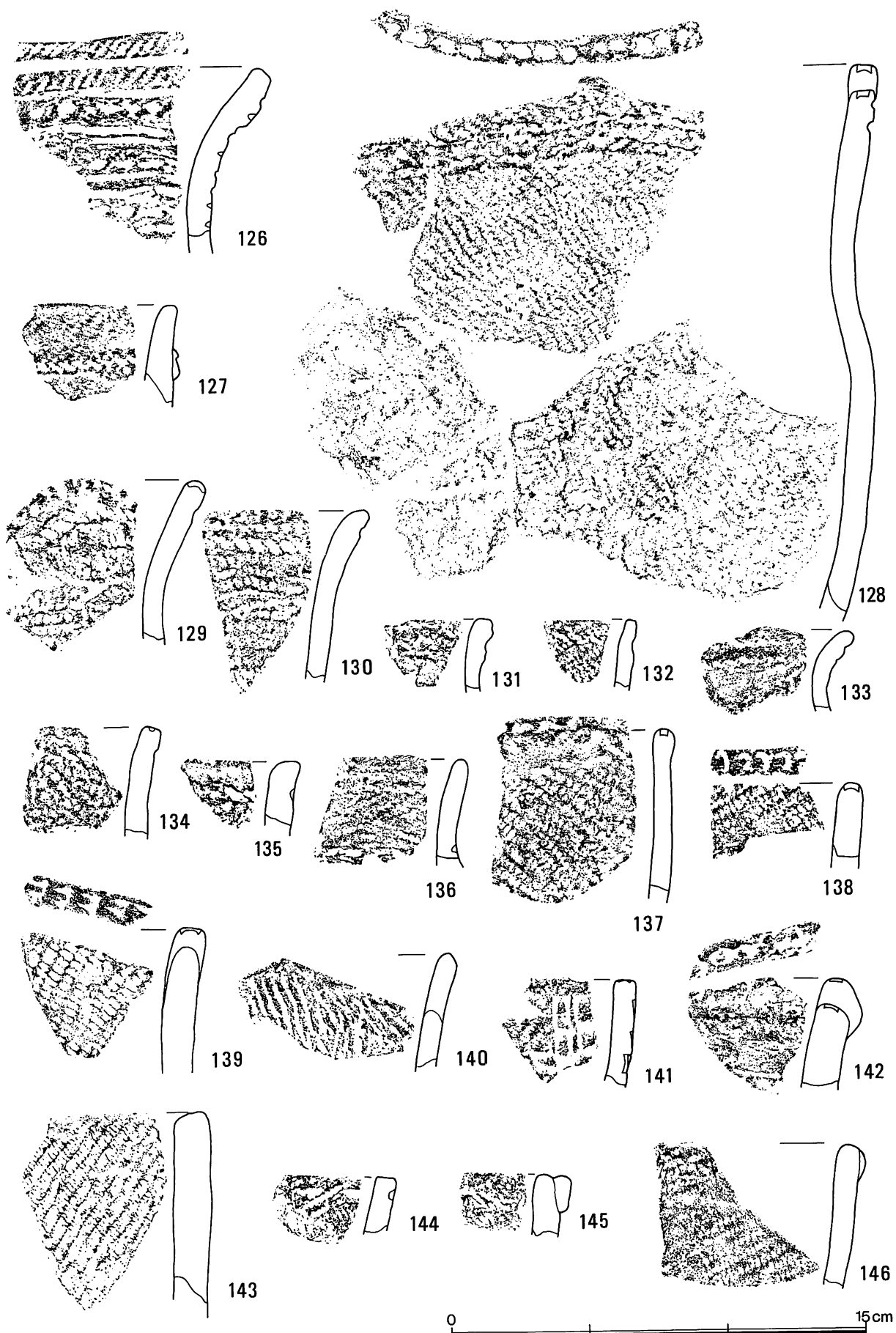
図V-3-6 縄文時代前期・中期・後期の土器（その6）



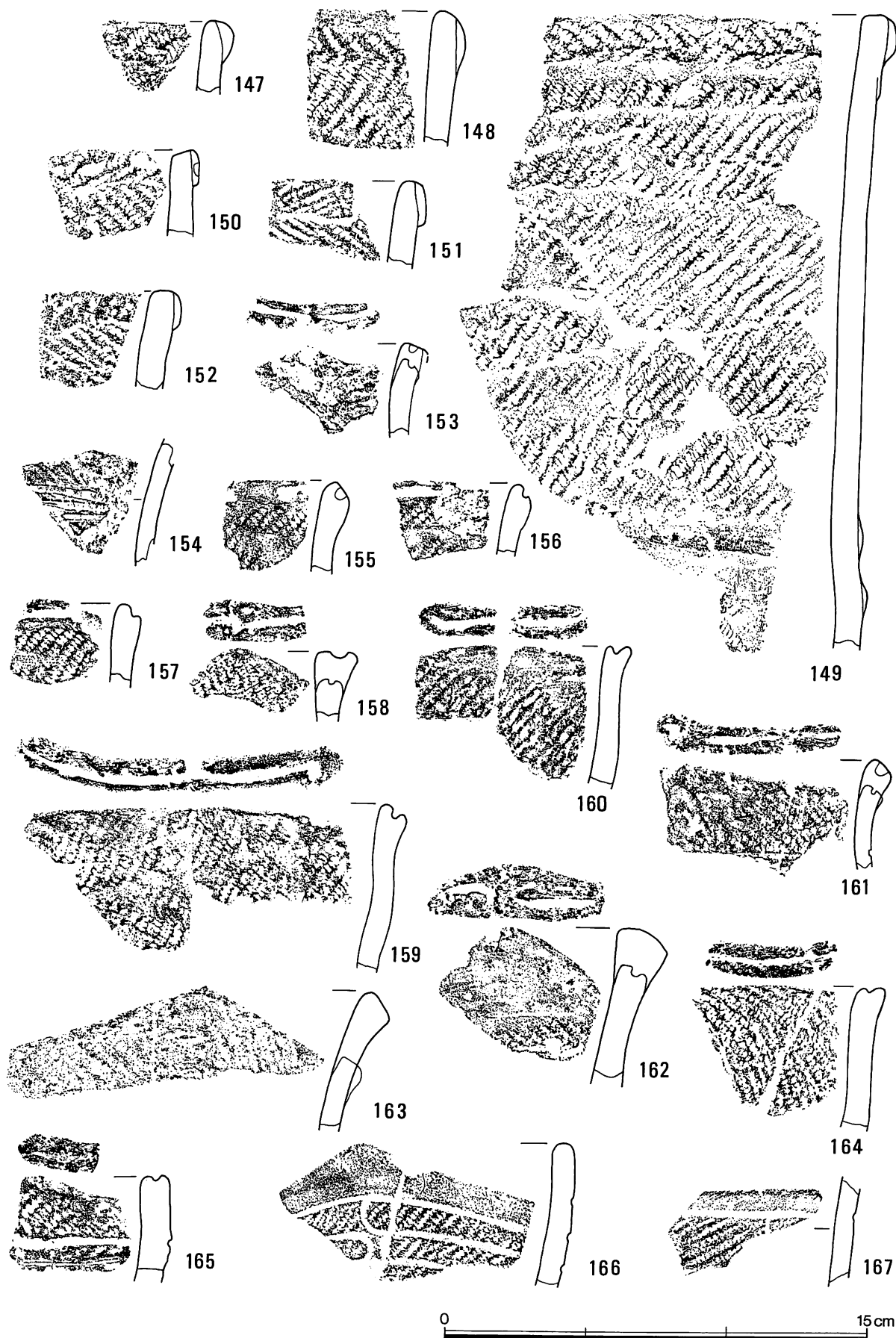
図V-3-7 縄文時代前期・中期・後期の土器（その1）



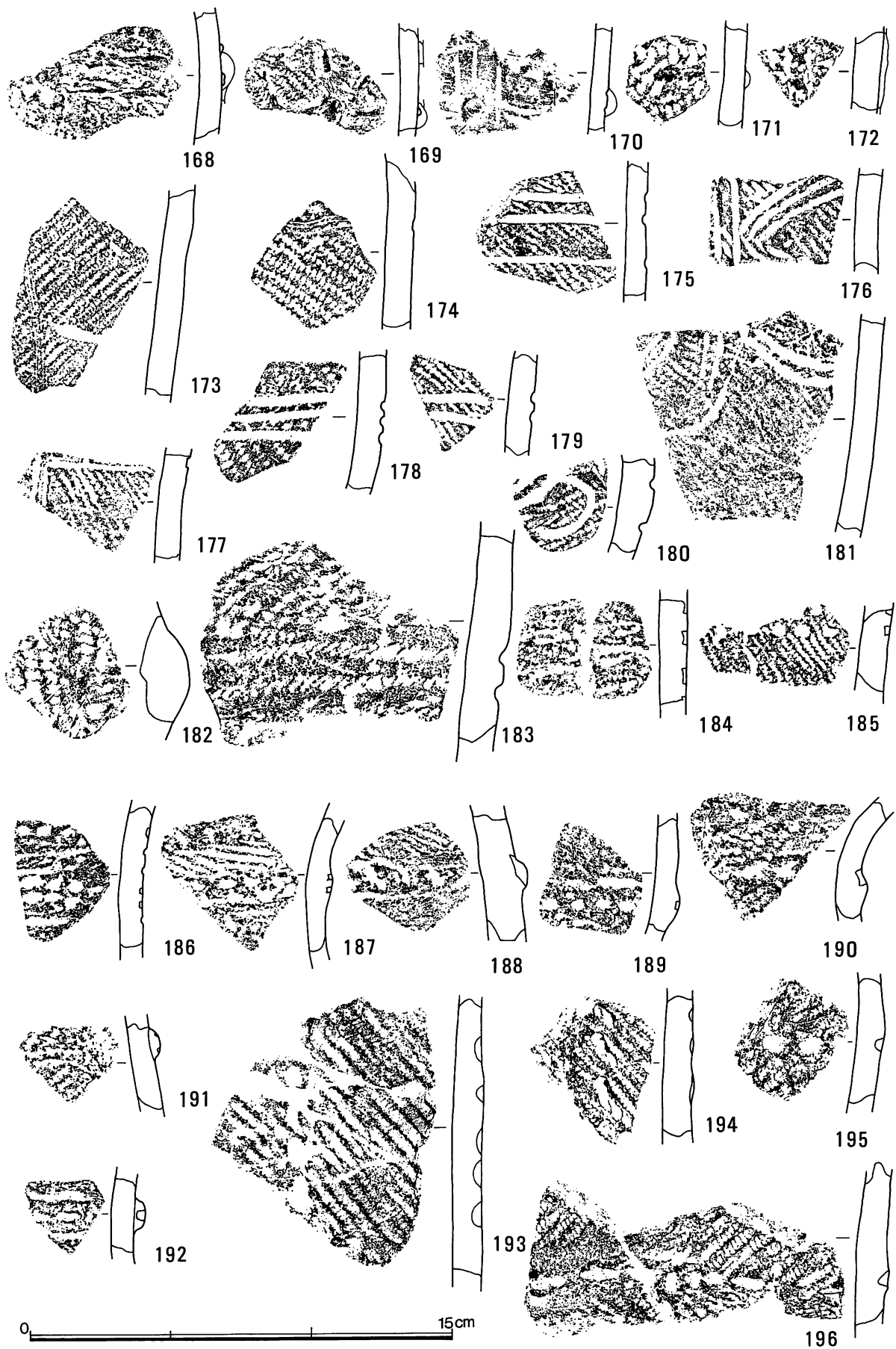
図V-3-8 縄文時代前期・中期・後期の土器（その8）



図V—3—9 縄文時代前期・中期・後期の土器（その9）

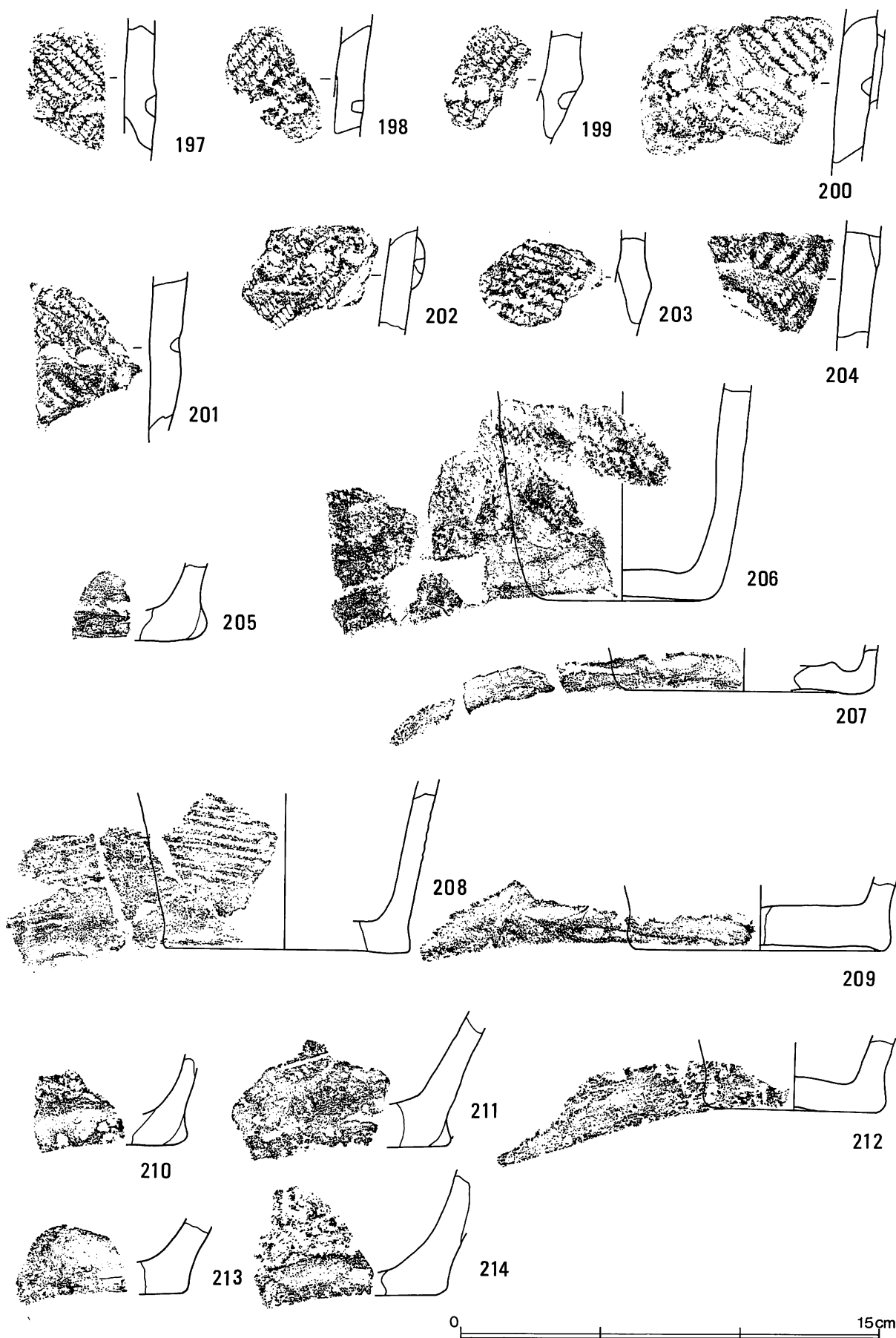


図V—3—10 縄文時代前期・中期・後期の土器（その10）



図V-3-11 縄文時代前期・中期・後期の土器（その11）





図V-3-12 縄文時代前期・中期・後期の土器（その12）

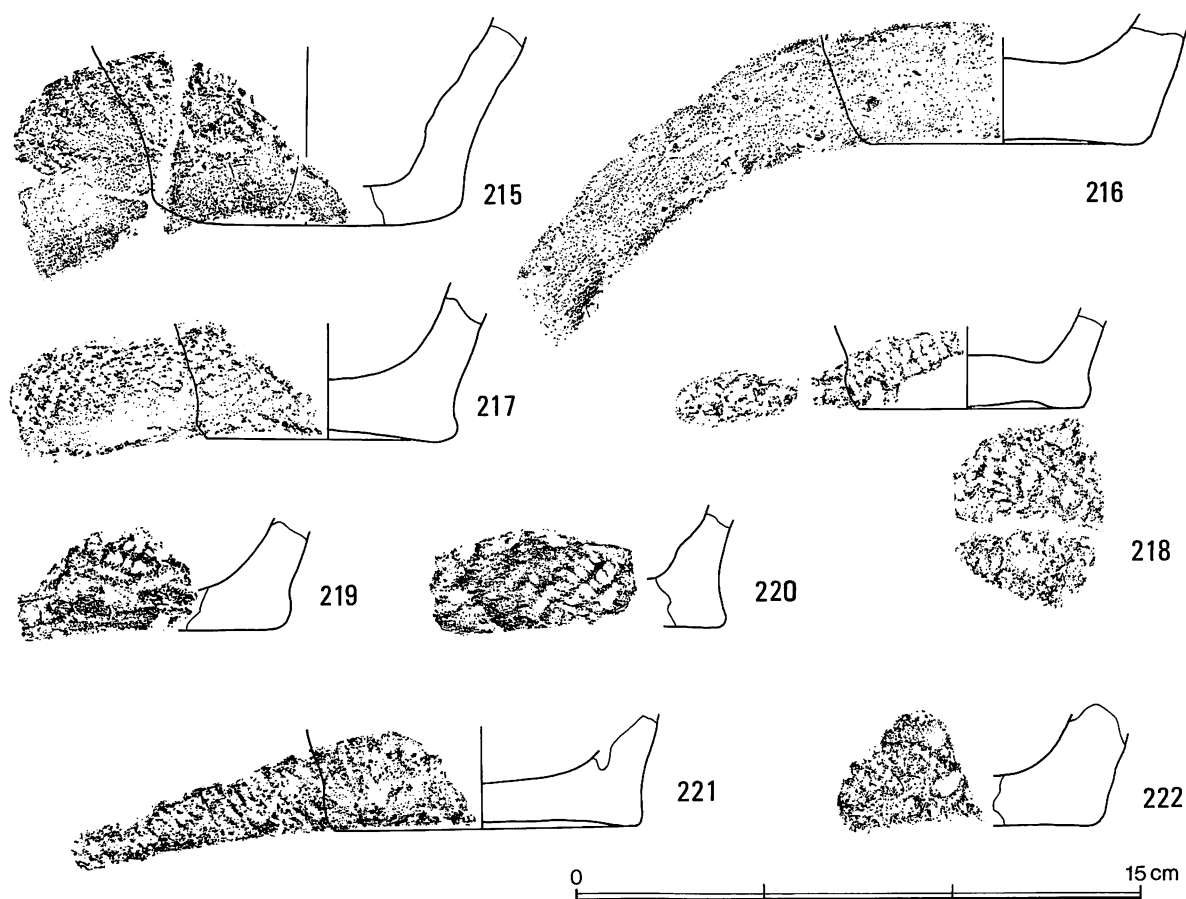


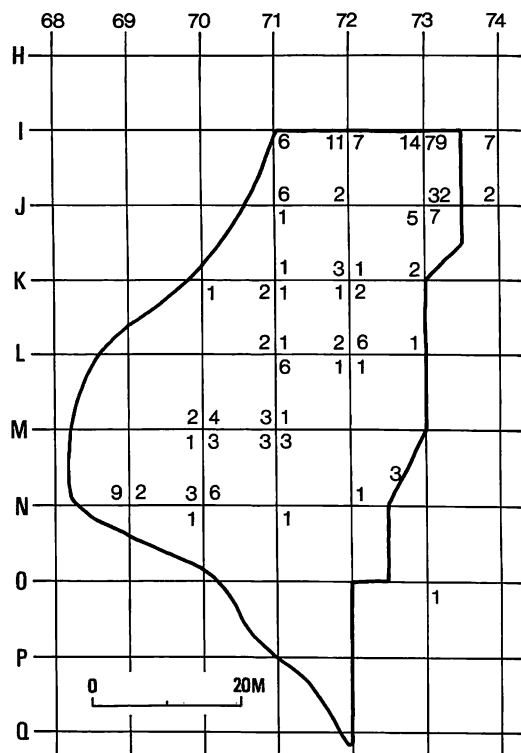
図 V—3—13 縄文時代前期・中期・後期の土器（その13）

整によりそれが消えている部分もある。218は地文と同じLRの縄文が底面にも施されている。胎土には少量の繊維が含まれ、脆い。219は内面が磨かれている。220は内面に横方向の調整による条痕が見える。221は斜めの撚糸文が施されている。また、垂直気味に胴部へ立ち上がっている。焼成などは8～10に近く、或はII群b類に入るのかもしれない。222は胴部へ傾きながら立ち上がっている。焼成はよく堅い。

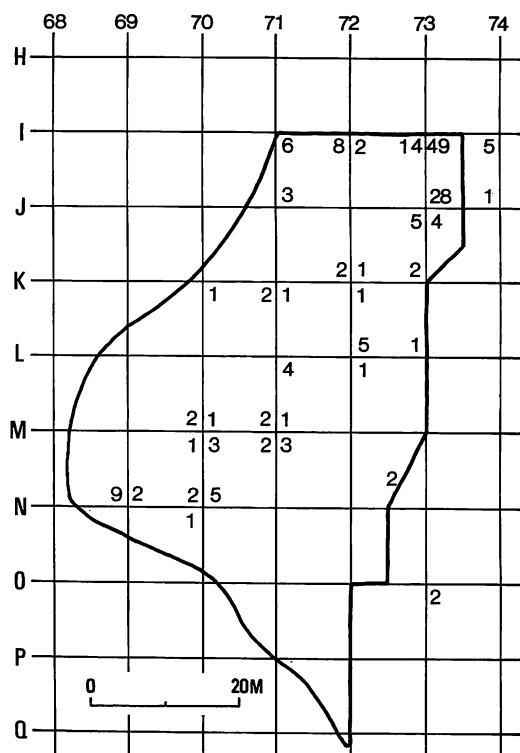
#### Ⅲ群土器の分布（図V—3—14～15）

Ⅲ群に分類される土器は全部で259個体出土した。Ⅲ群a—2類・b—1類土器はLラインを境に南北で大きく2つの分布域に分かれそうである。但し、多くはI—73区に集中している。Ⅲ群b—2類土器はI—73区に集中し傾斜方向に分散している。Ⅲ群b—3類土器はL、Mラインの間にみられ、Ⅲ群a—2類・b—1類、Ⅲ群b—2類土器とは異なった分布を示す。H—2がⅢ群b—3類の時期に該当し、L—70・71区に位置していることによると思われる。大木式土器もI—73区に集中し傾斜方向に分散している。

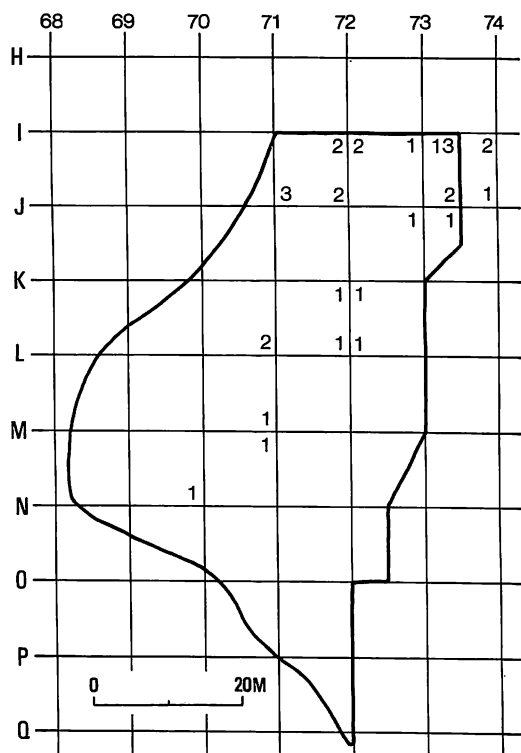
（藤原秀樹）



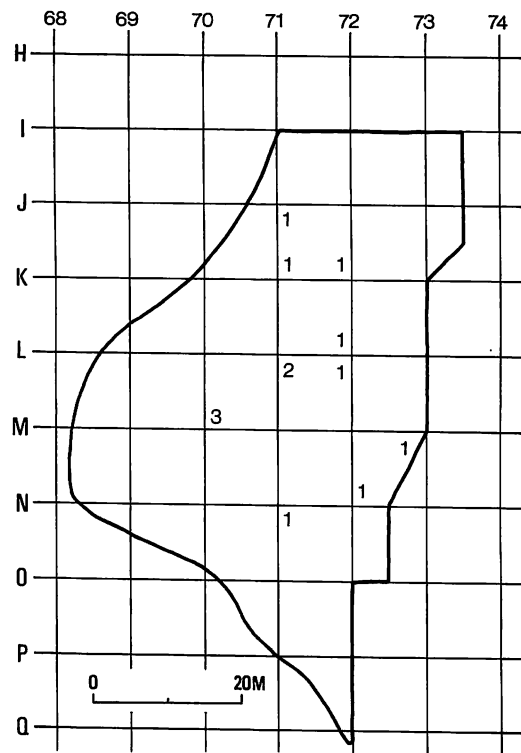
III群土器の分布 (個体数)



III群 a-2 類 b-1 類土器の分布 (個体数)

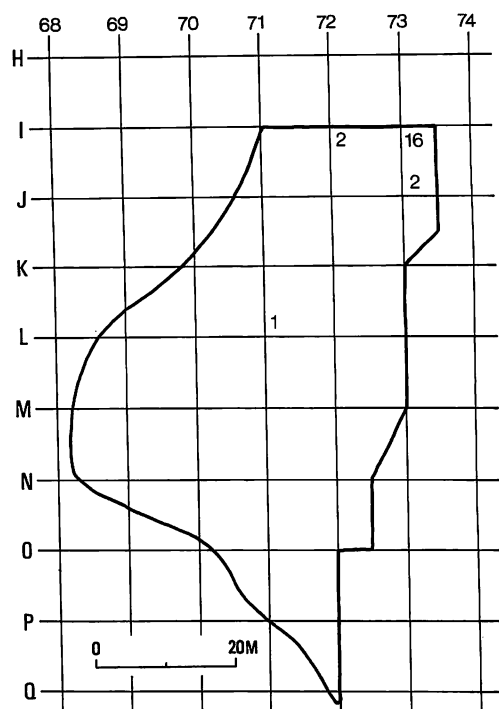


III群 b-2 類土器の分布 (個体数)

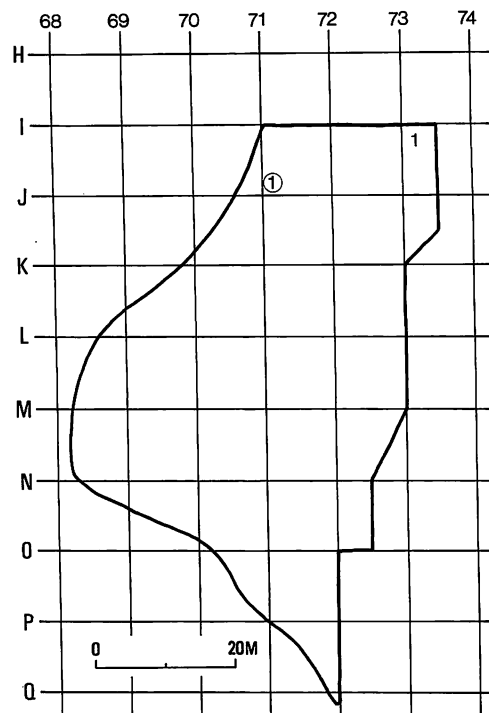


III群 b-3 類土器の分布 (個体数)

図V-3-14 縄文時代中期の土器の分布



III群大木式土器の分布 (個体数)



IV群土器の分布 I IV群のa類

① IV群b類

図V-3-15 縄文時代中期・後期の土器の分布

III群土器個体数

IIIa-2・IIIb-1	181
IIIb-2	39
IIIb-3	13
III群 大木式	21
III群 不明	5
III群土器個体数合計	259

表V-3-1 縄文時代前期・中期・後期 掲載土器一覧

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	口径			分類	接合・同一個体
					口径	底径	器高		
V-3-1	1	M-70-a	108	III	17.2	9.5	(23.5)	IIIa-2	
V-3-2	2	I-73-b	98	V	30.2	(25.6)	(9.0)	"	I-73-b9・93、I-73-c1・6・16
V-3-1	3	M-68-c	19	III	(22.0)	10.5	(30.9)	"	
V-3-2	4	K-70-d	98	V	18.9	8.7	(23.7)	"	K-70-d22・83・85・86・87・89・90・92・93
"	5	K-70-d	85	III (風割木)	(15.6)	(18.2)	(12.4)	"	K-70-d34・36
"	6	I-73-a	675	V上	23.7	(14.1)	(30.4)	IIIb-1	I-73-a152・153・154・197・198・248・249・251・492・533・534・606
"	7	I-73-a	472	II	29.2	(24.3)	(12.4)	IVa	I-73-a175・470・471

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
V-3-3	8	I-72-c	23	V	IIb	I-72-c1・10
"	9	I-72-c	4	I	"	
"	10	I-72-c	4	I	"	
"	11	I-73-a	291	V	IIIa-2・IIIb-1	
"	12	I-72-d	53	V	"	
"	13	I-73-a	502	II (風割木)	"	
"	14	I-72-d	8	I	"	
"	15	M-69-b	77	III	"	

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
V-3-3	16	I-73-b	277	V	IIIa-2・IIIb-1	
"	17	I-73-a	519	II	"	
"	18	J-72-b	114	I	"	
"	19	I-73-b	93	V	"	
"	20	M-69-d	171	V	"	
"	21	I-71-a	62	V	"	
"	22	I-71-a	6	I	"	
"	23	K-70-a	1	I	"	

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
V-3-3	24	M-68-c	10	I	IIIa-2・IIIb-1	
"	25	I-73-a	6	I	"	
"	26	L-72-a	6	I	"	
"	27	I-73-a	6	I	"	
"	28	I-73-b	84	V	"	
"	29	M-70-a	113	III	"	
"	30	L-70-b	44	V	"	
V-3-4	31	I-73-b	315	V上	"	
"	32	I-71-d	69	V	"	
"	33	M-68-c	23	V (風割木)	"	
"	34	M-70-b	149	V	"	
"	35	I-73-a	563	V上	"	
"	36	I-73-b	55	V上	"	
"	37	I-72-d	3	I	"	
"	38	I-73-b	406	V上	"	
"	39	M-68-c	10	I	"	
"	40	M-68-c	10	I	"	
"	41	I-73-b	402	V上	"	
"	42	I-73-b	279	V	"	
"	43	I-73-c	3	V上	"	
"	44	I-73-b	105	V	"	
"	45	I-73-b	398	II	"	
"	46	I-73-b	113	V上	"	
"	47	K-70-c	15	I	"	
"	48	I-71-a	28	I	"	I-71-a65
"	49	N-69-d	1	I	"	
V-3-5	50	M-68-c	10	I	"	
"	51	I-73-a	45	III	"	
"	52	I-71-d	3	I	"	
"	53	I-73-a	6	I	"	
"	54	M-71-a	65	V	"	M-69-160・c192
"	55	M-70-d	1	I	"	M-70-d19・26・56
"	56	M-71-d	15	I	"	M-71-d62・81、M-70-a19
"	57	M-71-a	15	I	"	M-71-a26・53・31
V-3-6	58	I-73-d	15	I	III-a-2	
"	59	I-73-b	16	I	"	
"	60	J-72-c	6	I	"	60、61同一個体
"	61	J-72-b	87	V	"	
"	62	J-73-a	10	I	"	
"	63	I-73-a	6	I	"	
"	64	I-73-a	216	V	"	
"	65	I-73-a	591	V上	"	
"	66	I-73-a	664	V上	"	
"	67	I-73-a	6	I	"	
"	68	L-69-d	88	V	"	
"	69	B調STA 394+0 R10			"	
"	70	"			"	
"	71	M-72-c	14	V上	"	
"	72	I-73-a	659	V上	"	
"	73	I-73-b	244	V上	"	

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
V-3-6	74	I-73-b	394	V	IIIa-2・IIIb-1	
"	75	I-72-d	56	V	"	
"	76	I-72-d	8	I	"	
"	77	M-72-c	1	I	"	
"	78	J-72-c	6	I	"	
"	79	K-72-b	19	I	"	
"	80	I-73-a	665	V上	"	
"	81	I-73-b	375	V	"	I-73-b377・442
"	82	M-71-a	7	I	"	
"	83	J-73-a	18	V	"	
"	84	I-73-a	1	I	"	
"	85	L-71-a	24	I	"	
"	86	J-73-a	10	I	"	
"	87	L-69-c	38	V	"	
"	88	I-73-a	561	V上	"	
"	89	I-73-a	6	I	"	
"	90	I-71-d	101	V	"	
"	91	I-71-d	14	I	"	
"	92	I-73-b	363	V	"	
"	93	I-73-b	285	V	"	
"	94	M-70-a	19	I	"	
"	95	I-73-a	523	V上	"	
"	96	K-72-b	612	V	"	
"	97	M-70-b	207	III (風割木)	"	
"	98	L-69-c	176	I	"	
"	99	M-69-c	5	I	"	
"	100	I-73-d	6	I	"	
"	101	M-70-d	46	V	"	
"	102	L-70-c	54	I	"	
"	103	L-71-b	53	V	"	
"	104	M-68-c	10	I	"	
"	105	I-71-a	25	V	"	
"	106	M-68-c	48	V	"	
"	107	I-72-d	119	V (風割木)	"	I-73-a655、I-73-d15・79、I-72-d80・81
"	108	J-72-d	12	I	"	
"	109	I-73-a	6	I	"	
V-3-8	110	I-71-a	67	V	"	
"	111	I-71-a	67	V	"	
"	112	K-71-b	5	I	"	
"	113	I-73-b	313	V上	"	
"	114	J-73-a	10	I	"	
"	115	K-71-d	5	I	"	
"	116	I-73-b	9	I	"	
"	117	I-73-b	16	I	"	
"	118	I-73-a	680	V上	"	
"	119	I-73-a	644	V上	"	I-73-a85・478
"	120	I-73-a	478	V	"	I-73-a424・426・427・428
"	121	I-73-a	333	V上	"	I-73-a431・432・478
"	122	I-73-a	313	V上	"	I-73-a341・422・423
"	123	L-70-c	23	I	"	

表V—3—1 縄文時代前期・中期・後期 掲載土器一覧

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
V-3-8	124	I-73-d	15	I	IIIa-2・IIIb-1	
"	125	K-70-c	34	III	"	
V-3-9	126	I-73-c	1	I	"	
"	127	M-70-d	8	I	"	
"	128	I-73-a	470	II	"	
"	129	I-71-d	14	I	"	129~131 同一個体
"	130	I-71-d	19	I	"	
"	131	I-71-b	58	V	"	
"	132	I-73-a	491	II	"	
"	133	I-72-d	45	V (風葬木)	"	
"	134	I-72-a	36	V (風葬木)	"	
"	135	I-73-d	15	I	"	
"	136	J-72-d	12	I	"	
"	137	I-73-a	492	II	"	
"	138	I-73-a	656	V上	"	
"	139	I-73-b	465	V上	"	
"	140	I-71-b	97	V	"	
"	141	K-72-b	211	V上	"	K-72-b481
"	142	I-73-a	235	III	"	
"	143	N-71-a	88	V上	IIIb-3	
"	144	J-71-c	18	I	"	
"	145	L-70-b	9	I	"	
"	146	J-71-a	3	I	"	
V-3-10	147	L-71-a	8	I	"	
"	148	L-71-a	1	I	"	
"	149	K-71-c	15	I	"	
"	150	J-71-b	13	I	"	
"	151	L-71-d	1	I	"	
"	152	M-72-a	1	I	"	
"	153	I-73-b	458	V上	IIIb	
"	154	I-73-b	257	V	"	
"	155	I-73-a	615	V上	"	155、156 同一個体
"	156	I-73-a	626	V上	"	
"	157	I-73-a	40	III	"	
"	158	I-73-a	666	V上	"	
"	159	I-73-a	78	III	"	I-73-b491
"	160	I-73-a	6	I	"	I-73-a562
"	161	I-73-a	298	V	"	
"	162	I-73-a	520	II	"	
"	163	I-73-b	298	V	"	I-73-b581
"	164	I-73-a	660	V上	"	I-73-a276
"	165	I-72-a	5	I	"	
"	166	I-71-b	61	V	IVb	I-71-b64
"	167	I-71-b	113	V	"	
V-3-11	168	I-71-a	60	V	IIIa-2・IIIb-1	
"	169	K-69-b	1	I	"	
"	170	I-71-d	61	V	"	
"	171	M-70-b	70	V	"	
"	172	I-73-a	107	III	"	
"	173	M-70-d	8	I	"	

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
V-3-11	174	I-73-b	346	V	IIIa-2・IIIb-1	
"	175	I-73-a	667	V上	"	
"	176	I-72-a	5	I	"	
"	177	I-73-a	6	I	"	
"	178	I-73-a	555	V上	"	
"	179	I-73-a	567	V上	"	
"	180	I-73-a	589	V上	"	
"	181	I-73-c	8	V上	"	
"	182	K-72-d	5	III	"	
"	183	M-70-b	87	V	IIIb-2	M-70-b89
"	184	I-71-b	57	V	"	
"	185	M-70-a	113	III	"	
"	186	I-73-b	93	V	"	
"	187	I-73-b	89	V	"	
"	188	L-72-a	10	I	"	
"	189	I-73-b	9	I	"	
"	190	I-71-b	79	V	"	
"	191	I-72-a	8	I	"	
"	192	J-72-c	3	I	"	
"	193	M-72-b	329	IV	IIIb-3	
"	194	J-71-b	13	I	"	
"	195	K-71-b	5	I	"	
"	196	J-71-c	1	I	"	J-71-b14
V-3-12	197	N-69-a	1	I	"	
"	198	K-70-d	6	I	"	
"	199	L-71-c	6	I	"	
"	200	N-70-a	13	I	"	200~201同一個体
"	201	M-71-b	6	I	"	
"	202	L-69-d	17	I	"	
"	203	M-71-a	151	V	"	
"	204	M-72-a	8	I	"	
"	205	I-72-a	5	I	III	
"	206	M-68-c	40	III (風葬木)	"	M-68-c32
"	207	J-72-c	12	I	"	J-72-c20
"	208	I-71-d	63	V	"	I-71-d14、19、64
"	209	I-73-a	299	V	"	
"	210	I-71-b	19	II	"	
"	211	I-73-b	710	V上	"	
"	212	K-69-b	29	V	"	
"	213	N-69-a	158	V	"	
"	214	M-70-b	288	V上 (風葬木)	"	
V-3-13	215	I-73-b	96	V	"	
"	216	M-72-b	327	IV	"	
"	217	I-72-a	15	V	"	
"	218	I-72-a	21	V上 (風葬木)	"	I-72-a5
"	219	I-73-c	13	I	"	
"	220	I-73-a	292	V	"	
"	221	I-73-c	6	V上	"	
"	222	J-72-b	3	I	"	

表V—3—1 縄文時代前期・中期・後期 掲載土器一覧

## 4 続縄文時代の土器

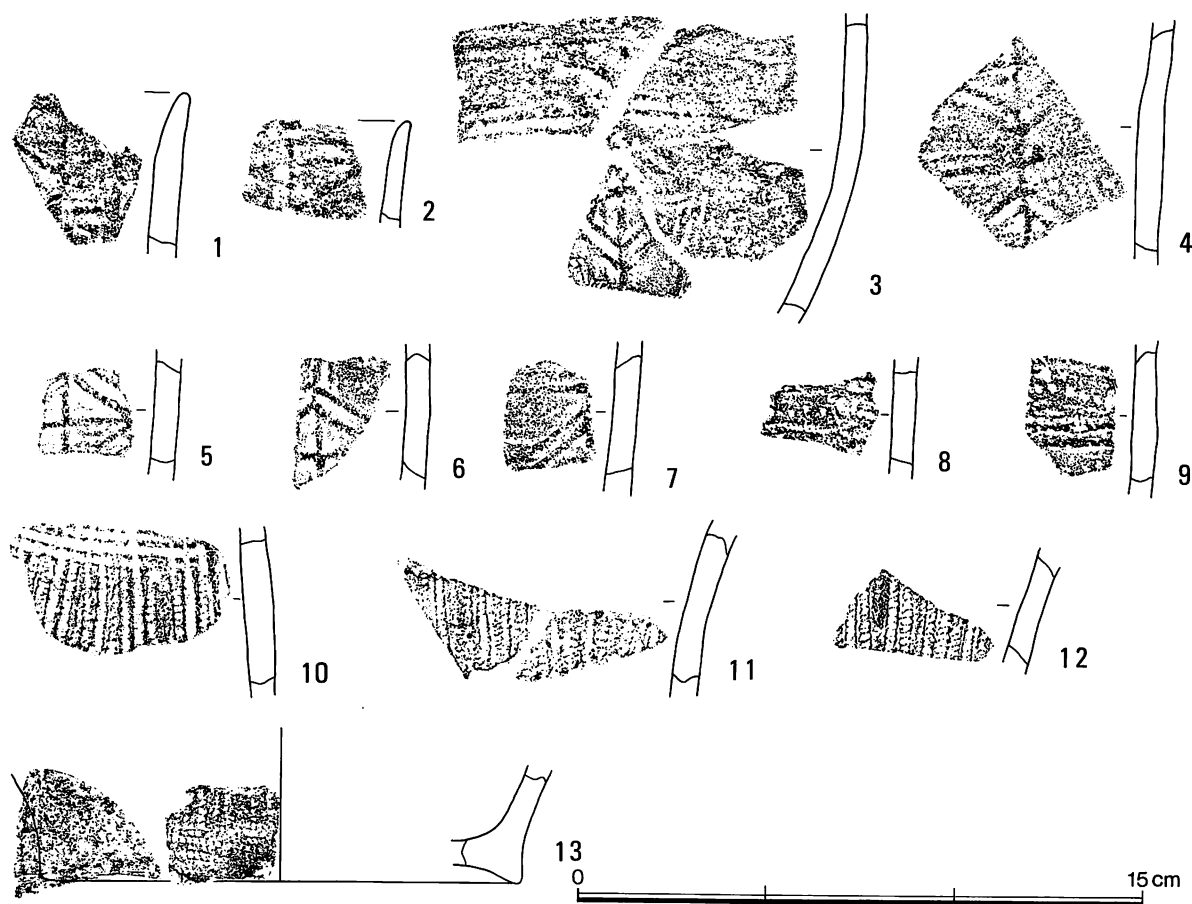
VI群c類土器 (図V-4-1-1~13 表V-4-1 図版50)

後北C<sub>1</sub>式に相当する。1~13は同一個体と思われるが1~9は黒褐色、10~13は白褐色で色調は異なる。1・2は口縁部である。波状口縁を呈している。8・9には三角形点状文列が見える。10~12は胴部下半と思われる。10はまず、横走する縄文を施文した後、縦行する縄文が施文されている。11・12は縦行する縄文がある。13は揚げ底である。縦行する縄文が施されているが、底部付近では横走する縄文となる。底径は推定で13cm程である。

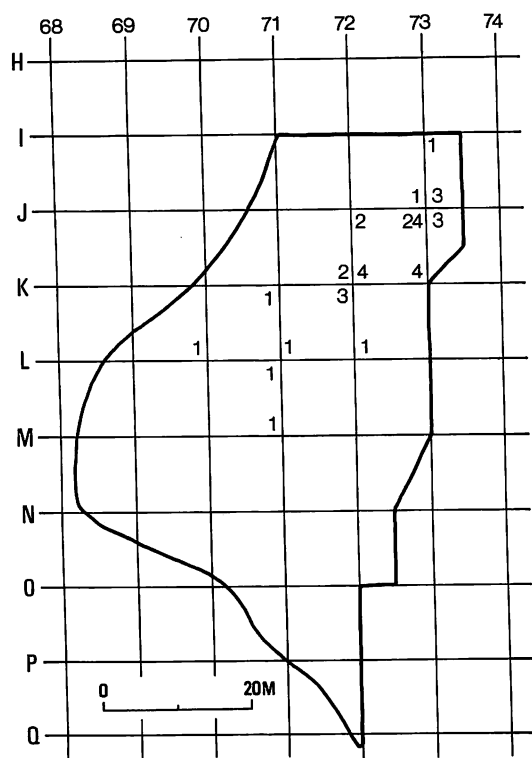
分布 (図V-4-2)

VI群c類土器は破片が全部で53点検出された。J-72-d区が最も多く、調査区の傾斜に沿って分布している。破片は全般的に磨耗が激しい。口縁部、底部とも2点で固体数では1つと思われる。

(藤原秀樹)



図V-4-1 縄文時代の土器



VI群C類土器（後北C<sub>1</sub>式）の分布

図V-4-2 後北式土器の分布

表V-4-1 続縄文時代 掲載土器一覧

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
V-4-1	1	J-72-d	12	I	IVc	
"	2	J-72-d	20	I	"	
"	3	J-72-d	12	I	"	
"	4	J-72-d	20	I	"	
"	5	J-72-d	12	I	"	
"	6	J-72-d	12	I	"	
"	7	J-72-d	12	I	"	

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
"	8	J-72-b	10	I	"	
"	9	J-72-d	3	I	"	
"	10	J-72-d	12	I	"	
"	11	J-72-c	12	I	"	
"	12	J-73-a	16	I	"	
"	13	J-72-d	12	I	"	



## VI. 包含層の石器等

本調査において検出し得た石器は、1,994点である。このうち、土製品・石製品を含めた231点を図示した。

石器は、調査区のほぼ全域から出土しているが、特に調査区北東側の平坦部と中央部から南西側の緩やかな斜面部に多くみられる。耕作により、深いところではⅦ層上部まで削平を受けており、このため表土からの遺物の出土が圧倒的に多い。

剥片石器の石材は、黒曜石・頁岩・珪岩がみられる。石鏃・石槍は黒曜石、つまみ付きナイフ・ナイフ・スクレイパーは頁岩の使用割合が多い。黒曜石は、肉眼観察から十勝三叉、白滝、赤井川、豊浦町豊泉などの原産地を推定させるものがみられる。産地が近いこともあって、豊浦町豊泉産の黒曜石の使用割合が全体の50%ほどを占めているが、石質が悪く石器製作に適さないためか、石器の出土はきわめて少ない。しかし、黒曜石の礫、残核、剥片、破片などの多量の出土は、ここが剥片剥離、石器製作の場所であったことを示している。

礫石器の石材は、安山岩、玄武岩、流紋岩、蛇紋岩、緑色泥岩、片岩がみられる。安山岩の使用割合が圧倒的に多い。

石器は、石鏃、石槍もしくはナイフ、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石斧、たたき石、すり石、台石、石錘などが出土している。石器等の総点数は36,378点で、このうち剥片・碎片が約94.5%をしめている。出土した剥片石器は、1,371点で、石鏃が39.4%、つまみ付ナイフが24.8%、スクレイパーが16.0%、ついで石槍が14.1%と多い。礫石器は、360点出土した。すり石が51.7%と圧倒的に出土割合が高く、たたき石が19.4%、台石もしくは石皿が10.6%、ついで石斧が10.3%を占めている。

### 石鏃（Ⅰ群A類）[図Ⅵ-1-1～40 図版-51]

540点が出土している。このうち、40点を図示した。剥片石器の約39.4%を占め、最も出現率が高い。1～28は、無茎鏃である。1～21は薄身で柳葉形のもの（ⅠA3a）である。3・4・9・10は表裏面に、9・15・17は裏面に一次剥離面を残す。22～24は薄身で五角形のもの（ⅠA3b）である。25は三角形で凹基のもの（ⅠA4a）である。26～28は菱形を呈するもの（ⅠA6）である。表裏面に一次剥離面を残し、粗雑な加工から未成品の可能性がある。29～40は一般的な有茎族（ⅠA7）である。37は表裏面に、32・36は裏面に一次剥離面を残す。石質は、1・2・7・8・10・17・26・28が頁岩、3・32が玄武岩、4が流紋岩である。このほかは、すべて黒曜石である。

### 石槍またはナイフ（Ⅰ群B類）[図Ⅵ-1-41～47、図Ⅵ-2-48～66、図Ⅵ-3-67～71 図版-52]

193点が出土している。このうち、31点を図示した。剥片石器の約14.1%を占める。41～56は茎をもつもの（ⅠB1）である。47・50・51・53・55は裏面に一次剥離面を残す。

49・56は裏面に礫表皮面を残している。57～71は基部が明瞭にみられないもの（ⅠB2）である。57・59は表面に礫表皮面を残している。側縁部に刃部のつぶれが見られることから、ナイフの可能性はある。石質は、48・57・58・62・63・66～69が頁岩、このほかはすべて黒曜石である。

**石錐 (II群A類) [図VI-3-72~84 図版-51]**

78点が出土している。このうち13点を図示した。すべて棒状のものにつまみ部が作り出されたもの (II A2) である。72・75・79は両面加工のものである。72・75・80・84は、刺突部に使用によるものと思われるつぶれが見られる。石質は、72~74・76・77・79~81・84が頁岩、75が流紋岩、78・82・83が黒曜石である。

**つまみ付きナイフ (III群A類) [図VI-4-85~104、図VI-5-105~111 図版-53]**

340点が出土している。このうち27点を図示した。剥片石器の中では、石鏃について出現率が高く、24.8%を占める。85~105は片面全面加工で、裏面の側縁に刃部をもつもの (III A1) である。106~108は片面全面加工で、III A1のように裏面に刃部をもたないもの (III A2) である。109~111は片面周縁加工のもの (III A3) である。98~100は、横剥ぎ素材を縦長に、108は縦剥ぎ素材を横長に使用している。108・110は、下端部を欠損している。石質は、87・95・99がメノウ、この他はすべて頁岩である。

**スクレイパー (III群C類) [図VI-5-112~124、図VI-6-125~133 図版-54]**

220点が出土している。このうち22点を図示した。剥片石器の中では、石鏃、つまみ付きナイフについて出現率が高く、16.0%を占める。112~121は一般に石べらと称されるもの (III C1) である。112・114・121は刃部が曲線的、113・115~120は刃部が直線的なものである。石材は、120が黒曜石である。122~128は縦長で側縁に刃部が設けられたもの (III C2) である。125・127・128は礫表皮面を残す。121・123は下部が欠損している。石材は、120が黒曜石である。129~133は素材の形状を大きく変えていないもの (III C6) である。133は礫表皮面を残している。石質は、121・125・128・133が黒曜石、この他はすべて頁岩である。

**石斧 (IV群A類) [図VI-7-134~144 図版-55]**

37点出土している。このうち11点を図示した。134・135は擦り切り手法により製作されたもの (IV A1) である。134は基部、135は刃部が欠損している。136~143は全面磨製のもの (IV A3) である。140・141は基部、138は刃部、142・143は基部と刃部の一部が欠損している。144は擦り切り残片 (IV A8a) である。石質は、135~137・140・141・143が緑色泥岩、134・138・142・144が蛇紋岩、139が片岩である。

**たたき石 (V群A類) [図VI-8-145~158 図版-56]**

70点が出土している。このうち14点を図示した。礫石器の中では、すり石について出現率が高く、19.4%を占める。145は棒状礫を素材としたもの (V A1) である。礫の両端にたたき痕がみられる。146~150は扁平礫を素材としたもの (V A2) である。146~148は礫の周縁にたたき痕がみられる。149・150は打ち欠きにより円形に整形したもので、さらに150はすり痕がみられる。たたき石に分類したが、打ち欠かれた弦の部分に使用によるつぶれがみられないことから、すり石の可能性もある。151は円礫を素材としたもの (V A3) である。152~157は礫の腹・背面にたたき痕がみられ、たたき跡が深くくぼんでいる。いわゆる凹み石と称されるタイプ (V A3) に属する。152は、礫端部にもたたき痕がみられる。158は棒状礫を素材とし、胴部は敲打と研磨により把握部状に、さらに下端部は打ち欠きと敲打により球状に整形を行っている。あたかも、乳棒のような形状である。たたき石に分類したが、すり石、または石製品の可能性もある。石質は、すべて安山岩である。

**すり石 (VI群A類) [図VI-8-159~161、図VI-9-162~177、図VI-10-178~191 図**

## 版—57～60]

186点が出土している。このうち33点を図示した。159～165は断面が三角形の礫の稜をすったもの（ⅥA1）である。160はすり面が2面ある。166～176は扁平礫を素材としたもの（ⅥA2）である。168は礫の腹面に、他は側縁部にすり面がみられる。166～176はほぼ長方形を呈する素材を使用しており、いずれも礫の長軸方向の側縁に打ち欠きが見られる。また、174・175は一側縁を打ち欠きその弦をすったものであるが、ⅥA3のように素材の形状を変えることはしていない。177～181は扁平礫を半円状に打ち欠き弦をすったもの（ⅥA3）である。182～190は北海道式石冠と称されるもの（ⅥA4）である。181～183は北海道式石冠の特徴であるはちまき状の溝がみられないものの、長軸方向の側縁に打ち欠きや敲打による調整痕がみられることから、ⅥA4に分類した。187は、ⅥA2に分類した172～175に類似するが、ほ胴部に打ち欠きと敲打によるはちまき状の溝がみられることから、ⅥA4とした。191は未製品と思われる。扁平礫を半円状に打ち割った状態のもので、すり痕や打ち欠き、敲打などの調整はみられない。石質は、179・180が玄武岩、182が閃緑岩、187が流紋岩である。この他は、すべて安山岩である。

## 台石もしくは石皿（Ⅶ群A類）[図Ⅵ—11—192～194 図版—61]

38点が出土している。このうち3点を図示した。いずれも破片であるが、使用によると思われるくぼみが顕著にみられる。石質は、すべて安山岩である。台石と分類した38点の中には、使用痕はみられないものの、形態や出土状況からみて台石と推定されるものもこの範疇に含めた。

## 石鋸（Ⅷ群A類）[図Ⅵ—11—195・196 図版—60]

2点のみの出土である。195は平面形がほぼ長方形を呈し、4側縁に直線状の刃部をもつものである。刃部断面は、使用による磨滅からか、U字形を呈する。196は破片で、刃部は直線状で、刃部断面はV字形を呈する。分類は、いずれもⅧA1である。石質は、いずれも凝灰岩である。

## 砥石（Ⅷ群B類）[図Ⅵ—11—197～199 図版—60]

6点が出土している。このうち3点を図示した。197・198は板状の砥石（ⅧB2）の破片である。199は、研磨面全体が溝状の曲面を呈するものである。石質は、195・196が凝灰岩、197が安山岩である。

## 石錘（Ⅸ群A類）[図Ⅵ—12—200～205、図Ⅵ—13—206～220 図版—62・63]

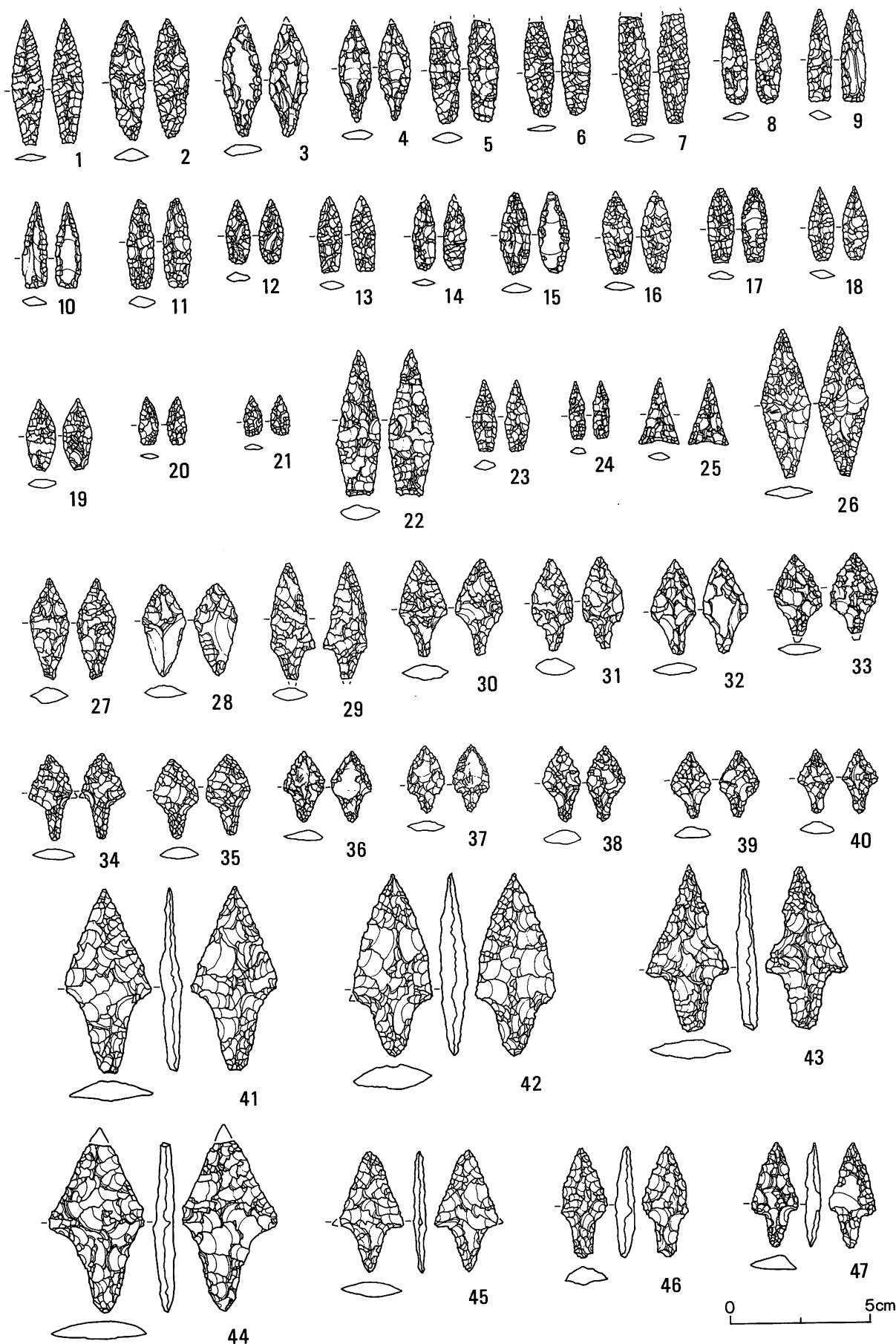
21点が出土し、すべてを図示した。200～205は4か所の打ち欠きをもつもの（ⅨA1）である。206～220は長軸の2か所に打ち欠きをもつもの（ⅨA3）である。205は、200～204と比較して小型であるが、短軸方向の側縁にもわずかではあるが打ち欠きがみられることからⅨA1とした。石質は、211・216・218が凝灰岩、この他はすべて安山岩である。

## 石核（Ⅺ群A類）[図Ⅵ—14—221～224 図版—64]

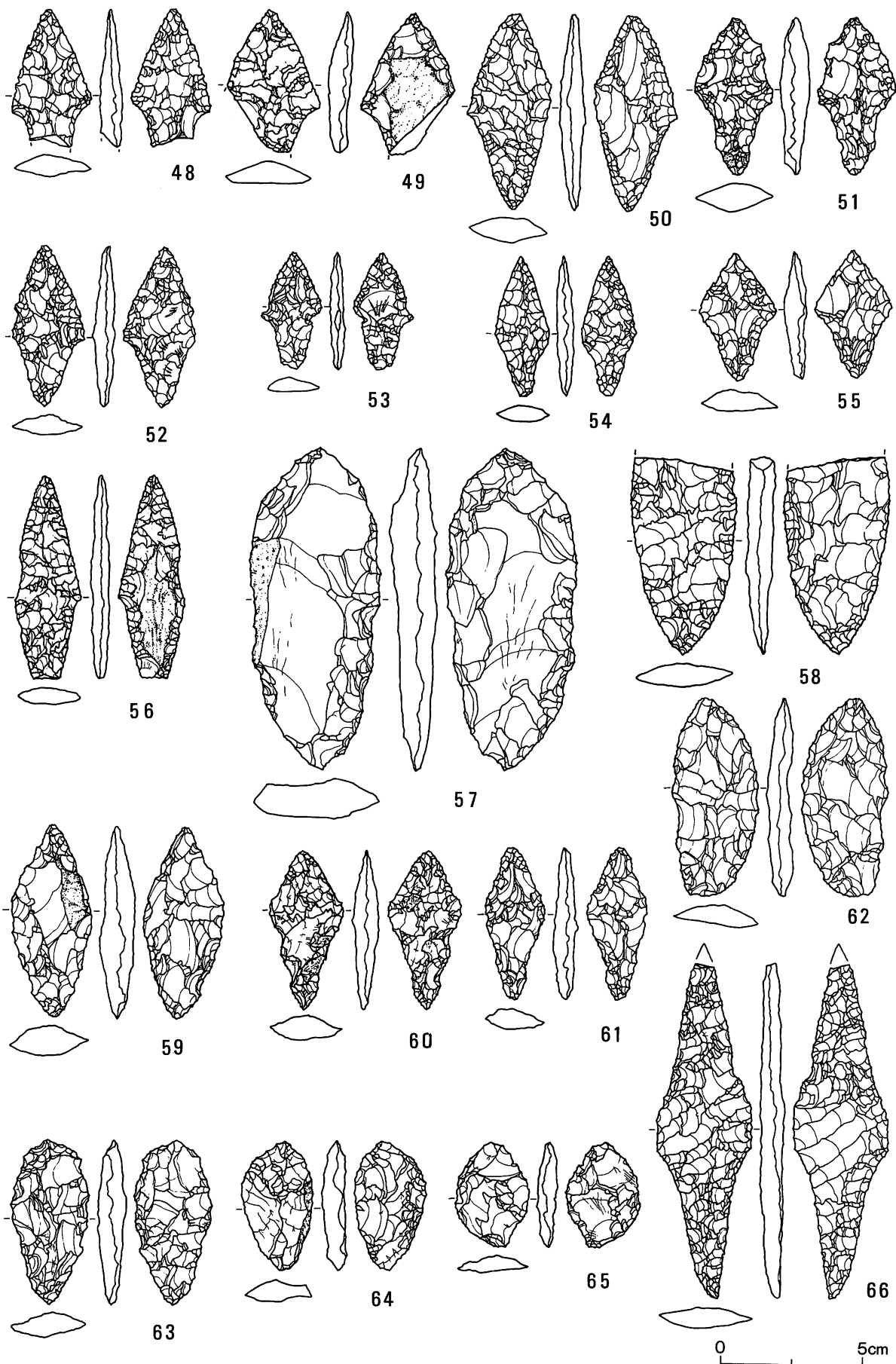
70点が出土している。このうち4点を図示した。221は残されている礫表皮から、径15cmほどの黒曜石の角礫が利用されている。石質は、221・222・224が黒曜石、223が頁岩である。

## 土製品 [図Ⅵ—14—221～225 図版—64]

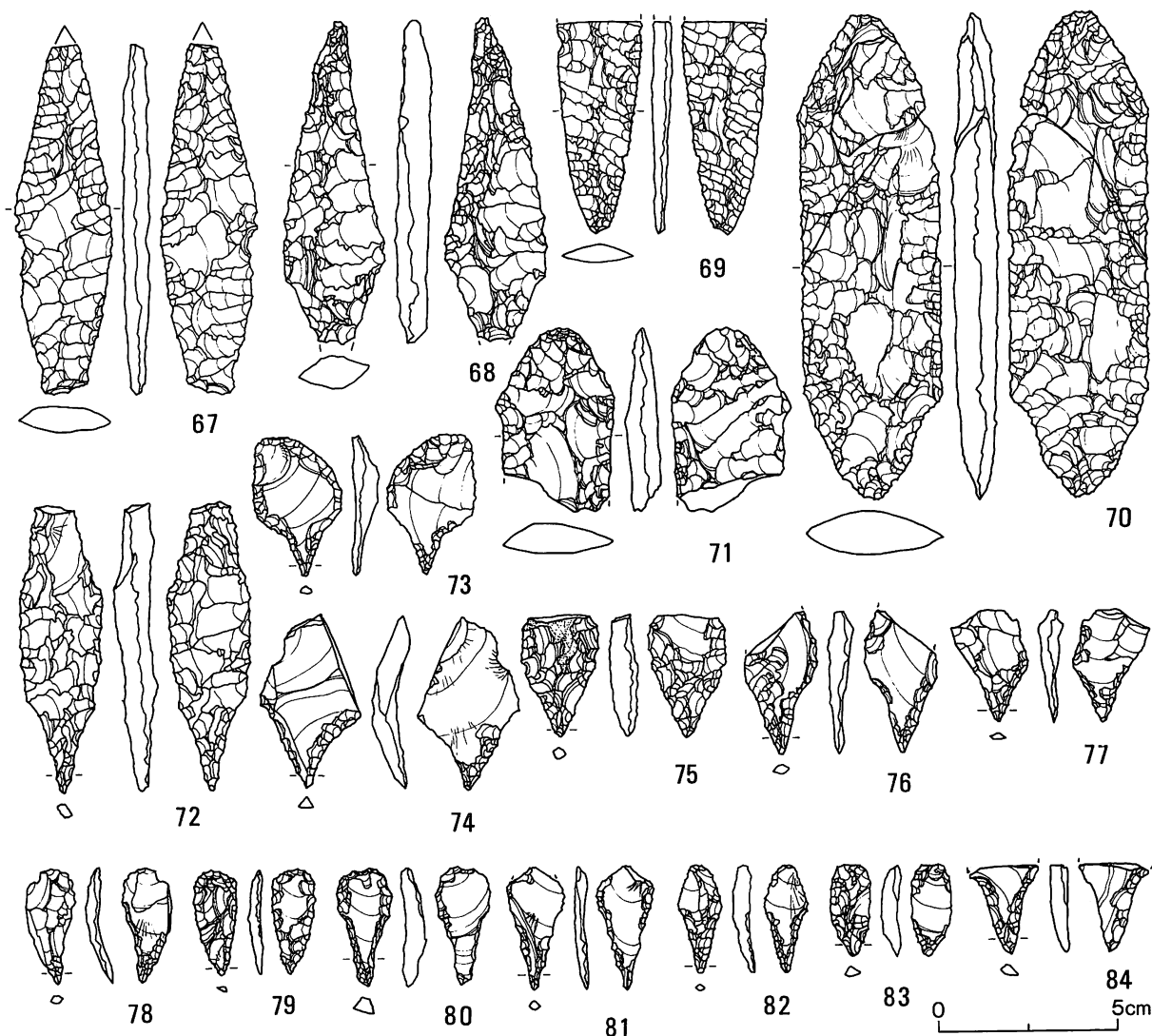
包含層から5点、遺構内から2点が検出された。ここでは、前者の5点について図示した。土製品は、いずれも土器破片を円形に整形した円盤状で、有孔のものとそうでないもの



図VI-1 包含層出土の石器(1)



図VI-2 包含層出土の石器(2)



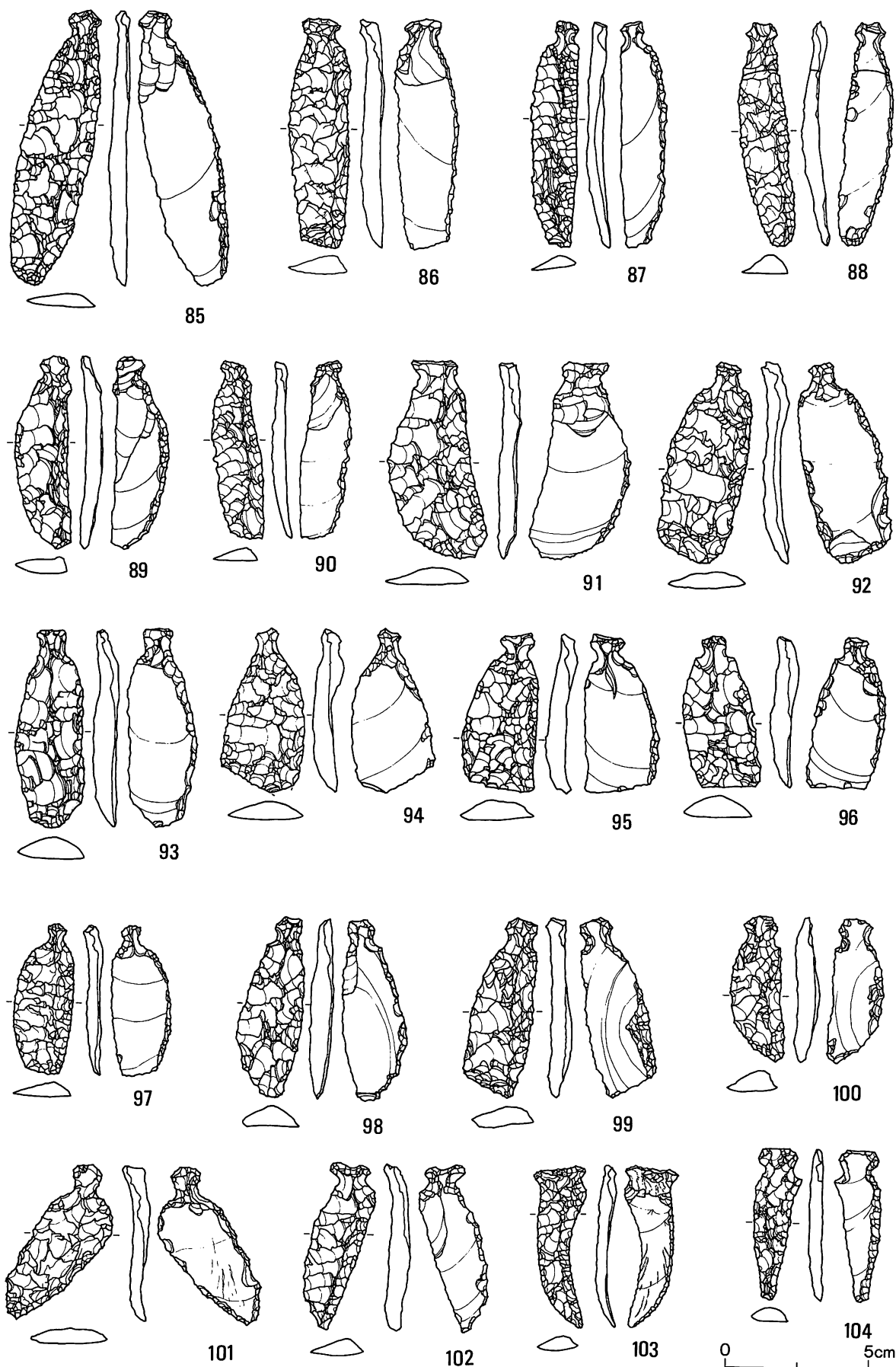
図VI-3 包含層出土の石器(3)

のことがみられる。221は、未加工の部分がみられることから、未製品と思われる。221～223、225は縄文時代早期の東釧路Ⅲ式土器、224は同中期の土器破片が使用されている。

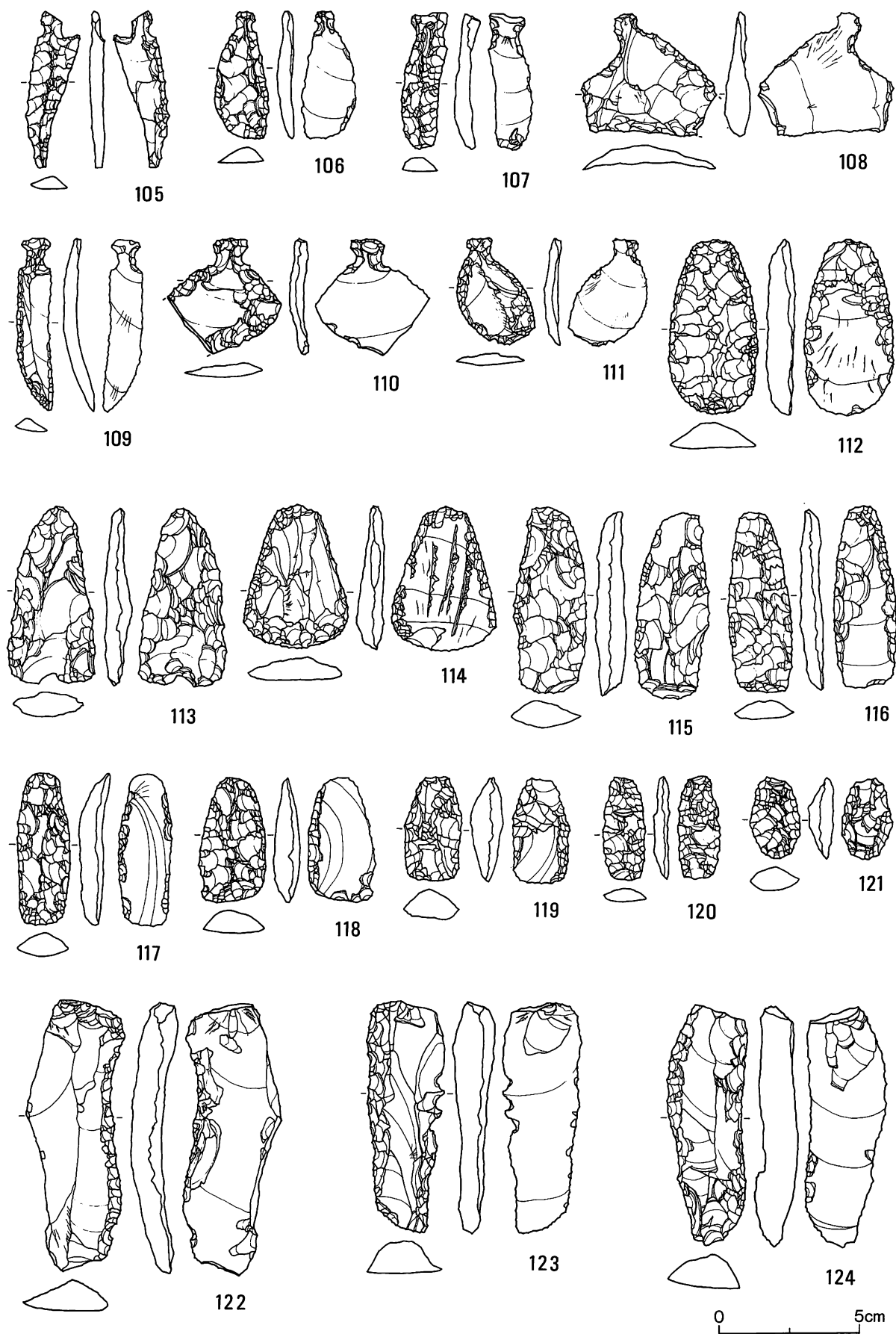
**石製品** [図VI-14-226・227 図版-64]

耕作表土Ⅰ層から、2点が検出された。226は、蛇紋岩製の有孔平玉である。227は、砂岩製の石製品の破片である。表・裏面は研磨加工されている。残存部位から、有孔石製品の可能性がある。

(立川トマス)

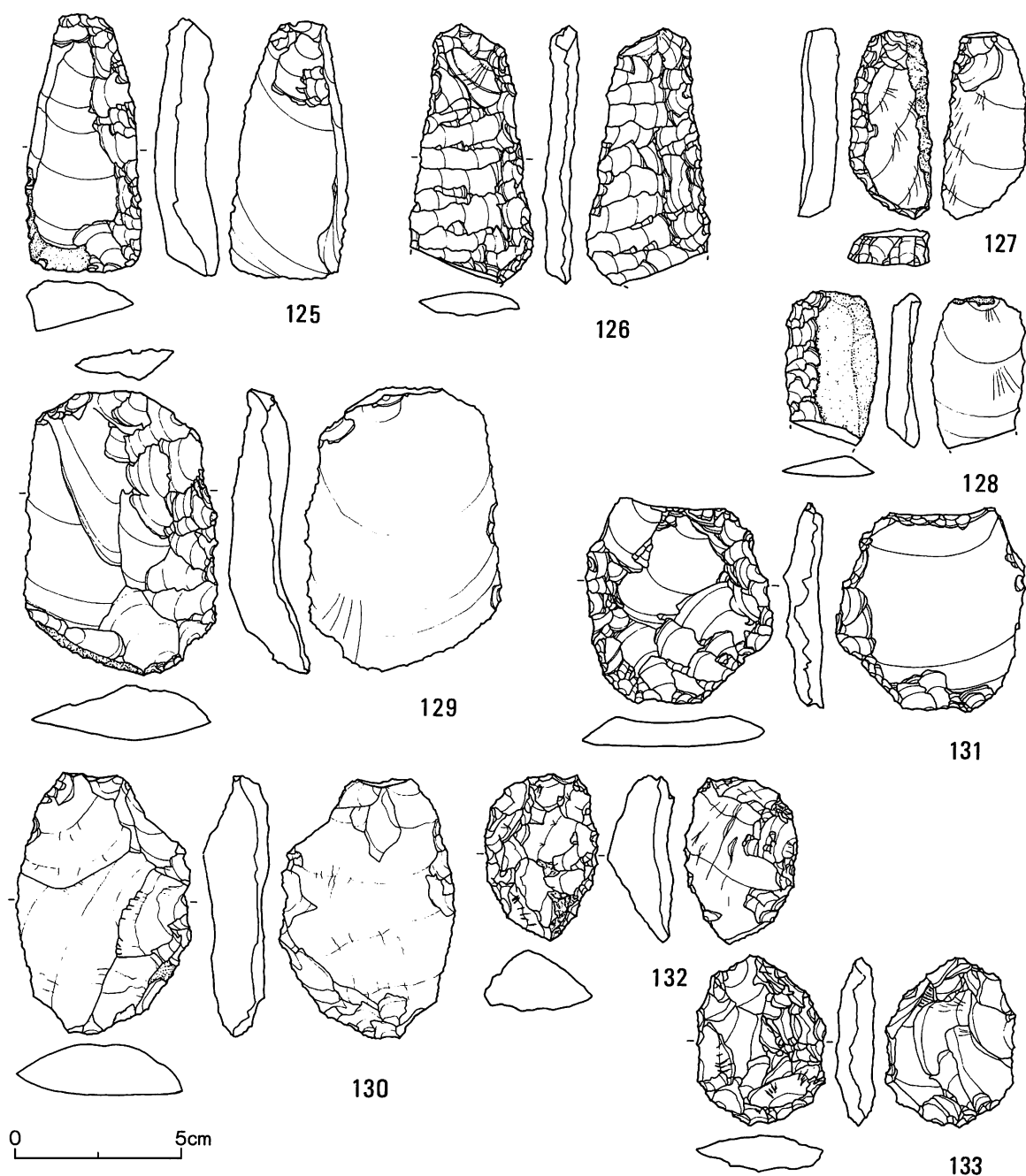


図VI-4 包含層出土の石器(4)

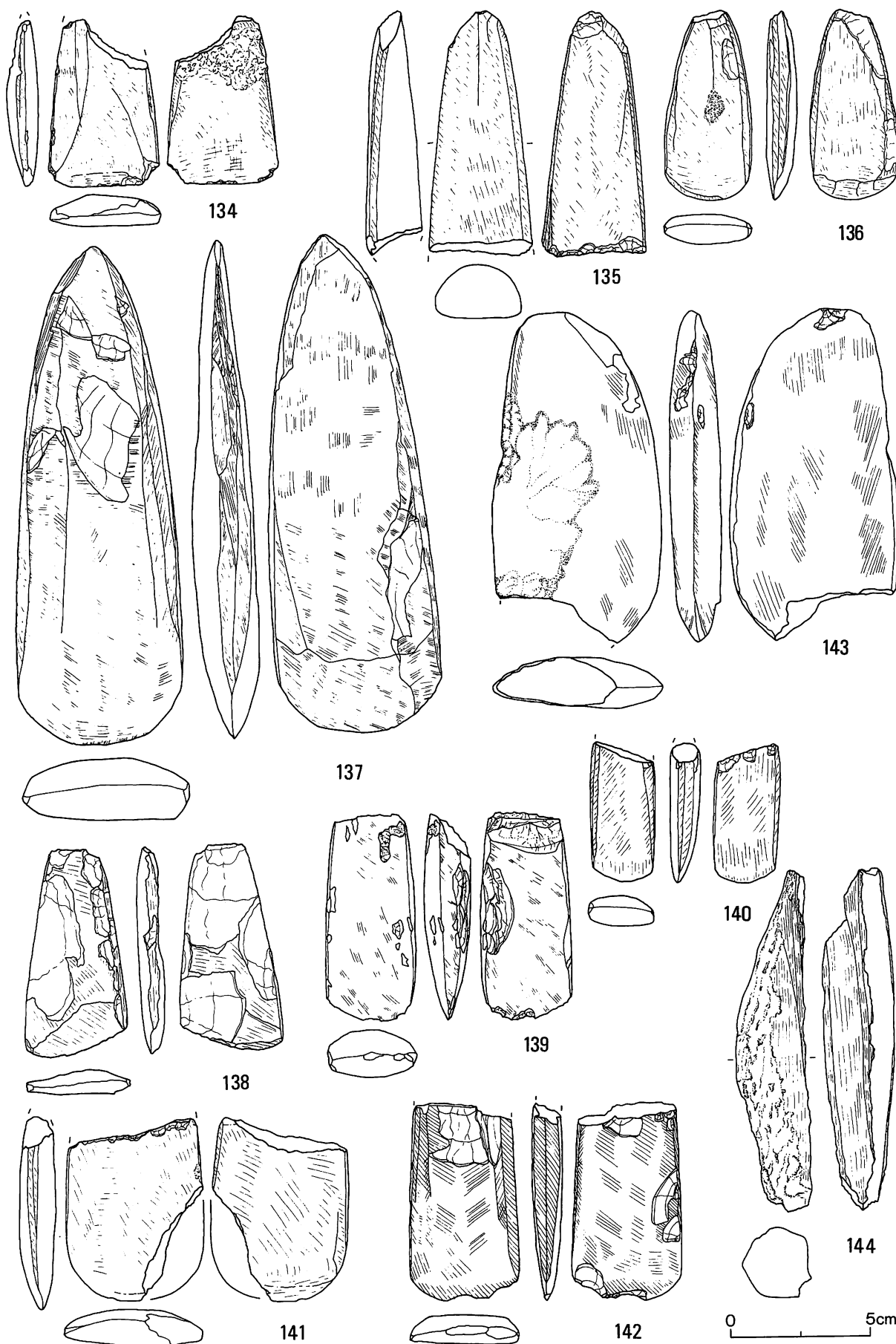


図VI-5 包含層出土の石器(5)

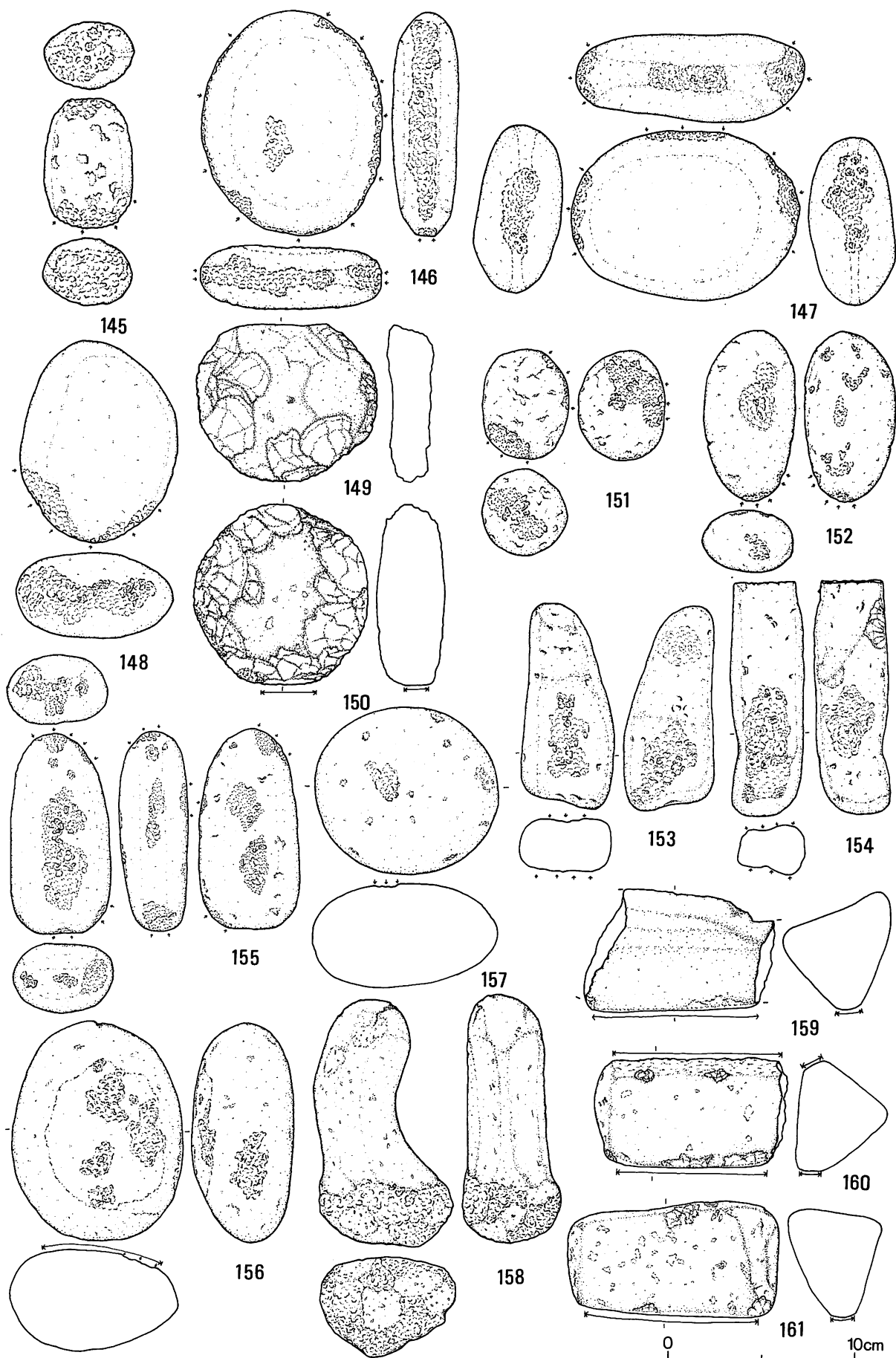




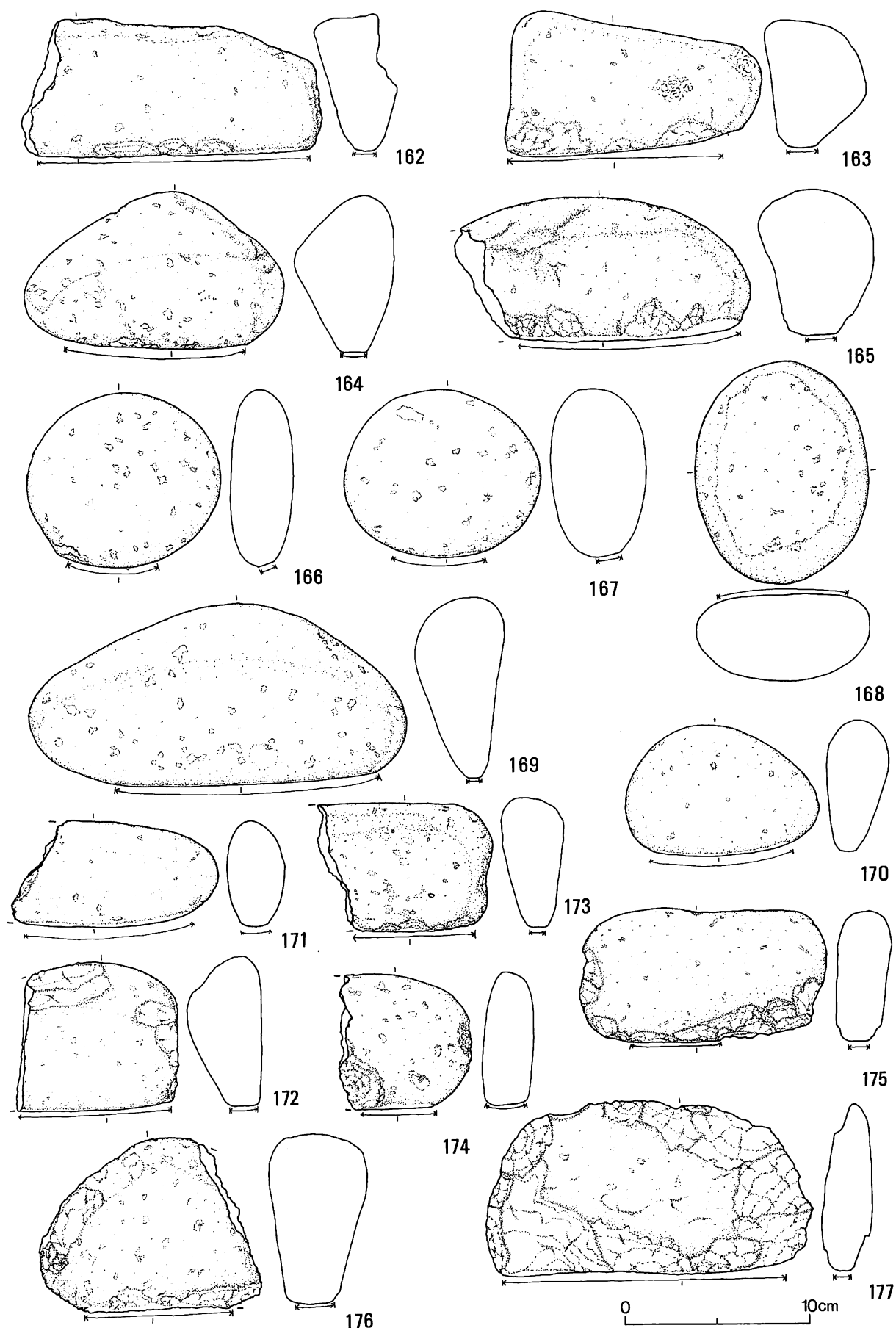
図VI—6 包含層出土の石器(6)



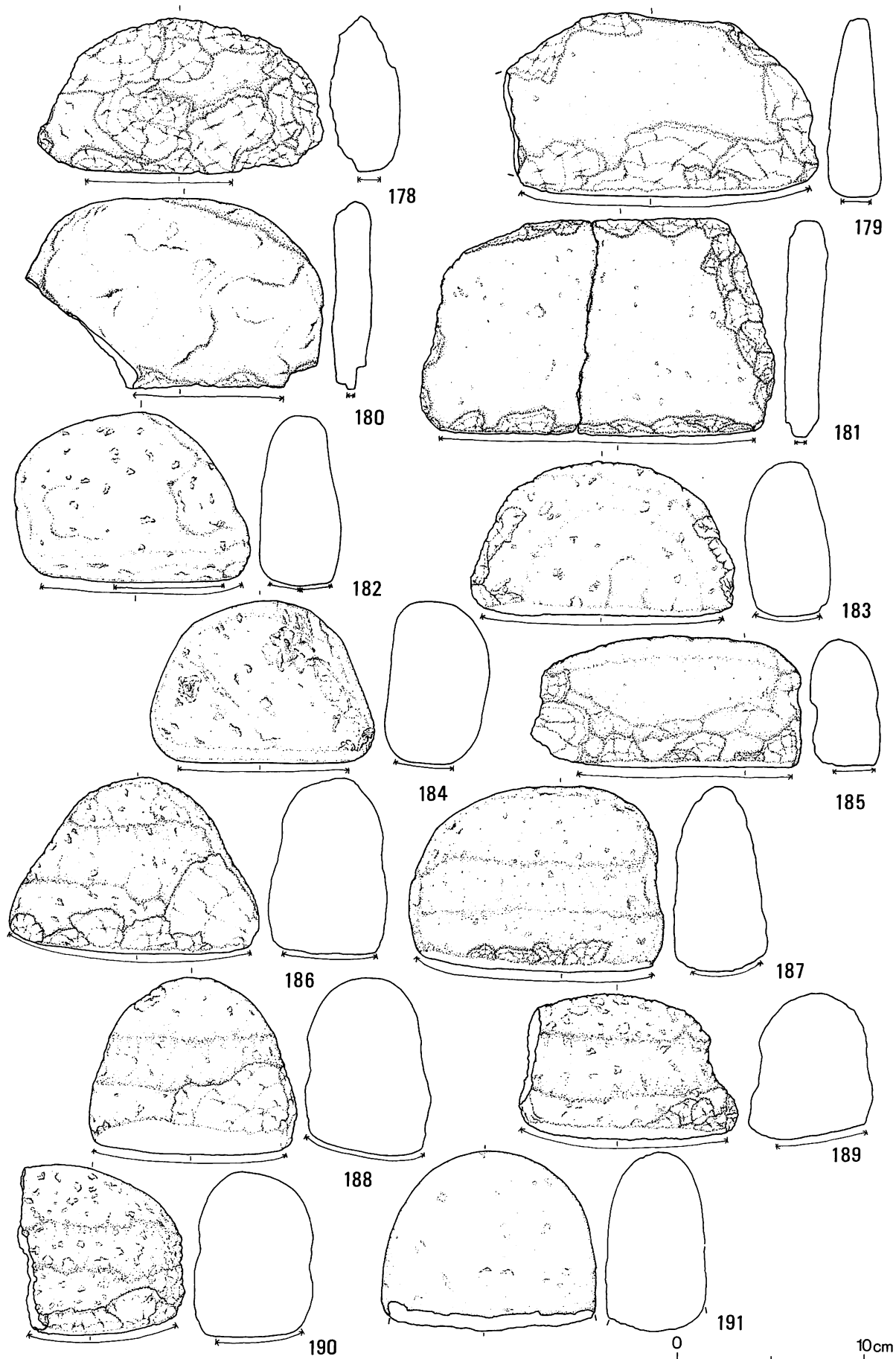
図VI-7 包含層出土の石器(7)



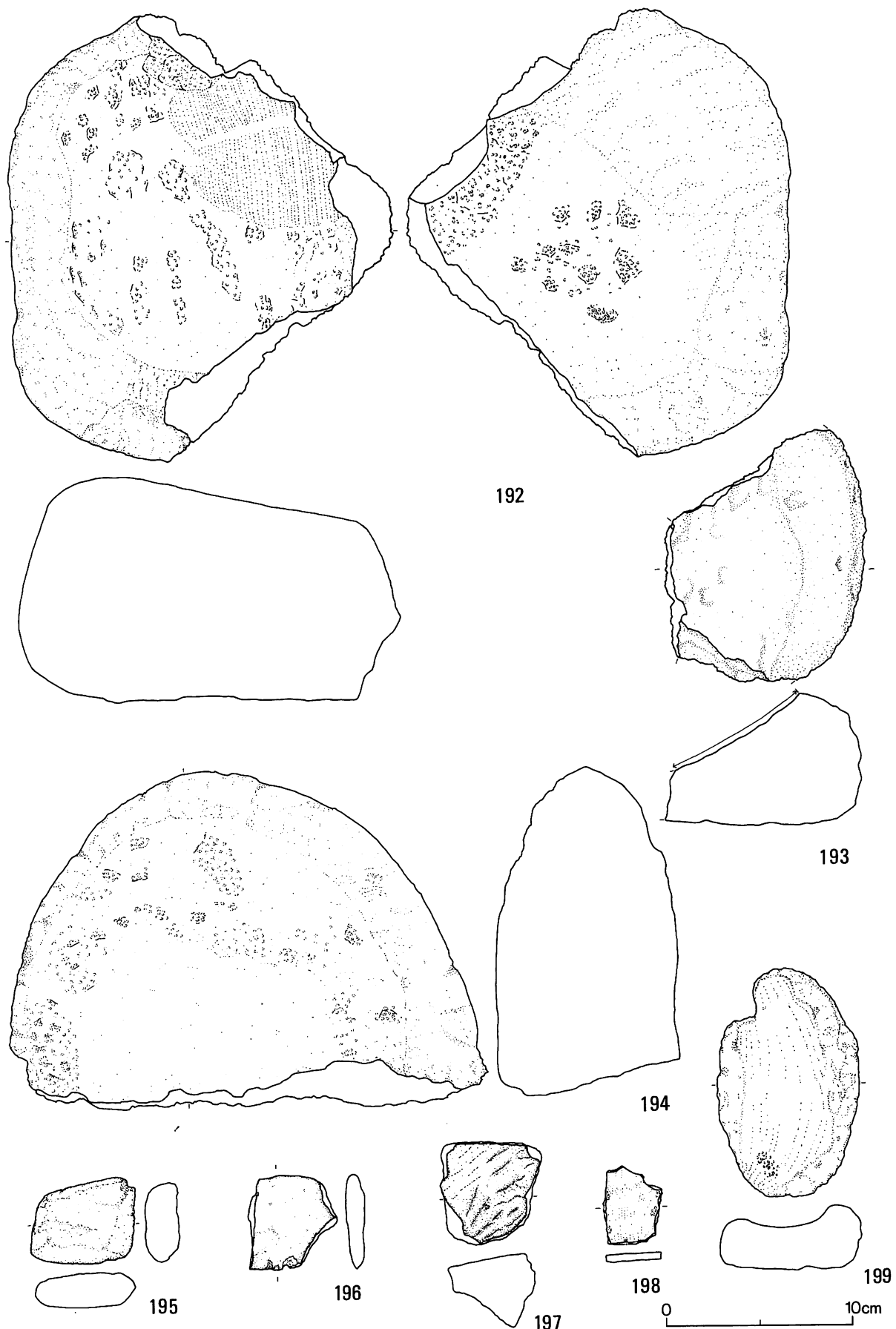
図VI-8 包含層出土の石器(8)



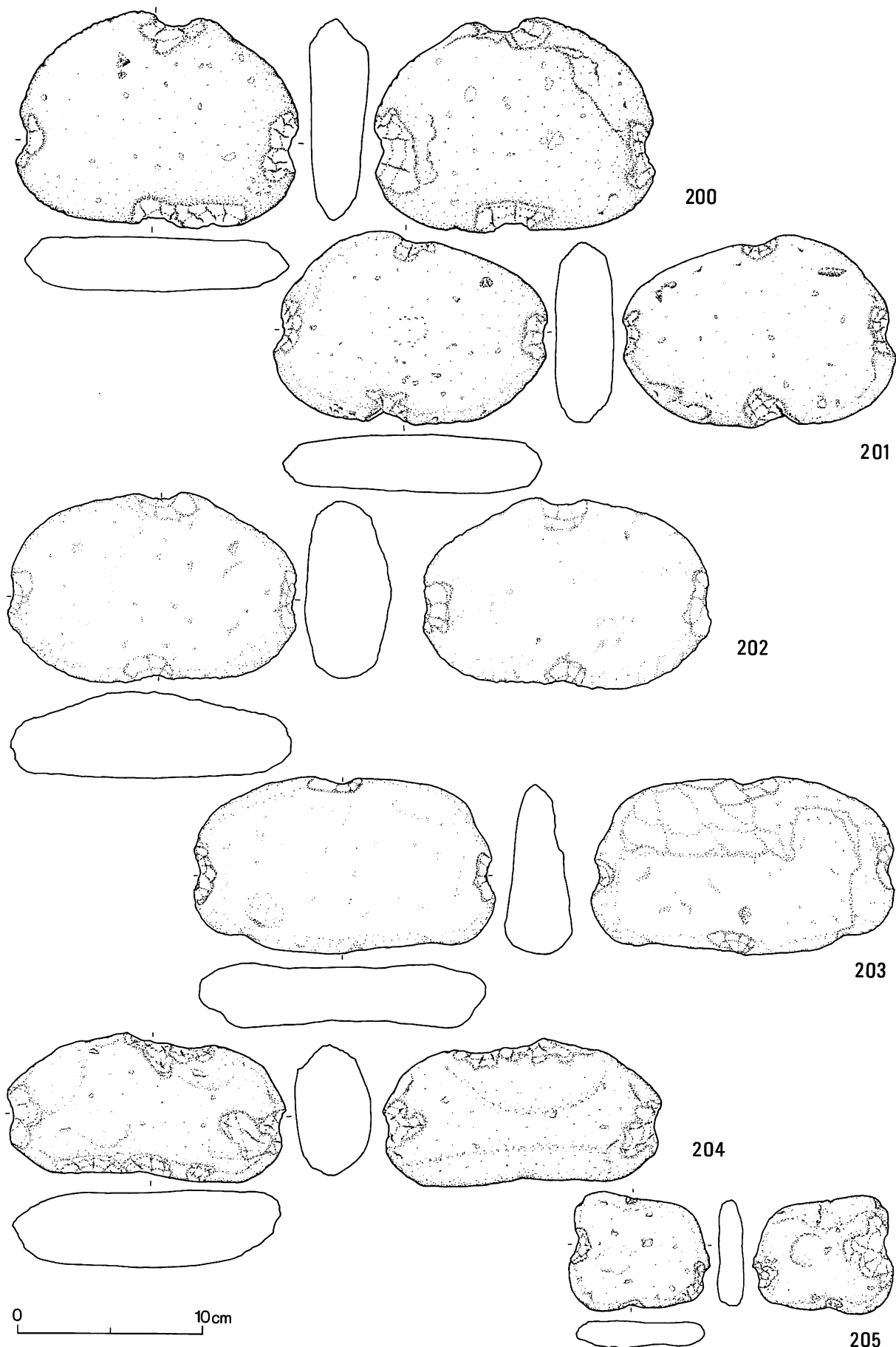
図VI—9 包含層出土の石器(9)



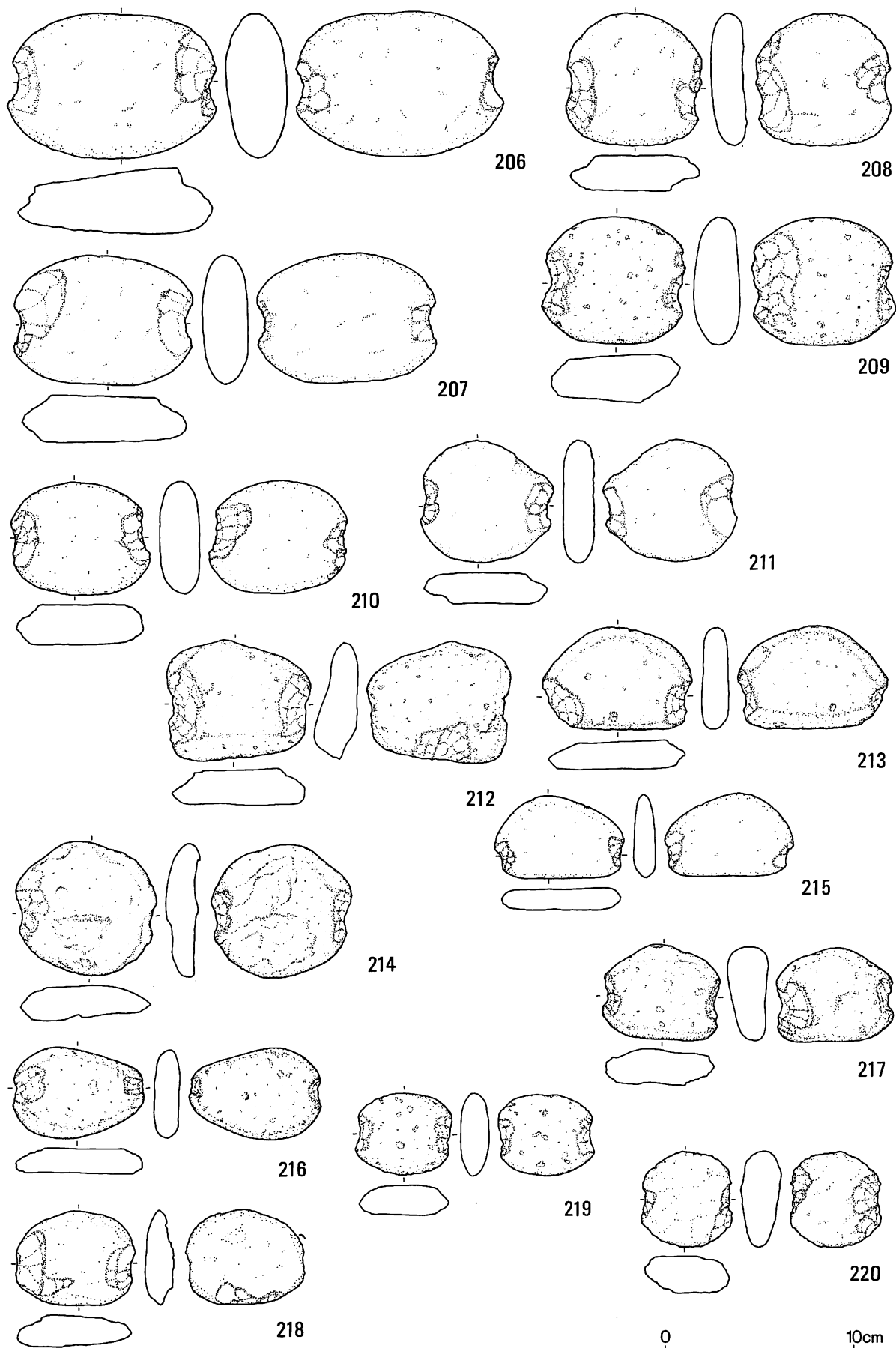
図VI—10 包含層出土の石器(19)



図VI-11 包含層出土の石器(11)

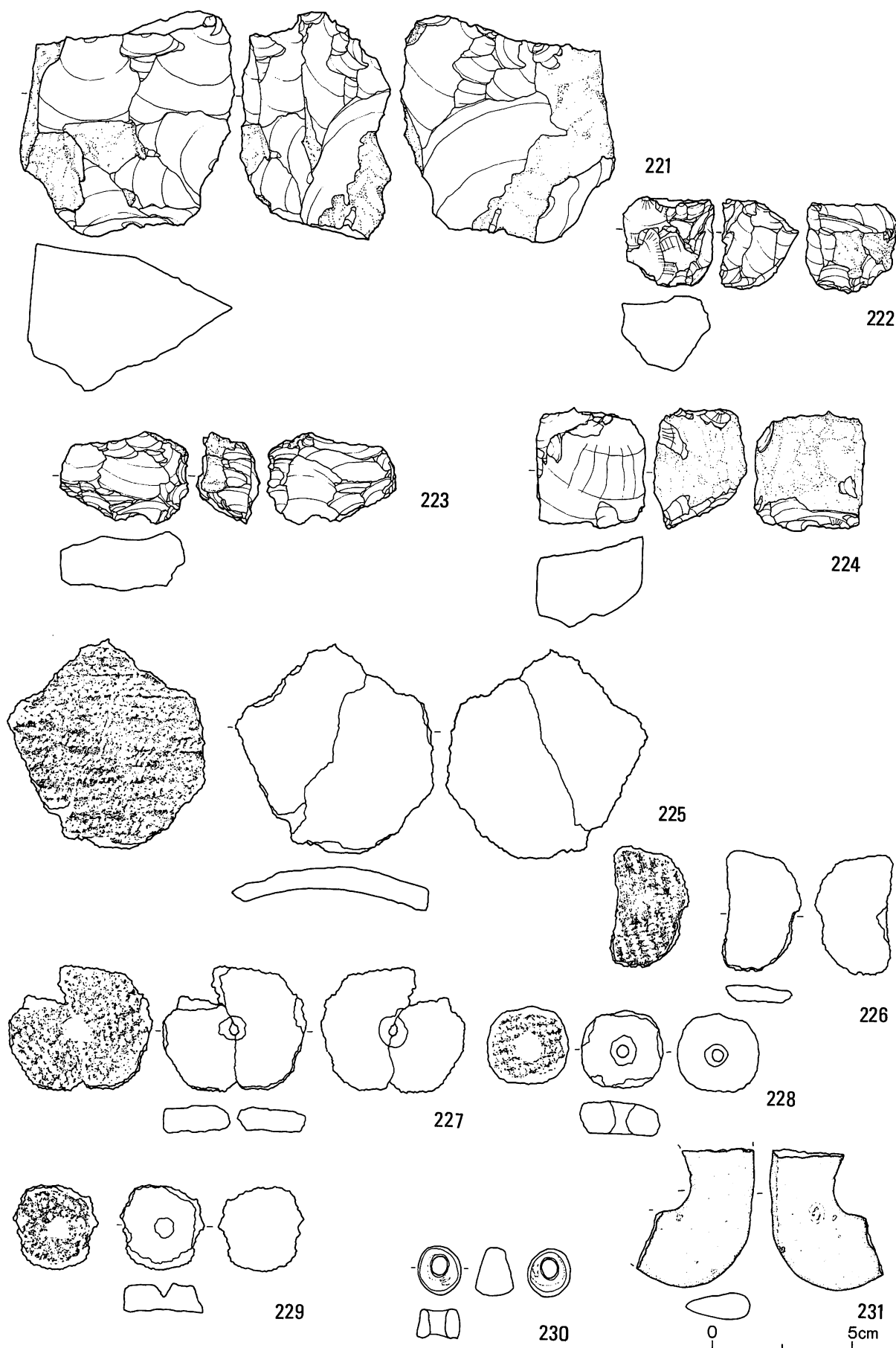


図VI-12 包含層出土の石器(12)



図VI-13 包含層出土の石器(13)





図VI-14 包含層出土の石器(14)

番号	名 称	分類	調査区・遺物番号	層位	大きさ(長さ×幅×高さcm・重さg)	石 質	備 考
1	石鏃	I A3a	N-72-a・40	I	4.5×1.1×0.3・1.1	頁岩	
2	"	"	L-69-b・12	"	4.3×1.3×0.4・1.9	"	
3	"	"	M-69-a・4	"	(4.0)×1.4×0.4・2.0	玄武岩	
4	"	"	J-72-a・8	"	(3.4)×1.2×0.5・1.5	流紋岩	
5	"	"	M-68-d・8	"	(3.5)×1.1×0.4・1.4	黒曜石	
6	"	"	M-68-b・29	"	(3.4)×1.0×0.2・0.7	"	
7	"	"	L-70-d・27	"	(3.9)×1.1×0.3・1.3	頁岩	
8	"	"	L-70-d・10	"	3.2×0.9×0.3・0.7	黒曜石	
9	"	"	M-69-c・44	"	3.3×0.9×0.3・0.8	頁岩	
10	"	"	M-70-a・6	"	3.6×1.4×0.6・2.2	"	
11	"	"	M-70-c・8	"	3.2×1.0×0.3・1.1	黒曜石	
12	"	"	L-72-a・12	"	2.3×0.9×0.4・0.6	"	
13	"	"	K-71-c・5	"	2.2×0.9×0.3・0.6	"	
14	"	"	M-71-a・16	"	(2.5)×0.8×0.3・0.5	"	
15	"	"	N-69-a・11	"	2.9×1.1×0.4・0.9	"	
16	"	"	M-72-a・23	"	(2.7)×1.1×0.3・0.7	"	
17	"	"	L-71-a・17	"	2.6×0.9×0.3・0.7	頁岩	
18	"	"	L-71-c・2	"	2.1×0.9×0.3・0.5	黒曜石	
19	"	"	K-71-b・6	"	2.7×1.1×0.3・0.7	"	
20	"	"	L-71-a・9	"	1.7×0.7×0.2・0.2	"	
21	"	"	L-70-a・22	"	1.4×0.7×0.2・0.2	"	
22	"	I A3b	I-73-b・19	"	5.2×1.6×0.6・3.1	"	
23	"	"	L-72-d・7	"	2.6×0.9×0.3・0.6	"	
24	"	"	M-69-b・21	"	2.0×0.6×0.2・0.2	"	
25	"	I A4a	J-72-a・3	"	(2.3)×1.4×0.2・0.5	"	
26	"	I A6	K-69-c・9	"	5.3×1.8×0.4・3.1	頁岩	
27	"	"	M-70-a・6	"	3.6×1.4×0.6・2.2	黒曜石	
28	"	"	K-71-b・44	"	3.3×1.5×0.4・1.6	頁岩	
29	"	I A7	K-71-d・6	"	(4.2)×1.6×0.4・2.1	黒曜石	
30	"	"	K-70-d・8	"	(3.4)×1.7×0.5・2.1	"	
31	"	"	N-69-a・10	"	3.2×1.4×0.6・2.2	"	
32	"	"	I-73-a・120	III	3.3×1.6×0.4・1.9	玄武岩	
33	"	"	I-73-a・9	I	(2.9)×1.7×0.4・1.4	黒曜石	
34	"	"	J-72-d・21	"	3.1×1.6×0.4・1.1	"	
35	"	"	J-72-b・4	"	2.8×1.6×0.4・1.5	"	
36	"	"	L-70-a・23	"	2.5×0.4×0.4・1.0	"	
37	"	"	J-73-a・12	"	2.4×1.3×0.4・0.9	"	
38	"	"	I-72-a・6	"	2.7×1.3×0.5・1.3	"	
39	"	"	J-72-a・2	"	2.4×1.4×0.4・0.9	"	
40	"	"	J-73-a・11	"	2.2×1.3×0.4・0.8	"	
41	石槍・ナイフ	I B1	K-71-c・91	VI	6.5×3.1×0.7・8.2	"	
42	"	"	L-70-b・85	I	6.5×2.8×0.9・11.3	"	
43	"	"	N-70-d・42	"	5.8×2.9×0.6・6.8	"	
44	"	"	M-72-a・25	"	(6.1)×3.4×0.8・10.1	"	
45	"	"	L-71-b・20	"	4.1×(2.3)×0.5・3.0	"	

番号	名 称	分類	調査区・遺物番号	層位	大きさ(長さ×幅×高さcm・重さg)	石 質	備 考
46	石槍・ナイフ	I B1	J-72-d・6	I	4.0×1.7×0.6・3.0	黒曜石	
47	"	"	I-73-a・3	"	3.7×1.7×0.5・2.2	"	
48	"	"	K-71-b・32	"	(4.8)×2.8×0.7・7.5	頁岩	
49	"	"	M-69-d・20	"	(5.0)×(3.1)×0.8・9.4	黒曜石	
50	"	"	K-72-c・8	"	(6.8)×2.9×0.9・11.3	"	
51	"	"	L-70-a・16	"	5.5×2.8×1.0・10.6	"	
52	"	"	L-71-a・11	"	5.6×2.6×0.7・6.7	"	
53	"	"	J-72-a・5	"	4.1×2.2×0.5・3.2	"	
54	"	"	K-70-d・60	VI	4.9×1.9×0.6・4.2	"	
55	"	"	K-71-c・139	"	4.5×2.7×0.7・5.7	"	
56	"	"	M-68-c・5	I	(7.1)×2.3×0.6・8.1	"	
57	"	I B2	L-70-b・22	"	11.3×4.6×1.4・71.1	頁岩	
58	"	"	L-70-b・16	"	(6.8)×3.8×0.8・23.8	"	
59	"	"	K-70-c・3	"	6.7×2.8×1.1・17.4	黒曜石	
60	"	"	L-71-a・10	"	5.5×2.6×0.9・8.3	"	
61	"	"	M-72-d・18	"	5.4×2.1×0.7・6.4	"	
62	"	"	L-71-b・12	"	6.9×3.2×0.8・17.1	頁岩	
63	"	"	I-72-a・3	"	5.8×2.8×0.9・12.1	"	
64	"	"	L-70-b・17	"	4.6×2.5×0.7・8.2	黒曜石	
65	"	"	M-72-a・16	"	3.7×2.7×0.7・5.3	"	
66	"	"	L-69-d・18	"	(11.8)×3.3×0.8・23.2	頁岩	
67	"	"	K-71-b・50	"	(9.8)×2.7×0.8・19.5	"	
68	"	"	L-69-d・19	"	(9.0)×2.9×0.9・22.2	"	
69	"	"	J-72-b・15	"	(5.9)×(2.4)×0.5・7.2	"	
70	"	"	K-71-d・31	"	13.6×3.9×1.2・76.0	黒曜石	J-71-c-9、 20と接合
71	"	"	I-71-a・11	"	(5.2)×3.3×0.9・14.6	"	
72	石鏃	IIA2	K-70-b・4	"	(7.9)×2.3×1.0・16.5	頁岩	
73	"	"	K-72-b・23	"	3.8×2.4×0.2・4.9	"	
74	"	"	M-69-d・21	"	4.8×2.9×0.7・7.2	"	
75	"	"	L-69-b・14	"	(3.4)×2.1×0.8・4.9	流紋岩	
76	"	"	K-71-a・7	"	(4.0)×2.0×0.6・3.1	頁岩	
77	"	"	M-70-b・15	"	2.9×1.8×0.7・2.5	"	
78	"	"	M-68-d・9	"	3.2×1.3×0.4・1.3	黒曜石	
79	"	"	L-69-b・13	"	2.9×1.2×0.4・1.3	頁岩	
80	"	"	L-69-a・38	"	3.3×1.5×0.5・2.2	"	
81	"	"	M-69-d・58	"	3.4×1.6×0.3・1.3	"	
82	"	"	M-71-a・19	"	3.0×1.2×0.4・1.1	黒曜石	
83	"	"	M-71-a・9	"	2.5×1.1×0.5・1.4	"	
84	"	"	L-69-d・12	"	(2.5)×2.0×0.5・1.7	頁岩	
85	つまみ付きナイフ	IIIA1	M-69-a・32	III	9.7×2.5×0.6・15.8	"	
86	"	"	M-69-d・6	I	8.0×2.1×0.6・12.5	"	
87	"	"	M-69-d・11	"	7.9×1.6×0.5・7.7	メノウ	
88	"	"	K-71-d・27	I	7.8×1.7×0.6・7.7	頁岩	
89	"	"	M-69-b・8	"	6.7×1.9×0.6・8.5	"	
90	"	"	K-71-d・28	"	6.2×1.6×0.5・5.1	"	

表 VI—1 包含層掲載石器属性一覧

番号	名 称	分類	調査区・遺物番号	層位	大きさ(長さ×幅×高さcm・重さg)	石 質	備 考
91	つまみ付きナイフ	III A1	K-70-c・10	I	6.8×3.5×0.6・15.2	頁岩	
92	"	"	L-69-a・79	III	7.0×2.8×0.7・13.9	"	
93	"	"	M-69-a・7	I	6.9×2.4×0.8・13.8	"	
94	"	"	K-70-c・27	"	5.7×2.4×0.6・10.8	"	
95	"	"	N-69-a・18	"	5.5×2.6×0.7・10.8	メノウ	
96	"	"	M-69-d・7	"	5.4×2.5×0.8・10.9	頁岩	
97	"	"	K-70-b・21	"	4.9×1.4×0.6・4.3	"	
98	"	"	L-70-a・10	"	6.3×2.2×0.7・10.1	"	
99	"	"	L-69-a・30	"	6.1×2.2×0.6・9.9	メノウ	
100	"	"	N-70-a・17	"	5.0×1.7×0.7・6.4	頁岩	
101	"	"	K-69-b・28	VII	6.0×2.3×0.6・8.6	"	
102	"	"	K-69-c・19	I	5.9×1.8×0.7・7.8	"	
103	"	"	L-72-a・7	"	5.6×1.8×0.5・4.1	"	
104	"	"	M-69-d・12	"	5.3×1.6×0.6・4.0	"	
105	"	"	K-69-b・16	"	5.6×1.5×0.4・3.2	"	
106	"	III A2	N-69-a・32	"	4.7×1.8×0.5・4.7	"	
107	"	"	M-69-b・7	"	(4.5)×1.9×0.6・4.5	"	
108	"	"	L-70-a・17	"	4.2×(4.8)×0.6・10.9	"	
109	"	"	M-71-c・14	"	6.1×1.3×0.5・3.6	"	
110	"	"	O-71-a・2	"	4.2×4.1×0.5・7.0	"	
111	"	"	K-71-a・8	"	4.0×2.4×0.4・4.2	"	
112	スクレイパー	III B1	N-68-d・3	"	6.2×3.2×0.9・21.1	"	
113	"	"	J-71-c・7	"	(6.3)×3.1×0.8・16.2	"	
114	"	"	N-68-a・44	VII	5.0×3.7×0.9・16.5	"	
115	"	"	M-70-d・28	I	6.5×2.6×1.0・18.5	"	
116	"	"	M-69-d・115	VII	6.4×2.2×0.6・12.8	"	
117	"	"	L-71-a・6	I	5.3×1.9×0.9・10.2	"	
118	"	"	K-69-c・12	"	4.4×2.4×0.9・10.1	"	
119	"	"	M-71-a・23	"	3.6×2.0×1.0・8.1	"	
120	"	"	N-70-d・41	"	3.6×1.5×0.5・3.0	"	
121	"	"	M-71-a・22	"	2.9×1.8×0.9・4.5	黒曜石	
122	"	III B5	J-72-a・10	"	9.6×3.1×1.1・41.1	頁岩	
123	"	"	M-72-a・26	"	7.9×2.7×1.3・29.6	"	
124	"	"	M-70-a・37	VII	8.6×2.8×1.2・30.6	"	
125	"	"	M-71-c・22	I	7.7×3.5×1.5・42.4	黒曜石	
126	"	"	M-69-c・31	"	(7.7)×3.7×0.7・25.4	頁岩	
127	"	"	K-72-c・3	"	5.6×2.5×1.1・20.0	"	
128	"	"	M-69-a・8	"	(4.5)×2.8×0.8・11.2	黒曜石	
129	"	"	M-70-d・15	"	8.5×5.9×1.6・88.4	頁岩	
130	"	"	L-71-c・10	"	7.8×5.2×1.5・66.5	"	
131	"	"	L-79-c・20	"	6.4×6.1×1.0・39.4	"	
132	"	"	K-69-c・13	"	5.0×3.9×1.1・22.2	"	
133	"	"	M-69-b・16	"	5.0×3.4×1.8・26.8	黒曜石	
134	石斧	IVA1	J-71-c・10	"	(5.9)×(3.9)×1.2・34.0	蛇紋岩	
135	"	"	K-71-d・16	"	(8.7)×(3.7)×1.9・84.4	緑色泥岩	

番号	名 称	分類	調査区・遺物番号	層位	大きさ(長さ×幅×高さcm・重さg)	石 質	備 考
136	石斧	IVA3	J-73-a・8	IV	6.8×3.1×1.1・35.4	緑色泥岩	
137	"	"	I-73-b・311	"	17.7×6.0×2.3・345.0	"	
138	"	"	N-70-a・19	I	7.4×3.7×0.8・34.8	片岩	
139	"	"	L-69-d・6	"	(7.3)×3.2×2.0・60.8	緑色泥岩	
140	"	"	I-72-a・10	"	(4.9)×2.4×1.0・22.4	"	
141	"	"	K-72-b・25	"	(6.6)×(5.0)×1.2・52.4	蛇紋岩	
142	"	"	I-72-a・9	"	(7.0)×3.9×1.1・5・8	緑色泥岩	
143	"	"	K-71-a・29	"	(11.8)×6.1×1.8・182.0	蛇紋岩	
144	"	IVA8	M-71-b・9	"	12.2×2.8×2.5・96.8	"	
145	たたき石	VA1	J-72-c・9	"	6.8×4.8×3.5・159.0	安山岩	
146	"	VA2	M-72-d・36	"	11.9×9.7×3.2・630.0	"	
147	"	"	N-68-d・49	VI	12.2×9.0×4.7・710.0	"	
148	"	"	M-70-d・37	I	10.6×8.5×4.5・571.0	"	
149	"	"	I-73-a・261	III	8.3×9.6×2.8・283.0	"	
150	"	"	I-71-b・39	II	9.5×9.3×3.6・437.0	"	
151	"	VA3	J-72-d・20	I	5.9×4.6×4.6・169.0	"	
152	"	VA4	N-71-d・6	"	8.1×4.9×3.3・179.0	"	
153	"	"	K-69-c・22	"	10.9×4.9×2.8・205.0	"	
154	"	"	I-71-d・15	"	12.4×4.0×2.6・208.0	"	
155	"	"	K-72-b・26	"	10.6×5.3×3.7・315.0	"	
156	"	"	N-68-d・15	"	11.9×9.0×5.4・780.0	"	
157	"	"	M-72-d・3	"	8.8×9.8×5.5・720.0	"	
158	"	VA8	M-72-a・4	"	13.2×7.1×5.3・475.0	"	
159	すり石	VIA1	L-72-d・15	"	6.6×10.1×5.7・421.0	"	
160	"	"	K-70-b・6	"	6.0×10.2×4.3・464.0	"	
161	"	"	K-69-c・42	VI	6.1×11.2×4.2・477.0	"	
162	"	"	L-72-c・14	"	7.5×(16.2)×4.4・725.0	"	
163	"	"	M-71-b・22	"	7.9×14.0×5.5・780.0	"	
164	"	"	K-71-b・53	"	8.4×14.2×5.4・760.0	"	
165	"	"	N-72-a・36	IV	7.7×(15.9)×6.2・1020.0	"	
166	"	VIA2	K-70-d・13	I	9.4×10.5×3.3・521.0	"	
167	"	"	M-69-d・111	VI	9.0×10.5×5.2・710.0	"	
168	"	"	M-69-a・10	I	11.9×9.5×4.8・790.0	"	
169	"	"	M-71-a・33	VI	9.7×20.3×4.9・1335.0	"	
170	"	"	L-71-b・15	I	7.0×10.5×3.3・338.0	"	
171	"	"	M-71-b・10	"	5.7×(11.2)×3.1・265.0	"	
172	"	"	I-71-a・30	II	8.0×8.9×4.0・268.0	"	
173	"	"	I-71-a・14	I	7.3×(7.2)×2.7・252.0	"	
174	"	"	I-71-d・16	"	7.0×(9.4)×3.5・358.0	"	
175	"	"	I-71-b・22	II	7.2×(13.3)×2.9・430.0	"	
176	"	"	I-71-a・15	I	9.3×(12.0)×5.4・630.0	"	
177	"	VIA3	M-70-b・139	VI	9.4×17.7×2.7・545.0	"	
178	"	"	I-73-b・12	I	8.3×15.2×3.7・441.0	"	
179	"	"	M-70-c・29	"	9.7×16.8×2.8・660.0	玄武岩	
180	"	"	I-71-c・10	"	10.0×(16.0)×2.1・508.0	"	

表VI-1 包含層掲載石器属性一覧

番号	名 称	分類	調査区・遺物番号	層位	大きさ(長さ×幅×高さcm・重さg)	石 質	備 考
181	すり石	VIA3	M-70-a・15	I	11.6×18.9×2.2・917.0	安山岩	
182	"	VIA4	L-70-d・12	"	9.0×12.6×4.3・710.0	閃緑岩	
183	"	"	K-69-b・7	"	8.2×14.1×4.7・665.0	安山岩	
184	"	"	M-70-a・72	III	8.6×12.0×5.6・770.0	"	
185	"	"	M-71-a・13	I	7.0×14.4×3.7・500.0	"	
186	"	"	M-70-b・94	I	9.4×13.3×6.4・865.0	"	
187	"	"	M-70-a・	"	9.8×13.6×5.0・1015.0	流紋岩	
188	"	"	L-70-c・15	"	9.4×11.0×6.7・830.0	安山岩	
189	"	"	I-73-b・23	"	7.7×(11.7)×6.6・670.0	"	
190	"	"	I-71-a・32	VII	9.0×(9.0)×6.4・700	"	
191	"	VIA8	M-70-a・73	III	9.5×11.5×5.3・905.0	"	
192	台石	VIA	I-73-a・521	II	(25.0)×(23.7)×12.0・6760.0	"	
193	"	"	M-72-d・10	I	(10.8)×(13.2)×7.0・840.0	"	
194	"	"	I-73-a・668	VI	(18.0)×(25.6)×(9.5)・6520.0	"	
195	石鏃	VIA1	K-71-b・38	I	4.6×5.6×1.8・51.4	凝灰岩	
196	"	"	J-72-a・14	"	5.1×(4.3)×1.0・31.4	"	
197	砥石	VIB2	M-70-b・60	"	5.5×5.5×4.0・124.5	"	
198	"	"	M-72-b・340	IV	(4.2)×(3.2)×(0.4)・8.0	"	
199	"	"	I-71-a・41	VIII	11.2×7.6×3.4・311.6	安山岩	
200	石鏃	IXA1	K-70-b・29	"	15.2×11.6×3.1・755.0	"	
201	"	"	L-69-d・145	"	14.7×10.3×3.1・695.0	"	
202	"	"	K-70-c・76	"	15.4×10.2×4.6・918.0	"	
203	"	"	M-70-b・277	VI	16.2×9.4×3.6・800.0	"	
204	"	"	K-71-b・54	I	14.9×7.9×4.1・680.0	"	
205	"	"	M-72-b・19	"	7.6×6.4×1.4・100.4	"	
206	"	IXA2	N-68-d・85	VII	11.0×7.6×3.3・385.8	"	
207	"	"	N-70-d・183	VI	9.5×6.8×2.5・244.2	"	
208	"	"	M-70-b・251	"	7.1×6.9×1.9・134.8	"	
209	"	"	L-70-c・21	I	7.7×6.8×2.5・169.8	"	
210	"	"	L-70-c・350	VI	7.3×6.9×2.1・144.6	"	
211	"	"	L-70-c・28	VII	7.1×6.4×1.7・110.2	凝灰岩	
212	"	"	N-70-d・37	I	7.6×6.4×1.8・138.8	安山岩	
213	"	"	M-71-c・23	"	8.0×5.4×1.5・91.2	"	
214	"	"	L-70-c・7	"	7.5×7.0×1.7・119.2	"	
215	"	"	M-71-c・94	IV	6.8×4.3×1.2・51.2	"	
216	"	"	M-71-d・27	I	6.8×4.8×1.3・67.0	凝灰岩	
217	"	"	M-71-d・26	"	6.2×5.0×2.1・87.4	安山岩	
218	"	"	M-72-b・192	IV	6.3×5.0×1.5・74.4	凝灰岩	
219	"	"	L-70-d・22	I	5.1×4.4×1.6・50.4	安山岩	
220	"	"	M-71-c・113	IV	4.8×5.1×2.1・61.4	"	
221	石核	XIA	I-71-d・87	VII	8.0×7.6×5.2・278.2	黒曜石	
222	"	"	M-71-c・28	IV	3.2×3.2×2.7・28.0	"	
223	"	"	M-71-c・17	I	3.0×4.6×2.1・33.2	頁岩	
224	"	"	M-69-c・223	VI	4.2×3.9×3.3・59.2	黒曜石	
225	土製品		M-71-c・433	VII	7.4×7.1×0.8・37.6		

番号	名 称	分類	調査区・遺物番号	層位	大きさ(長さ×幅×高さcm・重さg)	石 質	備 考
226	土製品		I-71-d・86	VII	4.4×5.1×0.9・19.2		I-71-d・109と接合
227	"		M-71-a・438	"	4.2×(2.8)×0.6・7.2		
228	"		J-72-c・27	I	2.8×2.9×1.1・8.8		
229	"		K-72-b・242	VI	3.1×3.0×1.0・7.6		
230	石製品		J-71-b・12	I	1.5×1.8×1.1・4.4		
231	"		N-70-d・20	"	(5.0)×(4.2)×2.1・24.8		

表 VI—1 包含層掲載石器属性一覧





25%調査状況



完全掘状況



## 図版 2



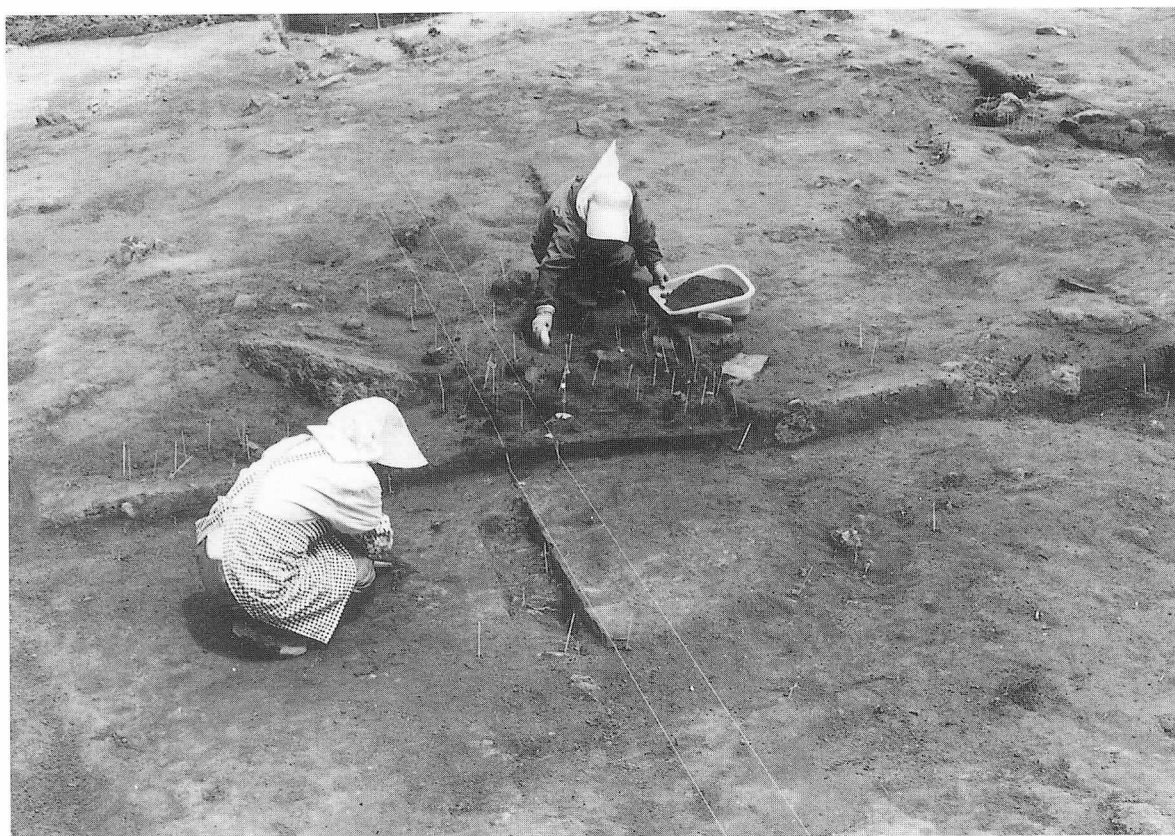
包含層調査状況



72ライン土層断面（O-72からP-72区間）



72ライン土層断面（L-72からN-72区間）

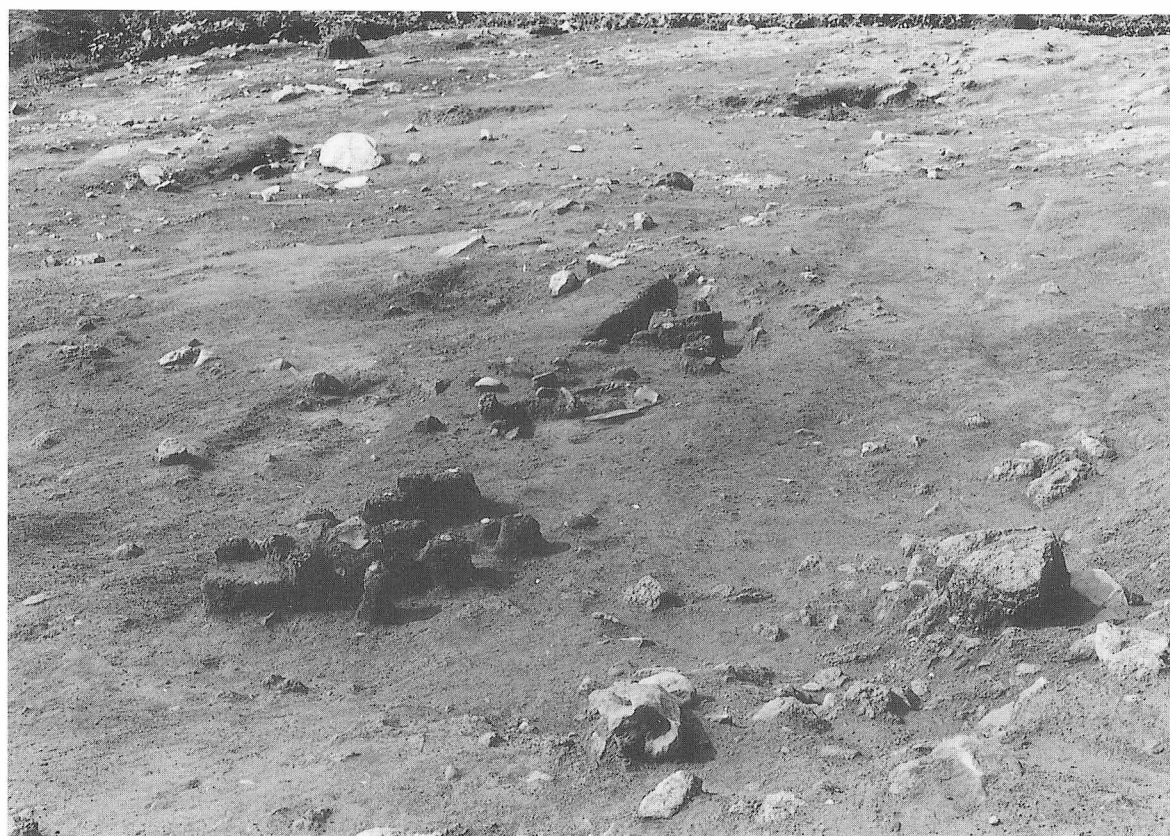


遺構調査状況

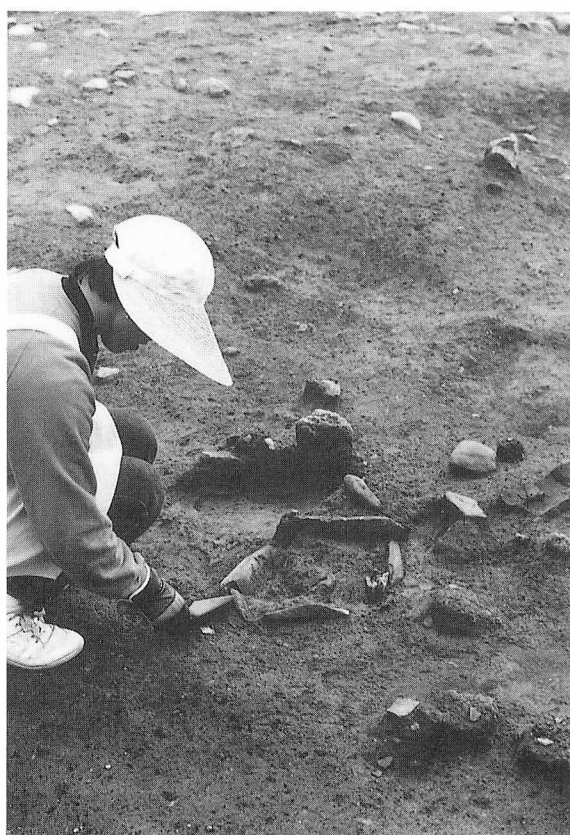


H - I 完掘

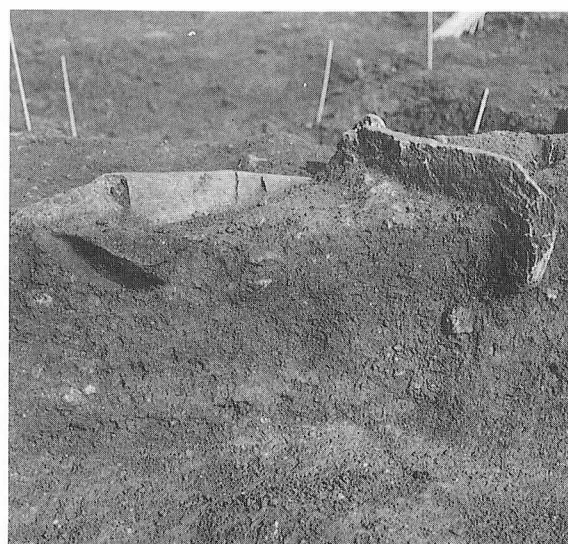




H-2 完掘



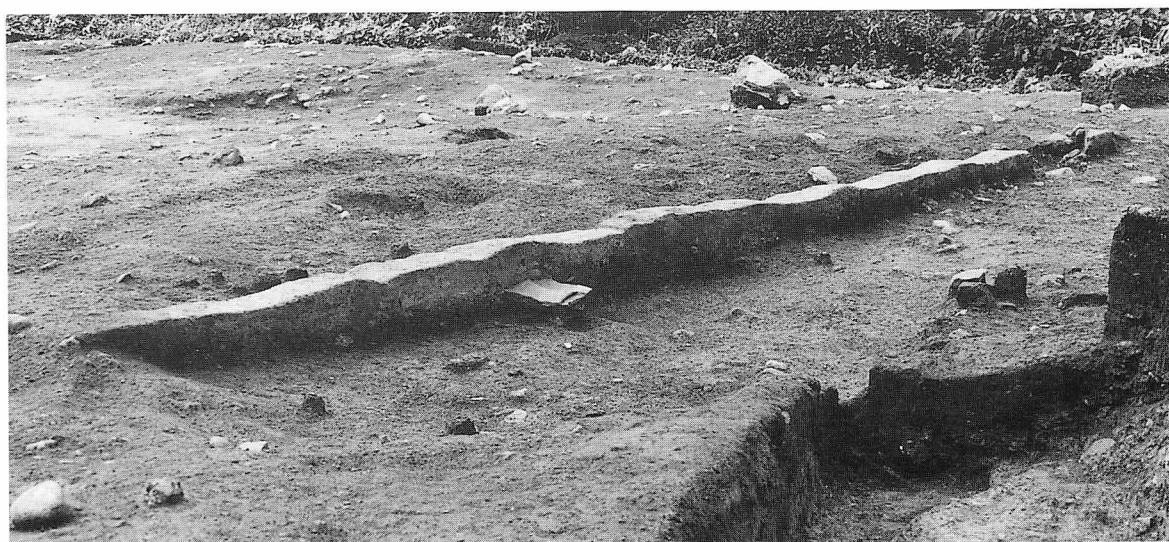
H-2 床面石組み炉焼土断面



H-2 床面石組み炉調査状況

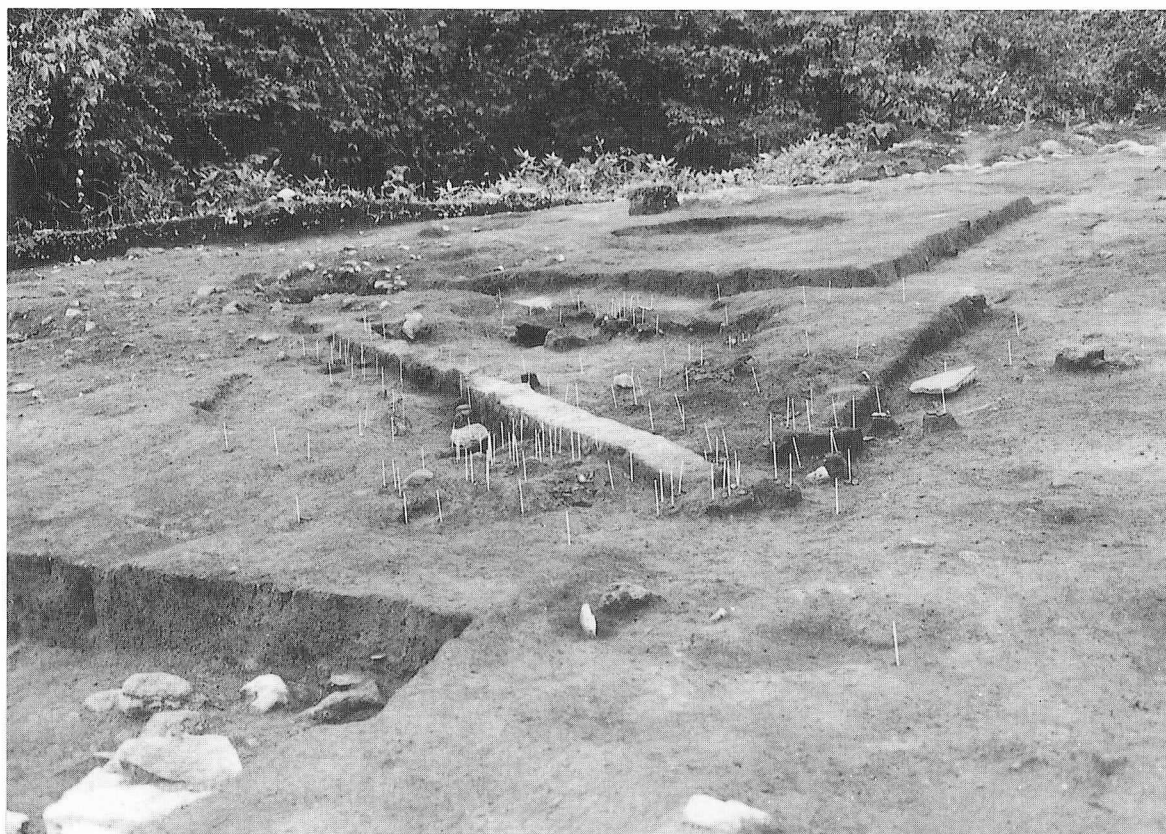


H-3 調査状況



H-3 土層断面





H-4 遺物出土状況



H-4 完掘



H-5 床面石組み炉焼土断面



P-1 完掘



P-2 完掘



P-5 完掘



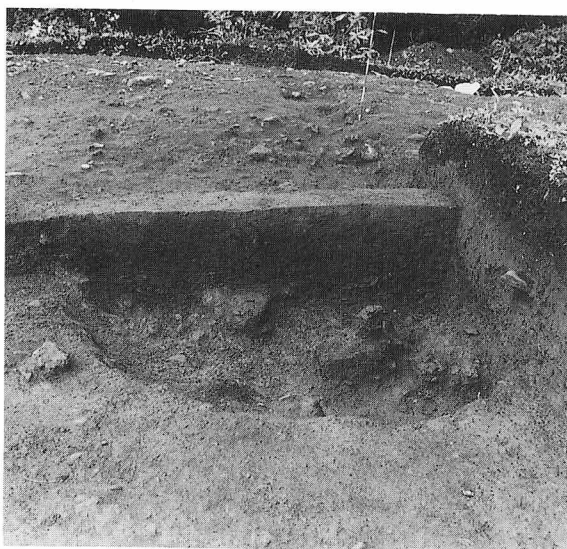
P-3 遺物出土状況



P-3 完掘



図版 8



P - 4 南北土層断面



P - 4 完掘



包含層調査状況



M-68-C 区IV層 一括土器出土状況



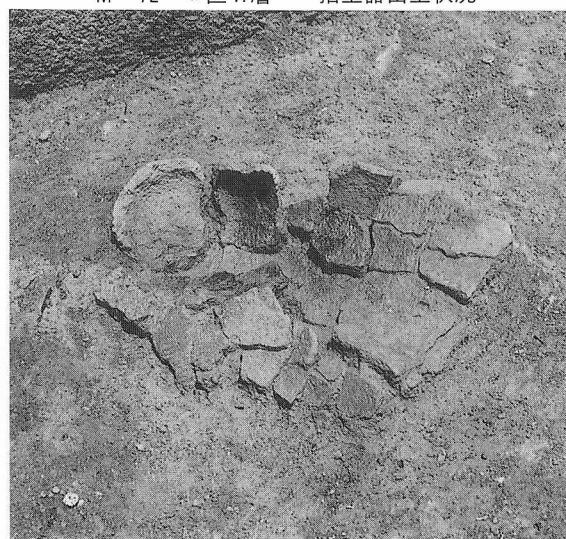
M-68-C 区IV層一括土器調査状況



M-72-a 区VI層 一括土器出土状況

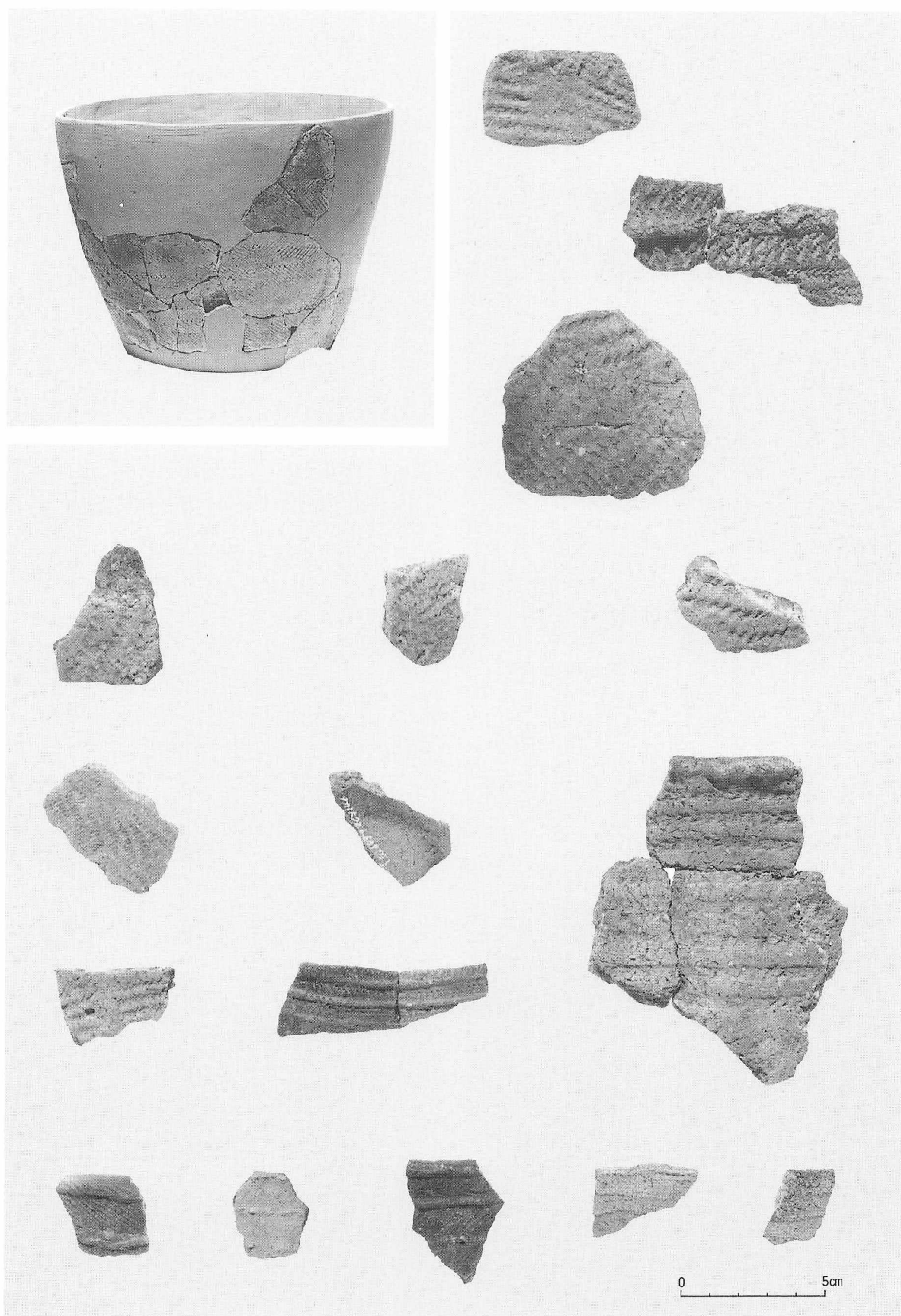


M-70-a 区VII層 一括土器出土状況

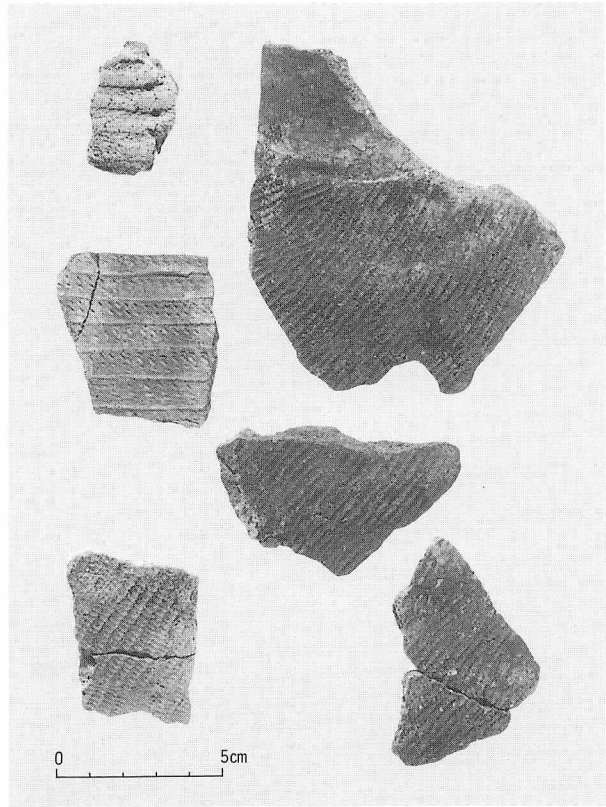


M-70-a 区VII層 一括土器出土状況

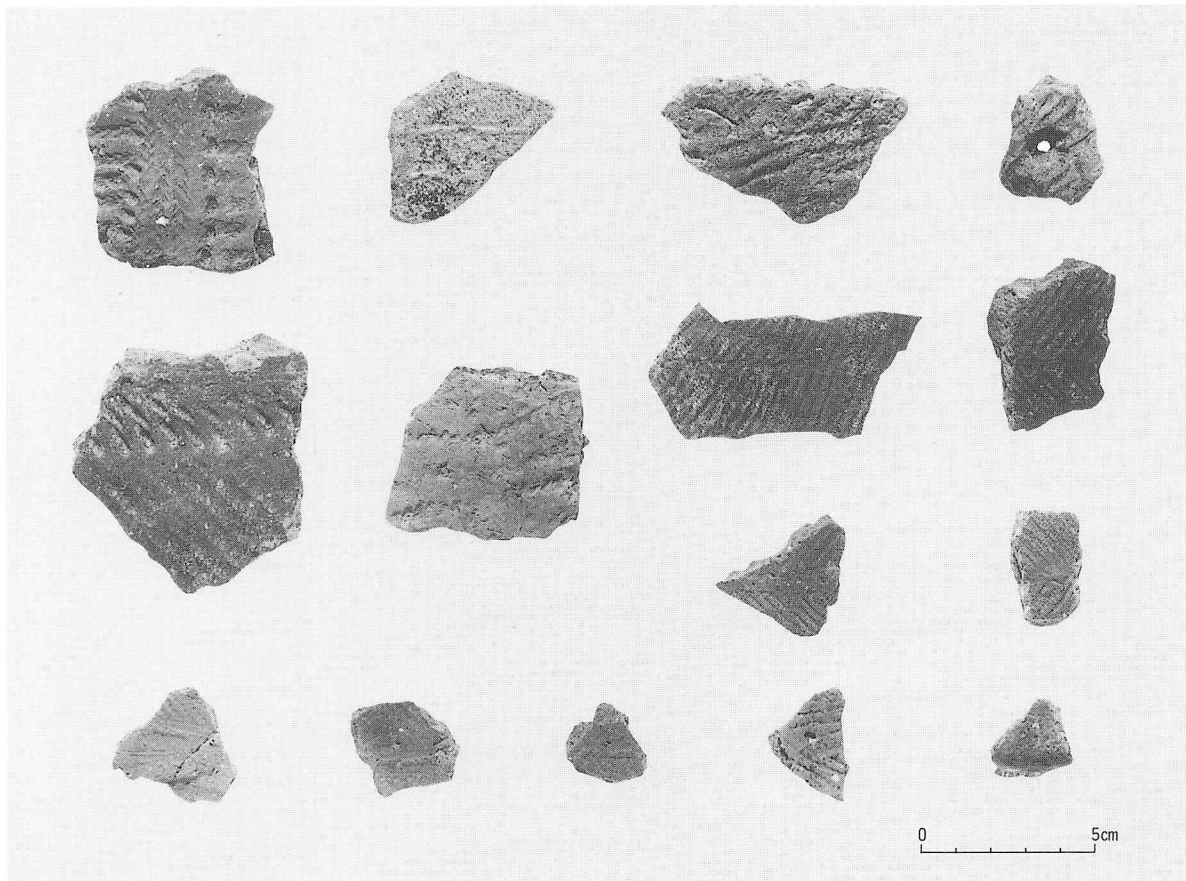




H - I 出土の土器

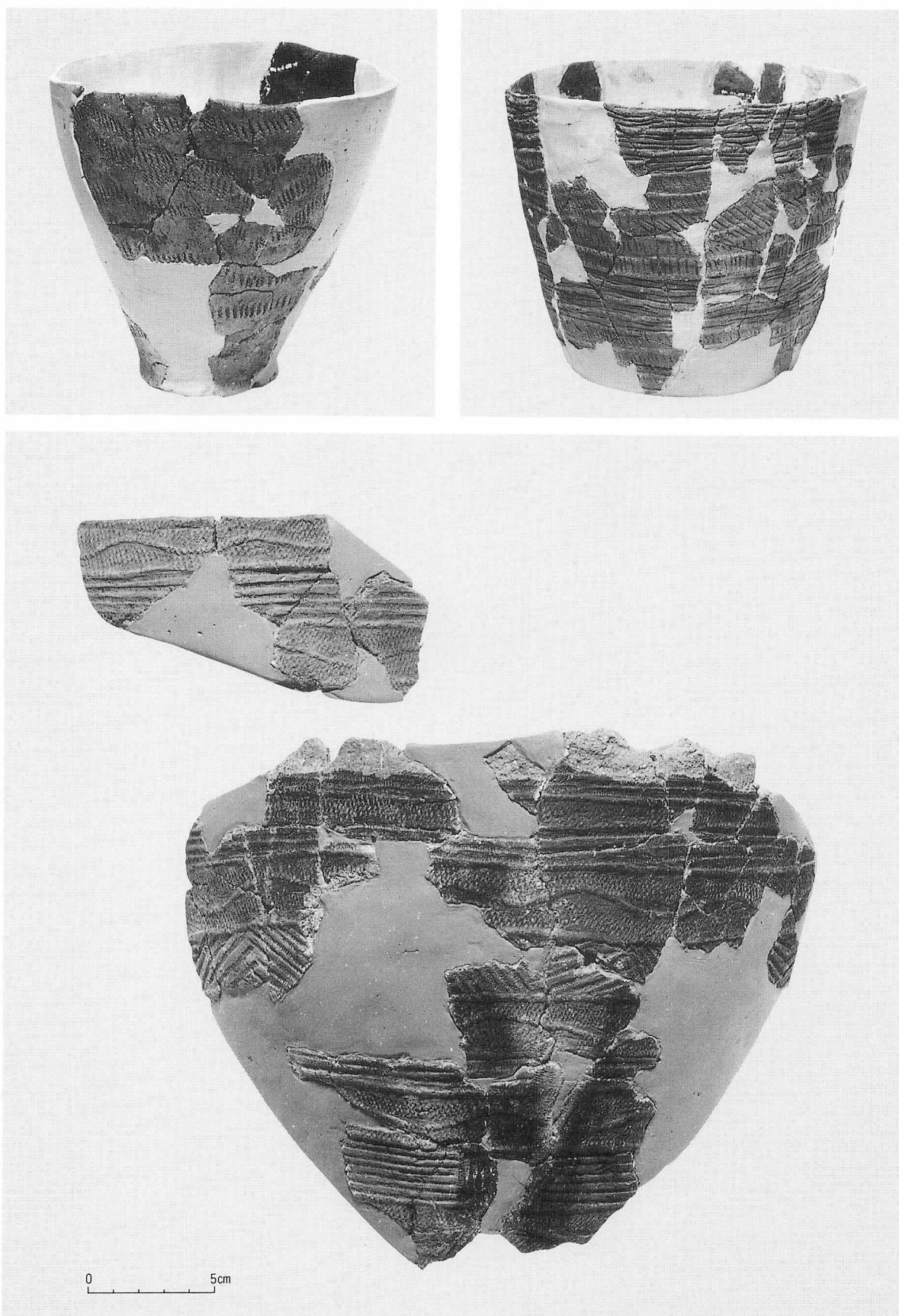


H-2 出土の土器

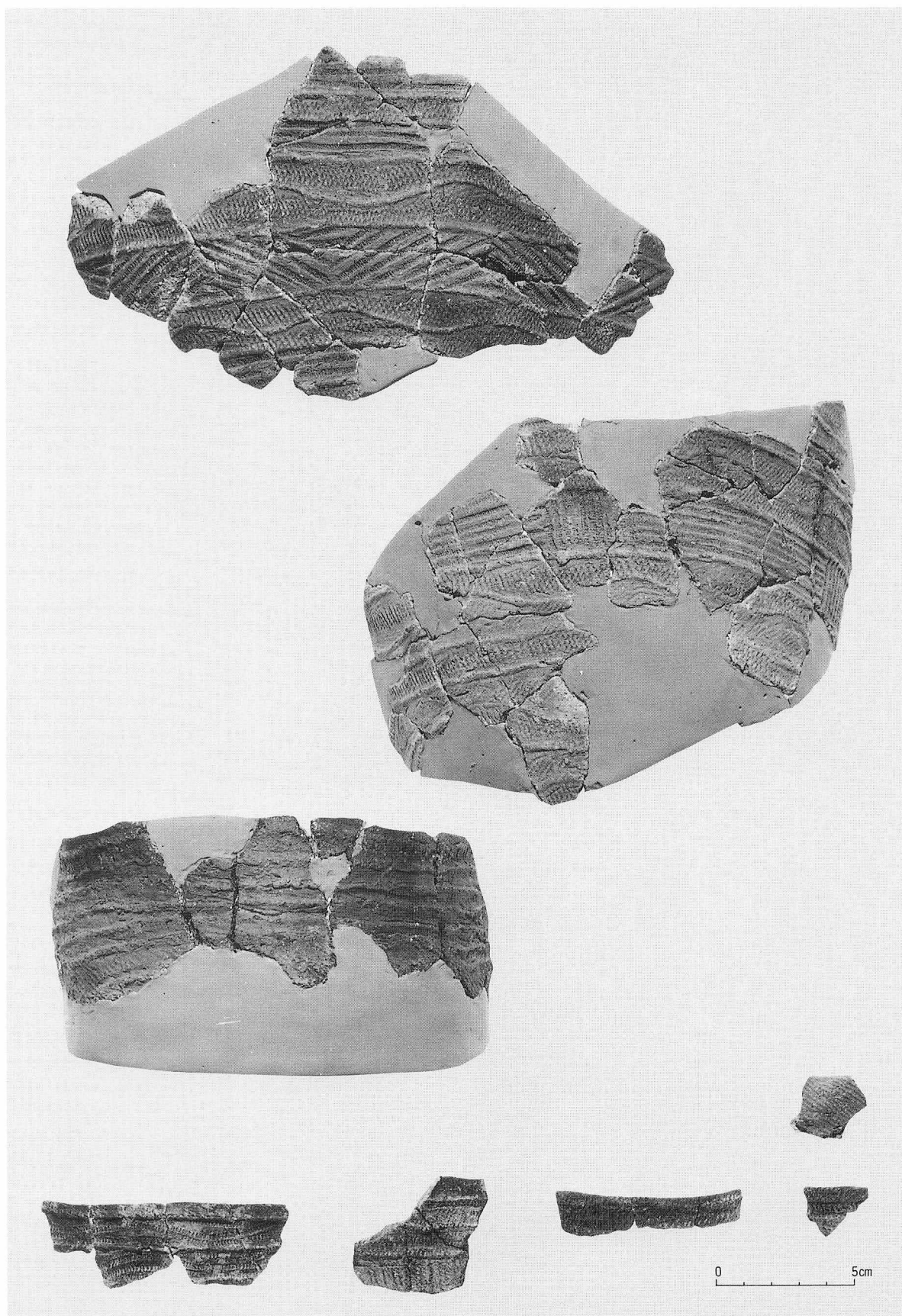


H-3 出土の土器



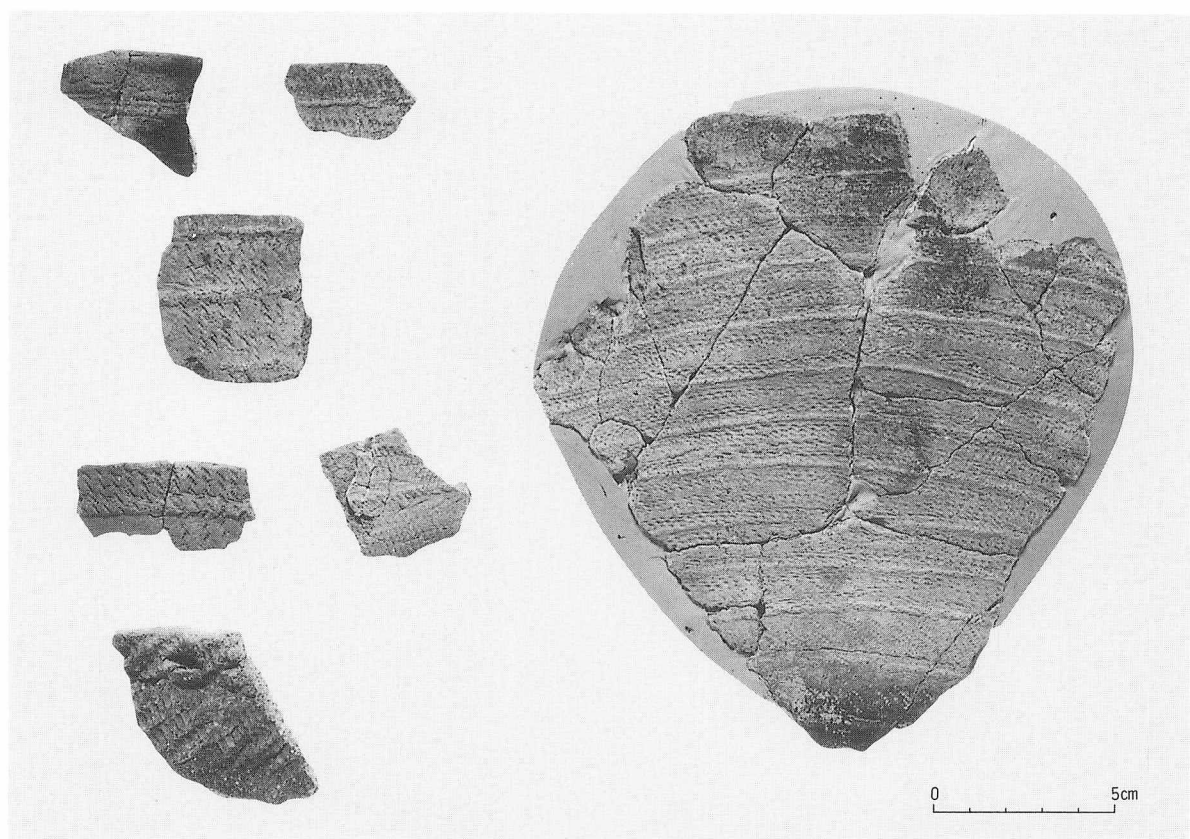


H-4 出土の土器

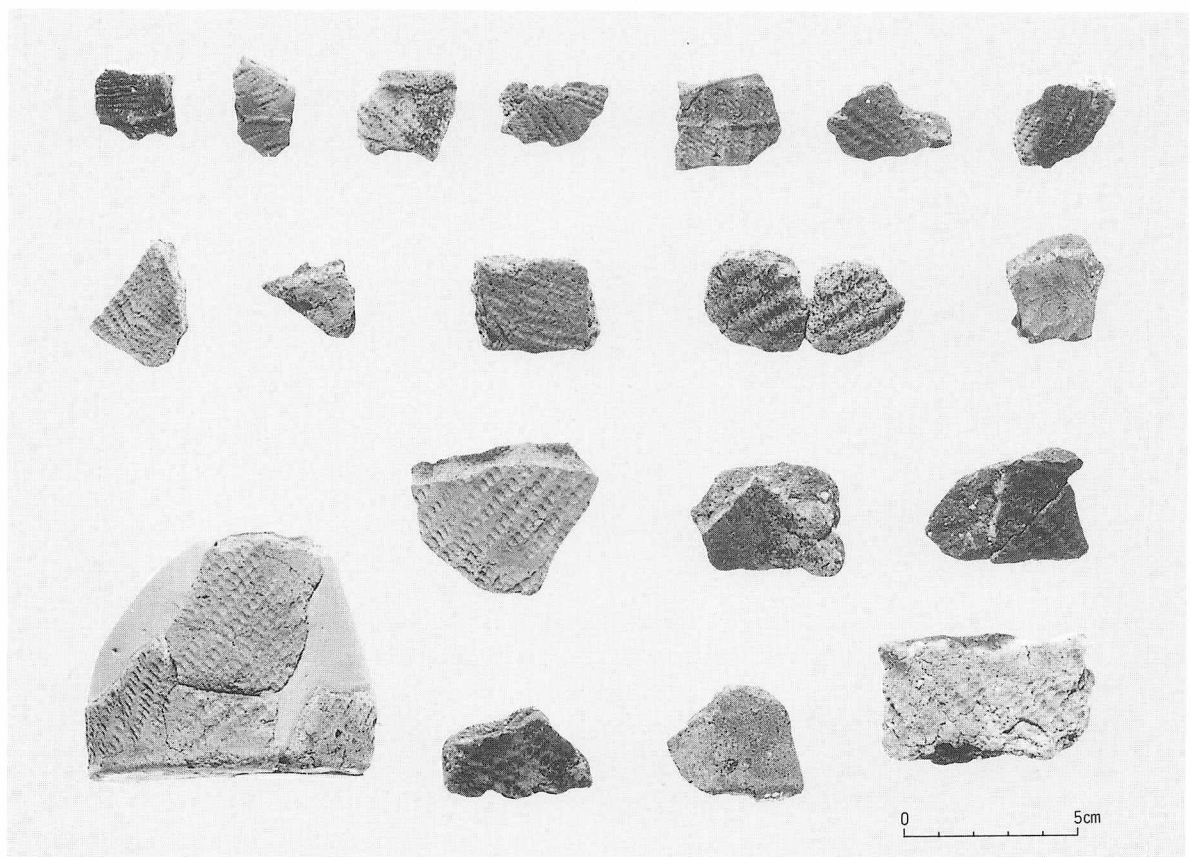


H-4 出土の土器

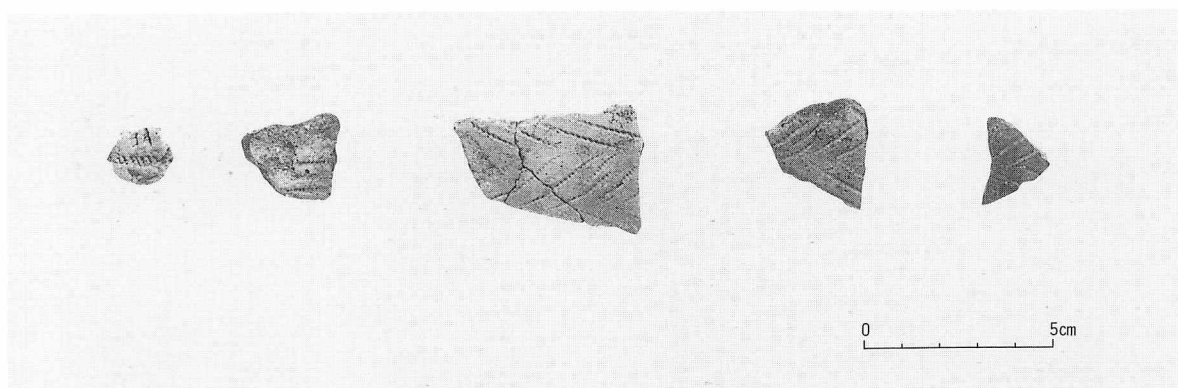




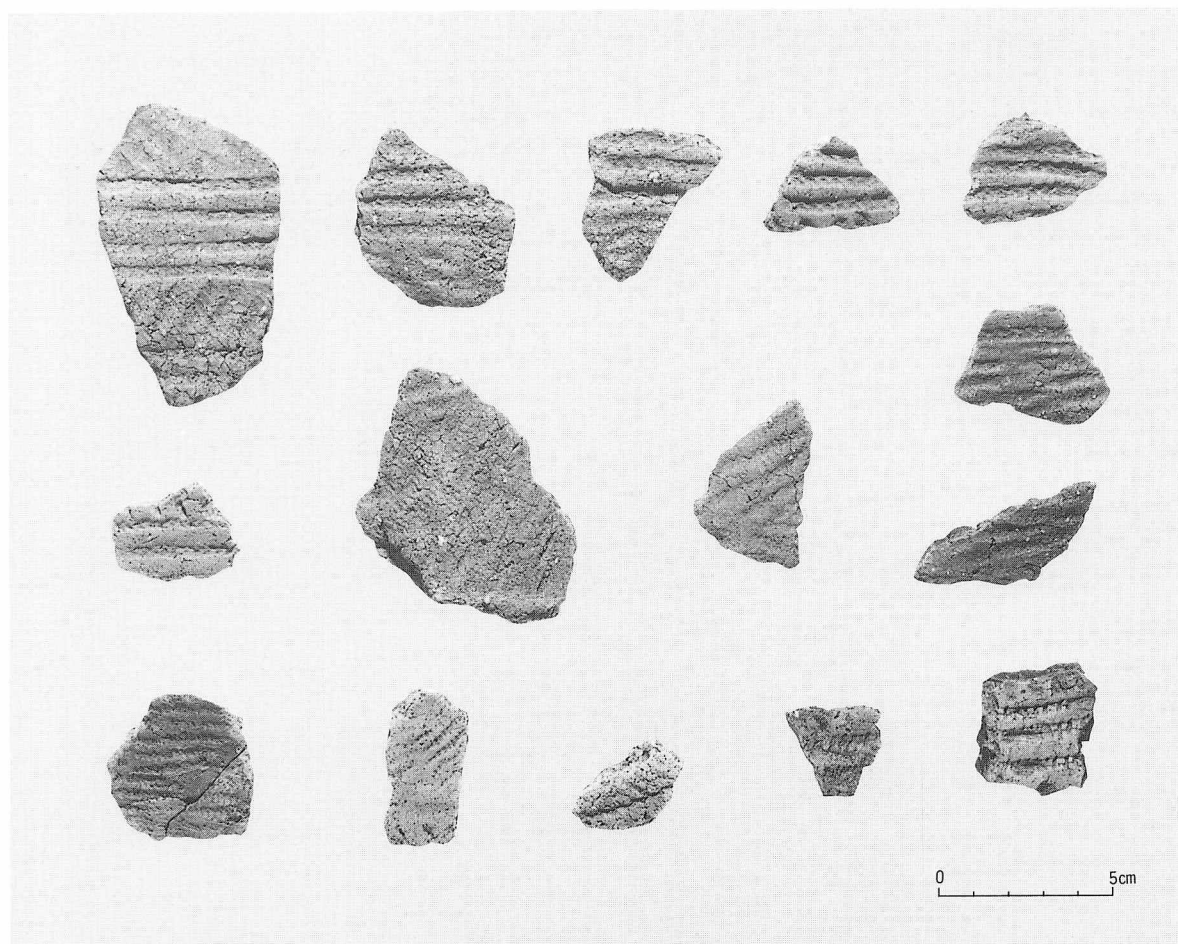
H-4 出土の土器



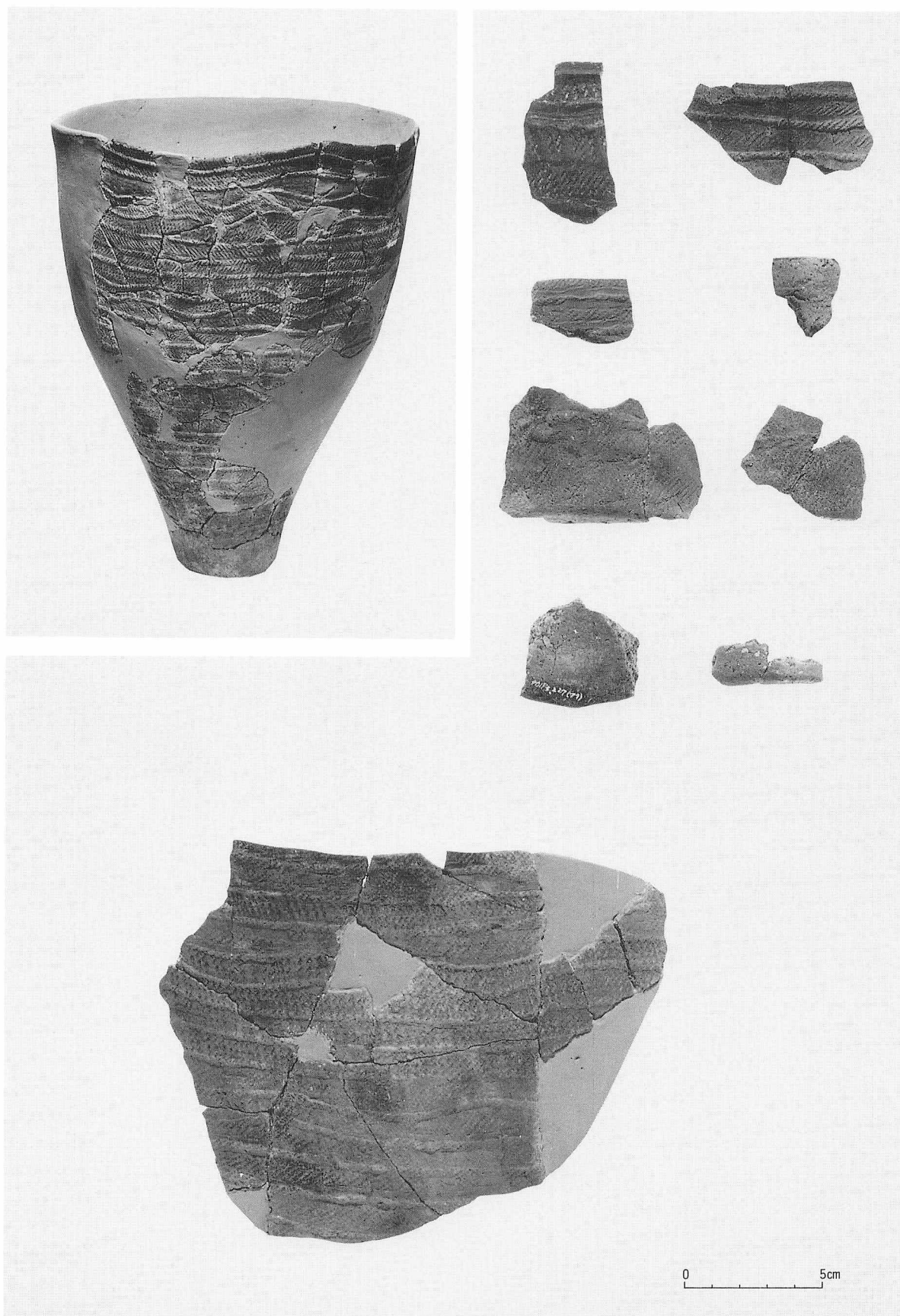
H-5 出土の土器



P-1 出土の土器

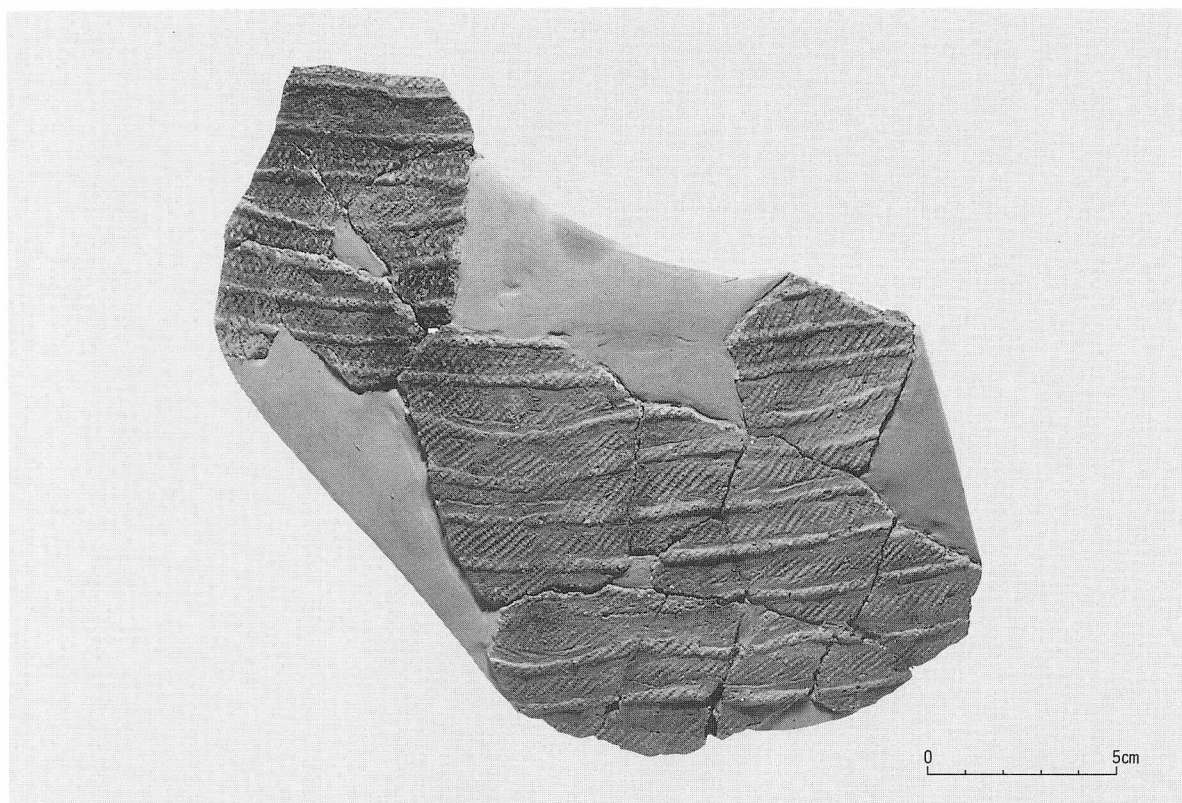


P-2 出土の土器

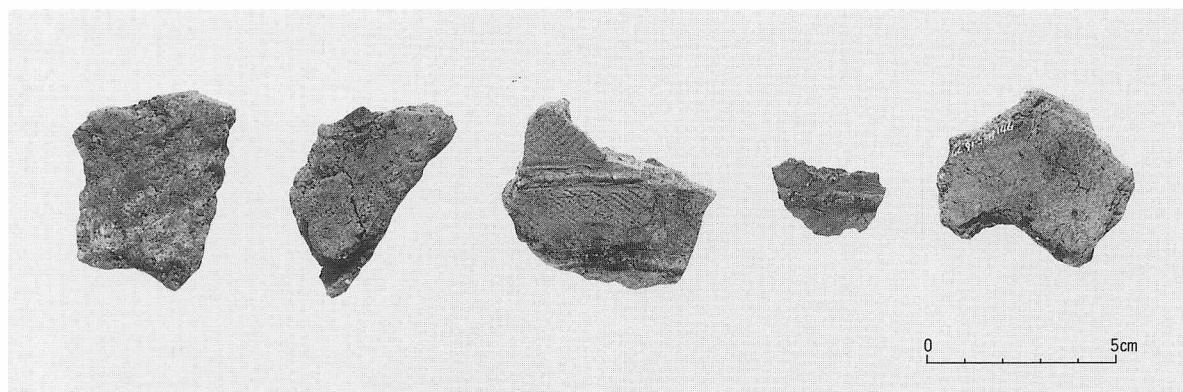


P-3 出土の土器

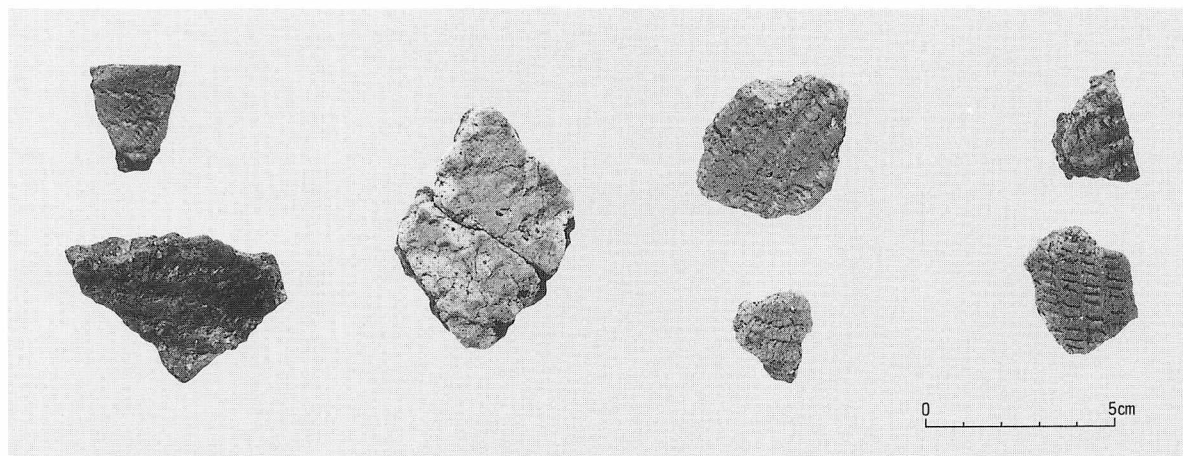




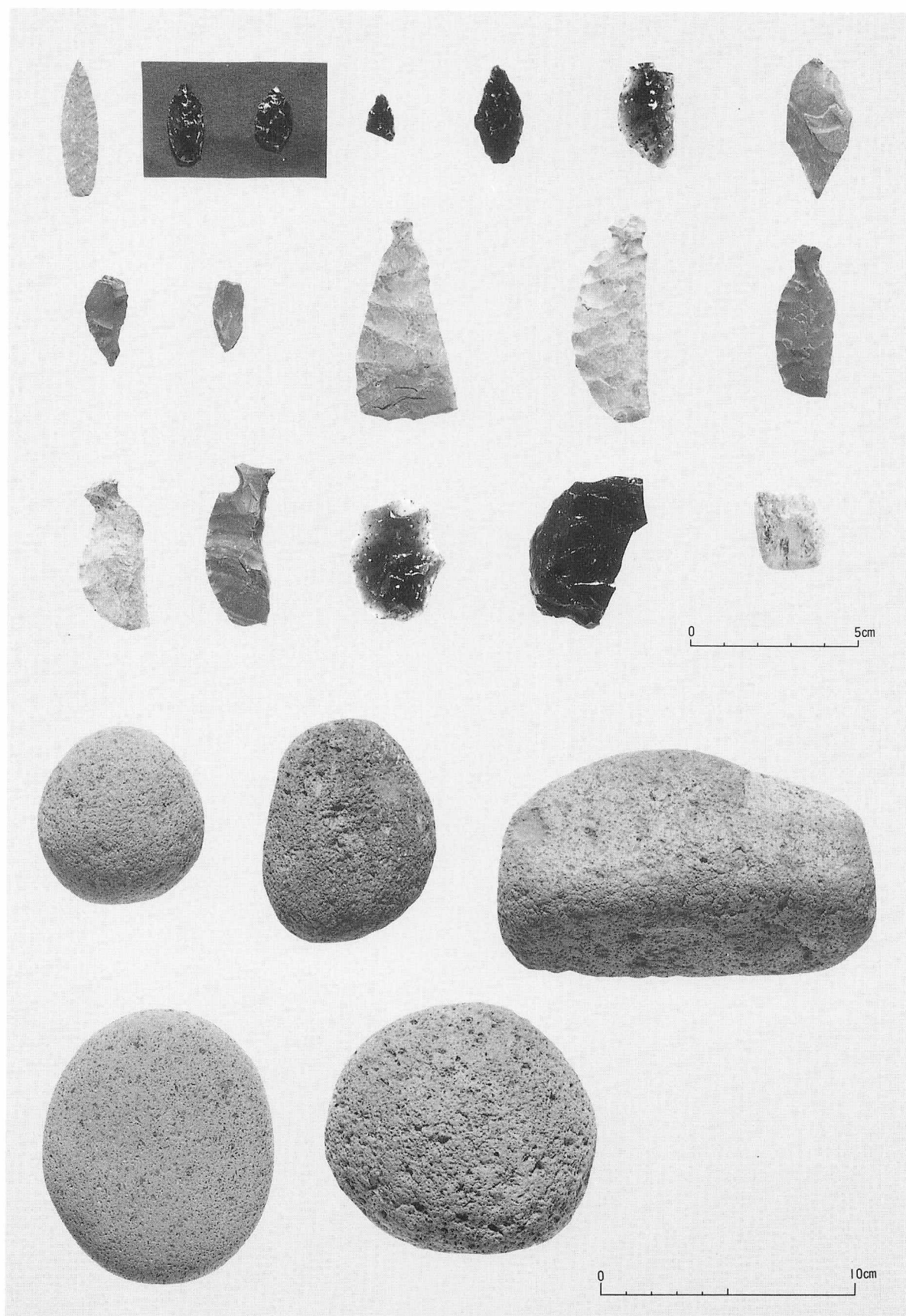
P-3 出土の土器



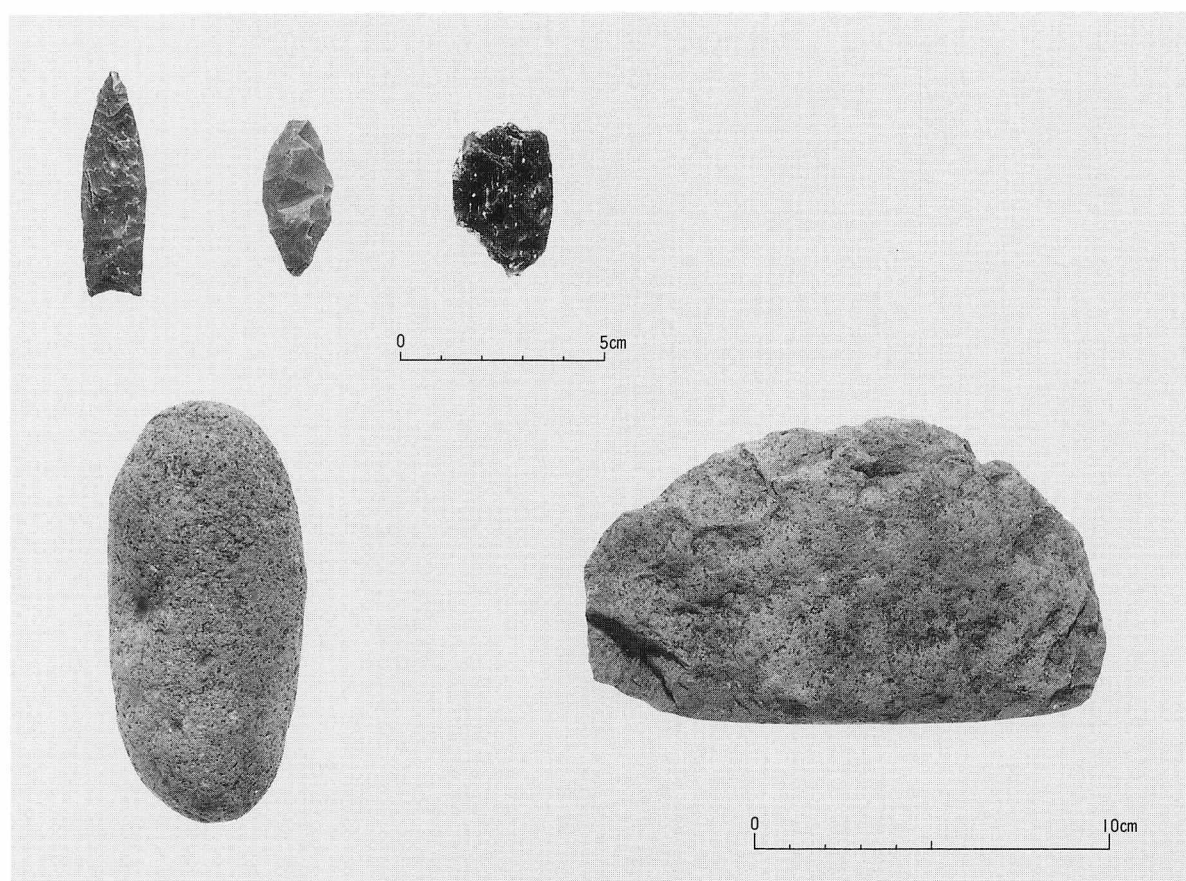
P-4 出土の土器



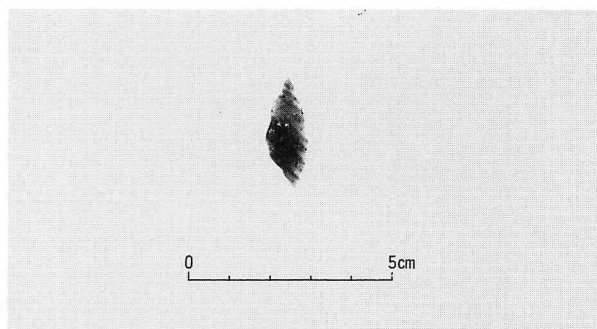
P-5 出土の土器



H-I 出土の石器

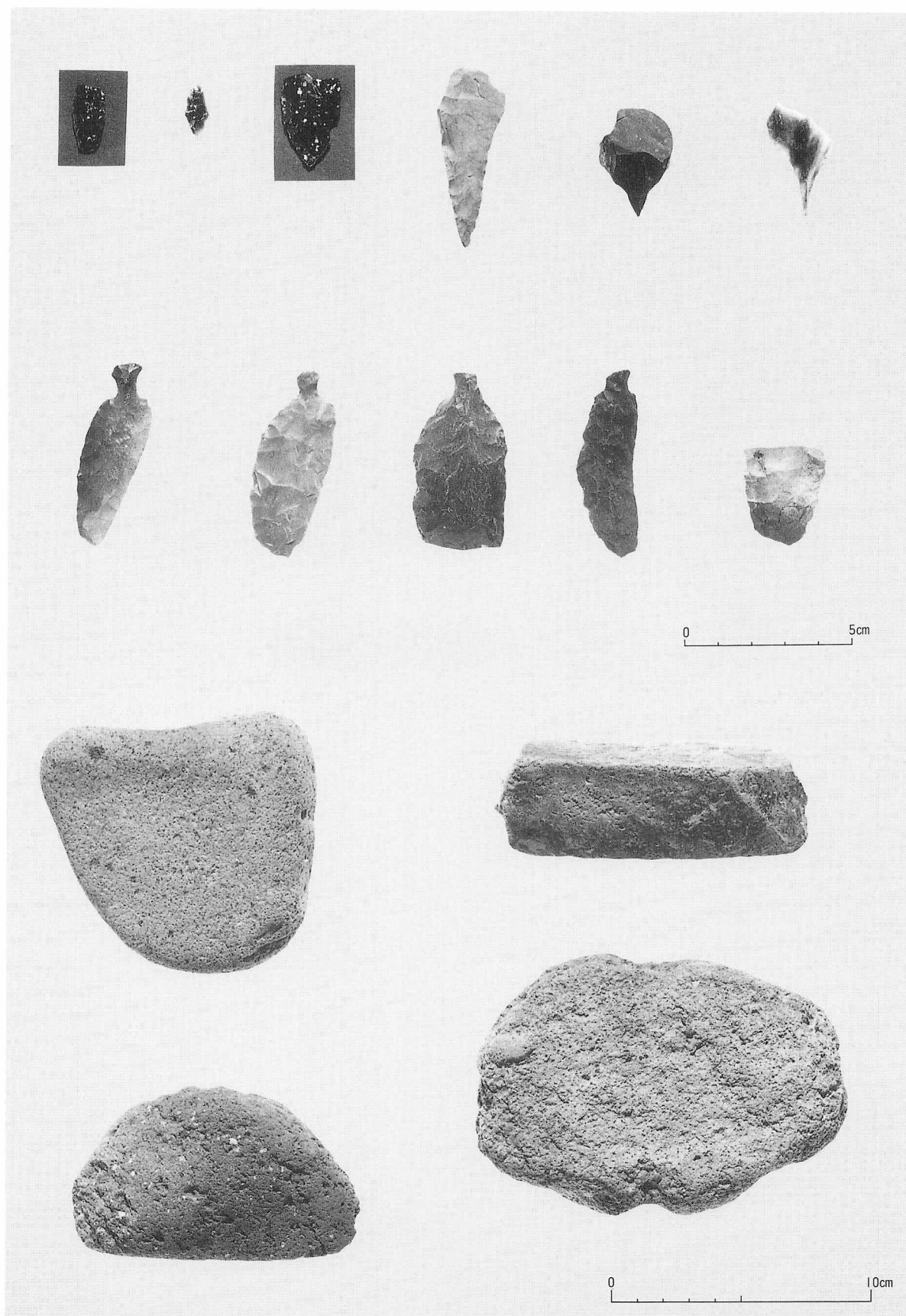


H-2 出土の石器

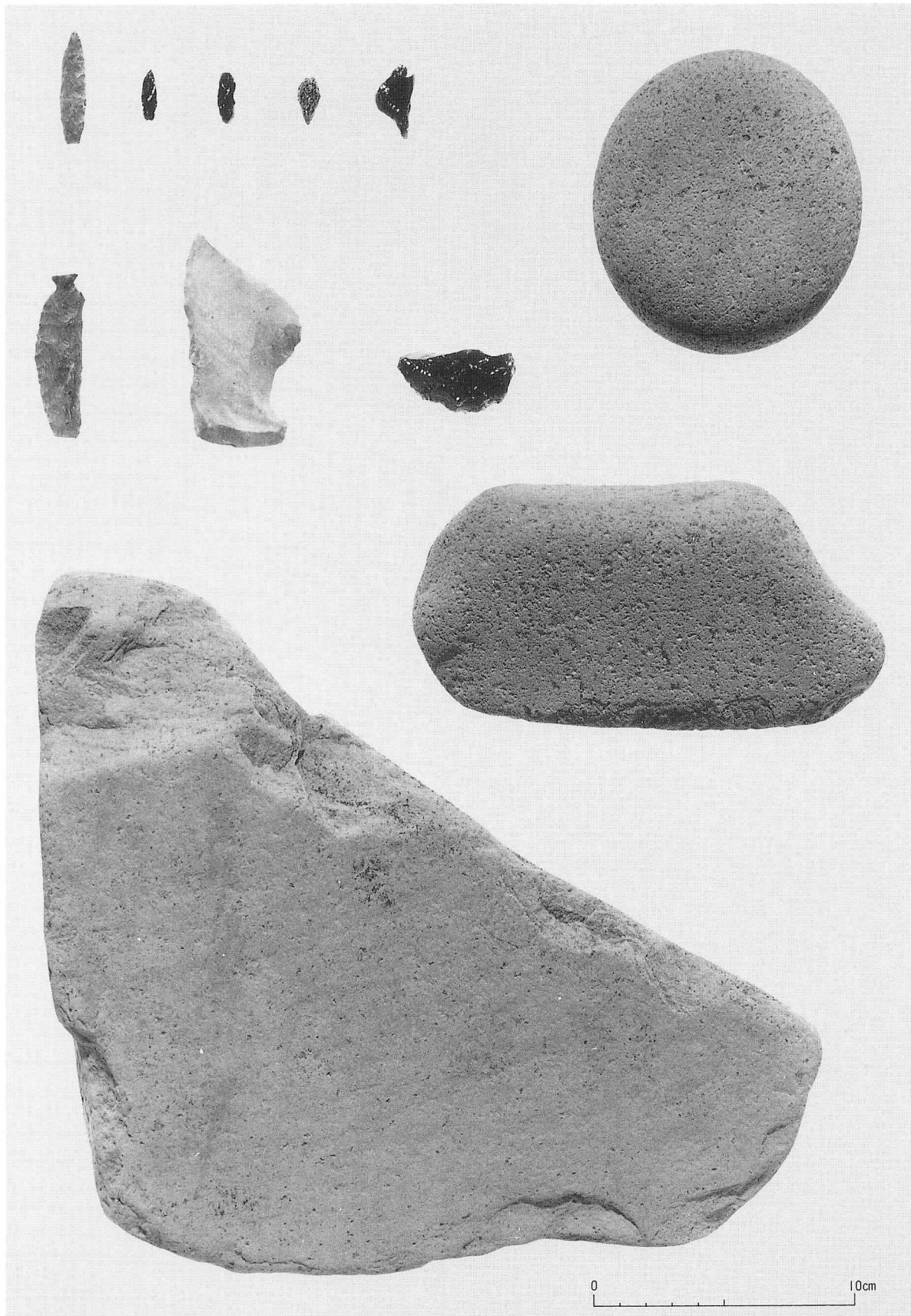


H-5 出土の石器

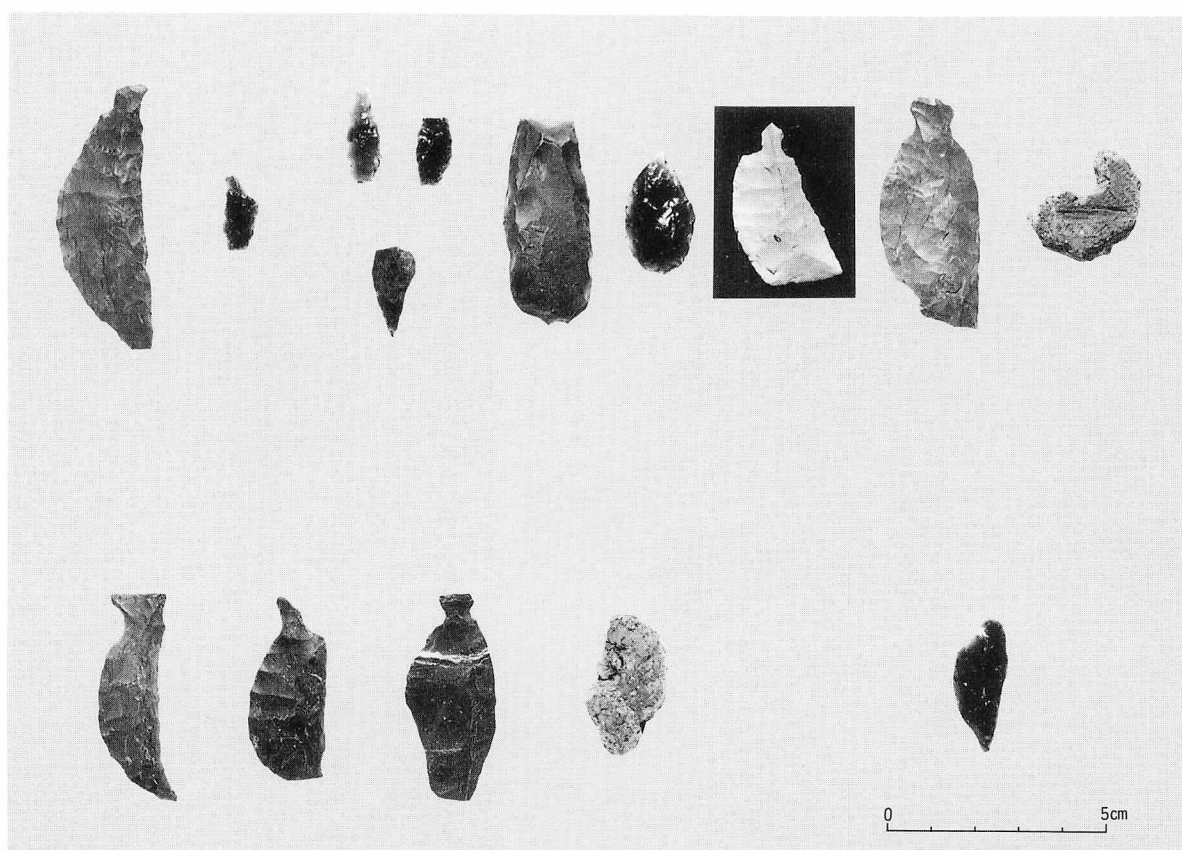




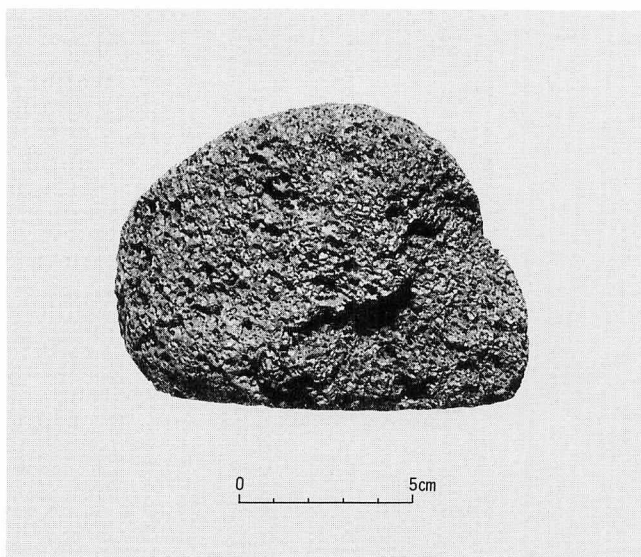
H-3 出土の石器



H-4 出土の石器



土壌出土の石器

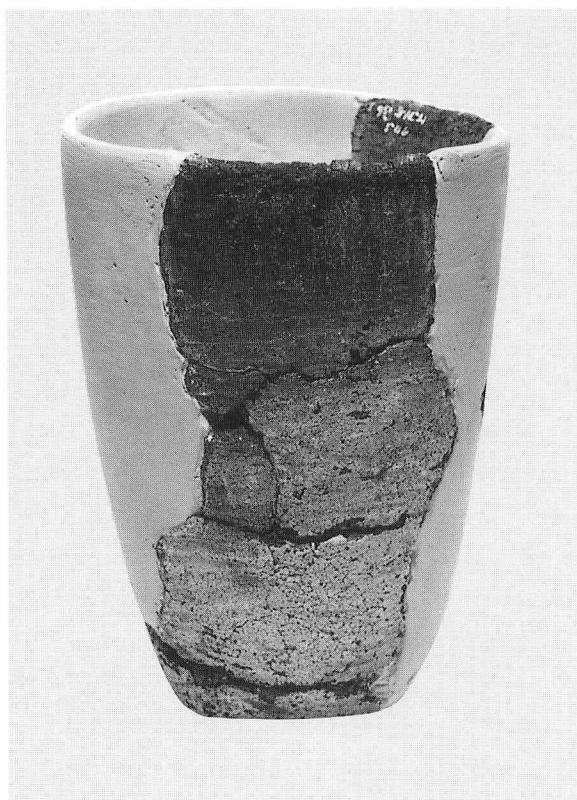


M-68-C区VI層 一括土器内出土の石冠





包含層出土の土器（縄文時代早期・条痕文土器）



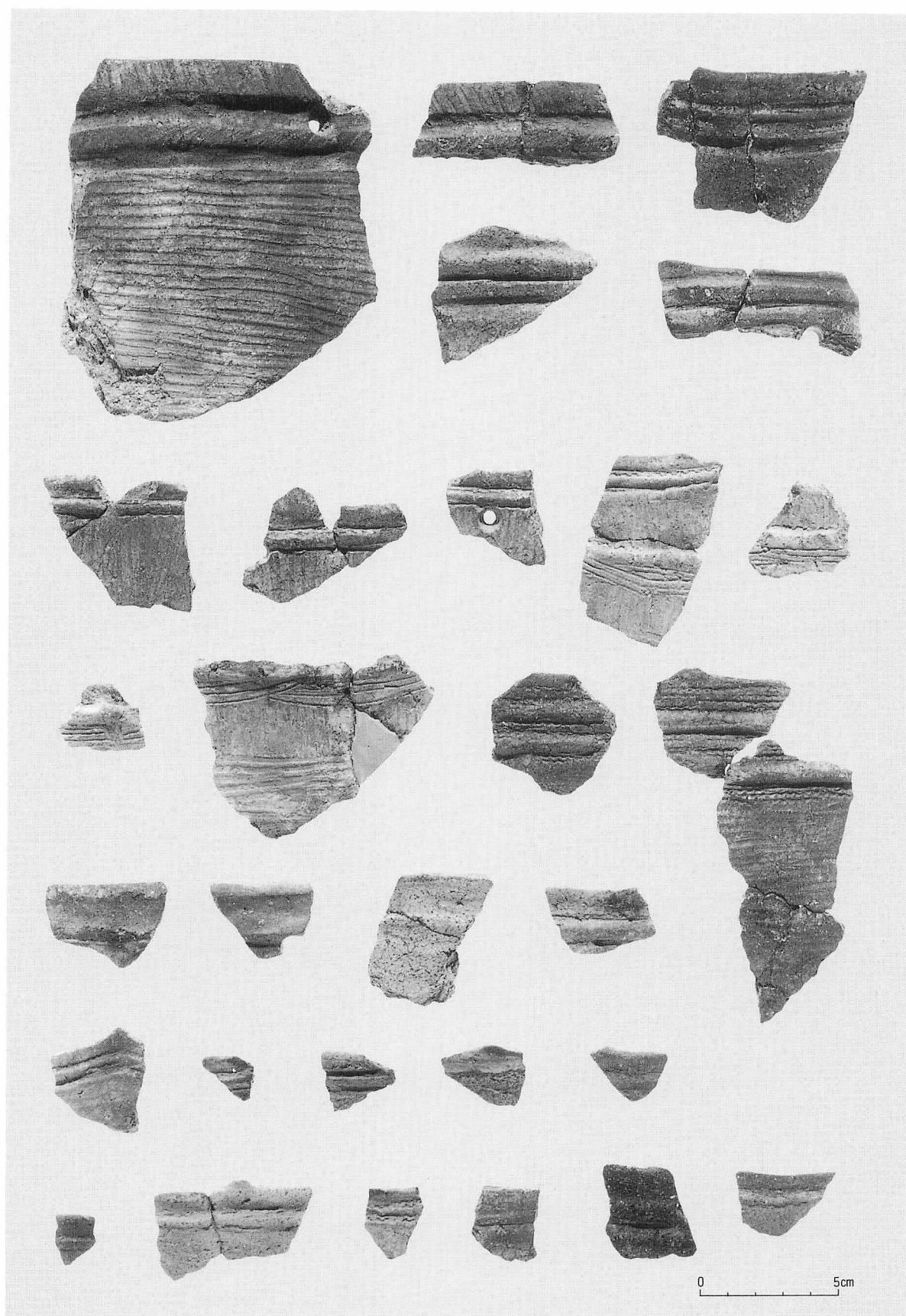
包含層出土の土器（縄文時代早期・条痕文土器）



包含層出土の土器（縄文時代早期・条痕文土器）

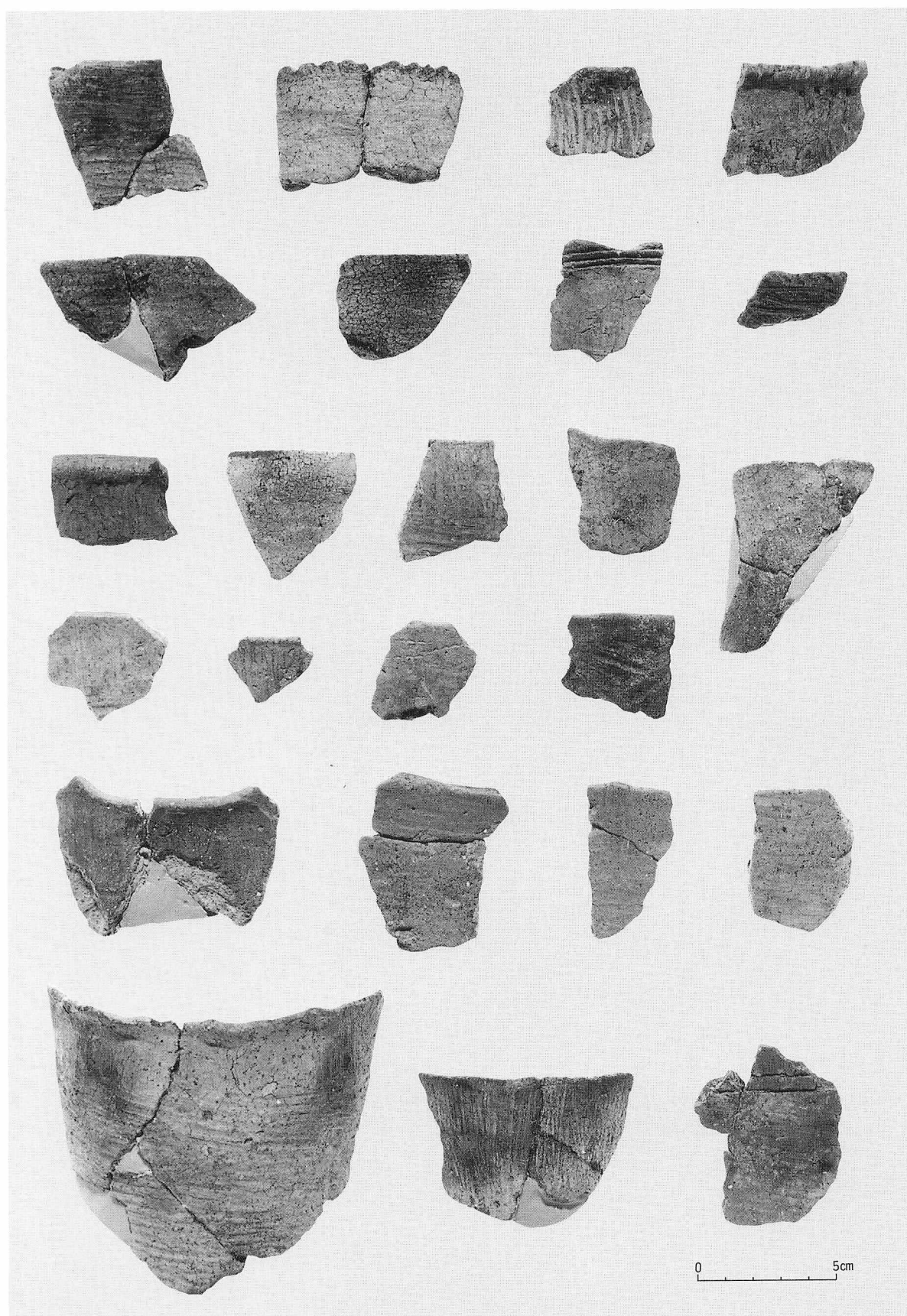


包含層出土の土器（縄文時代早期・条痕文土器）

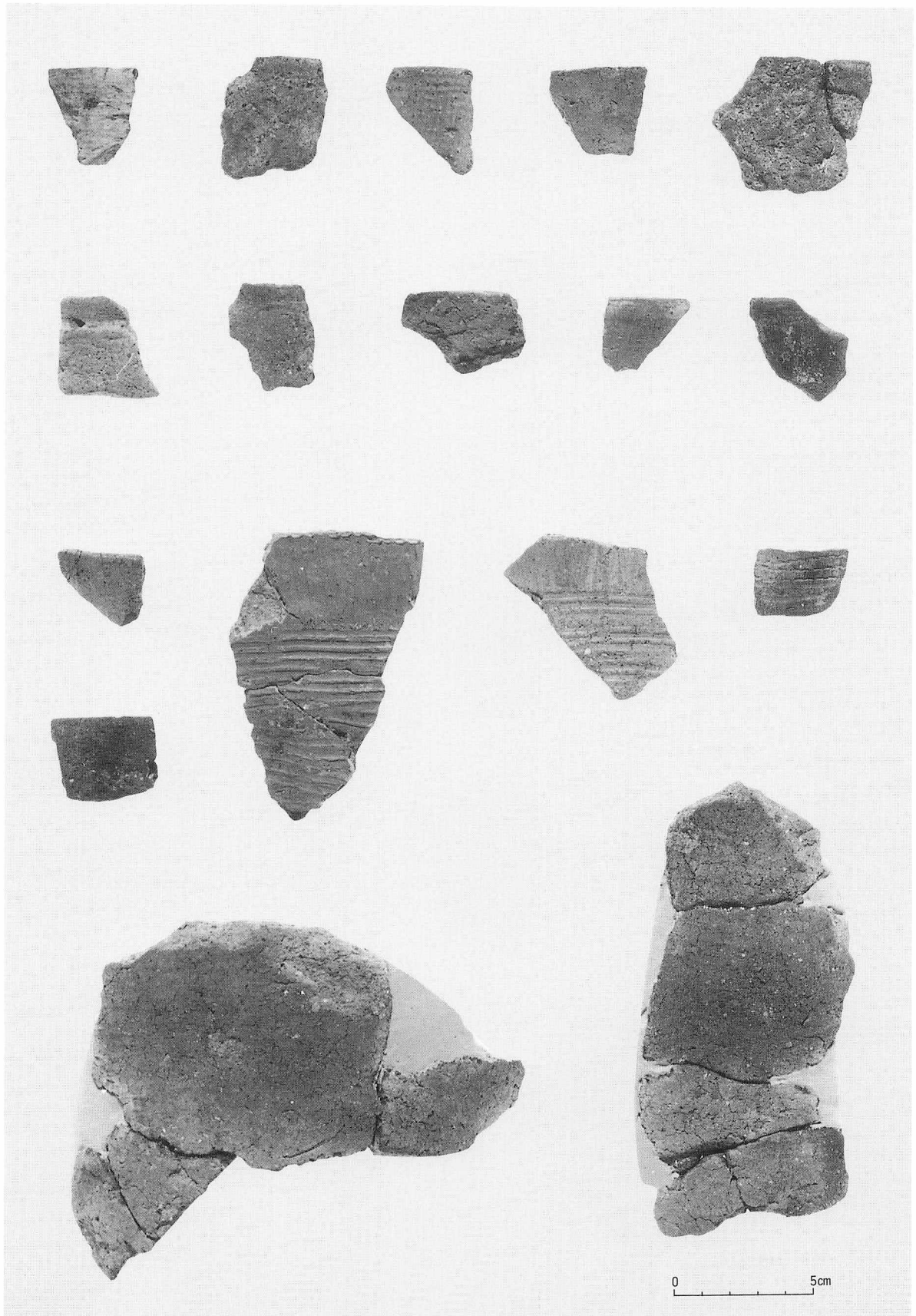


包含層出土の土器（縄文時代早期・条痕文土器）



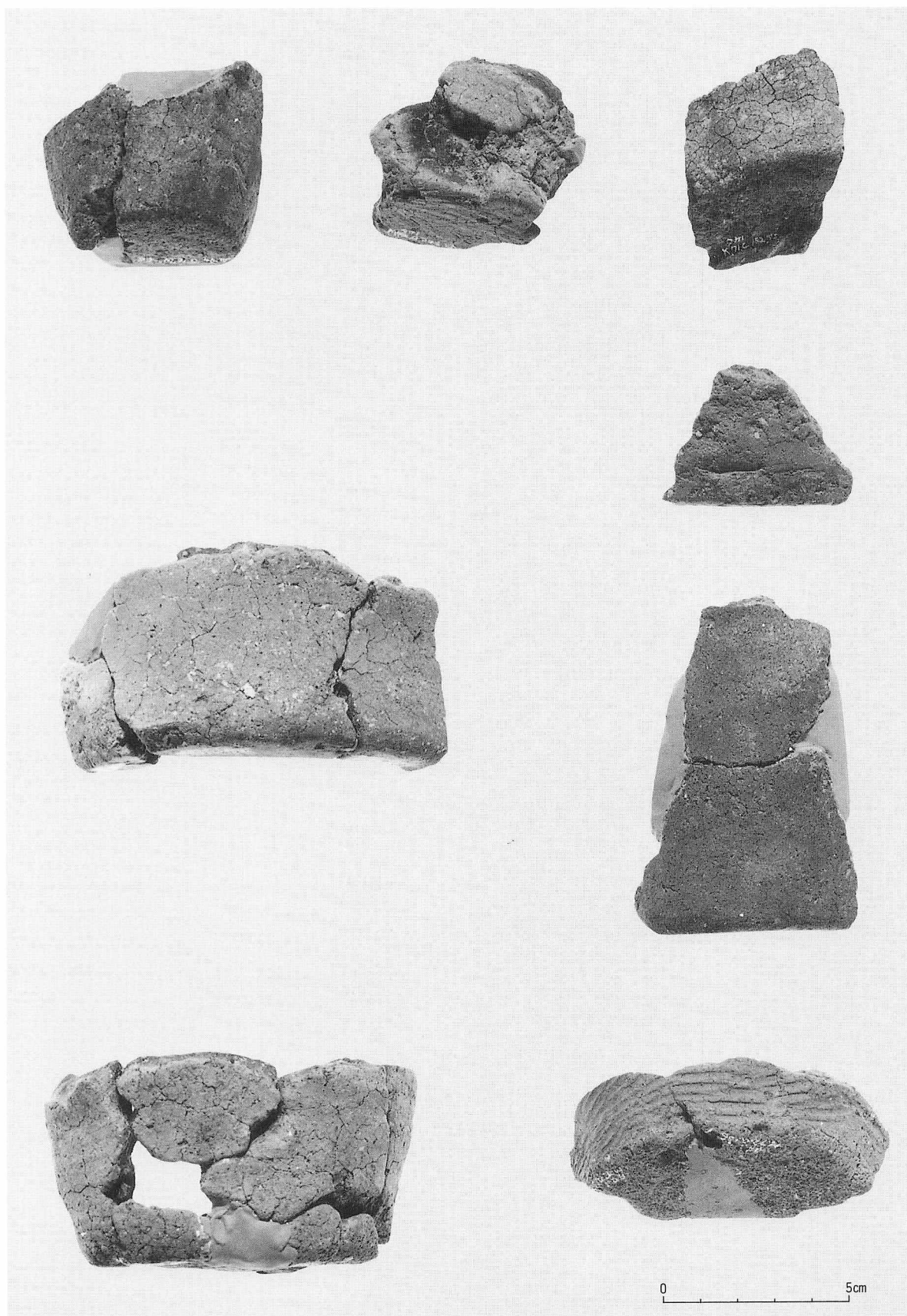


包含層出土の土器（縄文時代早期・条痕文土器）



包含層出土の土器（縄文時代早期・条痕文土器）





包含層出土の土器（縄文時代早期・条痕文土器）

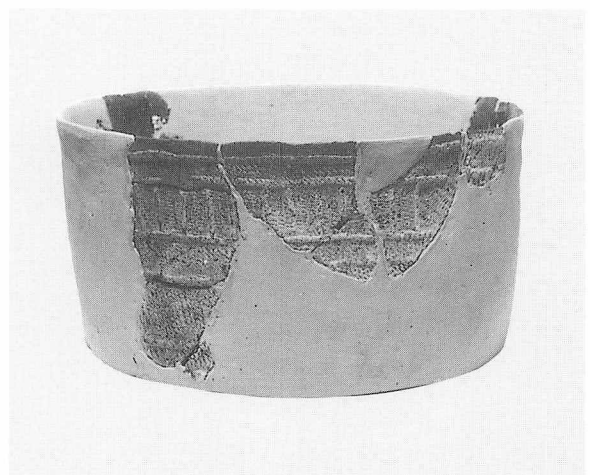




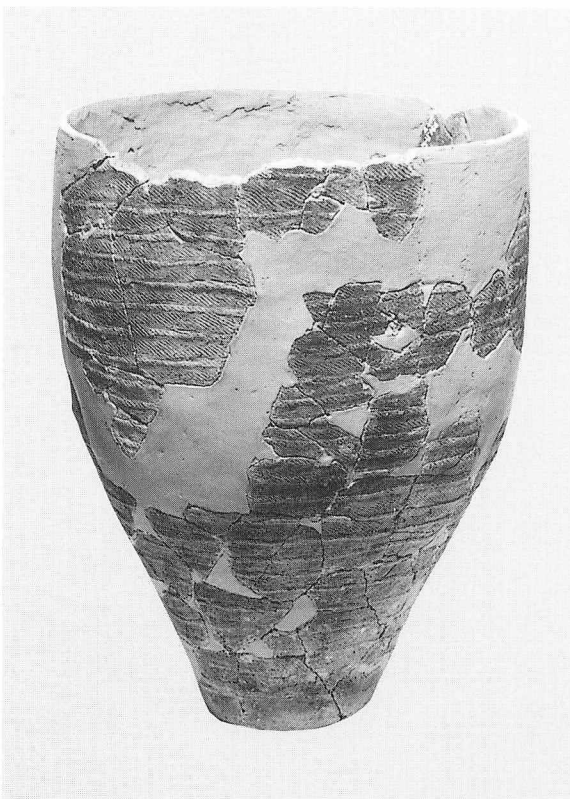
包含層出土の土器(縄文時代早期・中茶路式土器)



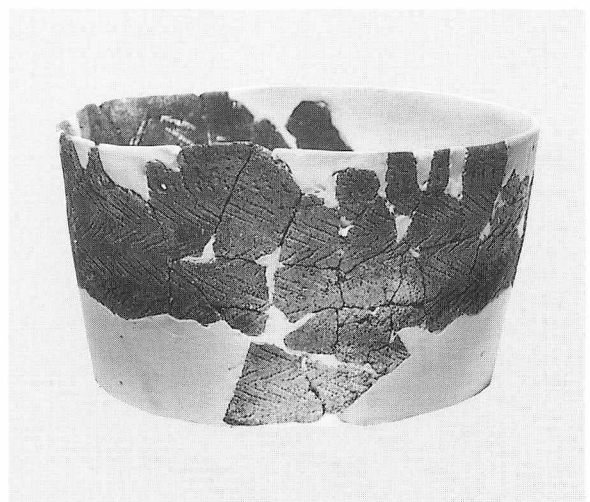
包含層出土の土器(縄文時代早期・中茶路式土器)



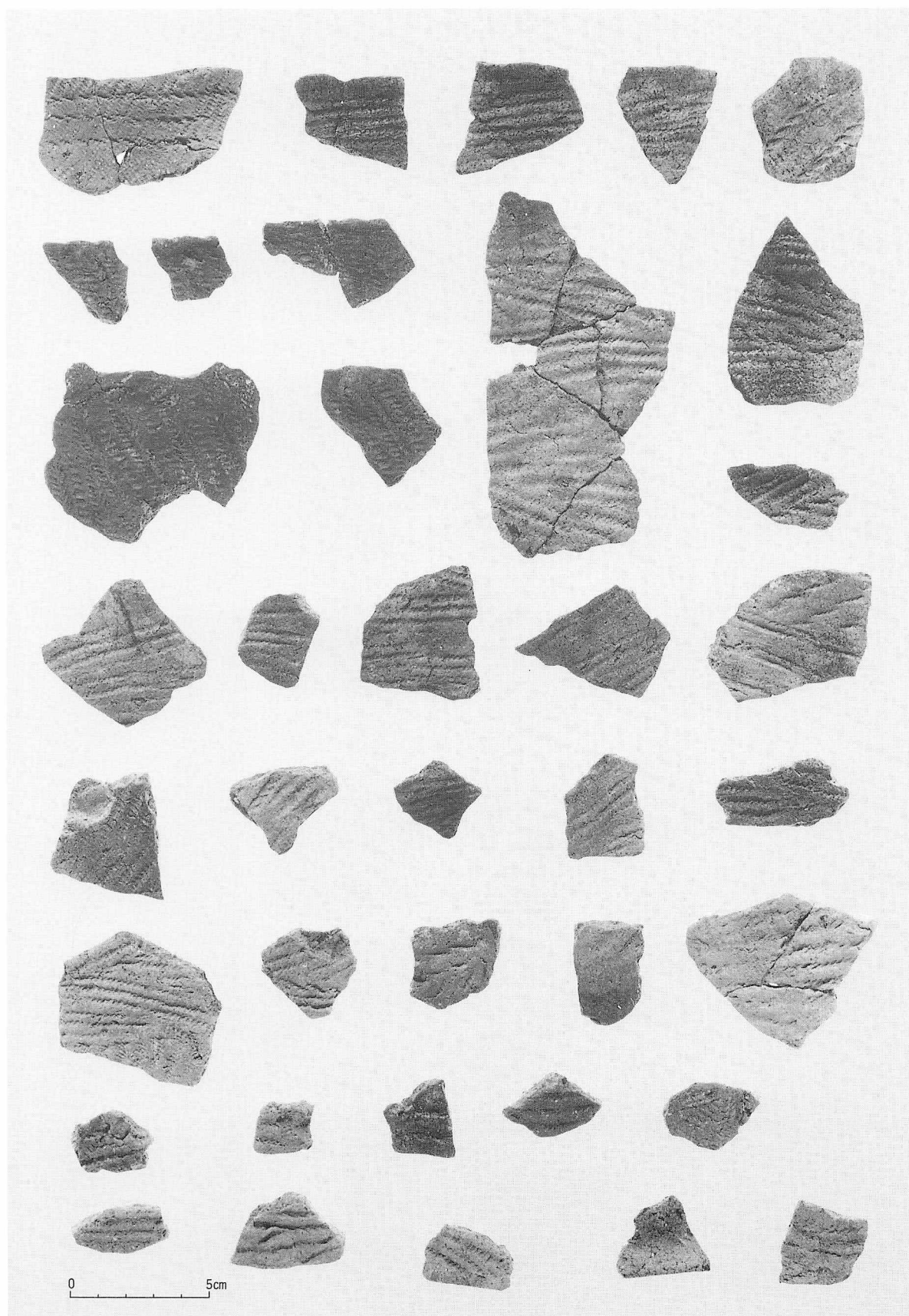
包含層出土の土器(縄文時代早期・中茶路式土器)



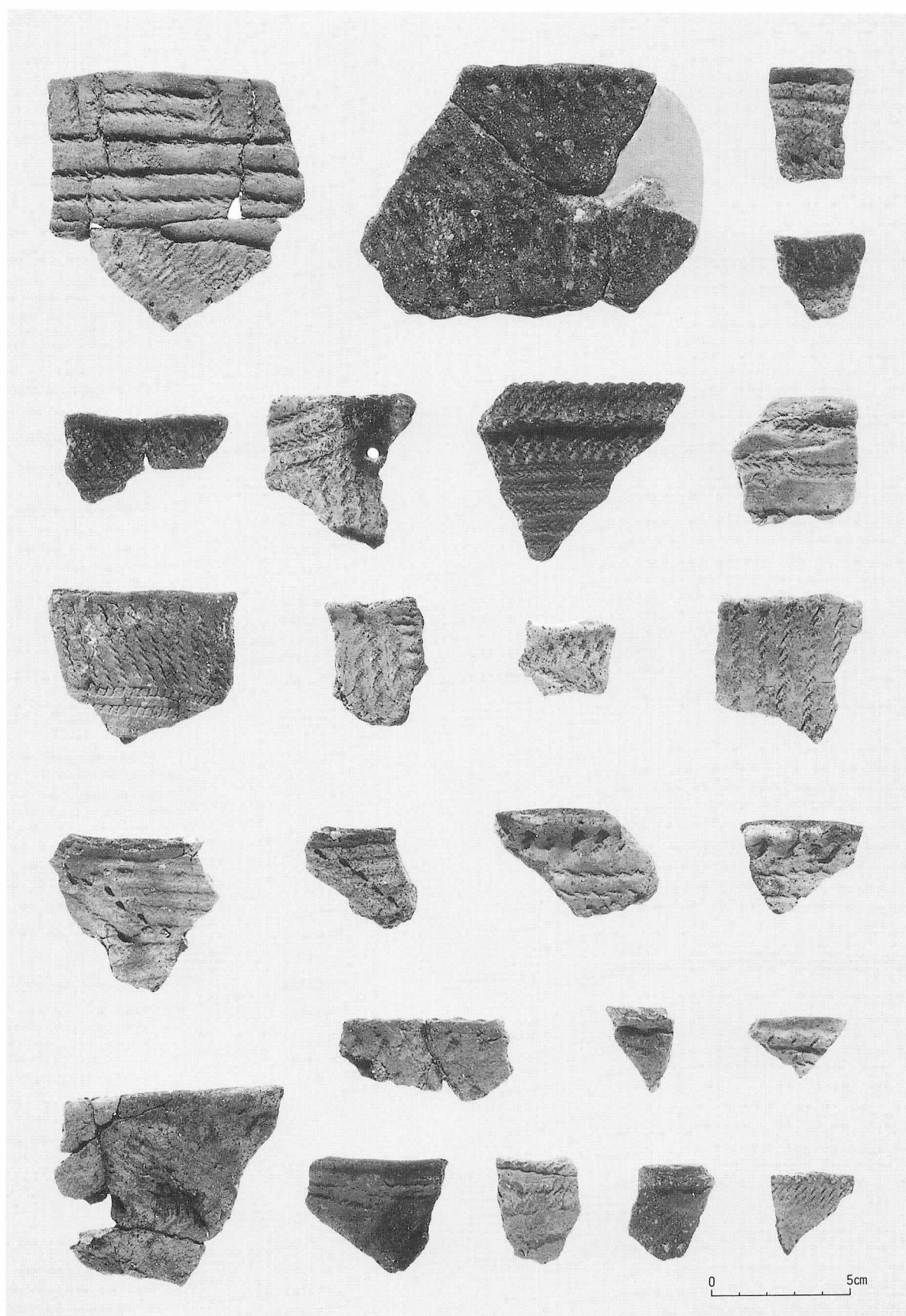
包含層出土の土器(縄文時代早期・中茶路式土器)



包含層出土の土器(縄文時代早期・東釧路Ⅳ式土器)

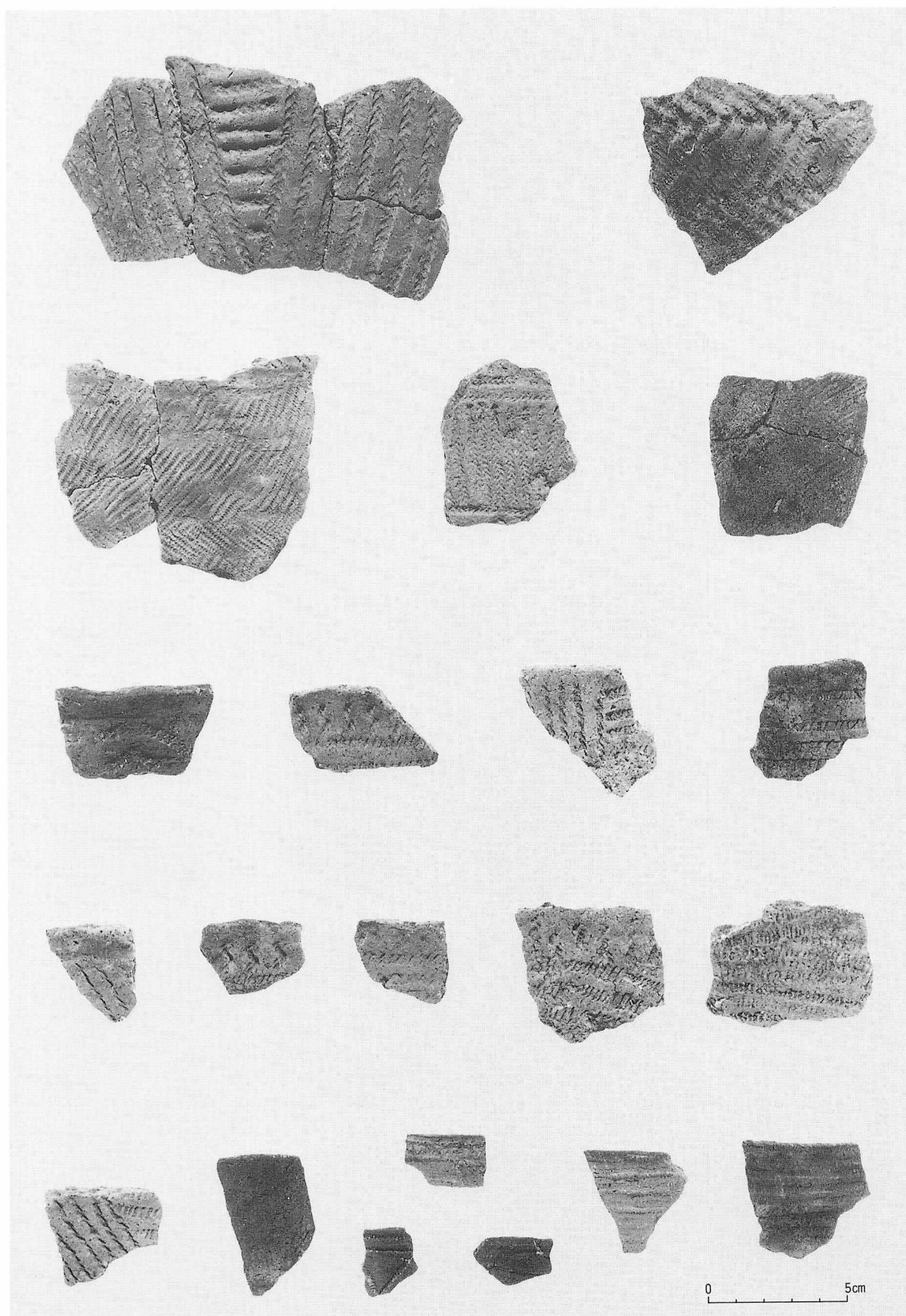


包含層出土の土器（縄文時代早期・縄文、撚糸文等の土器）

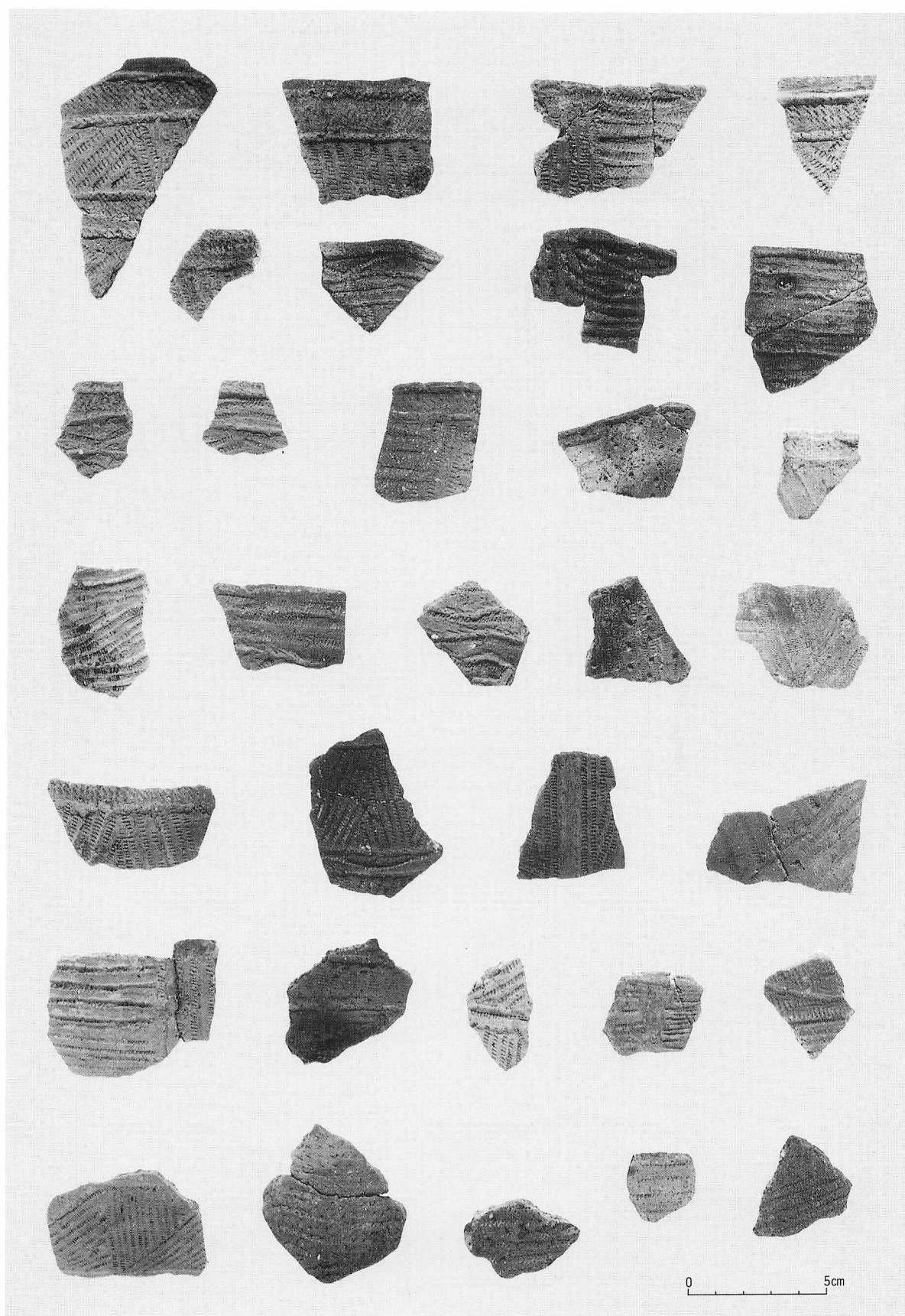


包含層出土の土器（縄文時代早期・縄文、撚糸文等の土器）



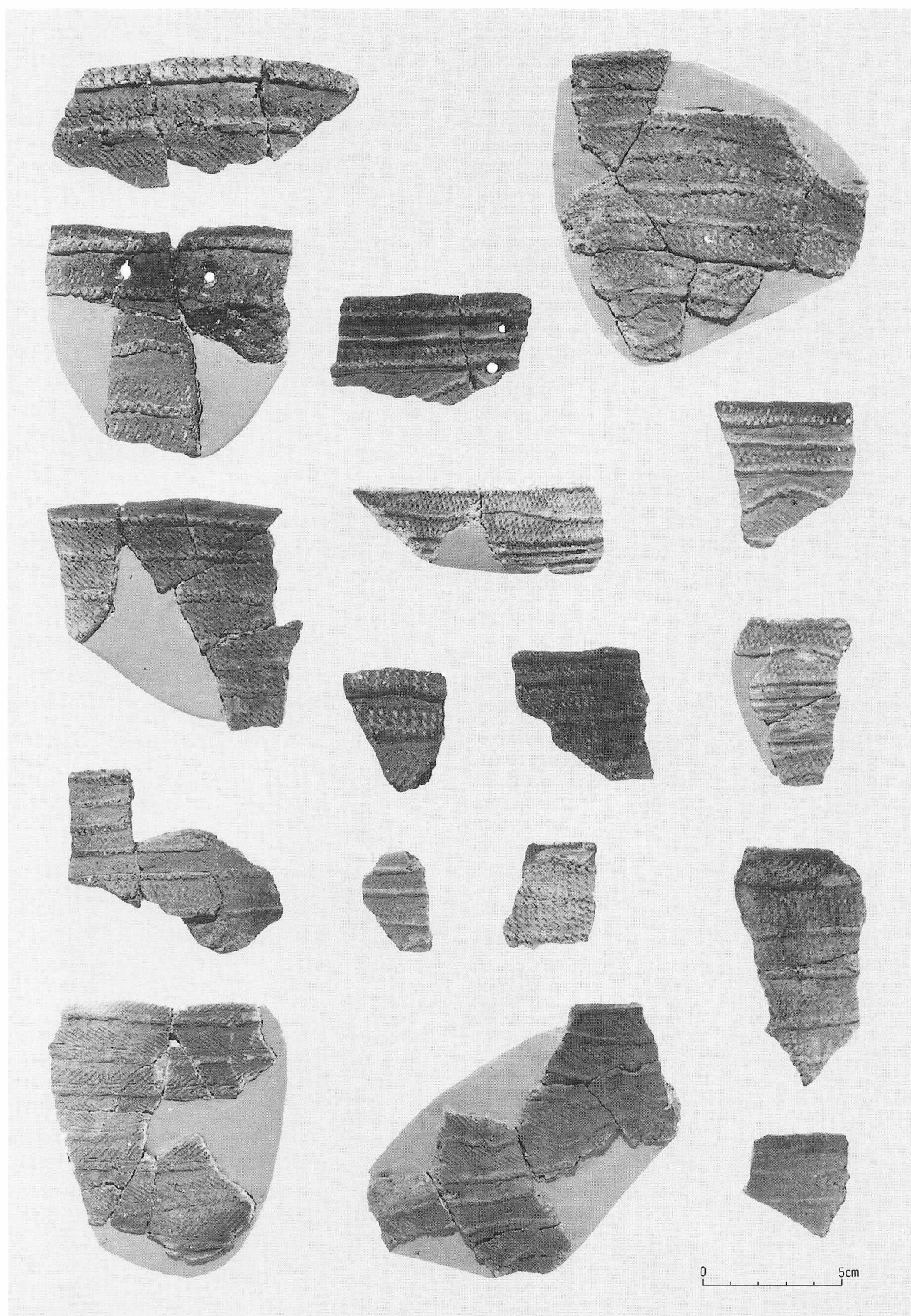


包含層出土の土器（縄文時代早期・縄文、撚糸文等の土器）

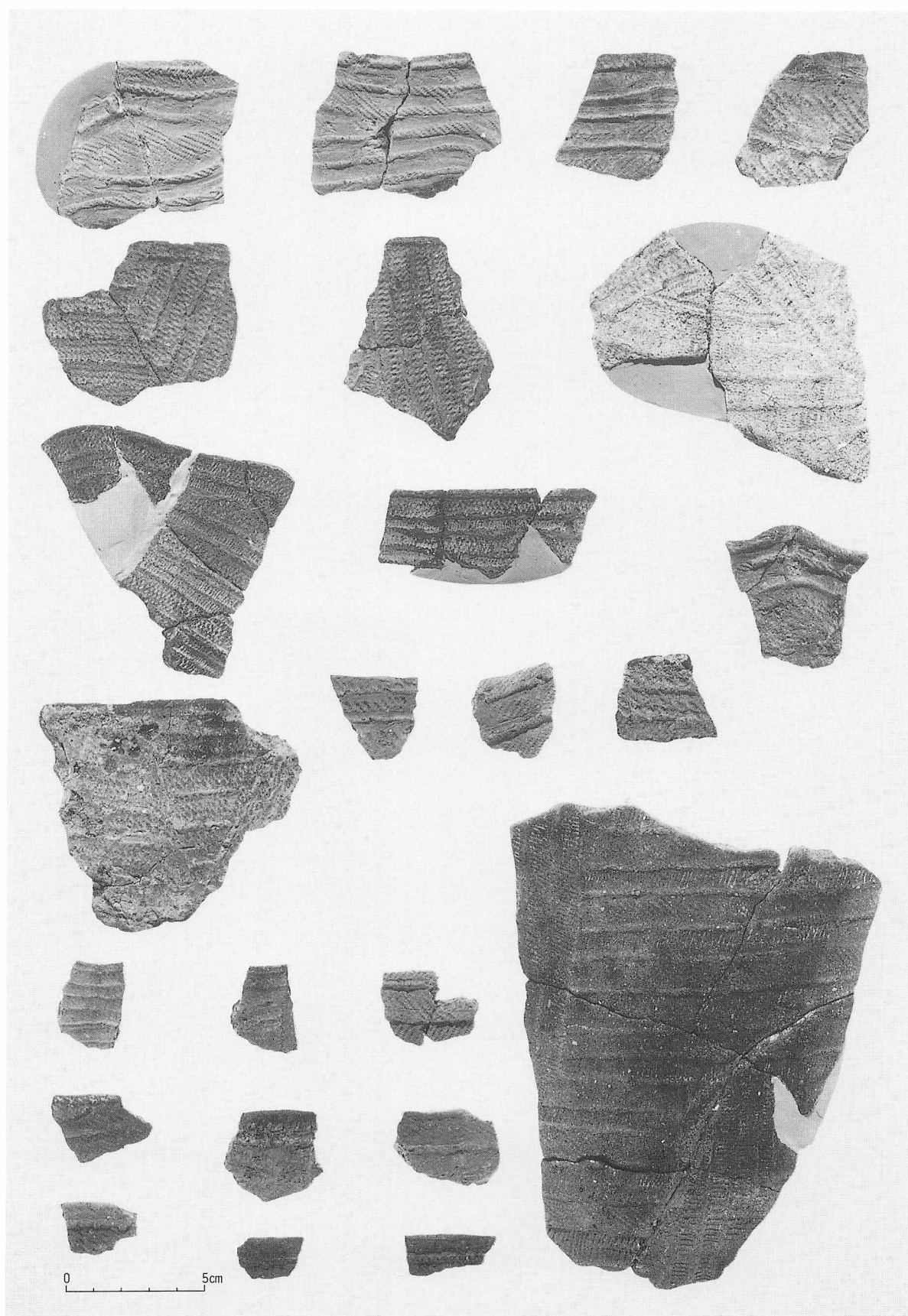


包含層出土の土器（縄文時代早期・縄文、撚糸文等の土器）



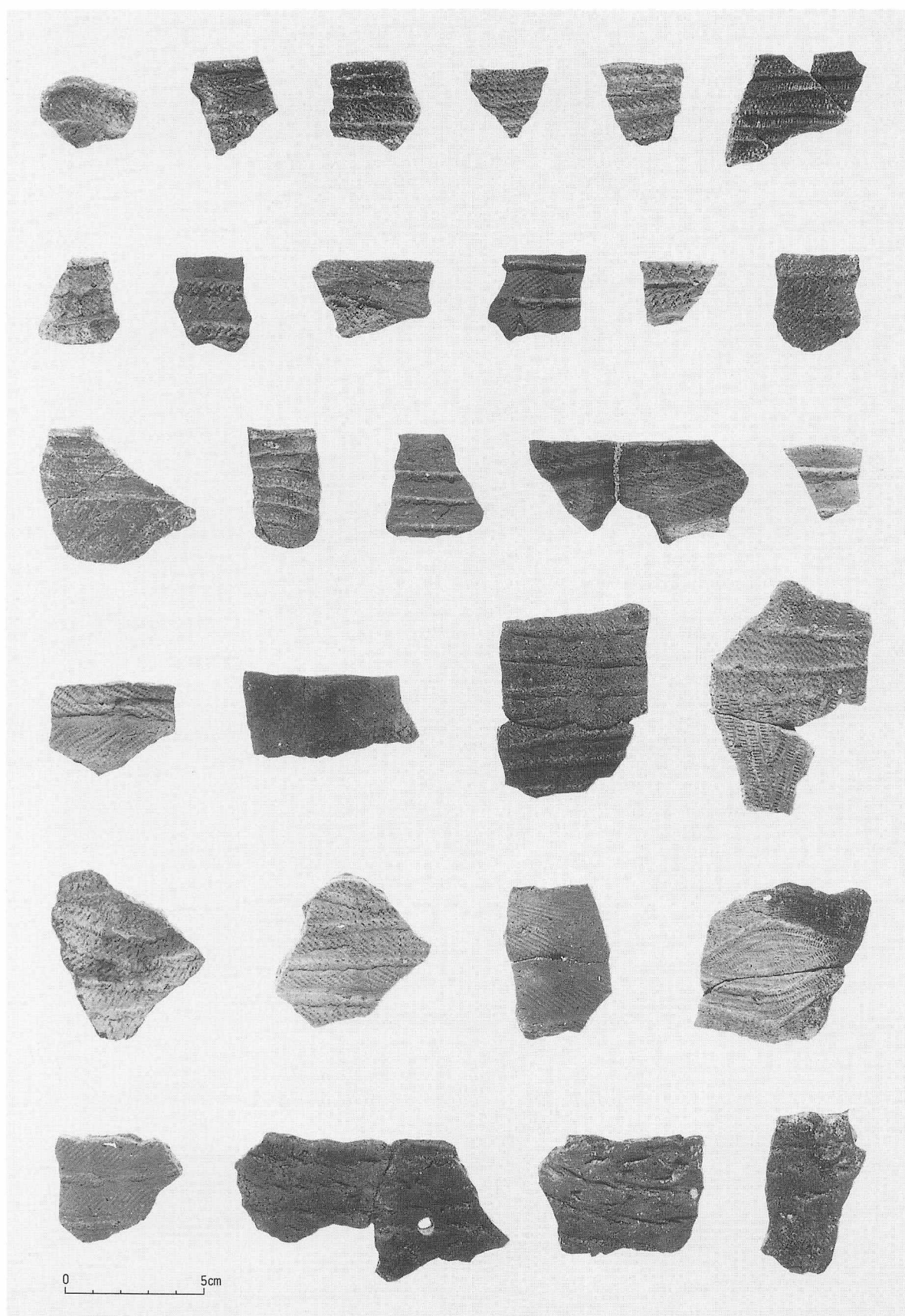


包含層出土の土器（縄文時代早期・縄文、撚糸文等の土器）

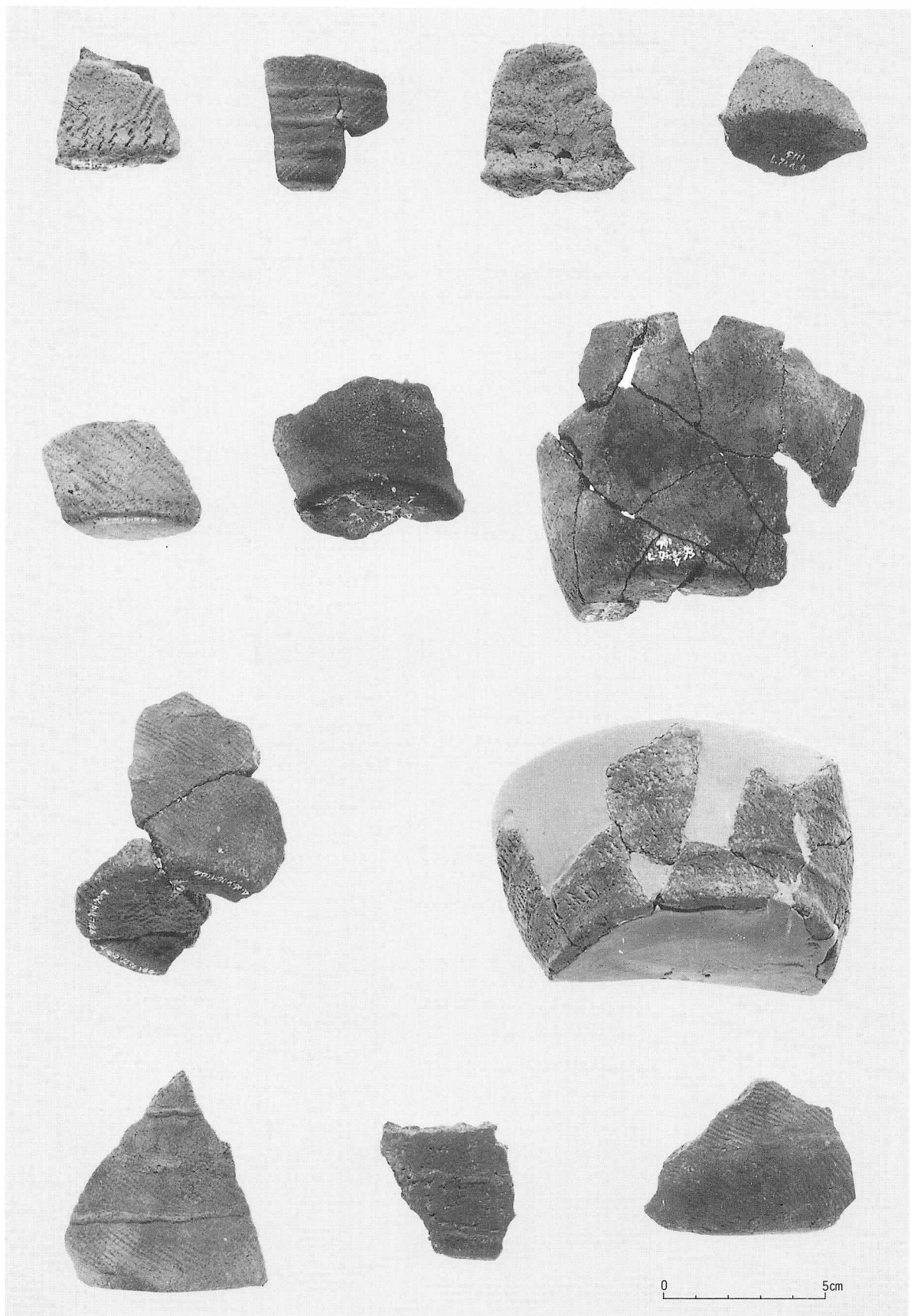


包含層出土の土器（縄文時代早期・縄文、撚糸文等の土器）



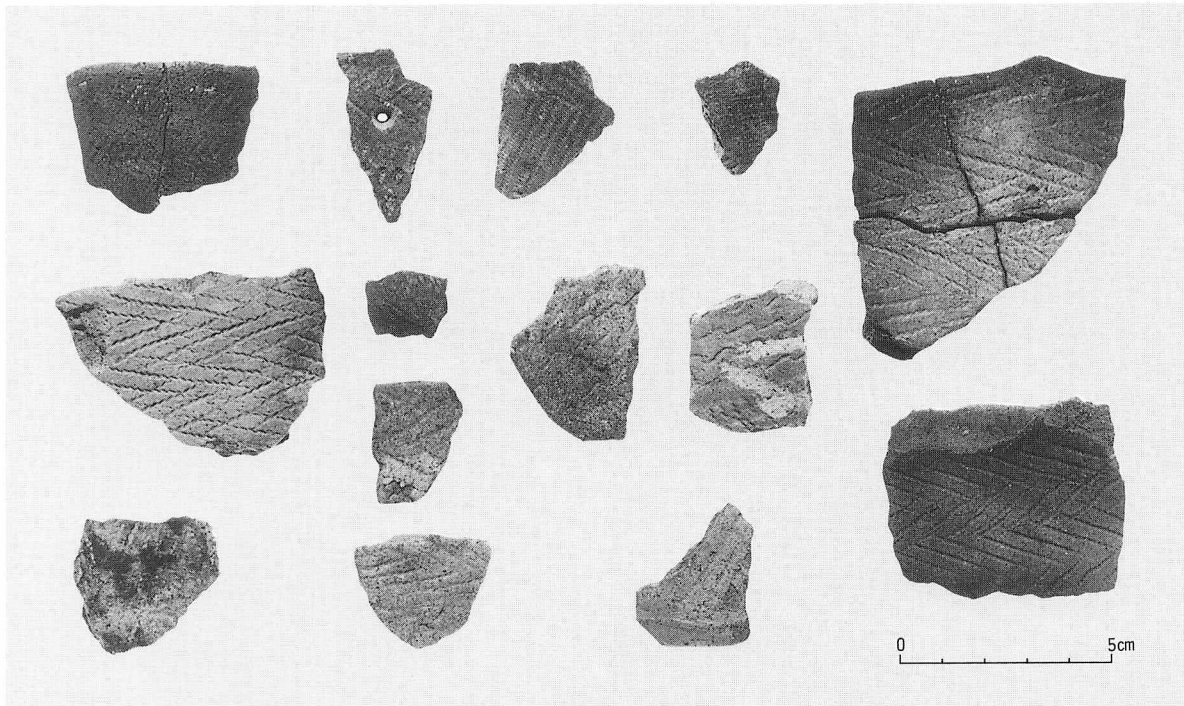


包含層出土の土器（縄文時代早期・縄文、撚糸文等の土器）

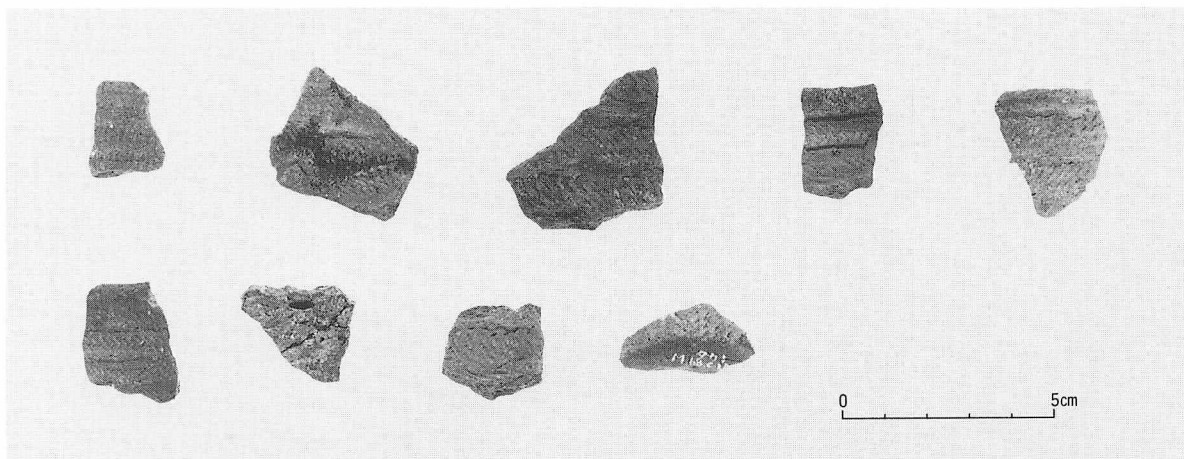


包含層出土の土器（縄文時代早期・縄文、撚糸文等の土器）

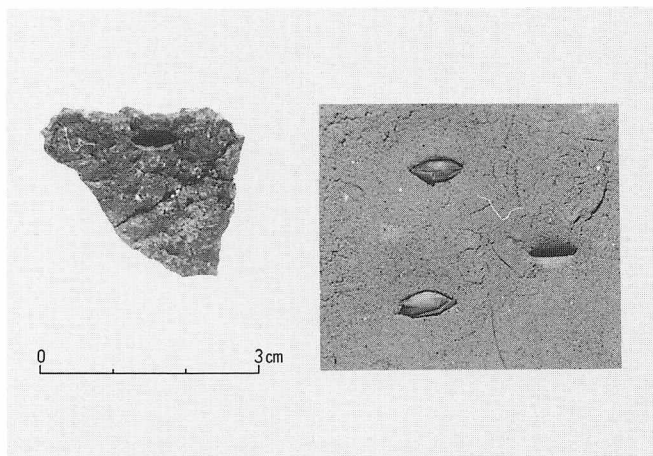




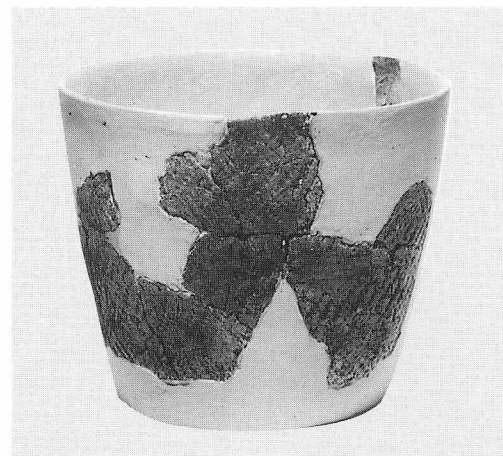
包含層出土の土器（縄文時代早期・東釧路Ⅳ式土器）



包含層出土の土器（縄文時代早期・中茶路式土器）

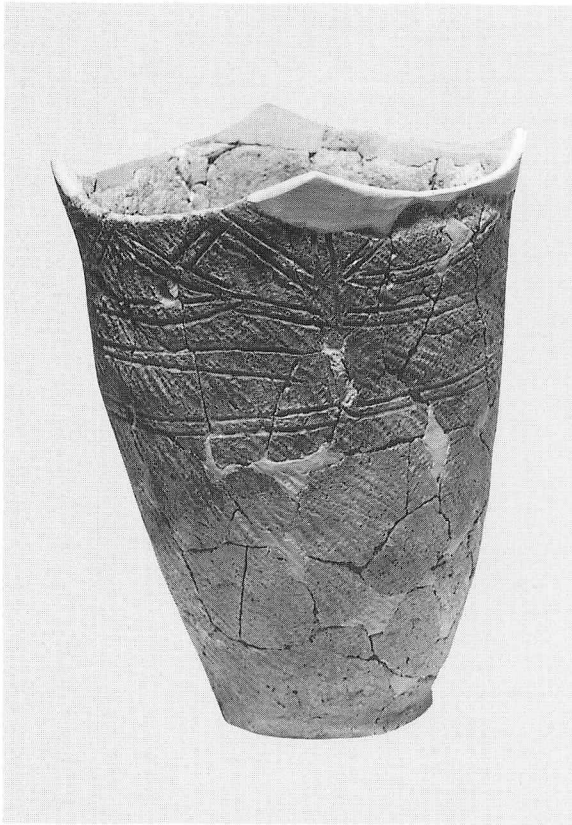


包含層出土の土器（左）種子圧痕の土器  
（右）ササの種子圧痕模式

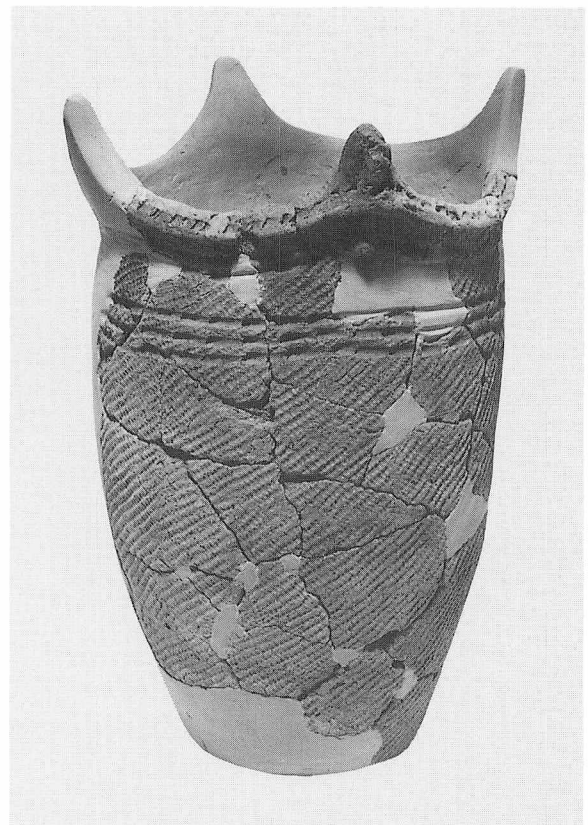


包含層出土の土器（縄文時代早期・東釧路Ⅳ式土器）

図版38



包含層出土の土器（縄文時代中期）



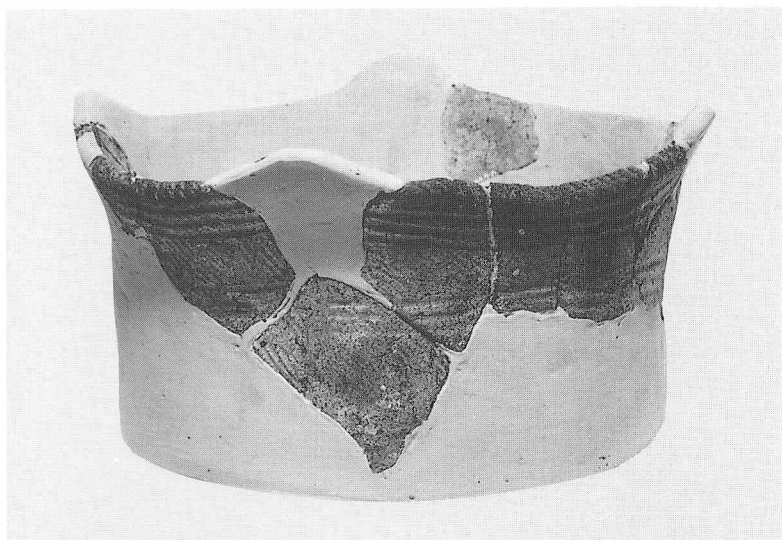
包含層出土の土器（縄文時代中期）



包含層出土の土器（縄文時代中期）



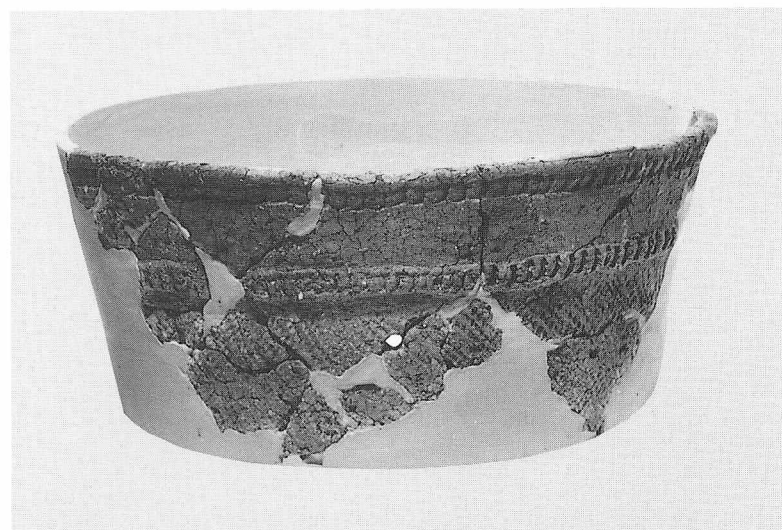
包含層出土の土器（縄文時代中期）



包含層出土の土器（縄文時代中期）

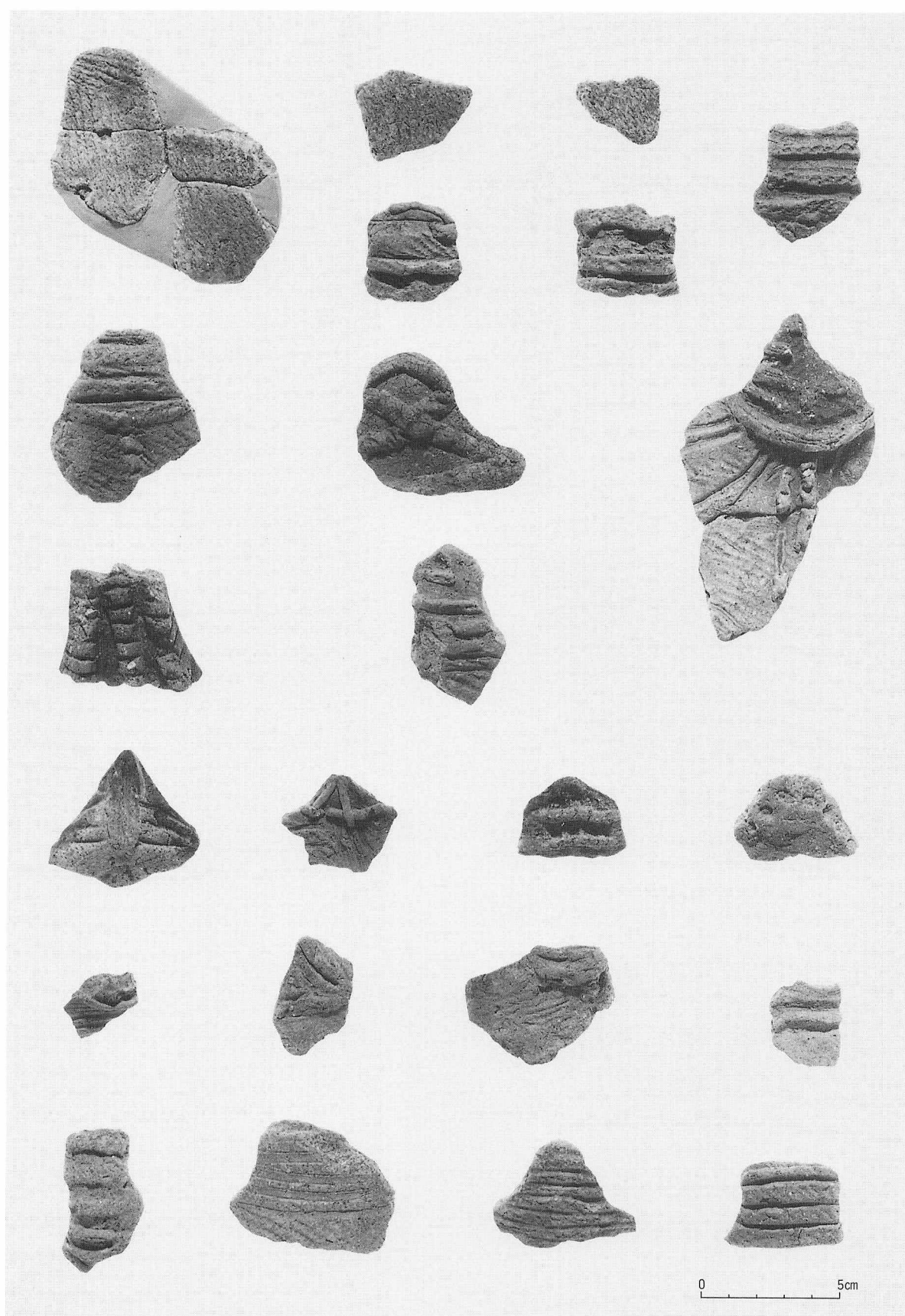


包含層出土の土器（縄文時代中期）



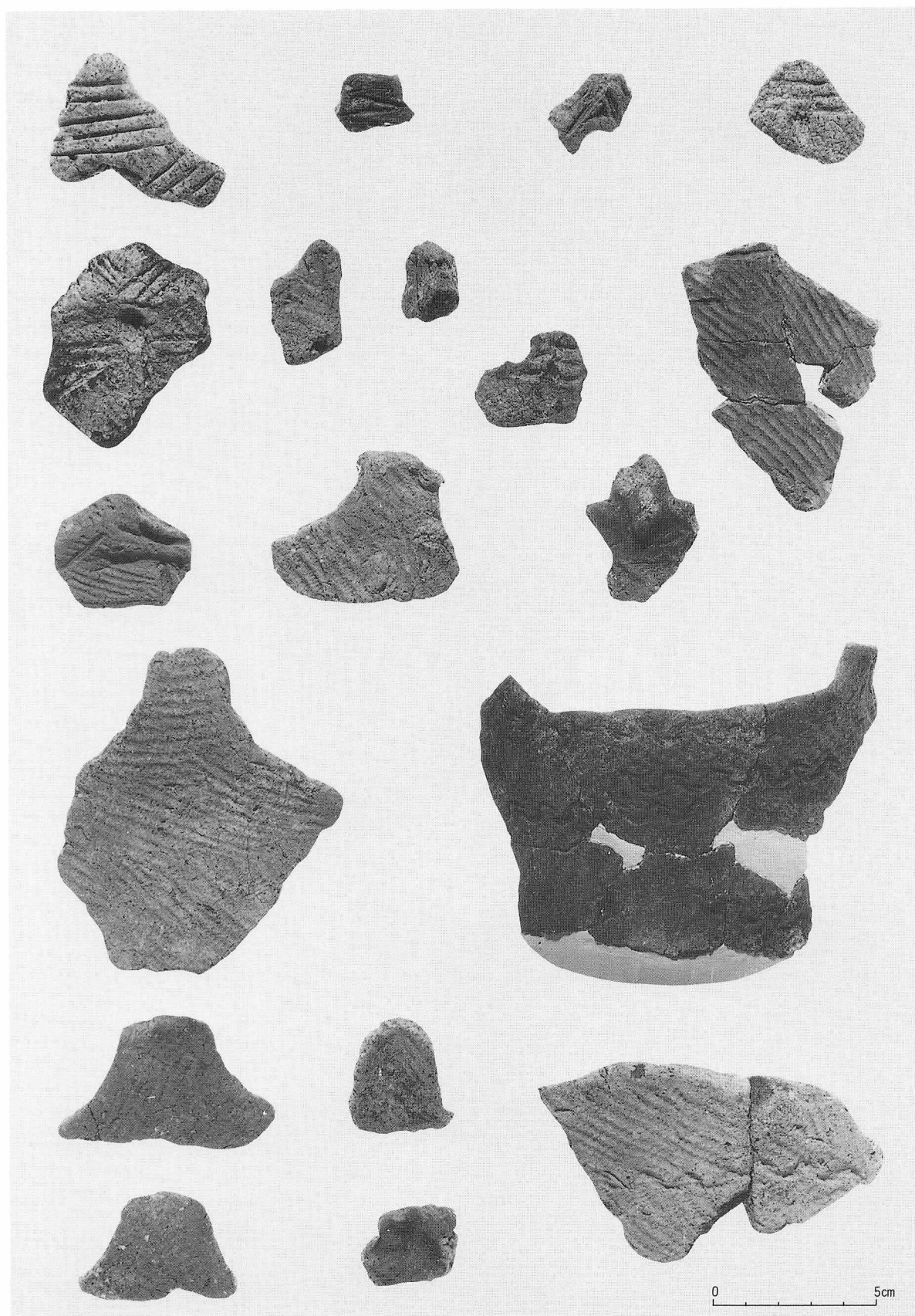
包含層出土の土器（縄文時代後期）



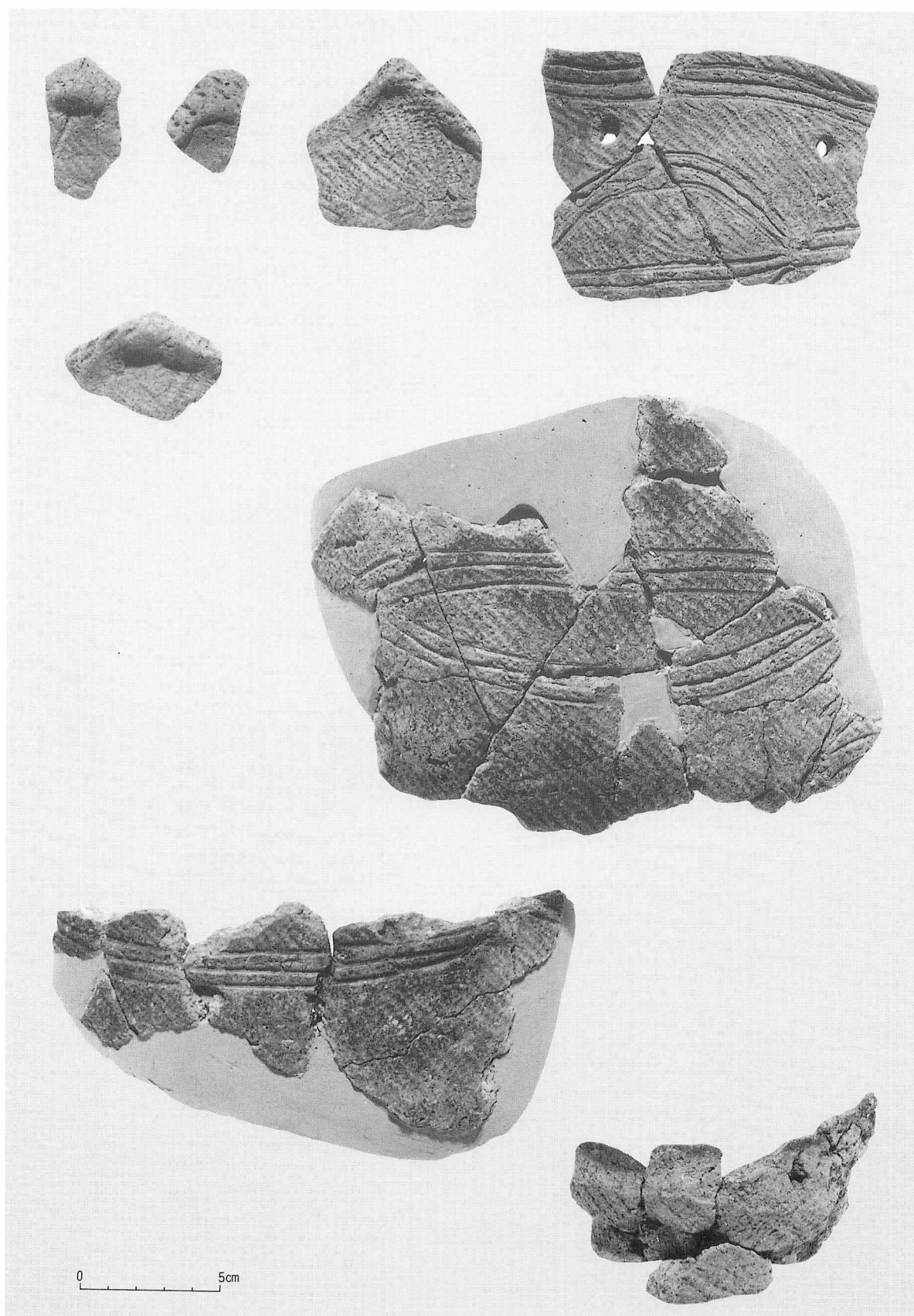


包含層出土の土器（縄文時代前期・中期）



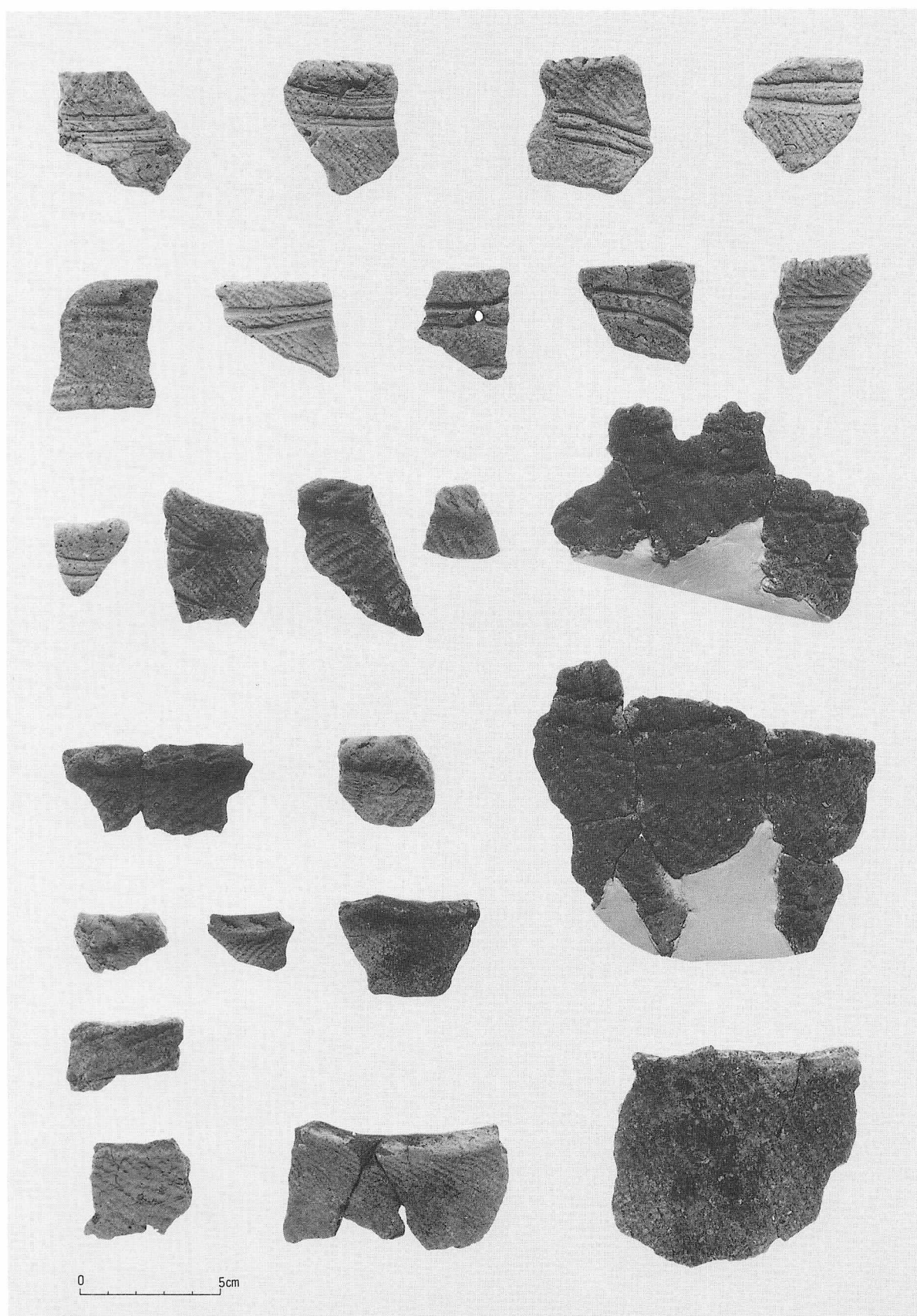


包含層出土の土器（縄文時代中期）

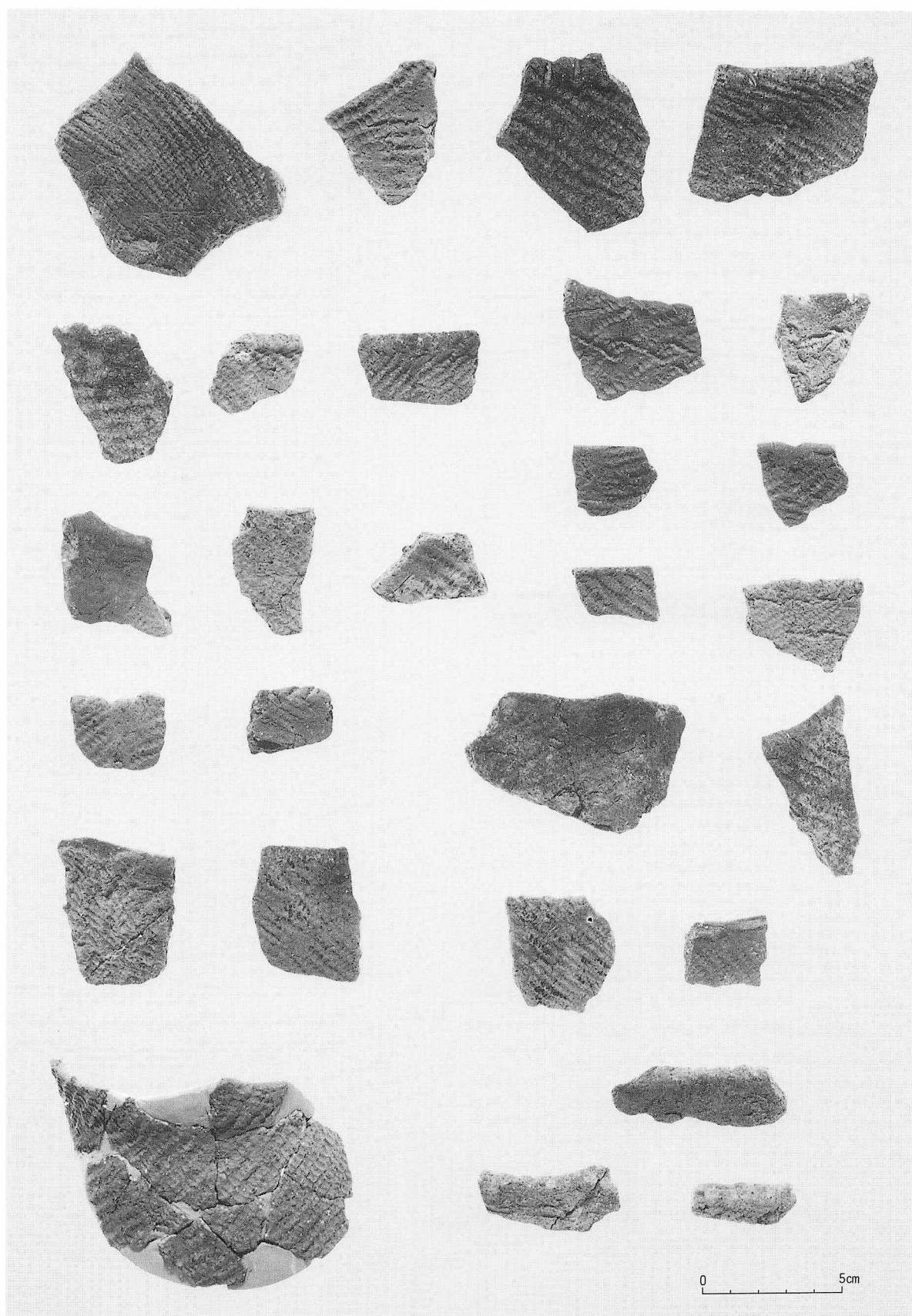


包含層出土の土器（縄文時代中期）



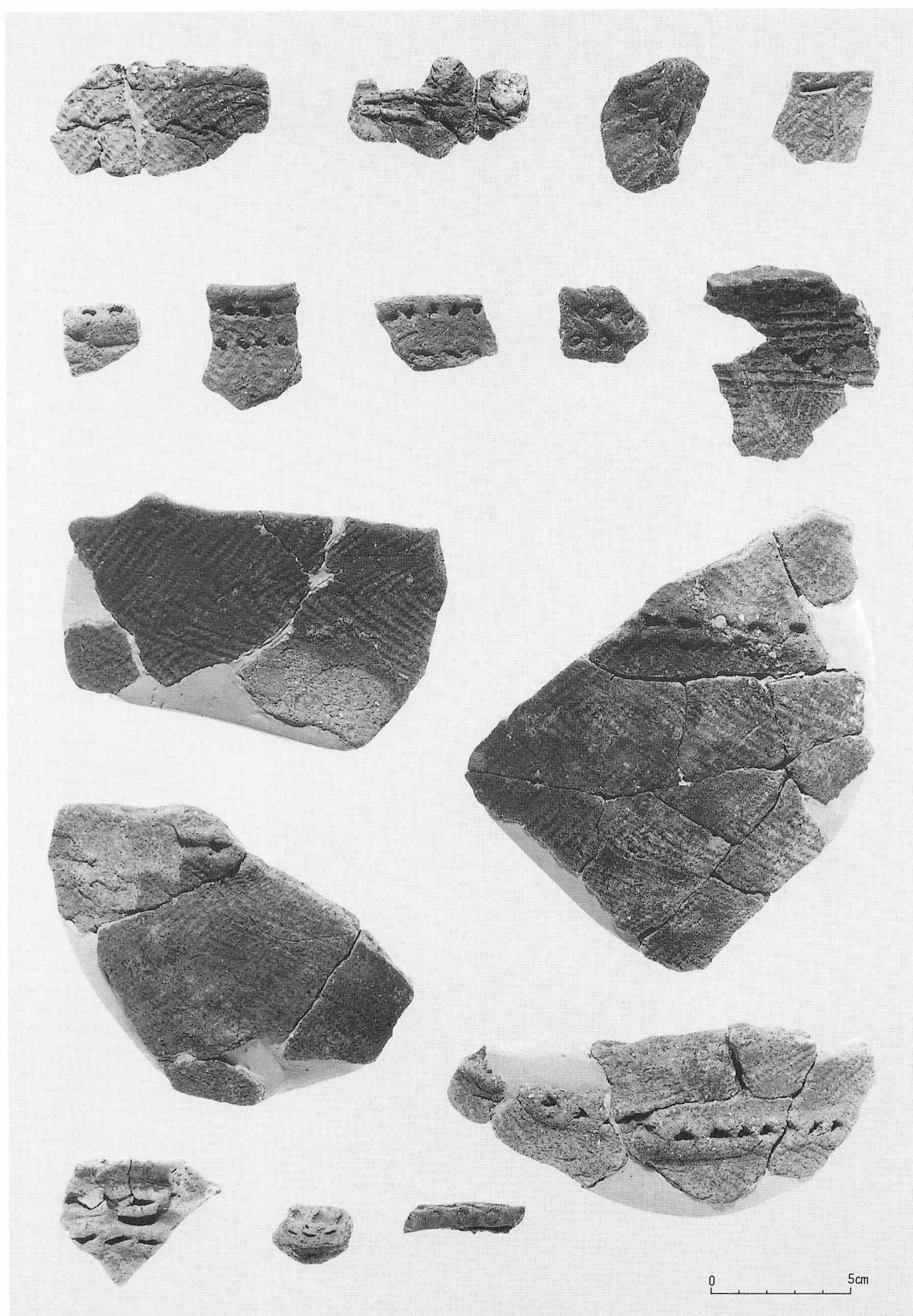


包含層出土の土器（縄文時代中期）

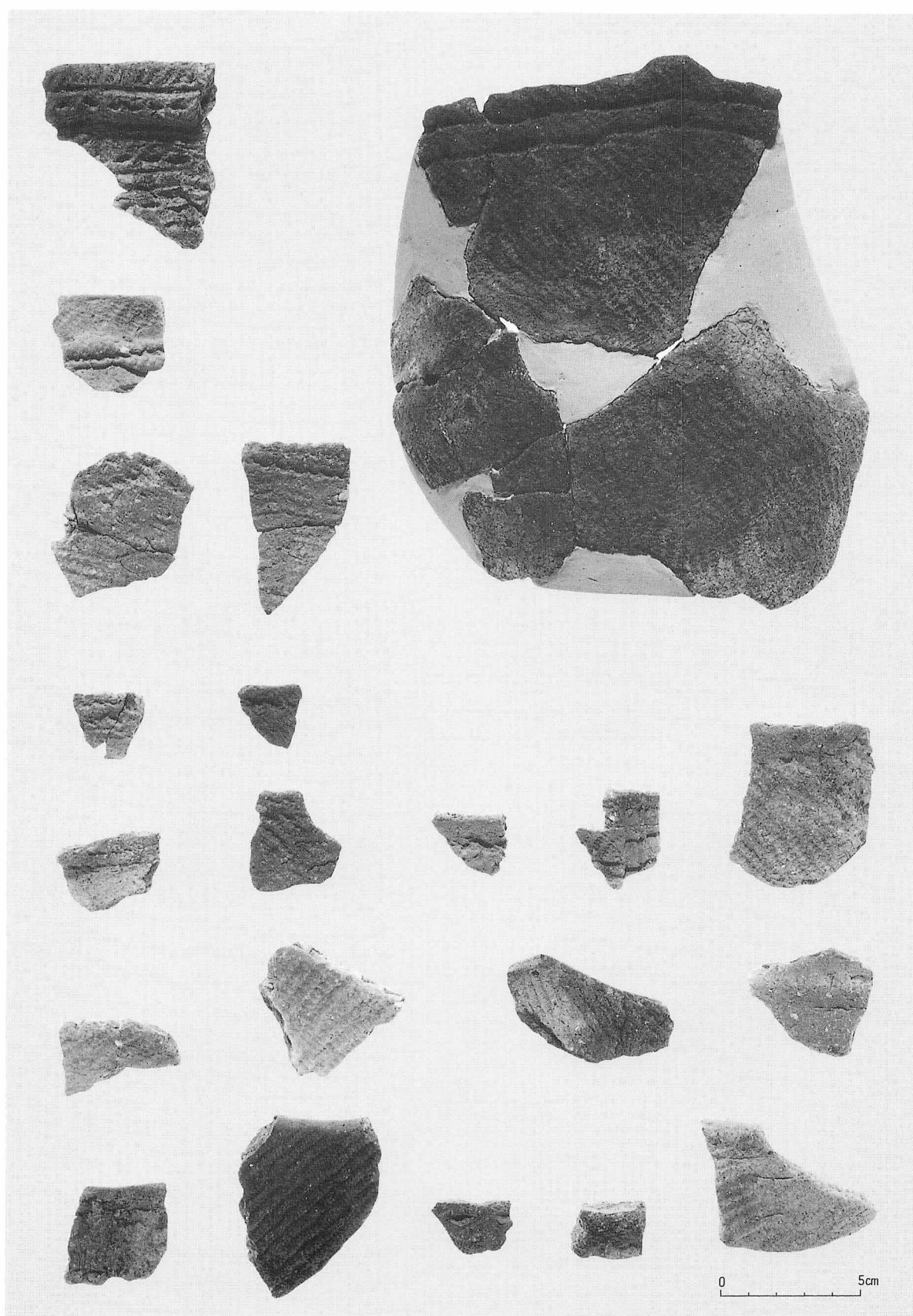


包含層出土の土器（縄文時代中期）



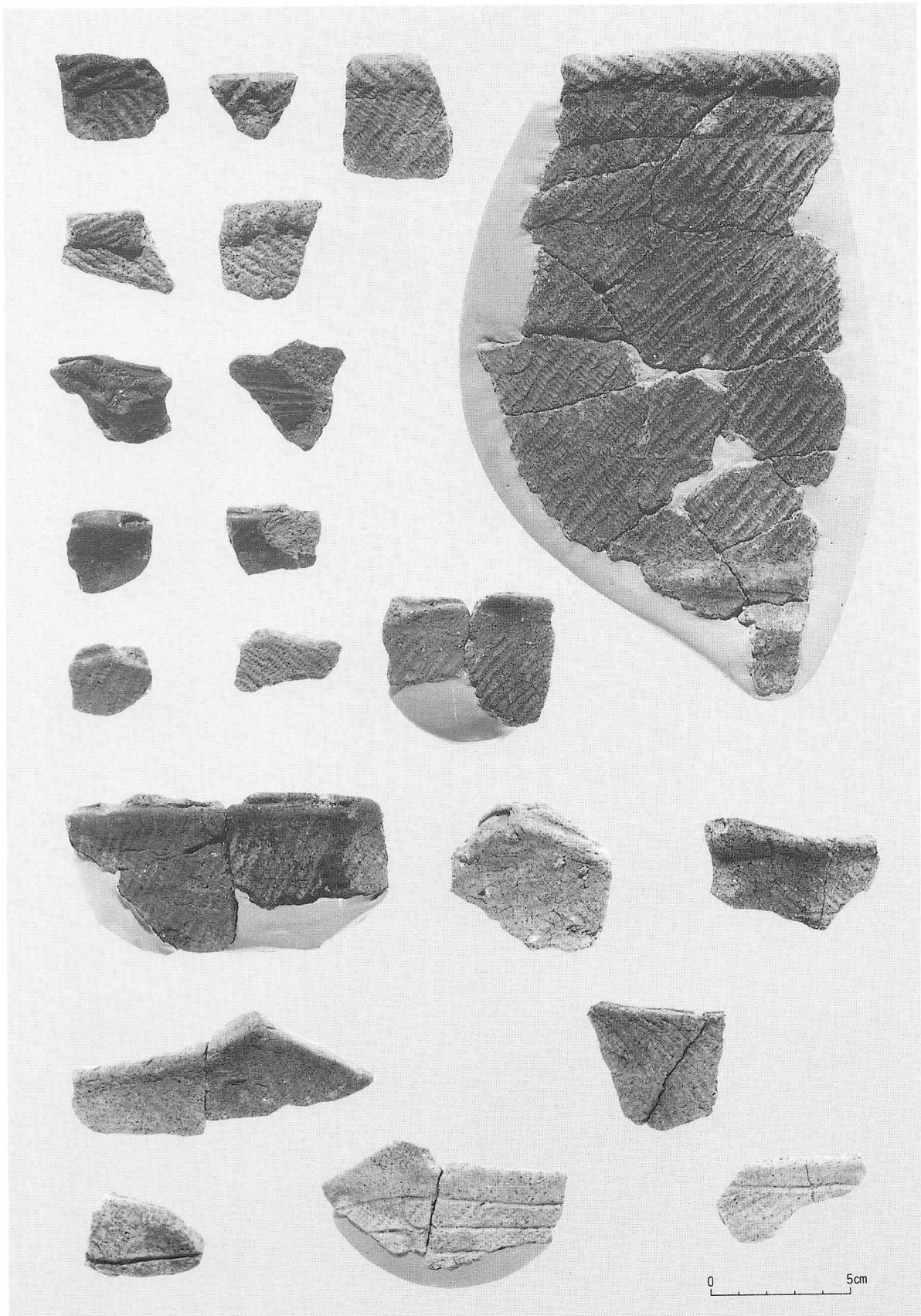


包含層出土の土器（縄文時代中期）

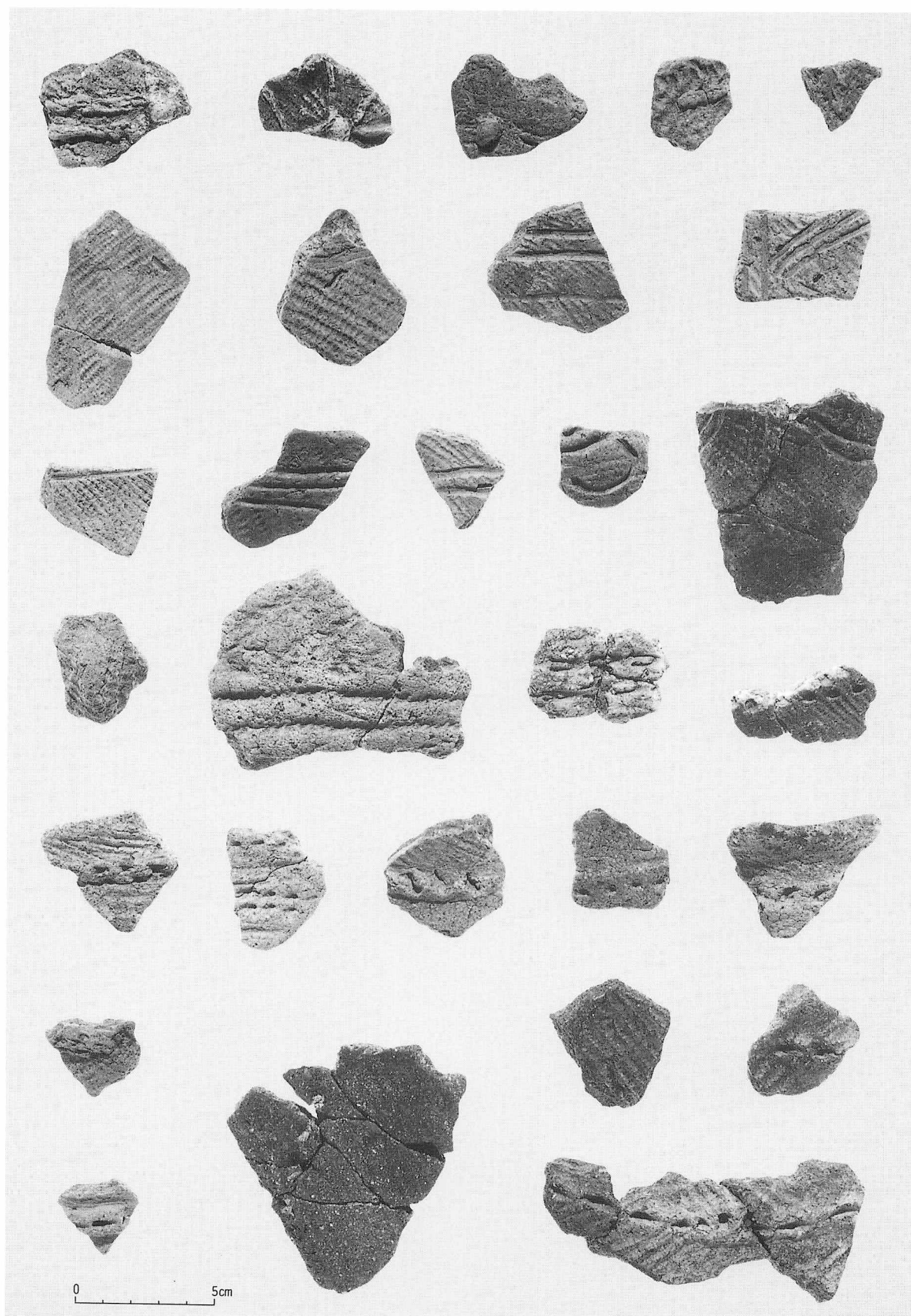


包含層出土の土器（縄文時代中期）



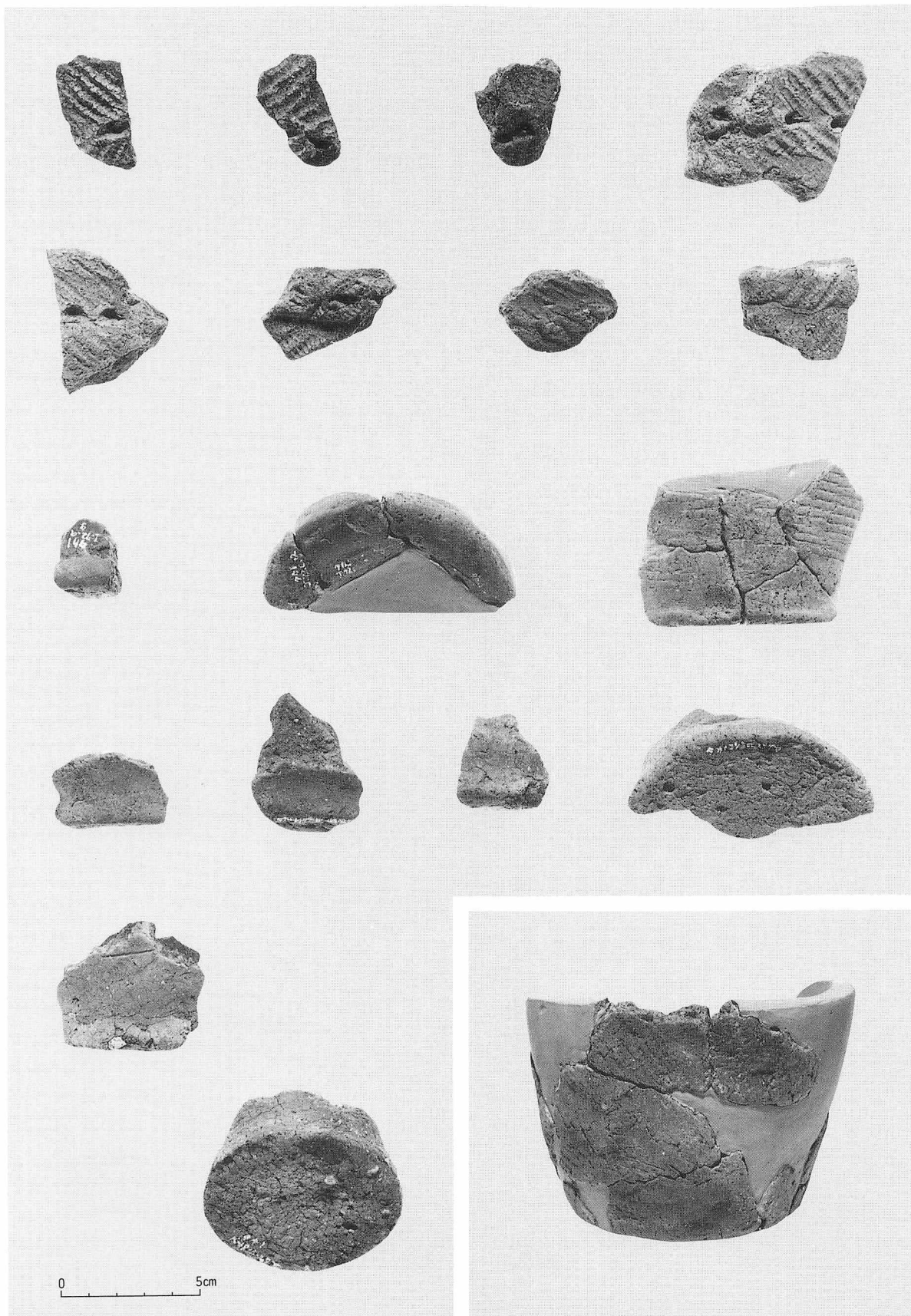


包含層出土の土器（縄文時代中期・後期）

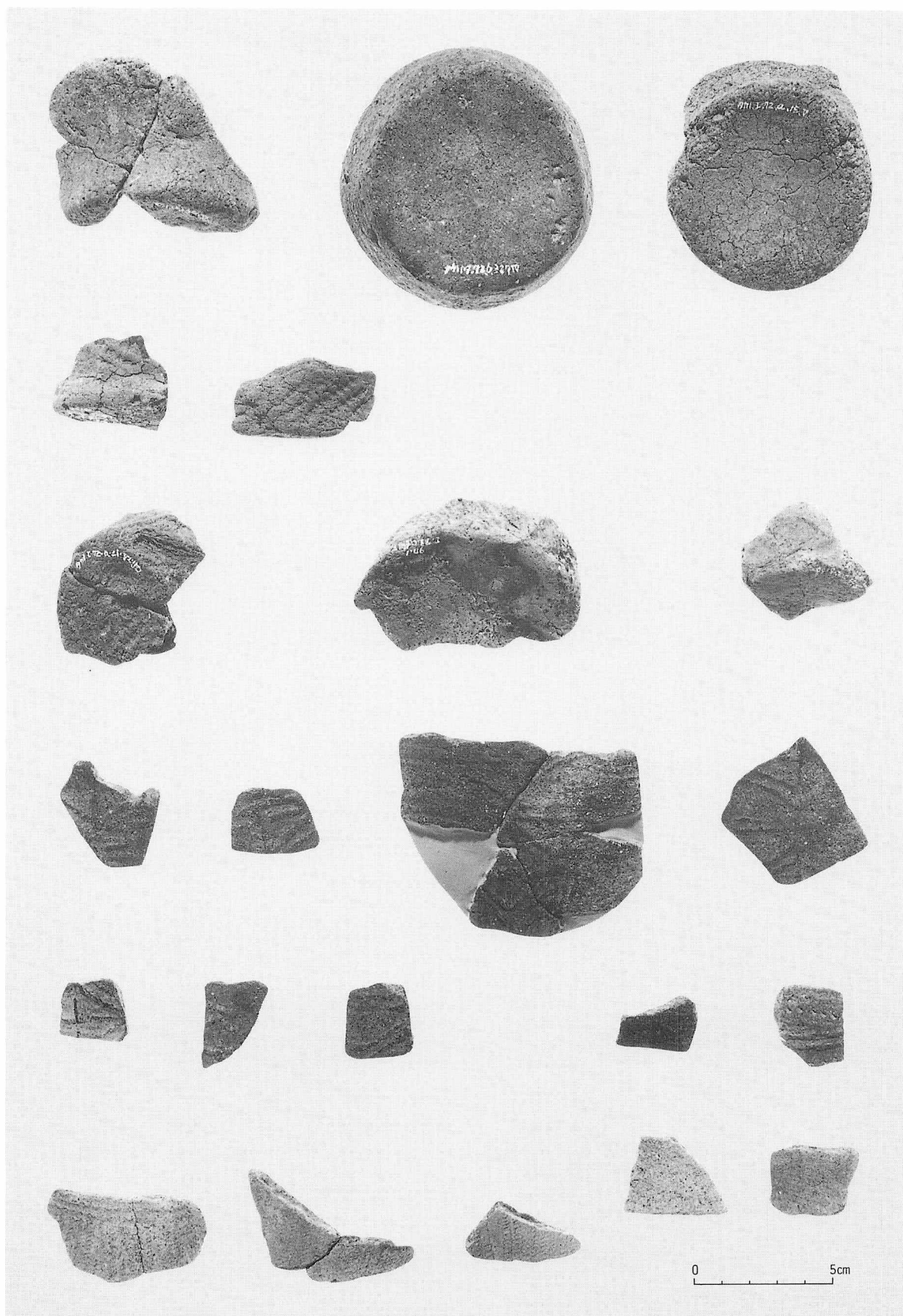


包含層出土の土器（縄文時代中期）



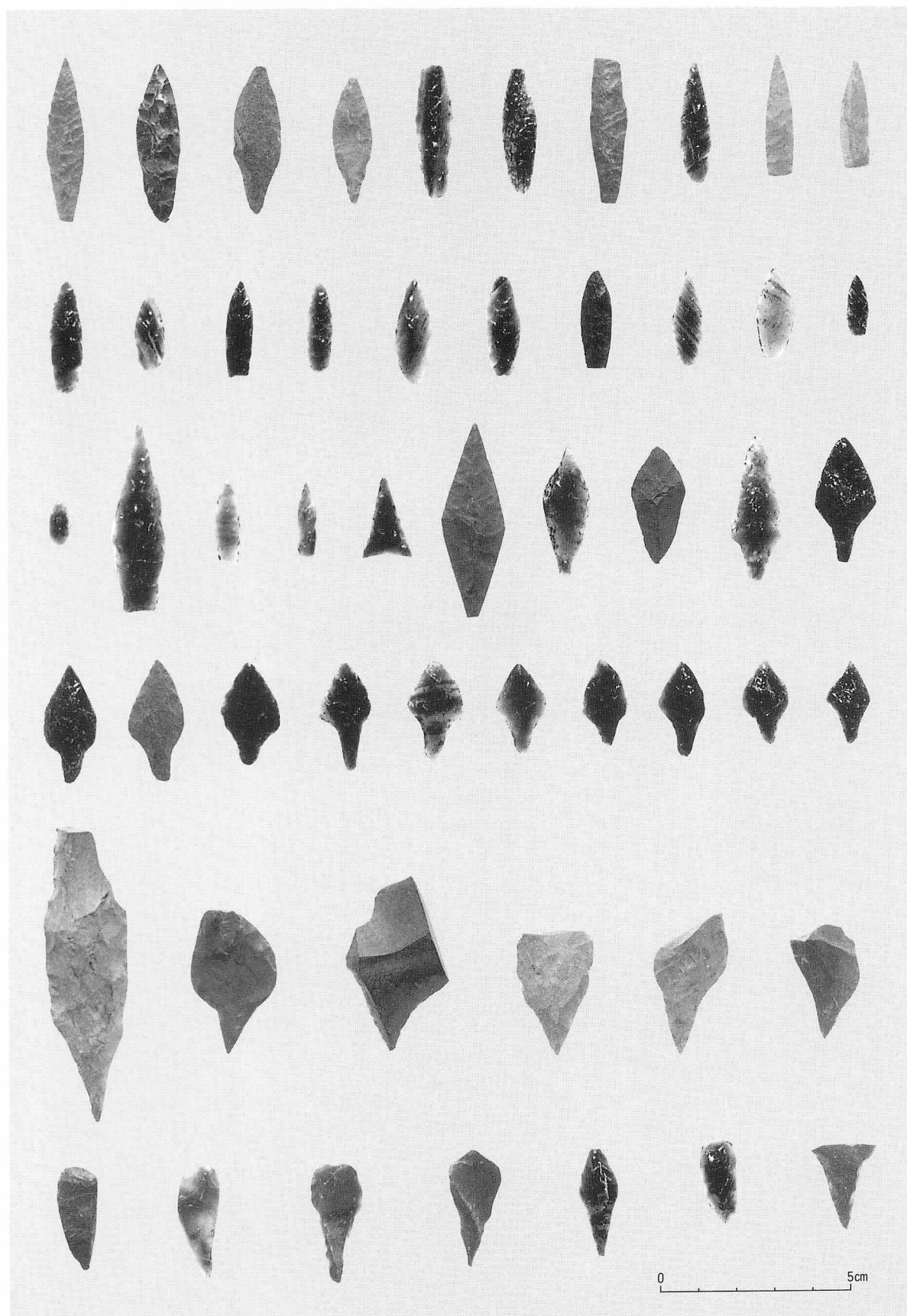


包含層出土の土器（縄文時代中期）

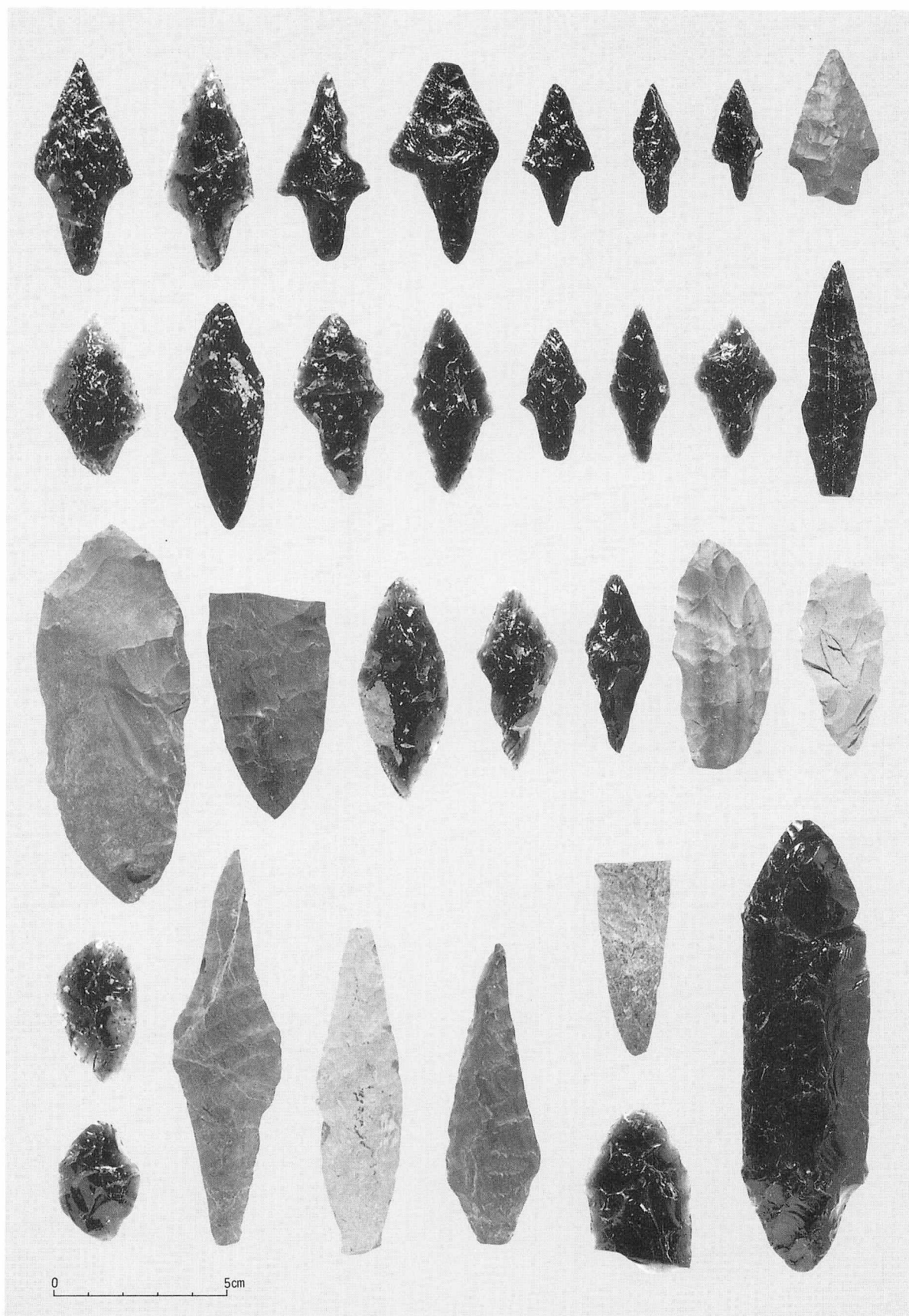


包含層出土の土器（縄文時代中期・続縄文時代）



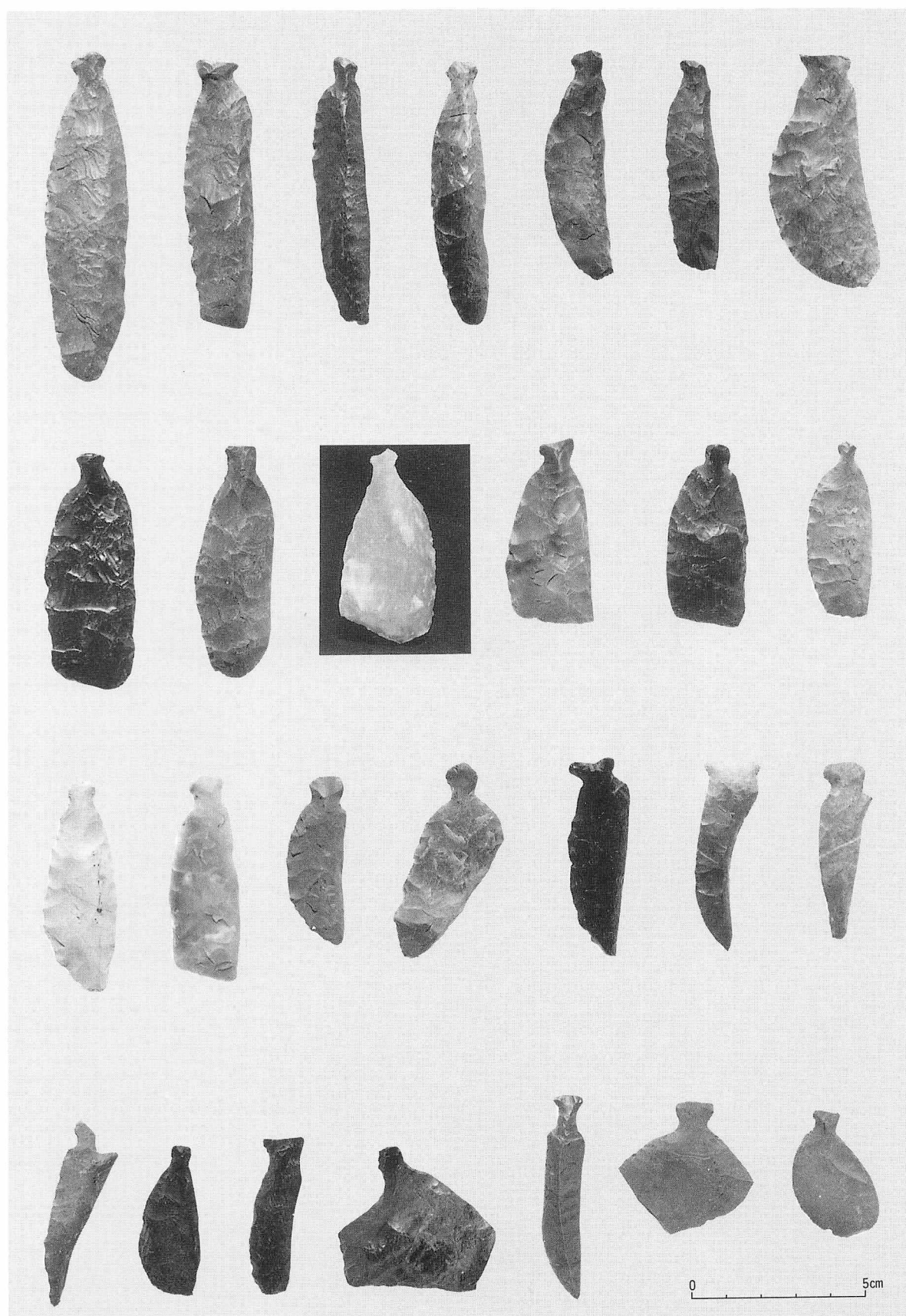


包含層出土の石器（石鏃・石錐）

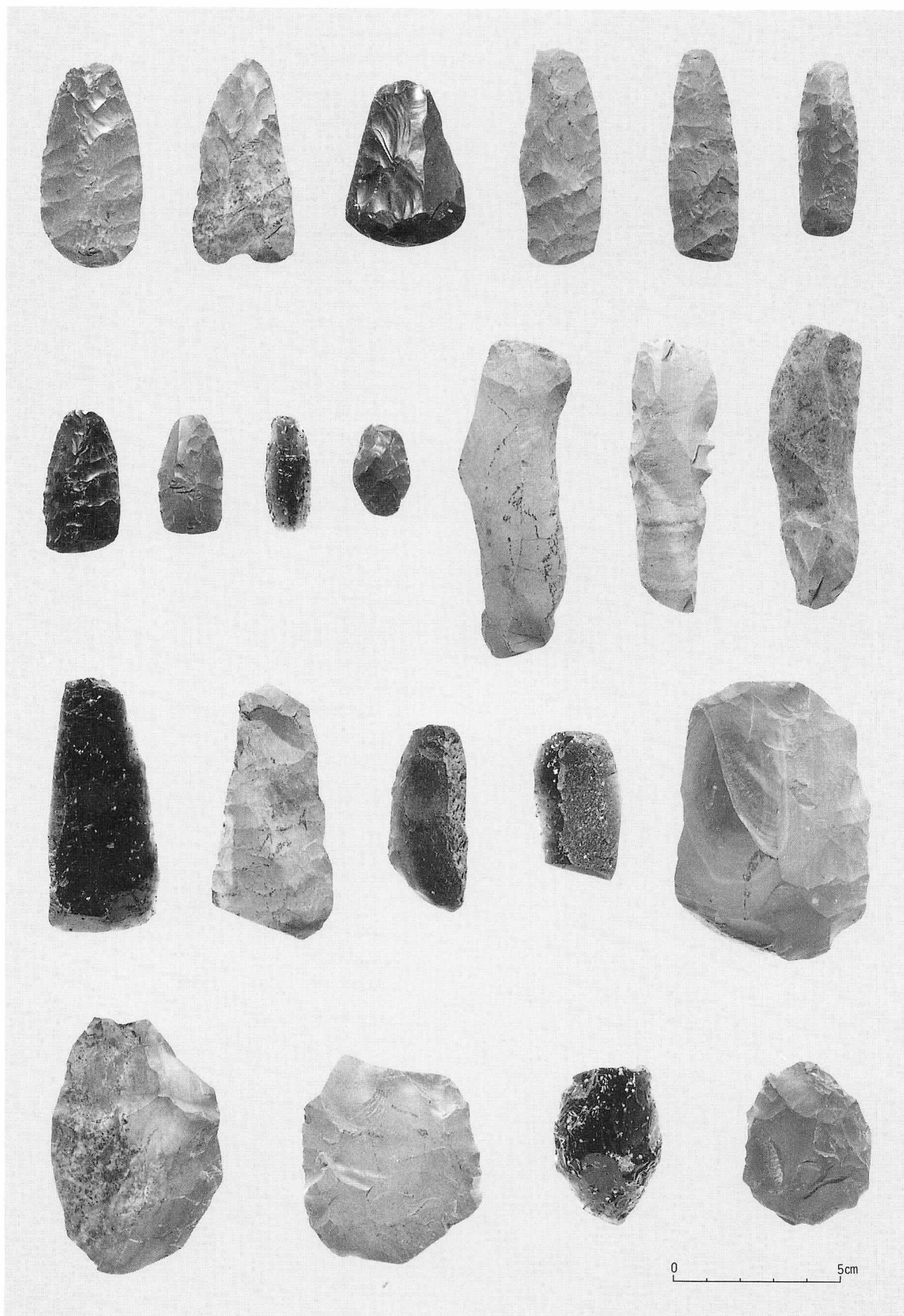


包含層出土の石器（石槍・ナイフ）



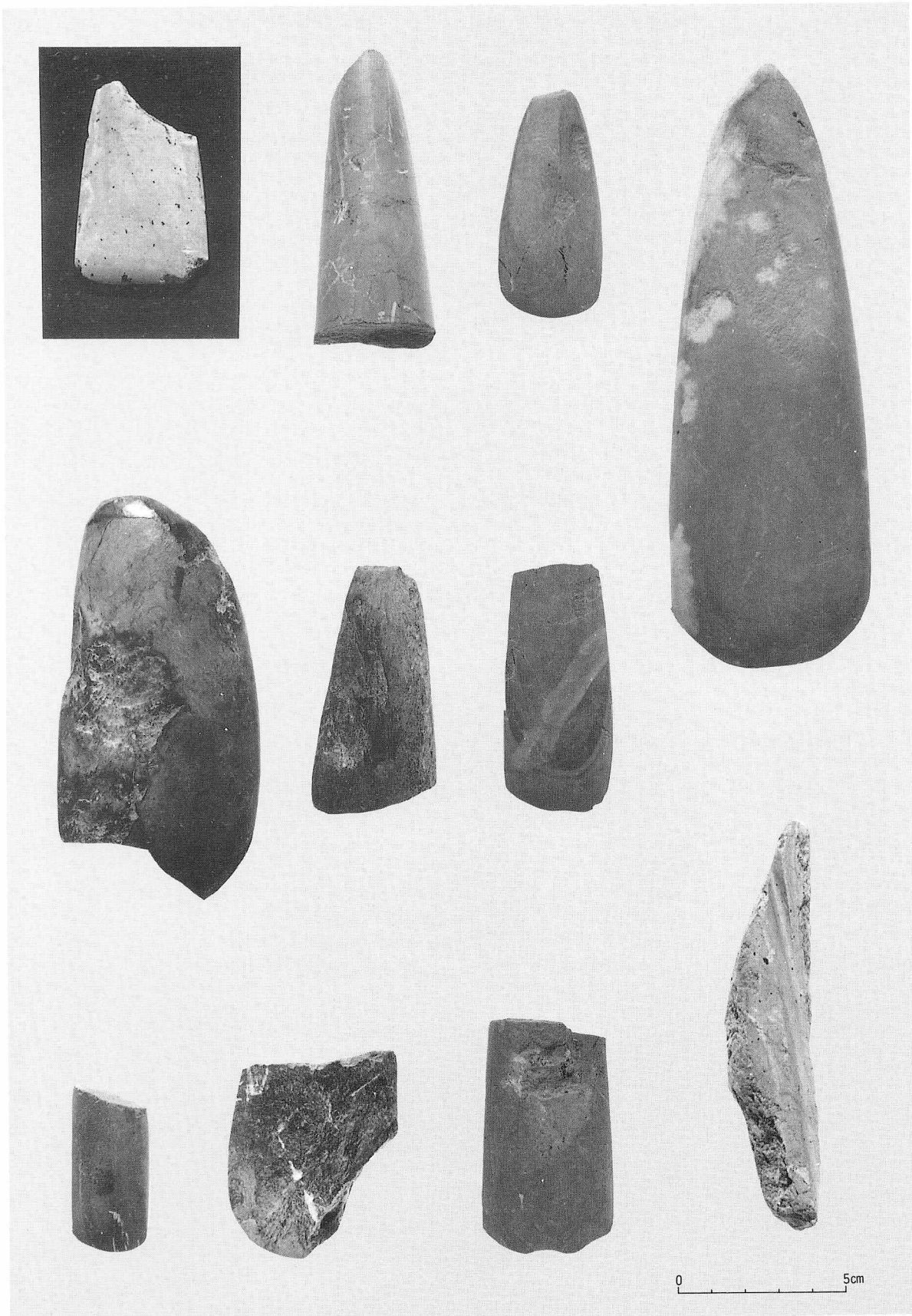


包含層出土の石器（つまみ付きナイフ）

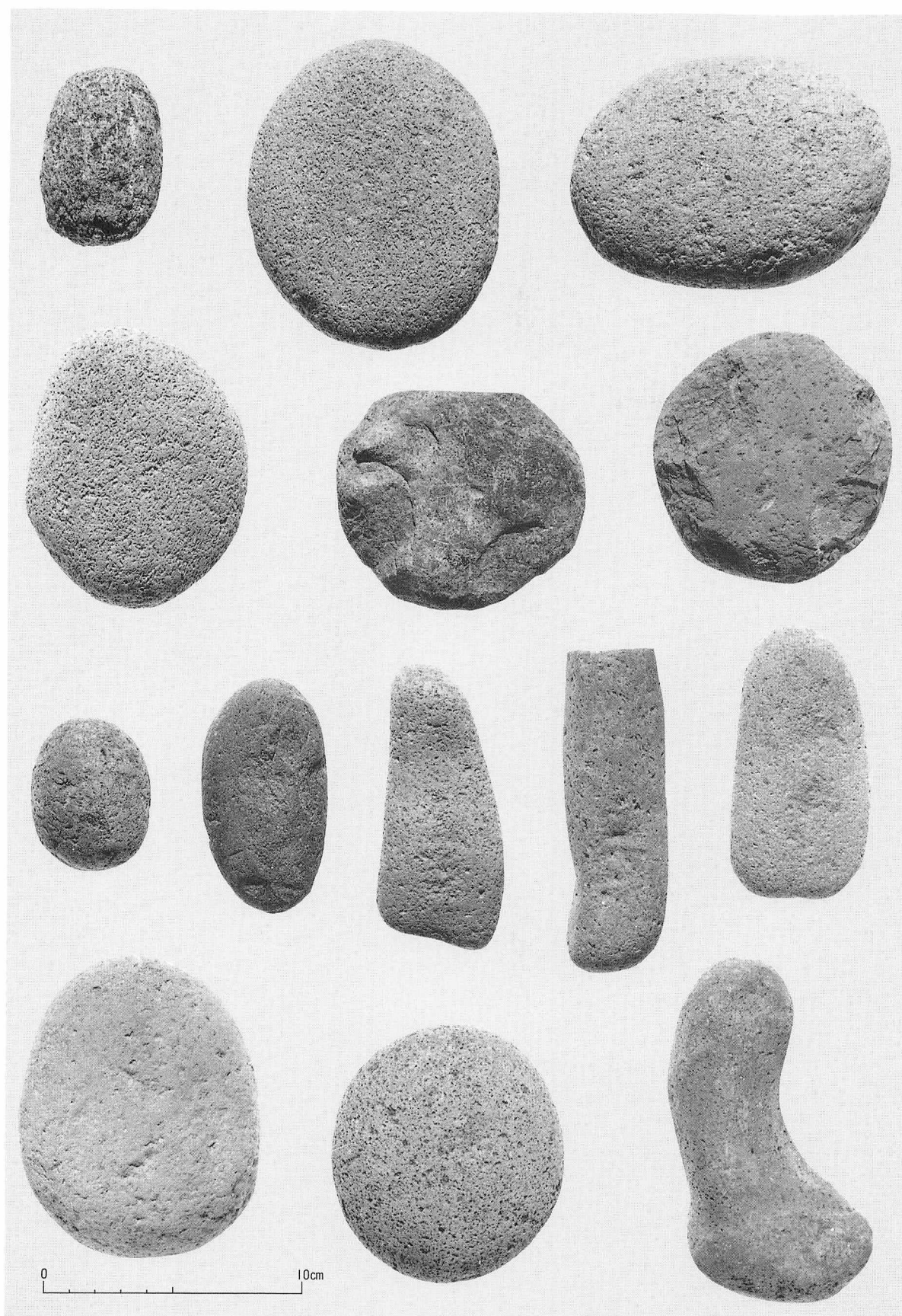


包含層出土の石器（スクレイパー）



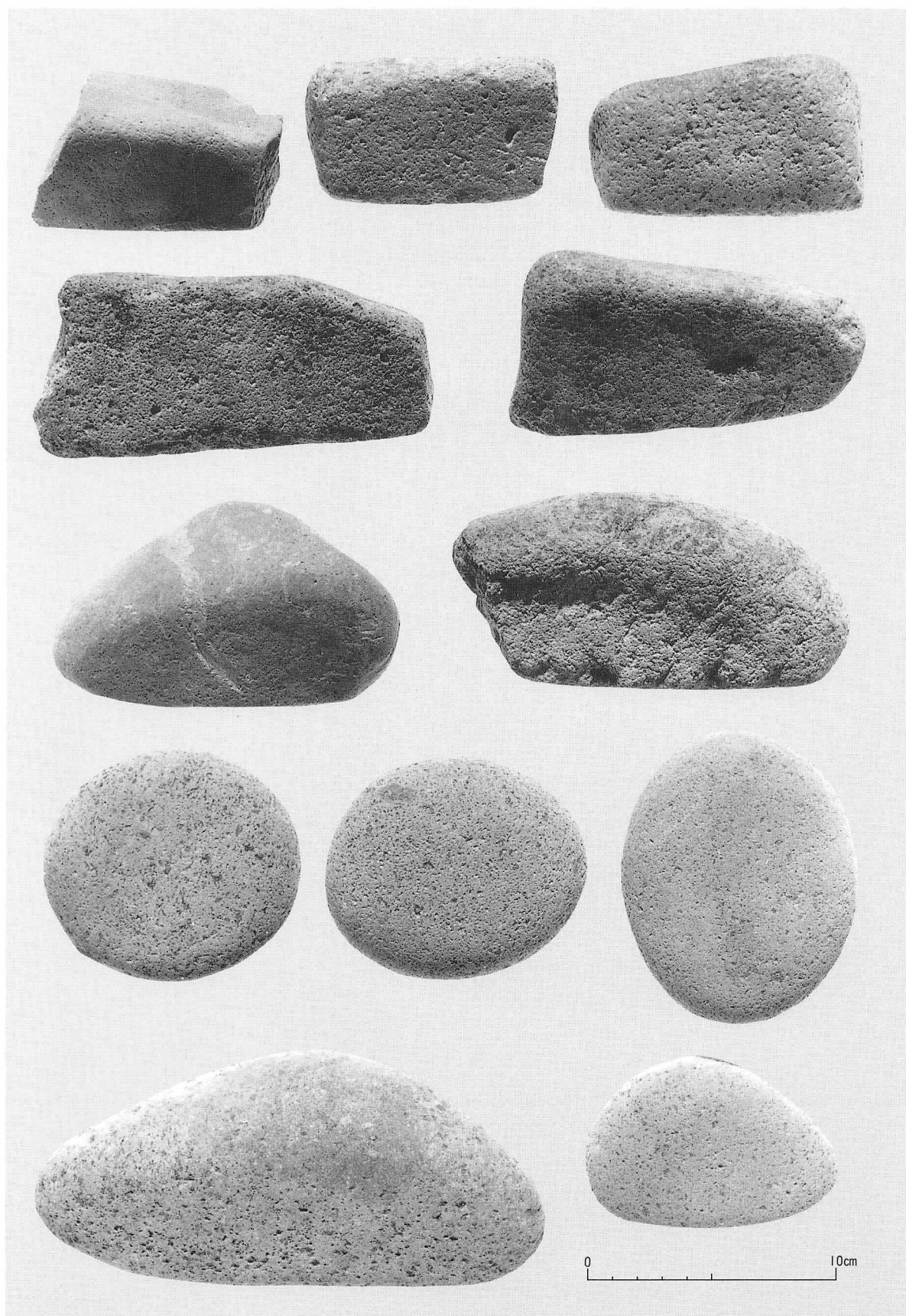


包含層出土の石器（石斧）

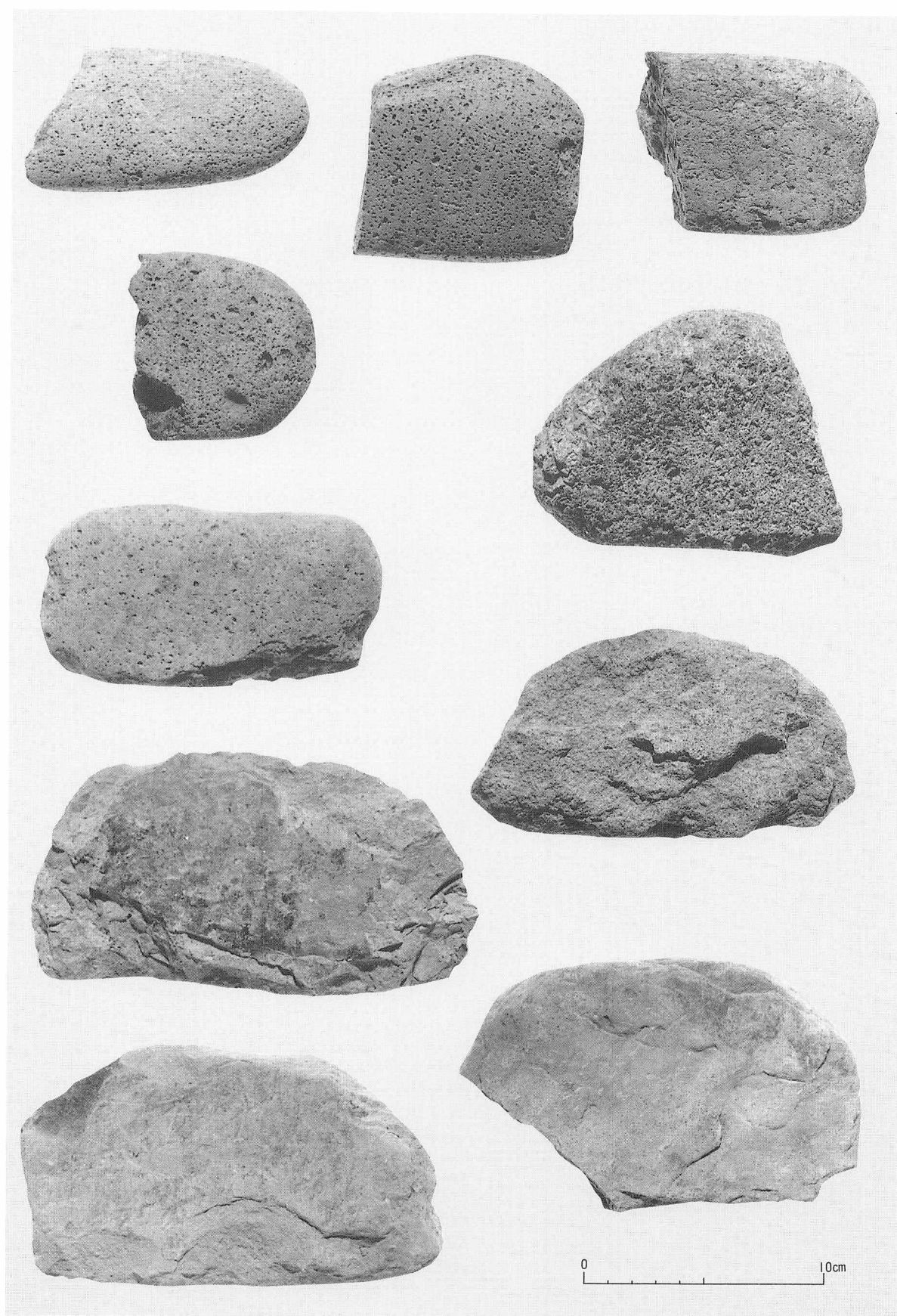


包含層出土の石器（たたき石）



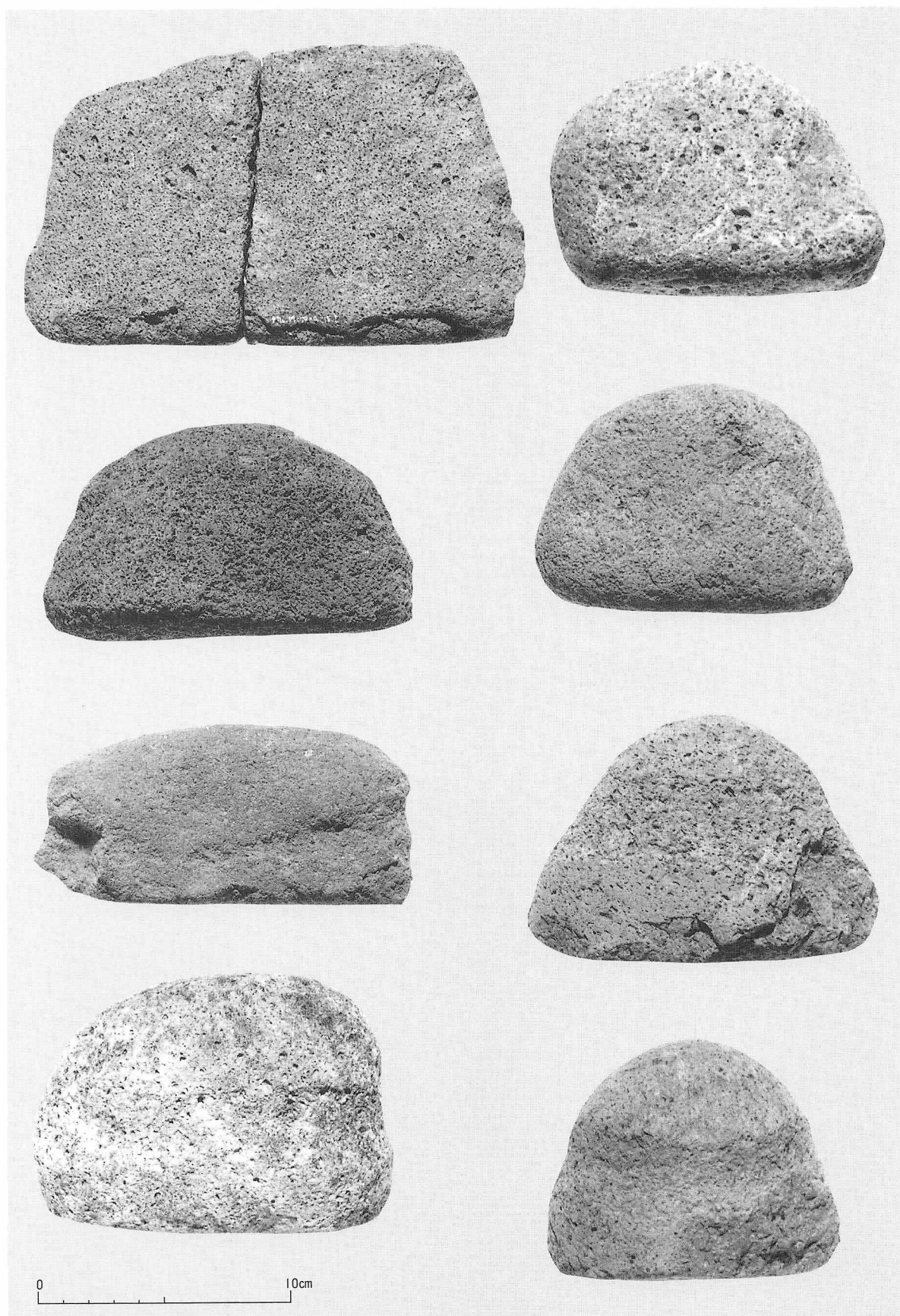


包含層出土の石器（すり石）

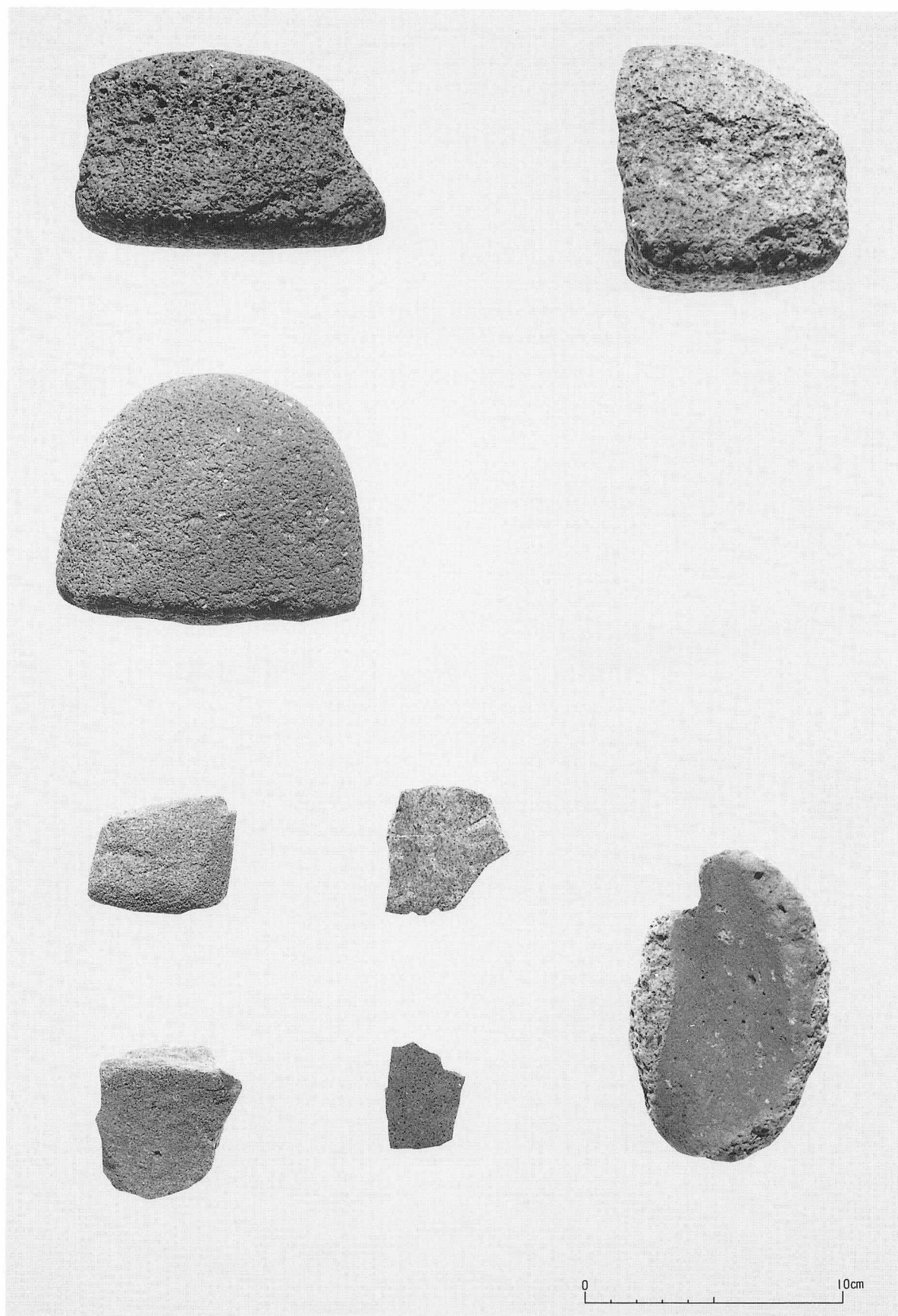


包含層出土の石器（すり石）



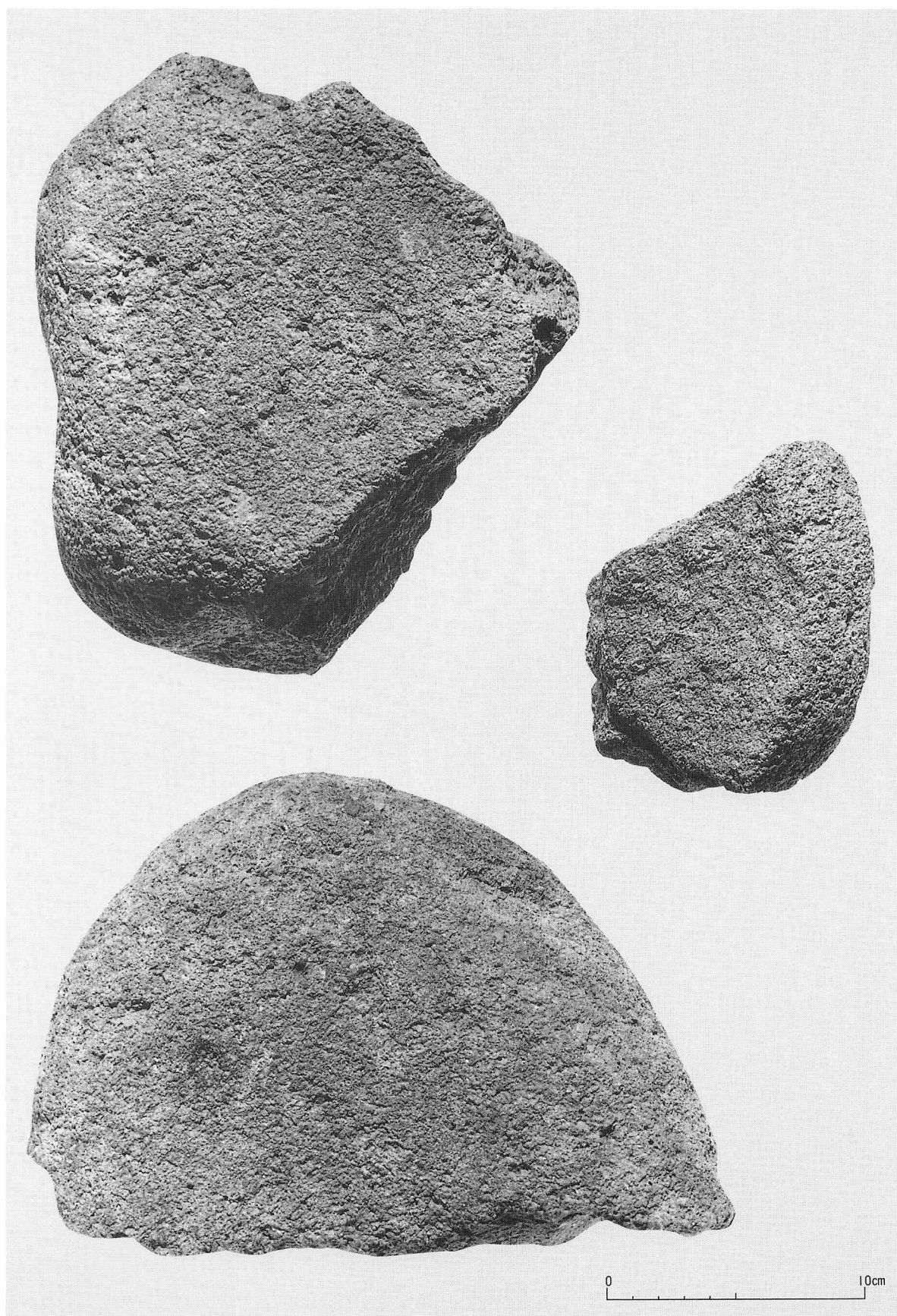


包含層出土の石器（すり石）

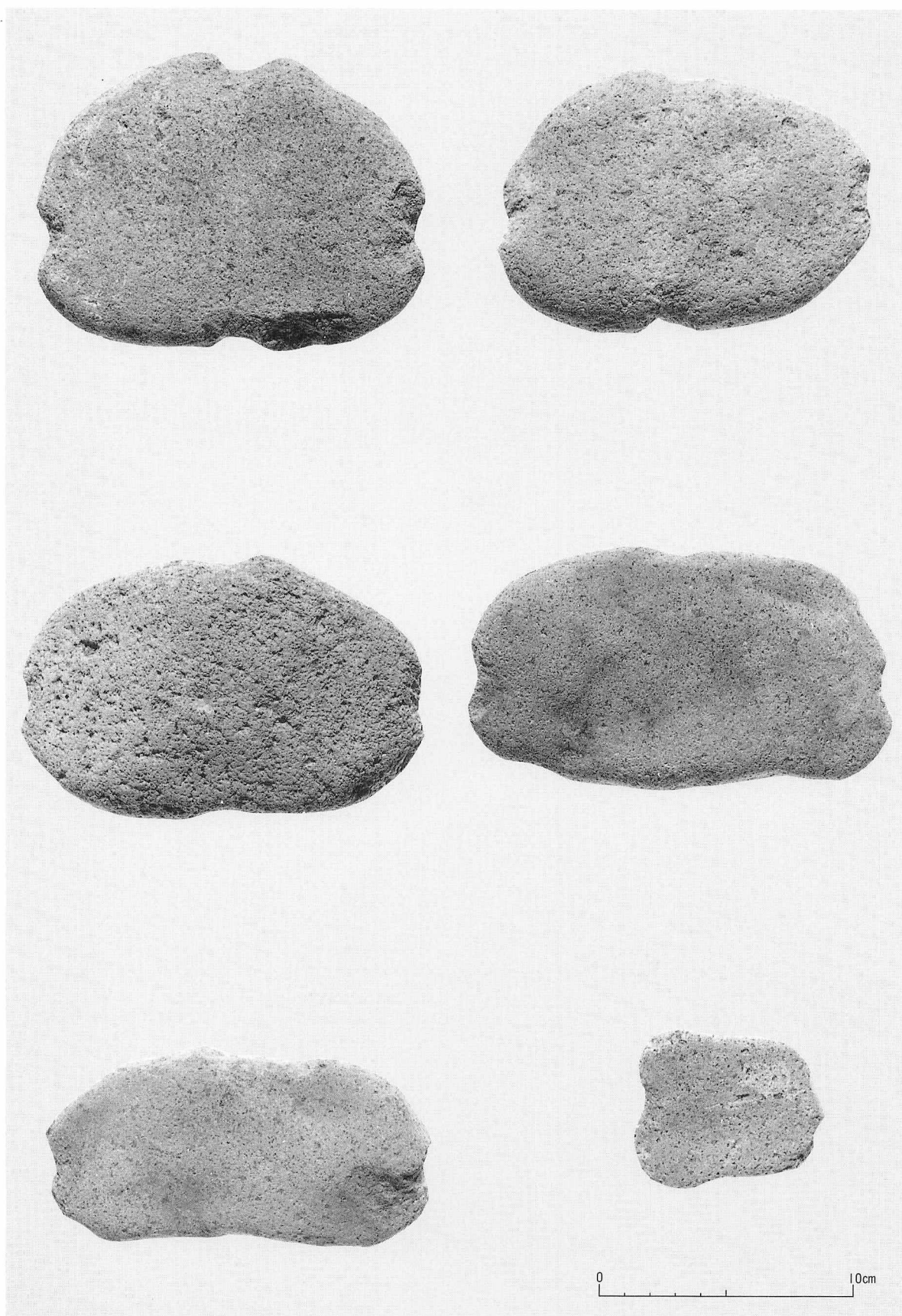


包含層出土の石器（すり石・石鋸・砥石）



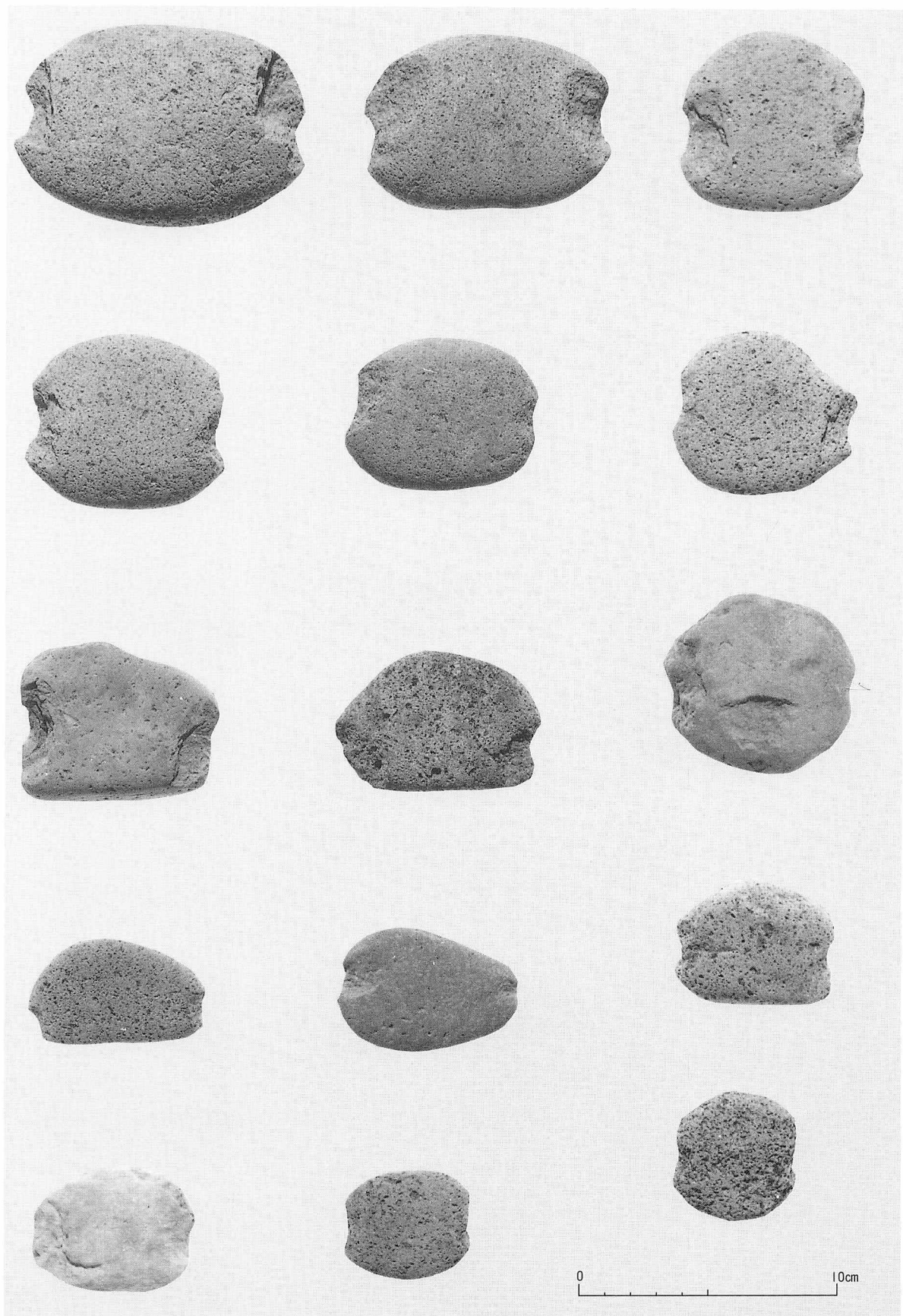


包含層出土の石器（台石・石皿）



包含層出土の石器（石錘）

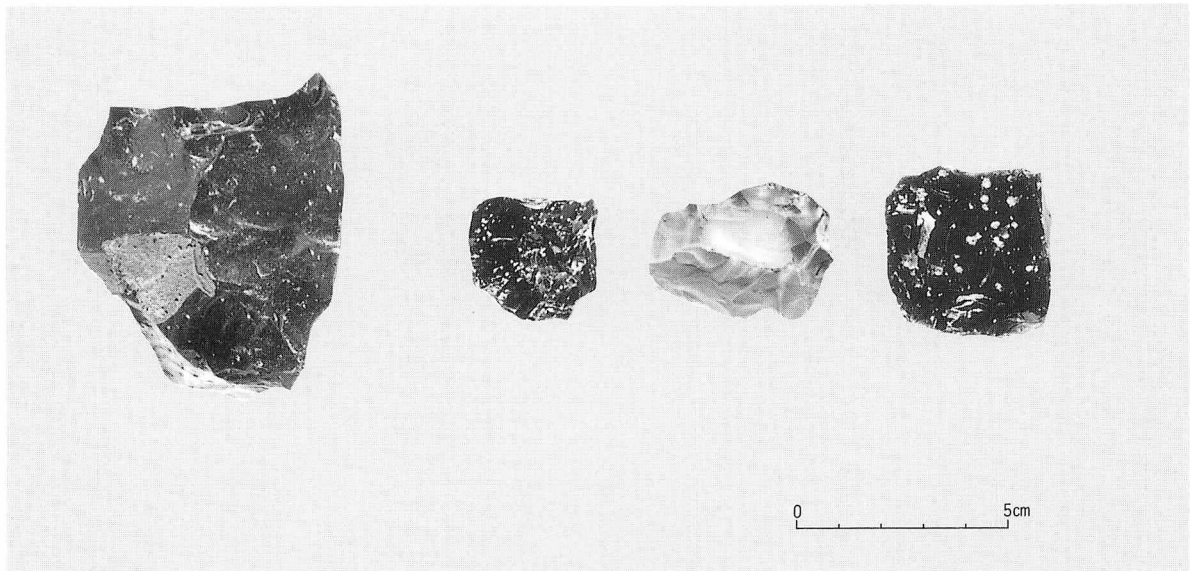




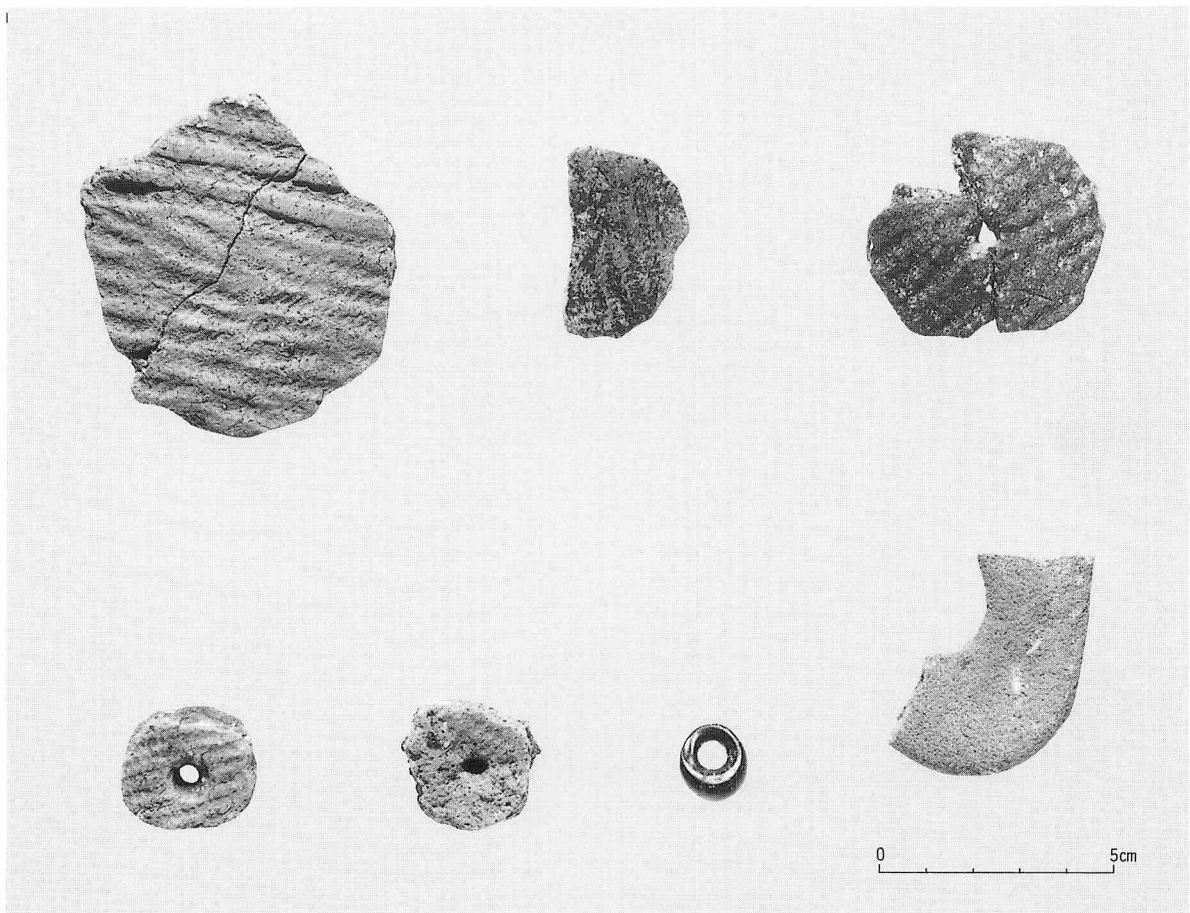
包含層出土の石器（石錘）



図版64



包含層出土の石器（石核）



包含層出土の土製品・石製品

## VII. 自然科学的手法による分析結果

### 1. 豊浦町高岡 1 遺跡出土の 黒曜石製遺物の原産地分析

藁科 哲男、東村 武信  
(京都大学原子炉実験所)

#### はじめに

石器石材の産地を自然科学的な手法を用いて、客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で、蛍光X線分析法によりサヌカイトおよび黒曜石遺物の石材産地推定を行なっている<sup>1,2,3)</sup>。

黒曜石、サヌカイトなどの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異同があると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行ない、これを産地を特定する指標とした。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと遺物のそれを対比して産地を推定する。この際多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

蛍光X線分析法は試料を破壊せずに分析することができて、かつ、試料調整が単純、測定操作も簡単である。石器のような古代人の日用品で多数の試料を分析しなければ遺跡の正しい性格が分からないという場合にはことさら有利な分析法である。

今回分析を行なった試料は、北海道虻田郡豊浦町高岡 1 遺跡出土の黒曜石製石器50個である。この産地分析の結果が得られたので報告する。

#### 黒曜石原石の分析

黒曜石原石の風化面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光X線分析装置によって元素分析を行なう。主に分析した元素はK、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの各元素である。塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それでもって産地を特定する指標とした。黒曜石は、Ca/K、Ti/K、Mn/Zr、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zrの比量をそれぞれ用いる。

黒曜石の原産地は北海道、東北、北陸、東関東、中信高原、伊豆箱根、伊豆七島の神津島、山陰、九州の各地に分布する。調査を終えた原産地を図1に示す。黒曜石原産地のほとんどすべてがつくされている。元素組成の上から、これら原石を分類すると表1に示すように95個の原石群に分かれる。

ここでは北海道地域および一部の東北地域の産地について記述すると、白滝地域の原産地は、北海道紋別郡白滝村に位置し、鹿砦北方2kmの採石場の露頭、鹿砦東方約2kmの幌加沢地点、また白土沢などより転礫として黒曜石が採取できる。この露頭からの黒曜石原石は白滝第一群にまとめ、白土沢の転礫は白滝第二群にまとまる。幌加沢よりの転礫の

中で、70%は幌加沢群にまとまるが、この群は白滝第二群と一致し、元素組成から両群を区別できない。さらに、幌加沢産原石の30%は白滝第一群に一致する。

置戸産原石は、北海道常呂郡置戸町の清水の沢林道より採取され、この原石の元素組成は置戸群にまとまる。この原産地は、常呂川に通じる流域にあり、この常呂川流域で黒曜石の円礫が採取されるが現在まだ調査していない。

十勝三股産原石は、北海道河東郡上士幌町の十勝三股の十三の沢の谷筋および沢の中より原石が採取され、この原石の元素組成は十勝三股群にまとまる。この十勝三股産原石は十三の沢から音更川さらに十勝川に流れた可能性があり、十勝川から採取される黒曜石円礫の組成は、十勝三股産の原石の組成と相互に近似している。また、上士幌町のサンケオルベ川より採取される黒曜石円礫の組成も十勝三股産原石の組成と相互に近似している。これら組成の近似した原石の原産地は区別できず、遺物石材の産地分析でたとえ、この遺物の原石産地が十勝三股群に同定されたとしても、これら十勝三股、音更川、十勝川、サンケオルベ川の複数の地点を考えなければならない。しかし、この複数の産地をまとめて、十勝地域としても、古代の地域間の交流を考察する場合、問題はないと考えられる。また、清水町、新得町、鹿追町にかけて広がる美蔓台地から産出する黒曜石から2個の美蔓原石群が作られた。この原石は産地近傍の遺跡で使用されている。

名寄市の智南地域、智恵文川および忠烈布貯水池から上名寄にかけて黒曜石の円礫が採集される。これらを組成で分類すると88%は名寄第一群に、また12%は名寄第二群にそれぞれなる。

旭川市の近文台、嵐山遺跡付近および雨文台北部などから採集される黒曜石の円礫は、20%が近文台第一群、69%が近文台第二群、11%が近文台第三群にそれぞれ分類された。また滝川市江別乙で採集される親指大の黒曜石の礫は、組成で分類すると約79%が滝川群にまとまり、21%が近文台第二、三群に組成が一致する。滝川群に一致する組成の原石は、北竜町恵袋別川培本社からも採取される。秩父別町の雨竜川に開析された平野を見下す丘陵中腹の緩斜面から小円礫の黒曜石原石が採取される。産出状況とか礫状は滝川産黒曜石と同じで、秩父別第一群は滝川第一群に組成が一致し、第二群も滝川第二群に一致しさらに近文台第二群にも一致する。

赤井川産原石は、北海道余市郡赤井川村の土木沢上流域およびこの付近の山腹より採取できる。ここの原石には、少球果の列が何層にも重なり石器の原材料として良質とはいえないものが多く、稀に球果の見られない、またあっても非常に少ない握り拳半分の良質な原石が少数みられた。これら原石の元素組成は赤井川群にまとまる。

豊泉産原石は豊浦町から産出し使用圏は道南地方に広がり、一部は青森県に伝播している。

出来島群は青森県西津軽郡木造町七里長浜の海岸部より採取された円礫の原石で作られた群で、この出来島群と相互に似た組成の原石は、岩木山の西側を流れ鱒ヶ沢地区に流入する中村川の上流で1点採取され、また、青森市の鶴ヶ坂および西津軽郡森田村鶴ばみ地区より採取されている。

深浦群は青森県西津軽郡深浦町の海岸とか同町の六角沢およびこの沢筋に位置する露頭より採取された原石で作られた群である。深浦群と相互に似た群は青森市戸門地区より産出する黒曜石で作られた戸門第二群である。戸門第一群は赤井川産原石と弁別は可能であ

るが両産地の原石の組成は比較的似ている。戸門産黒曜石の産出量は非常に少なく、また大きさも石鏃が作れる程度である。

## 結果と考察

遺跡から出土した石器、石片は風化しているが、黒曜石製のものは風化に対して安定で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。産地分析で水和層の影響は、軽い元素の分析ほど大きいと考えられるが、影響はほとんど見られない。Ca/K、Ti/Kの両軽元素比量を除いて産地分析を行なった場合、また除かずに産地分析を行った場合同定される原産地に差はない。他の元素比量についても風化の影響を完全に否定することができないので、得られた確率の数値にはやゝ不確実さを伴うが、遺物の石材産地の判定を誤るようなことはない。

今回分析した高岡1遺跡の黒曜石製石器の分析結果を表2に示した。石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするためRb/Zrの一変量だけを考えると、表2の試料番号34891番の遺物ではRb/Zrの値は0.437で、豊泉群の[平均値]±[標準偏差値]は、 $0.438 \pm 0.027$ である。遺物と原石群の差を標準偏差値( $\sigma$ )を基準にして考えると遺物は原石群から $0.03\sigma$ 離れている。ところで豊泉原産地から100ヶの原石を採ってきて分析すると、平均値から $\pm 0.03$ のずれより大きいものが98個ある。すなわち、この遺物が、豊泉群の原石から作られていたと仮定しても、 $0.03\sigma$ 以上離れる確率は98%であると言える。だから、豊泉群の平均値から $0.03\sigma$ しか離れていないときには、この遺物が豊泉群の原石から作られたものでないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を赤井川群に比較すると赤井川群の平均値からの隔たりは、約 $9\sigma$ である。これを確率の言葉で表現すると、赤井川群の原石を採ってきて分析したとき、平均値から $9\sigma$ 以上離れている確率は、十億分の一であると言える。このように、十億個に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、赤井川群の原石から作られたものではないと断定できる。

これらのことを簡単にまとめて言うと、「この遺物は豊泉群に98%、赤井川群に千万分の一の確率でそれぞれ帰属される」。各遺跡の遺物について、この判断を表1のすべての原石群について行ない、低い確率で帰属された原産地を消していくと残るのは、豊泉の原産地だけとなり、豊泉産地の石材が使用されていると判定される。実際はRb/Zrといった唯1ヶの変量だけでなく、前述した5ヶの変量で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならない。例えばA原産地のA群で、Ca元素とRb元素との間に相関があり、Caの量を計ればRbの量は分析しなくても分かるようなときは、A群の石材で作られた遺物であれば、A群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Rb量も一致するはずである。したがって、もしRb量だけが少しずれている場合には、この試料はA群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングの $T^2$ 検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて産地を同定する<sup>4,5)</sup>。

高岡1遺跡より出土した黒曜石製石器の産地推定の結果を表3に示す。原産地は確率の高い産地のものだけを選んで記した。原石群を作った原石試料は直径3 cm以上であるが、多数の試料を処理するために、小さな遺物試料の分析に多くの時間をかけられない事情が

あり、短時間で測定を打ち切る。このため、得られた遺物の測定値には、大きな誤差範囲が含まれ、ときには、原石群の元素組成のバラツキの範囲を越えて大きくなる。したがって、小さな遺物の産地推定を行なったときに、判定の信頼限界としている0.1%に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。この場合には、原石産地（確率）の欄の確率値に替えて、マハラノビスの距離 $D^2$ の値を記した。この遺物については、記入された $D^2$ の値が原石群の中で最も小さな $D^2$ 値で、この値が小さい程、遺物の元素組成はその原石群の組成と似ていると言えるため、推定確率は低い、その原石産地と考えてほゞ間違いないと判断されたものである。

今回、分析した高岡1遺跡出土の50個の遺物の産地分析の結果で、地元豊泉産原石の使用頻度は54%で一番高く、次いで赤井川産原石が30%で、十勝産および白滝産がそれぞれ2%の各産地の原石の使用頻度になった。また、産地が特定できなかった遺物は6個の12%で、これら産地不明の遺物は未発見の黒曜石産地の原石と考えるより、遺物の風化層が異常に厚く産地分析ができなかったと考えられる。被熱した黒曜石遺物が風化した場合風化層が厚くなるのではと想像されている遺物である。これら産地不明の遺物の新鮮な部分を分析し産地分析を行えば何れの産地原石が風化したか容易にわかる。

本遺跡は豊泉群原石の転礫産出地の上に位置している可能性があり、使用頻度も最も高くなっていて、他地域の遺跡に原石を供給している可能性は否定できないが、本遺跡で赤井川産原石の使用頻度もかなり高い。石器原材としては豊泉産より赤井川産原石の方が良質であると推定されるため、本遺跡でも比較的容易に赤井川産原石が入手できる状況にあったと推測しても産地分析の結果より求めた各産地原石使用頻度と矛盾しない。また、白滝産、十勝産原石の使用が確認されたことから、これら原産地地方の情報も本遺跡に伝播していたと推理できる。

#### 参考文献

- 1) 藁科哲男・東村武信(1975), 蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(Ⅱ)。考古学と自然科学, 8:61-69
- 2) 藁科哲男・東村武信・鎌木義昌(1977), (1978), 蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(Ⅲ)。(Ⅳ)。考古学と自然科学, 10, 11:53-81:33-47
- 3) 藁科哲男・東村武信(1983), 石器原材の産地分析。考古学と自然科学, 16:59-89
- 4) 東村武信(1976), 産地推定における統計的手法。考古学と自然科学, 9:77-90
- 5) 東村武信(1990), 考古学と物理化学。学生社



表1-1 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差

原産地	分析個数	Ca/K $\bar{x} \pm \sigma$	Ti/K $\bar{x} \pm \sigma$	Mn/Zr $\bar{x} \pm \sigma$	Fe/Zr $\bar{x} \pm \sigma$	Rb/Zr $\bar{x} \pm \sigma$	Sr/Zr $\bar{x} \pm \sigma$	Y/Zr $\bar{x} \pm \sigma$	Nb/Zr $\bar{x} \pm \sigma$	Al/K $\bar{x} \pm \sigma$	Si/K $\bar{x} \pm \sigma$
北海道	114	0.478±0.011	0.121±0.005	0.035±0.007	2.011±0.063	0.614±0.032	0.574±0.022	0.120±0.017	0.024±0.016	0.033±0.002	0.451±0.010
	12	0.315±0.011	0.106±0.003	0.023±0.005	1.796±0.070	0.692±0.043	0.264±0.017	0.293±0.018	0.039±0.020	0.029±0.002	0.401±0.010
	130	0.173±0.014	0.061±0.003	0.079±0.013	2.714±0.142	1.340±0.059	0.283±0.019	0.341±0.030	0.073±0.026	0.028±0.002	0.374±0.010
	23	0.139±0.009	0.023±0.001	0.099±0.015	2.975±0.102	1.794±0.077	0.104±0.010	0.470±0.037	0.103±0.027	0.027±0.002	0.369±0.007
	27	0.138±0.004	0.021±0.002	0.102±0.015	3.049±0.181	1.855±0.088	0.097±0.016	0.492±0.039	0.107±0.019	0.027±0.002	0.368±0.006
	30	0.819±0.013	0.165±0.006	0.081±0.010	3.266±0.117	0.604±0.031	0.941±0.030	0.165±0.020	0.039±0.016	0.039±0.002	0.457±0.008
	107	0.517±0.011	0.099±0.005	0.067±0.090	2.773±0.097	0.812±0.037	0.818±0.034	0.197±0.024	0.041±0.019	0.035±0.002	0.442±0.009
	17	0.514±0.012	0.098±0.005	0.066±0.014	2.765±0.125	0.814±0.068	0.815±0.042	0.199±0.039	0.078±0.008	0.034±0.002	0.443±0.011
	51	0.249±0.017	0.122±0.006	0.078±0.011	1.614±0.068	0.905±0.037	0.458±0.023	0.235±0.024	0.023±0.021	0.022±0.004	0.334±0.013
	25	0.506±0.016	0.098±0.005	0.070±0.011	2.750±0.099	0.805±0.042	0.808±0.032	0.197±0.026	0.027±0.016	0.027±0.003	0.371±0.010
青森県	31	0.253±0.018	0.122±0.006	0.077±0.009	1.613±0.090	1.017±0.045	0.459±0.025	0.233±0.029	0.038±0.018	0.025±0.003	0.370±0.023
	15	0.510±0.015	0.098±0.005	0.068±0.009	2.740±0.072	0.802±0.019	0.812±0.019	0.192±0.026	0.032±0.023	0.030±0.004	0.393±0.031
	65	0.326±0.008	0.128±0.005	0.045±0.008	1.813±0.062	0.824±0.034	0.454±0.020	0.179±0.023	0.044±0.020	0.030±0.002	0.412±0.010
	60	0.256±0.018	0.074±0.005	0.068±0.010	2.281±0.087	1.097±0.055	0.434±0.023	0.334±0.029	0.064±0.025	0.029±0.002	0.396±0.013
	41	0.499±0.020	0.124±0.007	0.052±0.010	2.635±0.181	0.802±0.061	0.707±0.044	0.199±0.026	0.039±0.023	0.033±0.002	0.442±0.015
	28	0.593±0.036	0.144±0.012	0.058±0.010	3.028±0.251	0.762±0.040	0.764±0.051	0.197±0.026	0.038±0.022	0.034±0.002	0.449±0.009
	50	0.254±0.029	0.070±0.004	0.088±0.010	2.213±0.104	0.989±0.060	0.428±0.021	0.249±0.024	0.058±0.023	0.027±0.002	0.371±0.009
	75	0.473±0.019	0.148±0.007	0.060±0.015	1.764±0.072	0.438±0.027	0.607±0.028	0.157±0.020	0.025±0.017	0.032±0.002	0.469±0.013
	35	0.190±0.015	0.075±0.003	0.040±0.008	1.575±0.066	1.241±0.046	0.318±0.014	0.141±0.033	0.076±0.021	0.024±0.002	0.348±0.010
	27	0.346±0.022	0.132±0.007	0.231±0.019	2.268±0.085	0.865±0.044	1.106±0.056	0.399±0.038	0.179±0.031	0.038±0.003	0.499±0.013
岩手県	36	0.080±0.008	0.097±0.011	0.013±0.002	0.697±0.021	1.128±0.008	0.002±0.002	0.064±0.007	0.035±0.004	0.026±0.002	0.379±0.010
	28	0.250±0.024	0.069±0.003	0.063±0.012	2.358±0.257	1.168±0.062	0.521±0.063	0.277±0.065	0.076±0.025	0.026±0.002	0.362±0.015
	28	0.084±0.006	0.104±0.004	0.013±0.002	0.691±0.021	1.123±0.006	0.002±0.002	0.069±0.010	0.033±0.005	0.025±0.002	0.369±0.007
	33	0.344±0.017	0.132±0.007	0.232±0.023	2.261±0.143	0.861±0.052	1.081±0.060	0.390±0.039	0.186±0.037	0.037±0.002	0.496±0.018
	43	0.293±0.007	0.087±0.004	0.223±0.015	1.637±0.072	1.512±0.082	0.920±0.051	0.287±0.042	0.125±0.031	0.027±0.002	0.362±0.006
	25	0.636±0.033	0.187±0.012	0.052±0.007	1.764±0.061	0.305±0.016	0.431±0.021	0.209±0.016	0.045±0.014	0.041±0.003	0.594±0.014
	22	0.615±0.055	0.180±0.016	0.058±0.007	1.751±0.062	0.306±0.033	0.421±0.051	0.228±0.079	0.045±0.011	0.041±0.005	0.594±0.055
	30	0.596±0.046	0.177±0.018	0.056±0.008	1.742±0.072	0.314±0.019	0.420±0.025	0.220±0.016	0.044±0.013	0.041±0.003	0.586±0.030
	湯倉	2.174±0.068	0.349±0.017	0.057±0.005	2.544±0.149	0.116±0.009	0.658±0.024	0.138±0.015	0.020±0.013	0.073±0.003	0.956±0.040
	塩	4.828±0.395	1.630±0.104	0.178±0.017	1.362±1.150	0.168±0.018	1.298±0.063	0.155±0.016	0.037±0.018	0.077±0.002	0.720±0.032
山形県	44	0.285±0.021	0.123±0.007	0.182±0.016	1.906±0.096	0.966±0.069	1.022±0.071	0.278±0.036	0.119±0.033	0.033±0.002	0.443±0.014
	34	0.228±0.013	0.078±0.006	0.020±0.005	1.492±0.079	0.821±0.047	0.288±0.018	0.142±0.018	0.049±0.017	0.024±0.004	0.338±0.013
	12	0.263±0.032	0.097±0.018	0.020±0.006	1.501±0.053	0.717±0.106	0.326±0.029	0.091±0.022	0.046±0.015	0.026±0.002	0.338±0.009
	44	0.232±0.011	0.068±0.003	0.169±0.017	2.178±0.110	1.772±0.098	0.772±0.046	0.374±0.047	0.154±0.034	0.027±0.002	0.359±0.009
	22	0.569±0.012	0.142±0.007	0.033±0.005	1.608±0.049	0.261±0.012	0.332±0.011	0.150±0.015	0.033±0.011	0.036±0.003	0.491±0.014
	高	0.738±0.067	0.200±0.010	0.044±0.007	2.016±0.110	0.381±0.025	0.502±0.028	0.190±0.017	0.023±0.014	0.036±0.002	0.516±0.012
	山	0.381±0.014	0.136±0.005	0.102±0.011	1.729±0.079	0.471±0.027	0.689±0.037	0.247±0.021	0.090±0.026	0.036±0.003	0.504±0.012
	神	0.317±0.016	0.120±0.008	0.114±0.014	1.833±0.069	0.615±0.039	0.656±0.050	0.303±0.034	0.107±0.026	0.033±0.002	0.471±0.009
	津	6.765±0.254	2.219±0.057	0.228±0.019	9.282±0.622	0.048±0.017	1.757±0.061	0.253±0.017	0.025±0.019	0.140±0.008	1.528±0.046
	箱	2.056±0.064	0.669±0.019	0.076±0.007	2.912±0.104	0.062±0.007	0.680±0.029	0.202±0.011	0.011±0.010	0.080±0.005	1.126±0.031
神奈川県	41	1.663±0.071	0.381±0.019	0.056±0.007	2.139±0.097	0.073±0.008	0.629±0.025	0.154±0.009	0.011±0.009	0.067±0.005	0.904±0.020
	31	1.329±0.078	0.294±0.018	0.041±0.006	1.697±0.068	0.087±0.009	0.551±0.023	0.138±0.011	0.010±0.009	0.059±0.004	0.856±0.018
	上	1.213±0.164	0.314±0.028	0.031±0.004	1.699±0.167	0.113±0.007	0.391±0.022	0.143±0.007	0.009±0.009	0.047±0.004	0.663±0.020
	柏	0.278±0.013	0.065±0.004	0.064±0.008	2.084±0.095	0.906±0.057	0.641±0.046	0.194±0.014	0.102±0.021	0.027±0.002	0.372±0.009
	魚	0.370±0.014	0.087±0.004	0.060±0.009	2.699±0.167	0.639±0.028	0.534±0.023	0.172±0.028	0.052±0.018	0.032±0.002	0.396±0.017
	石	0.407±0.007	0.123±0.005	0.038±0.006	1.643±0.051	0.643±0.041	0.675±0.030	0.113±0.020	0.061±0.016	0.032±0.002	0.450±0.010
	福	0.350±0.018	0.123±0.008	0.036±0.006	1.561±0.081	0.608±0.031	0.798±0.039	0.069±0.020	0.062±0.013	0.028±0.002	0.381±0.008
	安										
	三										
	里										

$\bar{x}$ : 平均値  $\sigma$ : 標準偏差  
and JB-1 basalt: Geochemical Journal Vol. 8, 175-192.

表 1-2 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差

原産地	原石群名	分析個数	Ca/K $\bar{X} \pm \sigma$	Ti/K $\bar{X} \pm \sigma$	Mn/Zr $\bar{X} \pm \sigma$	Fe/Zr $\bar{X} \pm \sigma$	Rb/Zr $\bar{X} \pm \sigma$	Sr/Zr $\bar{X} \pm \sigma$	Y/Zr $\bar{X} \pm \sigma$	Nb/Zr $\bar{X} \pm \sigma$	Al/K $\bar{X} \pm \sigma$	Si/K $\bar{X} \pm \sigma$
長野県	霧ヶ峰	171	0.138±0.009	0.066±0.003	0.104±0.011	1.339±0.057	1.076±0.047	0.360±0.023	0.275±0.030	0.112±0.023	0.026±0.002	0.361±0.013
	和田峠第一	143	0.167±0.028	0.049±0.008	0.117±0.011	1.346±0.085	1.853±0.124	0.112±0.056	0.409±0.048	0.139±0.026	0.025±0.002	0.355±0.016
	" 第二	17	0.146±0.003	0.032±0.003	0.151±0.010	1.461±0.039	2.449±0.135	0.036±0.012	0.517±0.044	0.186±0.025	0.027±0.002	0.368±0.007
	" 第三	62	0.248±0.048	0.064±0.012	0.114±0.011	1.520±0.182	1.673±0.140	0.274±0.104	0.374±0.048	0.122±0.024	0.025±0.003	0.348±0.017
	" 第四	37	0.144±0.017	0.063±0.004	0.094±0.009	1.373±0.085	1.311±0.037	0.206±0.030	0.263±0.038	0.090±0.022	0.023±0.002	0.331±0.019
	" 第五	47	0.176±0.019	0.075±0.010	0.073±0.011	1.282±0.086	1.053±0.196	0.275±0.058	0.184±0.042	0.066±0.023	0.021±0.002	0.306±0.013
	" 第六	53	0.156±0.011	0.055±0.005	0.095±0.012	1.333±0.064	1.523±0.093	0.134±0.031	0.279±0.039	0.010±0.017	0.021±0.002	0.313±0.012
	蔵山・和田	53	0.138±0.004	0.042±0.002	0.123±0.010	1.259±0.041	1.978±0.067	0.045±0.010	0.442±0.039	0.142±0.022	0.026±0.002	0.360±0.010
	男和倉	119	0.223±0.026	0.102±0.010	0.059±0.008	1.169±0.081	0.701±0.109	0.409±0.052	0.128±0.024	0.053±0.017	0.026±0.002	0.354±0.008
	麦草峠	68	0.263±0.020	0.138±0.011	0.049±0.008	1.403±0.069	0.532±0.048	0.764±0.031	0.101±0.018	0.056±0.016	0.029±0.002	0.401±0.017
島根県	加茂	20	0.154±0.008	0.092±0.009	0.018±0.003	0.943±0.029	0.289±0.016	0.006±0.003	0.047±0.010	0.144±0.019	0.022±0.001	0.269±0.017
	津井	30	0.150±0.008	0.100±0.003	0.015±0.002	0.919±0.033	0.305±0.010	0.013±0.003	0.046±0.013	0.132±0.007	0.022±0.001	0.258±0.006
大分県	久見	31	0.142±0.004	0.061±0.002	0.020±0.003	0.981±0.048	0.398±0.013	0.001±0.002	0.093±0.015	0.299±0.010	0.023±0.002	0.317±0.006
	音崎	41	0.216±0.017	0.045±0.003	0.428±0.057	6.897±0.806	1.829±0.220	1.572±0.180	0.325±0.088	0.622±0.099	0.035±0.002	0.418±0.011
	観瀨第一	33	0.221±0.021	0.045±0.003	0.450±0.061	7.248±0.668	1.917±0.194	1.660±0.173	0.355±0.057	0.669±0.105	0.035±0.002	0.419±0.009
	" 第二	32	0.634±0.047	0.140±0.013	0.194±0.026	4.399±0.322	6.14±0.077	3.162±0.189	0.144±0.031	0.240±0.041	0.038±0.002	0.451±0.011
	" 第三	10	1.013±0.140	0.211±0.026	0.126±0.016	3.491±0.231	0.305±0.067	4.002±0.174	0.109±0.021	0.137±0.028	0.040±0.004	0.471±0.017
	* オイ崎	29	1.074±0.110	0.224±0.024	0.122±0.012	3.460±0.301	0.286±0.048	4.010±0.197	0.101±0.022	0.133±0.025	0.040±0.003	0.469±0.014
	* 稲積	25	0.653±0.066	0.141±0.016	0.189±0.030	4.398±0.425	0.605±0.096	3.234±0.264	0.151±0.033	0.245±0.050	0.037±0.002	0.448±0.015
	* 塚瀬	30	0.313±0.023	0.127±0.009	0.065±0.010	1.489±0.124	0.600±0.051	0.686±0.082	0.175±0.018	0.102±0.020	0.028±0.002	0.371±0.009
	腰岳	26	0.214±0.015	0.029±0.001	0.076±0.012	2.694±0.110	1.686±0.085	0.441±0.030	0.293±0.039	0.257±0.029	0.027±0.002	0.356±0.008
	久喜ノ辻	37	0.165±0.012	0.066±0.002	0.034±0.003	1.197±0.030	0.403±0.012	0.005±0.004	0.114±0.012	0.326±0.008	0.024±0.002	0.294±0.008
長崎県	君ヶ浦	28	0.161±0.011	0.064±0.002	0.034±0.003	1.209±0.032	0.405±0.008	0.005±0.004	0.119±0.016	0.322±0.010	0.025±0.002	0.294±0.006
	角松	29	0.138±0.010	0.037±0.002	0.056±0.007	1.741±0.083	1.880±0.076	0.012±0.012	0.303±0.038	0.652±0.036	0.026±0.002	0.358±0.010
	浦第一	23	0.218±0.010	0.029±0.002	0.085±0.013	2.692±0.125	1.674±0.064	0.439±0.027	0.284±0.047	0.266±0.028	0.027±0.002	0.359±0.012
	" 第二	17	0.176±0.016	0.030±0.004	0.062±0.022	2.364±0.389	1.607±0.245	0.308±0.074	0.277±0.056	0.210±0.050	0.026±0.002	0.361±0.010
	" 第三	16	0.245±0.019	0.060±0.006	0.045±0.012	1.975±0.240	0.878±0.099	0.421±0.081	0.130±0.030	0.145±0.023	0.026±0.002	0.358±0.013
	" 第四	22	0.287±0.019	0.067±0.004	0.044±0.007	1.906±0.106	0.765±0.074	0.484±0.034	0.115±0.023	0.117±0.018	0.028±0.001	0.367±0.007
	波姫	44	0.329±0.014	0.080±0.005	0.042±0.007	1.804±0.065	0.539±0.022	0.504±0.035	0.077±0.018	0.117±0.014	0.029±0.002	0.374±0.009
	中第一	25	0.248±0.017	0.058±0.008	0.057±0.007	1.884±0.085	0.832±0.092	0.403±0.026	0.112±0.021	0.152±0.017	0.026±0.002	0.363±0.007
	" 第二	17	0.327±0.030	0.080±0.017	0.045±0.007	1.832±0.074	0.653±0.088	0.488±0.030	0.090±0.030	0.093±0.023	0.027±0.002	0.358±0.012
	古里第一	40	0.192±0.020	0.027±0.003	0.080±0.016	2.699±0.215	1.780±0.164	0.413±0.065	0.312±0.056	0.259±0.034	0.027±0.002	0.358±0.008
熊本県	" 第二	22	0.414±0.012	0.073±0.006	0.102±0.015	2.898±0.204	1.221±0.094	1.951±0.124	0.133±0.047	0.261±0.034	0.031±0.002	0.383±0.010
	" 第三	19	0.257±0.035	0.062±0.009	0.054±0.009	1.939±0.131	0.812±0.113	0.436±0.052	0.101±0.029	0.145±0.037	0.028±0.002	0.364±0.011
	大崎	25	0.161±0.011	0.051±0.002	0.037±0.006	1.718±0.056	0.948±0.030	0.179±0.018	0.191±0.026	0.179±0.019	0.024±0.002	0.340±0.006
	小国	30	0.317±0.023	0.127±0.005	0.063±0.007	1.441±0.070	0.611±0.032	0.703±0.044	0.175±0.233	0.097±0.017	0.023±0.002	0.320±0.007
	南	30	0.261±0.016	0.124±0.007	0.034±0.003	0.788±0.033	0.326±0.012	0.278±0.015	0.069±0.012	0.031±0.009	0.021±0.002	0.243±0.008
	冠岳	44	0.258±0.009	0.214±0.006	0.033±0.005	0.794±0.078	0.329±0.017	0.275±0.010	0.066±0.011	0.033±0.009	0.020±0.003	0.243±0.008
	白浜	21	0.261±0.012	0.211±0.008	0.032±0.003	0.780±0.038	0.324±0.011	0.279±0.017	0.064±0.011	0.037±0.006	0.025±0.002	0.277±0.009
	森/本諸群	40	0.197±0.020	0.104±0.008	0.025±0.006	1.405±0.073	1.048±0.087	0.348±0.028	0.163±0.023	0.033±0.017	0.019±0.001	0.273±0.007
	" 第二群	47	0.207±0.015	0.094±0.006	0.070±0.009	1.521±0.075	1.080±0.048	0.418±0.020	0.266±0.034	0.063±0.024	0.020±0.003	0.314±0.011
	" 第二群	33	0.261±0.015	0.094±0.006	0.066±0.010	1.743±0.095	1.242±0.060	0.753±0.039	0.205±0.029	0.047±0.036	0.022±0.002	0.323±0.019
鹿児島県	出水(日東)	42	0.262±0.018	0.143±0.006	0.024±0.004	1.178±0.040	0.712±0.028	0.408±0.025	0.100±0.018	0.029±0.013	0.019±0.001	0.275±0.006
	五女	37	0.266±0.021	0.140±0.006	0.019±0.003	1.170±0.064	0.705±0.027	0.405±0.021	0.108±0.015	0.028±0.013	0.019±0.001	0.275±0.006
	上平	41	1.629±0.098	0.804±0.037	0.053±0.006	3.342±0.215	0.188±0.013	1.105±0.056	0.087±0.009	0.022±0.009	0.036±0.002	0.391±0.011
	木場	34	1.944±0.054	0.912±0.028	0.062±0.005	3.975±0.182	0.184±0.011	1.266±0.049	0.093±0.010	0.021±0.010	0.038±0.003	0.408±0.010
	龍ヶ谷	28	0.514±0.032	0.167±0.008	0.063±0.009	1.524±0.079	0.619±0.038	0.719±0.054	0.115±0.019	0.082±0.016	0.037±0.003	0.523±0.009
	長谷	30	0.553±0.032	0.137±0.006	0.065±0.010	1.815±0.062	0.644±0.028	0.553±0.029	0.146±0.021	0.066±0.020	0.037±0.003	0.524±0.012
	JG - 1 <sup>a)</sup>	127	0.755±0.010	0.202±0.005	0.076±0.011	3.759±0.111	0.993±0.036	1.331±0.046	0.251±0.027	0.105±0.017	0.028±0.002	0.342±0.004

X: 平均値, σ: 標準偏差, \* ガラス質安山岩

a): Ando, A., Kurawawa, H., Ohmori, T. &amp; Takeda, E. (1974). 1974 compilation of data on the GSJ geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal Vol. 8, 175-192.

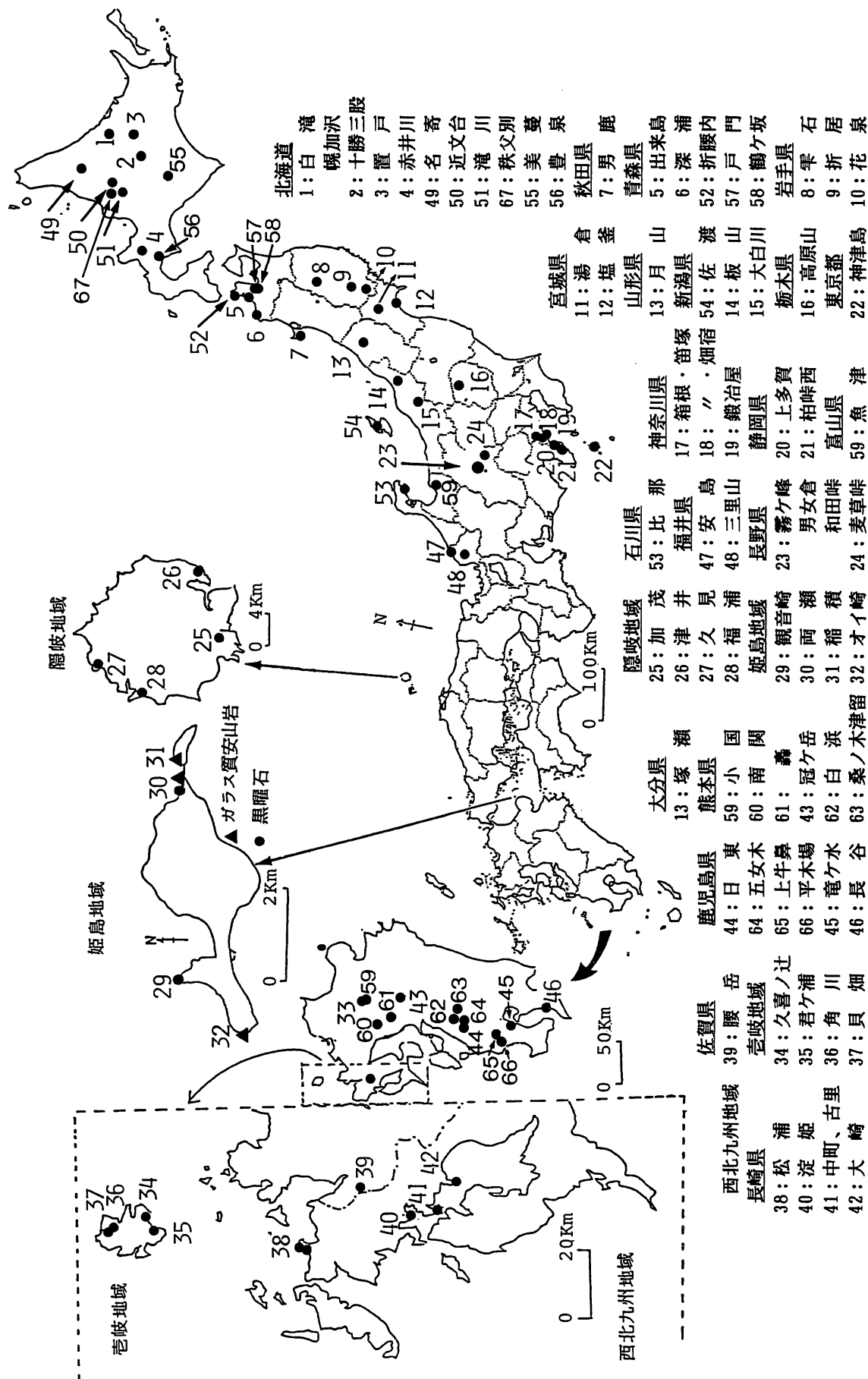


図1 黒曜石原産地

表2 高岡1遺跡出土の黒曜石製遺物分析結果

試料 番号	Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	元 Fe/Zr	素 Rb/Zr	比 Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K
34890	.228	.073	.078	1.956	.939	.435	.276	.011	.020	.332
34891	.494	.151	.056	1.527	.437	.611	.192	.034	.027	.399
34892	.267	.065	.084	1.841	.882	.405	.262	.056	.020	.302
34893	.471	.154	.055	1.562	.428	.604	.181	.029	.026	.387
34894	.255	.076	.084	2.055	1.004	.460	.297	.032	.022	.327
34895	.262	.069	.075	1.897	.901	.415	.260	.061	.021	.317
34896	.262	.071	.066	2.105	.991	.439	.352	.092	.023	.337
34897	.264	.071	.066	1.977	.932	.464	.234	.029	.021	.312
34898	.143	.036	.082	1.896	1.145	.437	.274	.052	.011	.162
34899	.259	.072	.088	2.196	1.004	.497	.294	.071	.021	.307
34900	.260	.069	.081	2.102	.990	.464	.285	.068	.023	.318
34901	.229	.070	.073	2.156	.954	.427	.252	.070	.025	.318
34902	.251	.070	.087	2.400	1.007	.409	.207	.030	.019	.313
34903	.480	.149	.050	1.723	.423	.617	.123	.023	.026	.388
34904	.256	.072	.077	2.232	1.046	.458	.221	.032	.020	.308
34906	.263	.066	.082	2.280	.992	.420	.216	.016	.020	.309
34907	.257	.084	.107	2.501	.949	.409	.216	.043	.021	.306
34908	.209	.066	.064	1.629	.476	.577	.141	.000	.013	.209
34909	.454	.150	.064	1.704	.435	.585	.143	.000	.025	.387
34910	.461	.153	.078	1.765	.426	.603	.162	.045	.024	.395
34911	.475	.144	.052	1.806	.444	.590	.157	.000	.027	.401
34912	.156	.053	.058	1.726	.524	.565	.088	.014	.012	.168
34913	.441	.142	.057	1.660	.384	.530	.130	.000	.023	.375
34914	.433	.145	.055	1.805	.466	.597	.157	.000	.024	.383
34915	.466	.160	.065	1.793	.439	.582	.164	.020	.025	.387
34916	.257	.071	.101	2.249	.950	.387	.262	.058	.020	.311
34917	.407	.131	.066	1.824	.465	.623	.134	.014	.024	.362
34918	.463	.158	.061	1.878	.464	.588	.173	.012	.025	.390
34919	.165	.059	.077	1.773	.496	.606	.144	.022	.014	.201
34920	.455	.142	.067	1.763	.462	.604	.162	.024	.027	.399
34922	.448	.141	.069	2.105	.506	.667	.193	.000	.024	.403
34923	.455	.149	.061	1.780	.433	.561	.153	.000	.026	.398
34924	.237	.070	.090	2.461	1.006	.435	.286	.057	.023	.332
34925	.158	.051	.056	1.747	.699	.641	.150	.023	.011	.162
34926	.508	.148	.058	1.857	.445	.617	.157	.000	.023	.398
34927	.169	.064	.055	1.584	.490	.530	.155	.032	.014	.196
34928	.192	.065	.082	2.716	1.343	.269	.307	.065	.020	.311
34929	.459	.133	.076	1.854	.439	.611	.165	.000	.027	.420
34930	.475	.155	.057	1.751	.424	.594	.122	.022	.023	.399
34931	.464	.154	.059	1.776	.447	.598	.157	.020	.027	.390
34932	.483	.160	.057	1.862	.425	.588	.161	.000	.024	.405
34933	.461	.151	.080	1.960	.468	.629	.158	.014	.025	.400
34934	.507	.152	.052	1.695	.383	.583	.140	.011	.028	.404
34935	.256	.069	.099	2.226	.944	.376	.270	.033	.021	.318
34936	.443	.136	.072	1.997	.479	.618	.145	.019	.003	.372
34938	.470	.132	.062	2.012	.463	.641	.199	.000	.031	.425
34939	.498	.148	.063	1.674	.436	.615	.147	.024	.026	.390
34940	.449	.138	.055	1.842	.422	.585	.180	.000	.028	.410
34941	.449	.138	.059	1.702	.445	.542	.153	.024	.026	.402
34942	.451	.155	.071	1.821	.476	.636	.182	.000	.026	.395

表 高岡1遺跡出土の黒曜石製遺物の原産地推定結果

(北海道虻田郡豊浦町)

分析 番号	試料 遺 物 番号 出土区	原 石 産 地 (確 率)	判 定	遺物品名 (備考)	遺物 挿図番号
34890	1 ,I-72-d-10	赤井川(5%)、戸門第1群(1%)	赤井川	石槍	
34891	2 ,I-73-b-26	豊泉(0.4%)	豊 泉	"	
34892	3 ,I-73-b-388	赤井川(1%)	赤井川	"	
34893	4 ,J-71-d-6	豊泉(11%)	豊 泉	"	
34894	5 ,J-72-a-6	赤井川(4%)、戸門第1群(8%)、十勝三股(2%)	赤井川	"	
34895	6 ,J-72-b-116	赤井川(12%)	"	"	
34896	7 ,K-69-b-14	十勝三股(38%)、戸門第1群(15%)	十 勝	"	
34897	8 ,K-70-b-2	赤井川(0.6%)	赤井川	"	
34898	9 ,K-70-b-3	不明(被熱?、風化層が異常に厚い)		"	
34899	10,K-70-b-12	戸門第1群(24%)、赤井川(4%)、十勝三股(1%)、	赤井川	"	
34900	11,K-70-c-9	赤井川(19%)、戸門第1群(16%)、十勝三股(3%)	"	"	
34901	12,K-71-a-24	" (94%)、" (8%)	"	"	
34902	13,K-71-b-79	" (8%)、" (1%)	"	"	
34903	14,K-74-c-126	豊泉(78%)	豊 泉	"	
34904	15,K-72-b-358	赤井川(18%)、戸門第1群(17%)、十勝三股(2%)	赤井川	"	
34906	16,L-69-a-28	" (39%)	"	"	
34907	17,L-69-b-12	" (D2=56)	"	"	
34908	18,L-69-c-1	不明(被熱?、風化層が異常に厚い)		"	
34909	19,L-70-b-86	豊泉(55%)	豊 泉	"	
34910	20,L-70-d-17	" (85%)	"	"	
34911	21,L-71-c-9	" (74%)	"	"	
34912	22,L-71-c-20	不明(被熱?、風化層が異常に厚い)		"	
34913	23,L-72-c-347	豊泉(2%)	豊 泉	"	
34914	24,M-68-c-6	" (21%)	"	"	
34915	25,M-69-b-5	" (52%)	"	"	
34916	26,M-69-b-6	赤井川(25%)	赤井川	"	
34917	27,M-69-c-50	豊泉(3%)	豊 泉	"	
34918	28,M-69-d-18	" (11%)	"	"	
34919	29,M-69-d-19	不明(被熱?、風化層が異常に厚い)		"	
34920	30,M-69-d-44	豊泉(98%)	豊 泉	"	
34922	31,M-70-a-10	" (0.2%)	"	"	
34923	32,M-70-b-13	" (22%)	"	"	
34924	33,M-70-b-33	赤井川(11%)、戸門第1群(5%)	赤井川	"	
34925	34,M-70-b-53	不明(被熱?、風化層が異常に厚い)		"	
34926	35,M-70-c-13	豊泉(52%)	豊 泉	"	
34927	36,M-70-c-14	不明(被熱?、風化層が異常に厚い)		"	
34928	37,M-70-c-25	白滝第1群(81%)	白 滝	"	
34929	38,M-70-d-9	豊泉(35%)	豊 泉	"	
34930	39,M-70-d-33	" (77%)	"	"	
34931	40,M-71-a-18	" (98%)	"	"	
34932	41,M-71-a-34	" (20%)	"	"	
34933	42,M-71-a-148	" (15%)	"	"	
34934	43,M-71-c-20	" (72%)	"	"	
34935	44,N-68-d-11	赤井川(10%)	赤井川	"	
34936	45,N-69-d-3	豊泉(2%)	豊 泉	"	
34938	46,N-69-d-50	" (2%)	"	"	
34939	47,N-70-a-33	" (63%)	"	"	
34940	48,N-71-a-17	" (12%)	"	"	
34941	49,N-71-a-72	" (23%)	"	"	
34942	50,N-71-a-144	" (29%)	"	"	



## 2. 高岡 1 遺跡の火山灰について

### 1. はじめに

今年度の発掘調査で認められた二種類の火山灰について記載し、既知の火山灰との対比を行なった。本遺跡は沖積錐上に立地し、背後からの土砂の押し出しや人為的な改変のために、火山灰や土壌層が流亡したり再移動していることが多い。

### 2. 試料と試料の処理方法

火山灰試料をグリッド J-71、I-73、L-70 から採取した(図 1)。後述するように「J-71 の 4」と「I-73 の 3」は同一火山灰である。この火山灰は灰色 (5Y5/1、5Y6/1) の砂質降下火山灰で層厚 1—1.5cm である。地表の浅い凹地や平坦な部分で腐植土中に断続的に認められる。「L-70 の 2」は黄橙色 (10YR7/8) のシルト質降下火山灰で層厚 5—8 cm である。沖積錐堆積物のほぼ直上あるいは褐色の腐植土を介して、浅い凹地に産出することが多い。

火山灰試料は次の手順で処理し検鏡した。6% $\text{H}_2\text{O}_2$ ・10% $\text{HCl}$ 処理→水洗→乾燥→篩い分け→粒径 $1/4$ — $1/8\text{mm}$ についてプレパラート作成→偏光顕微鏡下で200粒以上検鏡→各鉱物の粒数%を求め鉱物組成とする(軽石、スコリア、岩片も含める)。また、火山ガラスの屈折率を浸液法で測定した。

### 3. 結果

各試料の鉱物組成を表 1 に示す。「I-73 の 3」と「J-71 の 4」はよく似た組成を示している。両火山灰とも斜長石と軽石に富み、斜方輝石、スコリアも比較的多い。斜長石は半自形から自形を呈し、累帯構造が認められるもの、双晶をなしているものがある。軽石は気泡が小さく(写真 1-1)、微小の不透明鉱物が散在し、また多くの斜長石微粒子を含んでいる。「J-71 の 4」の試料では、軽石の石基のガラスの屈折率は1.508—1.517である。この値は、軽石粒に含まれる斜長石微粒子の影響による測定誤差の可能性があるので、参考値としたい。

「L-70 の 2」は火山ガラスが非常に多く、次いで斜長石が多い。火山ガラスは多孔質で泡壁が薄い。泡壁がつくる模様は網目状をなす(写真 1-2)。火山ガラスの屈折率は1.509—1.514である。斜長石は半自形から自形を呈し、累帯構造が認められるもの、双晶をなすものがある。斜長石のほとんどは網目状火山ガラスに被覆され、新鮮である(写真 1-3)。

### 4. 火山灰の対比

「I-73 の 3」と「J-71 の 4」は、鉱物組成、色調、粒度から同一火山灰と考えられる。産出層準は現地表に近い黒色腐植土中であることから、かなり新しい時代の火山灰と考えられる。この火山灰に産出層準や鉱物組成がよく類似した火山灰には、豊浦周辺においては有珠山起源のUs-b<sub>1</sub>、Us-b<sub>2</sub>(以上、A.D.1663)、Us-IVa (A.D.1822)、Us-III a (A.D.1853) がある(北海道埋蔵文化財センター、1991)。おそらく、Us-b以降のこれらの火山灰のいずれかに対比されられると思われる。

「L-70-2」によく似た色調、鉱物組成、降下年代を示す火山灰には、登別市の川上

B遺跡、同亀田公園遺跡、伊達市の牛舎川右岸遺跡、同稀府川遺跡の黄色ないし黄橙色のシルト質降下火山灰がある（北海道埋蔵文化財センター、1985；1987；1990）。これらの火山灰と本遺跡の火山灰は、火山ガラスの形態と火山ガラスの屈折率とも比較すると同一火山灰と考えられる。またこの火山灰は、函館市の中野A・B遺跡で「P.D.4」と呼称されてきた火山灰と、色調、粒度、鉱物組成、火山ガラスの形態が極めてよく類似し（北海道埋蔵文化財センター、1993）、対比される可能性が高い。

## 5. 火山灰と遺物の層位関係

本遺跡で認められた二種の火山灰のうち、Us—b以降の火山灰に対比されると思われる砂質の火山灰は、遺構・遺物と直接の関係はない。

「L—70の2」の火山灰については、直下の腐植土層から縄文時代早期の中茶路式土器が出土している。中茶路式土器はこの火山灰より上位からも出土することがある。この場合、その出土層は二次的に移動している可能性がある。川上B遺跡では縄文時代早期の住居跡の凹地に堆積している（北海道埋蔵文化財センター、1985）。牛舎川右岸遺跡では、扇状地堆積物のほぼ直上に産出するこの火山灰の直上から、中茶路式土器が出土している例が一個体ある（北海道埋蔵文化財センター、1990）。

沖積錐や扇状地の斜面では表層物質の移動が起こり易いので、火山灰と遺物の層位関係については遺物包含層が原位置を保っているのか否かの判定が必要である。本遺跡の「L—70の2」の火山灰は、他の遺跡の産出例からみても縄文早期のある時期以降であることは確実で、その時期からどのくらい新しくなるかは、この火山灰と直接関係する遺物の出土例が増すまで待つ必要がある。

## 6. まとめ

本遺跡で認められた二種の火山灰についてまとめると次の通りである。

### (1)砂質の降下火山灰

- a. 斜長石と軽石に富み、斜方輝石、スコリアも比較的多い。
- b. 軽石の石基のガラスの屈折率は、1.508—1.517である（参考値）。
- c. 有珠山起源のUs—b以降の火山灰のいずれかに対比されると思われる。
- d. 遺構・遺物との直接の関係はない。

### (2)シルト質の降下火山灰

- a. 火山ガラスが非常に多く、次いで斜長石が多い。
- b. 火山ガラスは泡壁が薄く、泡壁がつくる模様は網目状である。
- c. 火山ガラスの屈折率は1.509—1.514である。
- d. 川上B遺跡、亀田公園遺跡、牛舎川右岸遺跡、稀府川遺跡の黄色ないし黄橙色のシルト質降下火山灰に対比される。また、中野A・B遺跡の「P.D.4」に対比される可能性が高い。
- e. 直下の腐植土層から縄文時代早期の中茶路式土器が出土する。火山灰の上位からも同土器が出土するが、その場合には二次的に移動している可能性がある。

## 引用文献

- 北海道埋蔵文化財センター（1985）：「登別市川上B遺跡」。109pp。  
 北海道埋蔵文化財センター（1987）：「登別市亀田公園遺跡」。67pp。  
 北海道埋蔵文化財センター（1990）：「伊達市牛舎川右岸遺跡・稀府川遺跡」。282pp。  
 北海道埋蔵文化財センター（1991）：「伊達市牛舎川右岸遺跡・稀府川遺跡・谷藤川右岸遺跡」。220pp。  
 北海道埋蔵文化財センター（1993）：「中野A遺跡（II）本文編」。424pp。

(花岡正光)

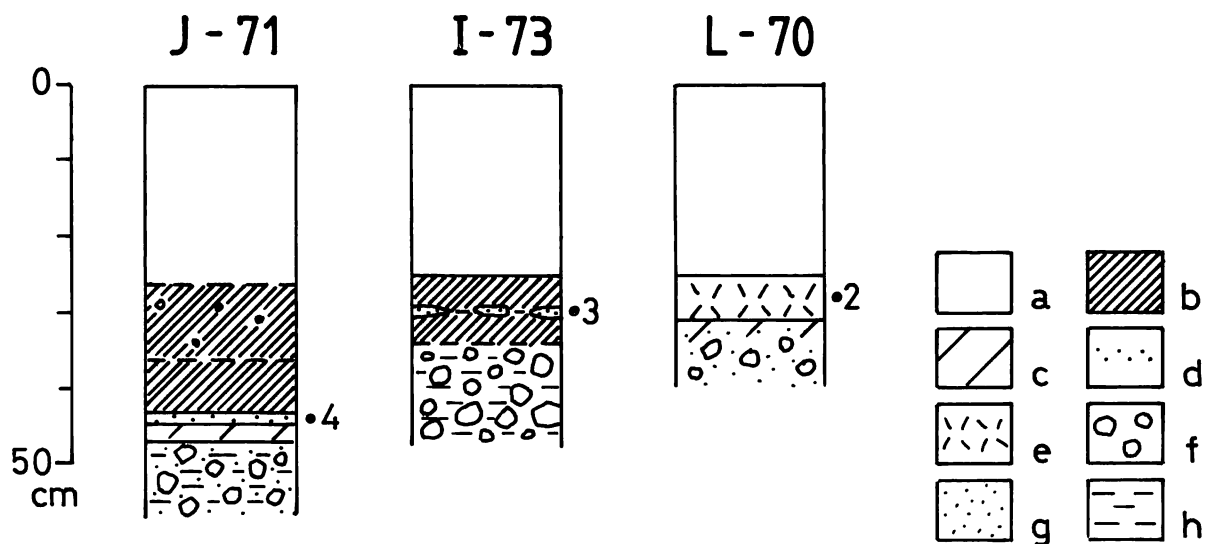


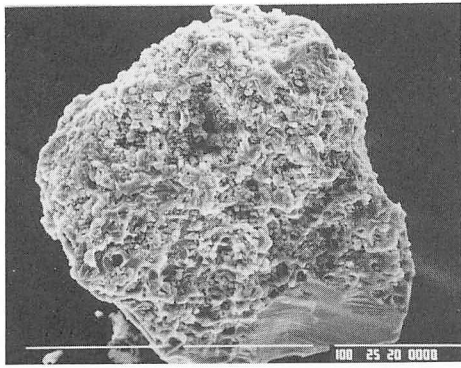
図1 地質柱状図

a：作土 b：黒色・赤黒色腐植土 c：褐色・黒褐色腐植土  
 d：砂質降下火山灰 e：シルト質降下火山灰 f：礫  
 g：砂 h：粘土 ●火山灰試料採取位置

表1 火山灰の鉱物組成

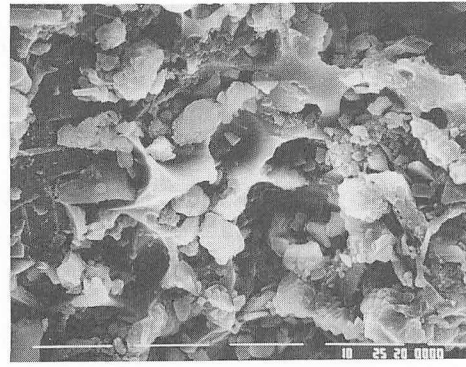
(粒径1/4—1/8mm、粒数%)

試料名	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	不透明鉱物	火山ガラス	軽石	スコリア	岩片	風化粒	検鏡粒数
I-73の3	34.3	10.0	0.4	3.9	—	31.7	15.7	0.9	3.0	230
J-71の4	31.2	6.0	—	0.8	—	53.4	7.5	—	1.1	266
L-70の2	15.8	1.3	0.7	0.3	81.9	—	—	—	—	304



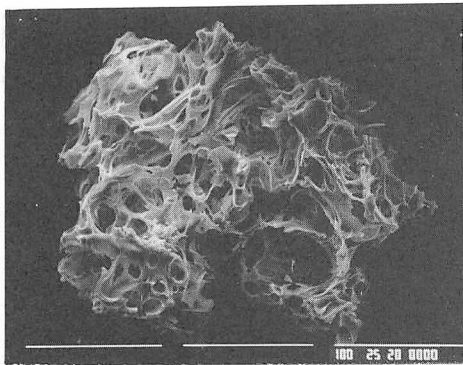
1a

「J-71の4」の軽石



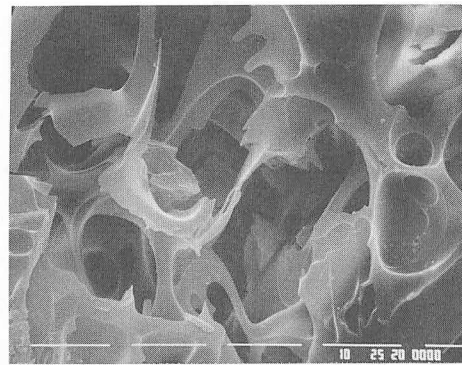
1b

1aの拡大



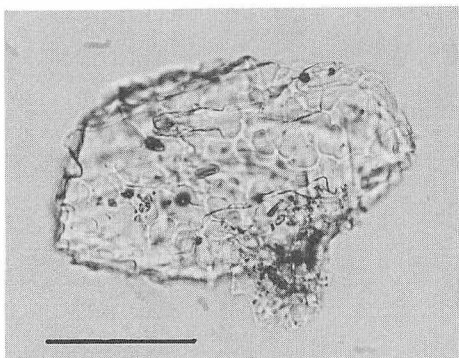
2a

「L-70の2」の網目  
模様状の火山ガラス



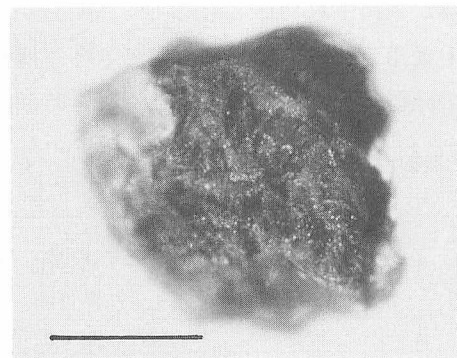
2b

2aの拡大



3

網目模様状の火山ガラスに被覆  
された斜長石（試料「L-70の  
2」）



4

「J-71の4」のスコリア

写真1 火山灰構成粒子の顕微鏡写真

1、2は走査型電子顕微鏡（JSM-T200、加速電圧20kV）、  
3、4は偏光顕微鏡（下方ポーラーのみ、4は落射照明併用）による。  
スケールバーは1a、2a、3、4が100 $\mu$ m、1b、2bが10 $\mu$ m。

## VIII. 成果と問題点

### 1 黒曜石の原産地推定について

(1) 方法 発掘調査でえられた黒曜石製石器の原産地推定を、蛍光X線分析法でおこなった。これの結果はⅧ-1 (217ページ)である。分析用資料として石槍等の両面加工石器50点を選定したが、報告書作成のための時間的制約から、その多くは破片、未製品である(図Ⅷ-1、2)。調査員の肉眼による判定の程度を知るために、分析用資料に関しては、分析前に筆者の原産地の推定を記録していた(表Ⅷ-1)。

(2) 結果 筆者が行った推定のうちで蛍光X線分析法とくい違ったのは、赤井川群の6点と白滝第1群の1点である。豊泉群については、推定不能の6点を除外して、27点のすべてが合致している。この結果は、豊泉群が他のものと見かけの違いで充分識別できることを示すものである。

くい違った赤井川群の6点は透明感があり、大多数の赤井川群に特徴的な白色球果を欠くものである。白滝第1群の1点は「花十勝」と呼ばれる紅茶褐色が見られるもの。

(3) 課題 肉眼観察と蛍光X線分析法による原産地の推定結果のうちで豊泉群に関しては、比較・参考資料を吟味するなどいくらかの訓練を積み、肉眼判定においても十分な成果が得られることを示している。豊泉群の見かけの特色は、粗雑な感じの材質、散在する灰色球果とともに剝離面のリング(剝離波紋)、フィッシャー(剝離裂痕)が灰色球果によって寸断・停滞していることである。

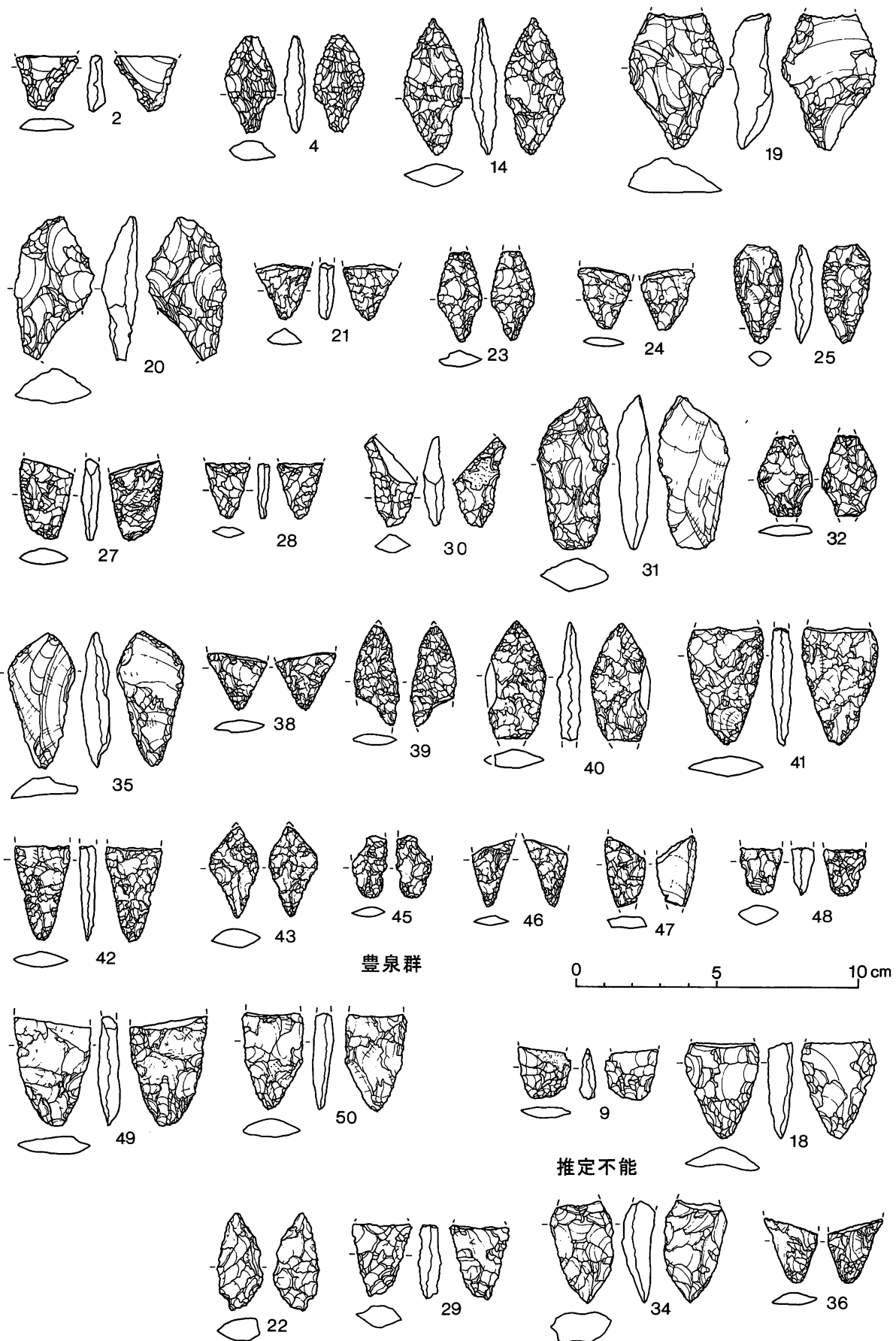
これらの特色から判定できる豊泉群を素材とした石器の一部は図Ⅷ-2に示した。ここに図示した石槍等の両面加工石器は、別の原産地の石器、たとえば赤井川群の石器、頁岩の石器などと形態はほぼ同じである(図Ⅷ-1、2)。高岡1遺跡で、豊泉群の礫を素材として剥片剝離、石器製作が行われていたことは、礫、残核、剥片、破片の多くが豊泉群に含められることから本文にも述べたところである。しかし、豊泉群の利用が縄文時代のどの時期に始まり、どの時期に盛んなのかは、多くの時期の土器が検出されたこともあって、明らかにできなかった。肉眼観察による判別の確度の高さは、豊泉群の使用を比較的簡易に推定できる可能性をもたらした。噴火湾を通路とする北海道南部における分布の確認、それぞれの遺跡における時期の確定は、今後の課題である。(西田 茂)

	肉眼推定	蛍光X線分析		肉眼推定	蛍光X線分析		肉眼推定	蛍光X線分析		肉眼推定	蛍光X線分析
1	赤井川	○	14	豊泉	○	27	豊泉	○	40	豊泉	○
2	豊泉	○	15	赤井川	○	28	豊泉	○	41	豊泉	○
3	赤井川	○	16	十勝	赤井川	29	豊泉	推定不能	42	豊泉	○
4	豊泉	○	17	十勝	赤井川	30	豊泉	○	43	豊泉	○
5	赤井川	○	18	豊泉	推定不能	31	豊泉	○	44	赤井川	○
6	赤井川	○	19	豊泉	○	32	豊泉	○	45	豊泉	○
7	十勝	○	20	豊泉	○	33	赤井川	○	46	豊泉	○
8	不詳透明	赤井川	21	豊泉	○	34	豊泉	推定不能	47	豊泉	○
9	不詳	推定不能	22	豊泉	推定不能	35	豊泉	○	48	豊泉	○
10	赤井川	○	23	豊泉	○	36	豊泉	推定不能	49	豊泉	○
11	十勝	赤井川	24	豊泉	○	37	十勝	白川第1群	50	豊泉	○
12	十勝	赤井川	25	豊泉	○	38	豊泉	○			
13	十勝	赤井川	26	赤井川	○	39	豊泉	○			

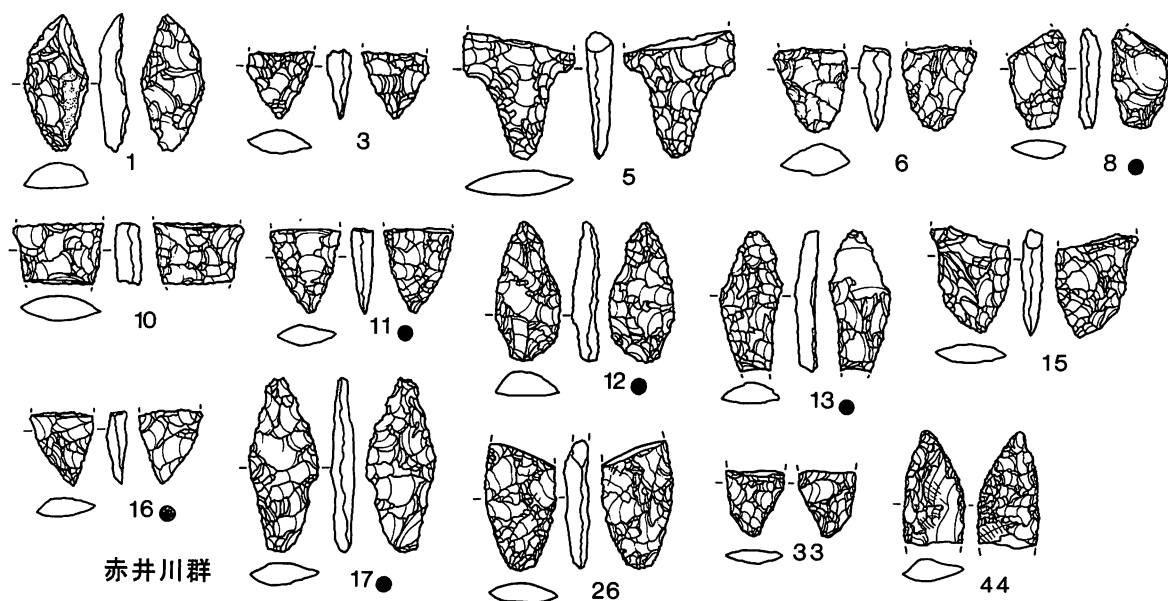
○：同一推定

表Ⅷ-1 黒曜石の原産地推定の結果

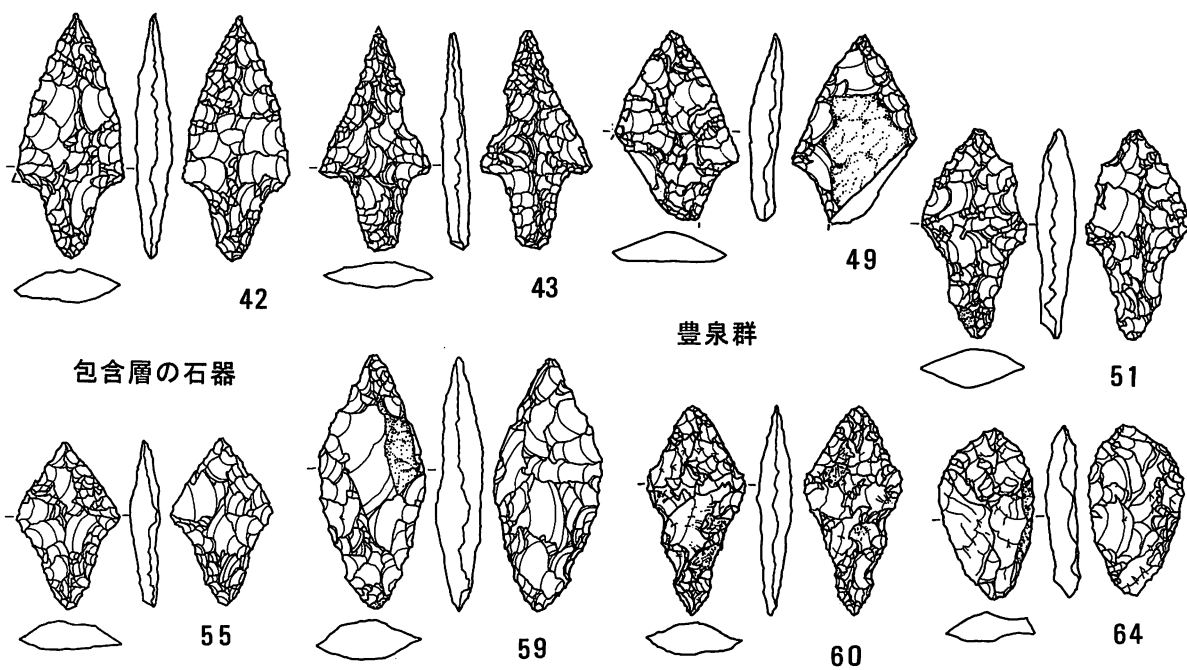
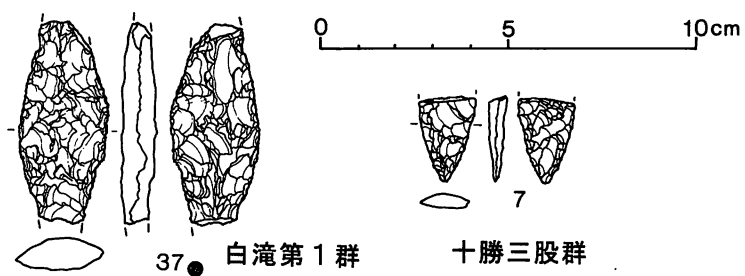




図Ⅷ-1 原産地推定の結果



● : 推定のくいちがい



図VIII-2 原産地推定の結果

---

（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第88集

豊 浦 町

高岡 1 遺跡

---

平成 6 年 3 月 31 日

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒064 札幌市中央区南26条西11丁目

Tel 011-561-3131

印刷 富士プリント株式会社

〒064 札幌市中央区南16条西 9 丁目

---

この報告書は、日本道路公団札幌建設局のご了解を得て、増冊したものです。







